

kan

巖

ze

世

on

音

ji

寺

— 寺域編 —



2006

九州歴史資料館

龍 世 音 卷

— 寺 域 編 —

2006

九州歴史資料館



観世音寺周辺航空写真



観世音寺境内全景



(1) 南辺城第109次調査区全景



(2) 南辺城第111次調査区全景



(1) 南辺城第115次調査区全景



(2) 南辺城第117次調査区全景



東辺城第119次調査区全景



(1) 東辺城第121次調査区全景



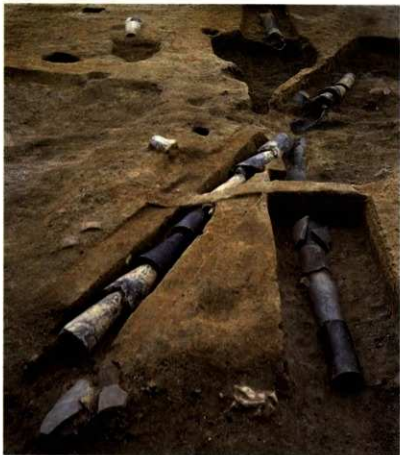
(2) 東辺城第121次調査建物群



(1) 北辺城第70次調査区全景



(2) 北辺城第70次調査区全景



(1) 第70次調査暗渠S X 1831・1832



(2) 第70次調査暗渠S X 1834

序

「筑紫観世音寺」は、天智天皇が母帝齊明天皇の菩提を弔うために発願された寺院であります。伽藍は天智天皇の発願から80余年を経た天平一八年（746）に完成をみました。観世音寺の寺域は方三町と推定され、壮大な伽藍は鎮西第一の名刹であり、「府の大寺」と称された規模と壮麗さを誇っていました。

また、天平宝字五年（761）には、僧尼に戒を授けるための戒壇院が設置され、名実ともに西海道随一の寺院としての地位を不動のものとししました。

菅原道真公は、「都府の樓はわずかに瓦の色を看 観音寺はただ鐘の声をのみ聴く」と詠われました。現在、観世音寺の梵鐘は国宝に指定され、大晦日には古の荘厳な音色を今に伝えています。

古代においては、大宰府の庇護のもと隆盛を極めた観世音寺でしたが、大宰府の衰退以後は急速に勢力を失い、東大寺の末寺となります。しかし、一方では、観音信仰の霊場として大衆の崇敬を集めました。その後、観世音寺は庵寺寸前までに追い込まれますが、江戸時代には黒田藩が中心となり再興がなされ、現在も法燈を保つに至っております。

今回の報告は、前回の「観世音寺－伽藍編－」の続編であり、40数回にわたった観世音寺の調査のなかで、伽藍周辺域の調査成果を取りまとめたものです。これまで、不明瞭であった伽藍周辺の様相が少しでも明らかとなり、古代史研究の一助となれば幸であります。

なお、本報告書の刊行に際しまして、大宰府史跡調査研究指導委員長をはじめとする委員各位には、諸事繁忙中にもかかわらず適切な御指導をいただき深謝に耐えません。また、境内の発掘調査を快諾いただいた観世音寺住職および御家族の方々には謝意を申し上げますとともに、今回の調査・報告書刊行にあたり、文化庁、大宰府市、地元関係各位、さらには故人となられた職員および作業員の皆様に対して深甚なる敬意を表する次第であります。

平成18年3月31日

九州歴史資料館長 森山 良一

例 言

1. 本書は、昭和45年度（1970）から福岡県が国庫補助を受け、九州歴史資料館が発掘調査を実施した観世音寺の正式報告書—寺域編—である。

当初、観世音寺の報告書としては、遺構編及び遺物・考察編の二分冊の刊行を予定していたが、報告すべき内容が膨大であったため遺構編を伽藍編と寺域編に分け、都合三編とした。

2. 本書には、観世音寺推定寺域内において観世音寺の解明を目的として発掘調査を実施した大宰府史跡第5次・16次・20次・23次・28次・39-1次・39-2次・39-3次・45次・47次・48次・61次・66次・70次・71次・103次・109次・111次・115次・117次・118次・119次・120次・121次・122次・123次・130次・144次・154次調査の成果を掲載した。

なお、大宰府史跡第8次・21次・68次・78次・93次・184次・185次調査は、観世音寺子院跡関連の調査であり、戒壇院を除く子院跡に関しては子院跡の調査成果をとりまとめた正式報告書の刊行を予定しており、今回の報告からは除外した。

3. 発掘調査は、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。検出遺構及び出土遺物については、各指導委員の御指導と御教示を得た。
4. 本巻掲載の遺構実測図は、国土調査法第Ⅱ座標系をもとに基準点を設け作成し、各次調査担当者の実測による。挿図の北は座標北であり、真北からは西に18分振っている。

なお、遺構配置図に掲載した大宰府条坊跡第140次・246次調査遺構図は、太宰府市教育委員会から提供を受けた。

5. 本書掲載の写真は、当館参事補佐石丸洋及び各次調査担当者の撮影による。
6. 観世音寺—寺域編—に係る整理関係者は、下記のとおりである。

図面整理：大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝

版下作成：小田和利

製図作業：高田いく子・初山淳子

7. 本書の執筆は、小田の監修のもとに井戸を主として吉村が担当し、それ以外の遺構は小田による。なお、文末には名を記し、分担を明らかにした。
8. 先に刊行した『観世音寺—伽藍編—』の誤りは、今回の報告書で訂正を行っているが、最終的な正誤表は『観世音寺—遺物・考察編—』で示したい。
9. 本書の編集は、小田が行った。

凡 例

遺構番号の頭に付した記号は、以下の遺構を示す。

SA：築地・橋、SB：建物、SC：回廊、SD：溝、SE：井戸、SG：池、SH：広場、SI：堅穴住居、SK：土坑、SX：その他の遺構

本文目次

I 調査の組織と経過	1
(1) はじめに	1
(2) 調査経過	1
(3) 調査組織	6
II 調査の概要	9
(1) 基本層序	9
(2) 遺構の概要	11
III 寺域の調査	19
(1) 南辺城	19
1) 築地・橋	19
2) 建物	28
3) 溝	57
4) 井戸	68
5) 土坑	84
6) 鑄造関連遺構	119
7) 埋甕・埋桶	121
8) 落込	122
9) その他の遺構	123
(2) 東辺城	125
1) 橋	125
2) 建物	132
3) 竪穴住居	145
4) 溝	146
5) 井戸	149
6) 土坑	163
7) 池状遺構	173
8) 暗渠	175
9) 鑄造関連遺構	176
10) 落込	177
11) その他の遺構	177
(3) 北辺城	180
1) 橋	180
2) 建物	182
3) 溝	185
4) 井戸	188
5) 土坑	193
6) 暗渠	200
7) 地鎮	203
8) その他の遺構	204
(4) 西辺城	205
1) 溝	205
2) 土坑	205
IV 総括	207

插 图 目 次

Fig. 1 觀世音寺調査地域図 (1/3,000)	2
Fig. 2 調査区配置図 (1/1,500)	折込
Fig. 3 南辺城土層図 (1/60)	9
Fig. 4 東辺城土層図 (1/60)	10
Fig. 5 北辺城土層図 (1/60)	11
Fig. 6 西辺城土層図 (1/60)	11
Fig. 7 第5・23次調査区 (1/600)	12
Fig. 8 第28次調査区 (1/600)	12
Fig. 9 第39-1次調査区 (1/600)	12
Fig. 10 第39-2次調査区 (1/600)	12
Fig. 11 第39-3次調査区 (1/600)	12
Fig. 12 第16・109・111・154次調査区 (1/600)	13
Fig. 13 第115次調査区 (1/600)	14
Fig. 14 第61・122・130次調査区 (1/600)	14
Fig. 15 第103・117次調査区 (1/600)	15
Fig. 16 第20次調査区 (1/600)	15
Fig. 17 第47次調査区 (1/600)	16
Fig. 18 第45次調査区 (1/600)	16
Fig. 19 第119次調査区 (1/600)	17
Fig. 20 第121次調査区 (1/600)	17
Fig. 21 第70・123次調査区 (1/600)	18
Fig. 22 第120次調査区 (1/600)	18
Fig. 23 第48・77次調査区 (1/600)	18
Fig. 24 築地 S A 091・095火測図 (1/60)	20
Fig. 25 築地 S A 467, 溝 S D 468火測図 (1/60)	21
Fig. 26 築地 S A 472火測図 (1/60)	22
Fig. 27 南辺城櫓尖測図① (1/80)	23
Fig. 28 南辺城櫓尖測図② (1/80)	25
Fig. 29 南辺城櫓尖測図③ (1/80)	26
Fig. 30 南辺城建物尖測図① (1/60)	29
Fig. 31 南辺城建物尖測図② (1/60)	30
Fig. 32 南辺城建物尖測図③ (1/80)	32
Fig. 33 南辺城建物尖測図④ (1/80)	34
Fig. 34 南辺城建物尖測図⑤ (1/80)	35
Fig. 35 南辺城建物尖測図⑥ (1/80)	37
Fig. 36 南辺城建物尖測図⑦ (1/80)	38

Fig.37	南辺城建物実測図⑧ (1/60)	40
Fig.38	南辺城建物実測図⑨ (1/80)	41
Fig.39	南辺城建物実測図⑩ (1/80)	42
Fig.40	南辺城建物実測図⑪ (1/80)	44
Fig.41	南辺城建物実測図⑫ (1/80)	45
Fig.42	南辺城建物実測図⑬ (1/80)	47
Fig.43	南辺城建物実測図⑭ (1/80)	49
Fig.44	南辺城建物実測図⑮ (1/80)	50
Fig.45	南辺城建物実測図⑯ (1/100)	52
Fig.46	南辺城建物実測図⑰ (1/80)	53
Fig.47	南辺城建物実測図⑱ (1/80)	55
Fig.48	南辺城建物実測図⑲ (1/80)	56
Fig.49	溝 S D363実測図 (1/60)	57
Fig.50	溝 S D892・929・939・942土層図 (1/60)	58
Fig.51	石組溝 S D916実測図 (1/60)	59
Fig.52	溝 S D3239・3300・3400土層図 (1/60)	62
Fig.53	溝 S D3333・3334・3340土層図 (1/60)	64
Fig.54	護岸施設 S X3845実測図 (1/40)	66
Fig.55	石組溝 S D3843・3846・3860実測図 (1/60)	67
Fig.56	南辺城井戸実測図① (1/50)	69
Fig.57	南辺城井戸実測図② (1/50)	70
Fig.58	南辺城井戸実測図③ (1/50)	71
Fig.59	南辺城井戸実測図④ (1/50)	73
Fig.60	南辺城井戸実測図⑤ (1/40)	74
Fig.61	南辺城井戸実測図⑥ (1/50)	75
Fig.62	南辺城井戸実測図⑦ (1/50)	76
Fig.63	南辺城井戸実測図⑧ (1/50)	78
Fig.64	南辺城井戸実測図⑨ (1/50)	79
Fig.65	南辺城井戸実測図⑩ (1/50)	80
Fig.66	南辺城井戸実測図⑪ (1/50)	82
Fig.67	南辺城井戸実測図⑫ (1/50)	83
Fig.68	南辺城土坑実測図① (1/40)	85
Fig.69	南辺城土坑実測図② (1/60)	87
Fig.70	南辺城土坑実測図③ (1/40)	89
Fig.71	南辺城土坑実測図④ (1/60)	90
Fig.72	南辺城土坑実測図⑤ (1/60)	92
Fig.73	南辺城土坑実測図⑥ (1/60)	94
Fig.74	南辺城土坑実測図⑦ (1/40)	96

Fig. 75	南边城土坑实测图⑧ (1/60)	98
Fig. 76	南边城土坑实测图⑨ (1/40)	99
Fig. 77	南边城土坑实测图⑩ (1/60)	101
Fig. 78	南边城土坑实测图⑪ (1/40)	103
Fig. 79	南边城土坑实测图⑫ (1/60)	105
Fig. 80	南边城土坑实测图⑬ (1/40)	106
Fig. 81	南边城土坑实测图⑭ (1/40)	107
Fig. 82	南边城土坑实测图⑮ (1/40 · 1/80)	109
Fig. 83	南边城土坑实测图⑯ (1/60)	111
Fig. 84	南边城土坑实测图⑰ (1/40 · 1/80)	112
Fig. 85	南边城土坑实测图⑱ (1/40 · 1/80)	113
Fig. 86	南边城土坑实测图⑲ (1/60)	115
Fig. 87	南边城土坑实测图⑳ (1/40)	117
Fig. 88	土坑 S K3853, 防空壕 S X3874 实测图 (1/60)	118
Fig. 89	石组区 S X525 实测图 (1/80)	119
Fig. 90	保土穴 S X901 · 923 实测图 (1/20)	119
Fig. 91	埋粪· 粗桶实测图 (1/30)	120
Fig. 92	土坑 S K1521, 落込 S X3682 (1/80)	122
Fig. 93	柱列 S A488, 通路 S X487 实测图 (1/80)	124
Fig. 94	槽 S A1235A ~ C, 溝 S D1230 实测图 (1/60)	折込
Fig. 95	槽 S A1235A · C 实测图 (1/60)	折込
Fig. 96	东边城槽实测图① (1/80)	126
Fig. 97	东边城槽实测图② (1/80)	127
Fig. 98	东边城槽实测图③ (1/80)	129
Fig. 99	东边城槽实测图④ (1/80)	130
Fig. 100	菜地 S A3625 实测图 (1/80)	131
Fig. 101	东边城建物实测图① (1/80)	132
Fig. 102	东边城建物实测图② (1/80)	134
Fig. 103	东边城建物实测图③ (1/80)	135
Fig. 104	东边城建物实测图④ (1/80)	136
Fig. 105	东边城建物实测图⑤ (1/80)	138
Fig. 106	东边城建物实测图⑥ (1/80)	139
Fig. 107	东边城建物实测图⑦ (1/80)	141
Fig. 108	东边城建物实测图⑧ (1/100)	142
Fig. 109	东边城建物实测图⑨ (1/80)	143
Fig. 110	东边城建物实测图⑩ (1/80)	144
Fig. 111	整穴住居 S I3638 实测图 (1/80)	145
Fig. 112	溝 S D1230 · 1300 · 3500 · 3520 土層图 (1/60)	148

Fig. 113	東辺城井戸実測図① (1/50)	150
Fig. 114	東辺城井戸実測図② (1/50)	152
Fig. 115	東辺城井戸実測図③ (1/50)	153
Fig. 116	東辺城井戸実測図④ (1/50)	154
Fig. 117	東辺城井戸実測図⑤ (1/50)	155
Fig. 118	東辺城井戸実測図⑥ (1/50)	156
Fig. 119	東辺城井戸実測図⑦ (1/50)	157
Fig. 120	東辺城井戸実測図⑧ (1/50)	158
Fig. 121	東辺城井戸実測図⑨ (1/50)	160
Fig. 122	東辺城井戸実測図⑩ (1/50)	161
Fig. 123	東辺城井戸実測図⑪ (1/50)	162
Fig. 124	東辺城土坑実測図① (1/60)	164
Fig. 125	東辺城土坑実測図② (1/60)	166
Fig. 126	東辺城土坑実測図③ (1/80)	167
Fig. 127	東辺城土坑実測図④ (1/40)	169
Fig. 128	東辺城土坑実測図⑤ (1/20 · 1/40 · 1/80)	171
Fig. 129	東辺城土坑実測図⑥ (1/80)	172
Fig. 130	池 S G 1305実測図 (1/80)	174
Fig. 131	排水施設 S X 1306, 暗渠1310, 瓦組 S X 1245実測図 (1/40)	175
Fig. 132	鋳造遺構 S X 3566 · 3640実測図 (1/20 · 1/40)	176
Fig. 133	石井 S X 437実測図 (1/60)	178
Fig. 134	積石塚 S X 1220実測図 (1/80)	179
Fig. 135	北辺城櫓実測図① (1/80)	180
Fig. 136	北辺城櫓実測図② (1/80)	181
Fig. 137	北辺城建物実測図① (1/60)	182
Fig. 138	北辺城建物実測図② (1/80)	182
Fig. 139	北辺城建物実測図③ (1/80)	183
Fig. 140	北辺城建物実測図④ (1/80)	184
Fig. 141	溝 S D 1805土層図 (1/60)	185
Fig. 142	溝 S D 1805石列実測図 (1/60)	186
Fig. 143	溝 S D 1830 · 1850 · 3701 · 3702土層図 (1/60)	187
Fig. 144	北辺城井戸実測図① (1/50)	189
Fig. 145	北辺城井戸実測図② (1/50)	190
Fig. 146	北辺城井戸実測図③ (1/50)	191
Fig. 147	北辺城井戸実測図④ (1/50 · 1/80)	192
Fig. 148	北辺城土坑実測図① (1/40)	194
Fig. 149	北辺城土坑実測図② (1/80)	195
Fig. 150	北辺城土坑実測図③ (1/60)	197

Fig. 151	北辺城土坑実測図④ (1/40)	198
Fig. 152	北辺城土坑実測図⑤ (1/40)	199
Fig. 153	北辺城暗渠実測図① (1/40)	201
Fig. 154	北辺城暗渠実測図② (1/40)	202
Fig. 155	暗渠 S X 3572, 石組 S X 1842実測図 (1/40)	203
Fig. 156	地鎮 S X 1810実測図 (1/10)	203
Fig. 157	溝 S D 1366・3450土層図 (1/60)	205
Fig. 158	土坑 S K 3451・3452・3453実測図 (1/40)	206

表 目 次

Tab. 1	観世音寺発掘調査地域一覧	5
Tab. 2	大宰府史跡調査研究指導委員会委員	6
Tab. 3	観世音寺発掘調査関係者一覧	7

付 図

付 図 1	観世音寺遺構配置図 (1/1,000)
付 図 2	南辺城遺構配置図① (1/200)
付 図 3	南辺城遺構配置図② (1/200)
付 図 4	南辺城遺構配置図③ (1/200)
付 図 5	東辺城遺構配置図① (1/200)
付 図 6	東辺城遺構配置図② (1/200)
付 図 7	北辺城遺構配置図 (1/200)

図 版 目 次

- 巻頭図版1 観世音寺周辺航空写真
- 2 観世音寺境内全景
- 3 (1) 南辺城第109次調査区全景
(2) 南辺城第111次調査区全景
- 4 (1) 南辺城第115次調査区全景
(2) 南辺城第117次調査区全景
- 5 東辺城第119次調査区全景
- 6 (1) 東辺城第121次調査区全景
(2) 東辺城第121次調査建物群
- 7 (1) 北辺城第70次調査区全景
(2) 北辺城第70次調査区全景
- 8 (1) 第70次調査暗渠 S X 1831・1832
(2) 第70次調査暗渠 S X 1834
-
- PL. 1 観世音寺本堂 (背後の山は四王寺山, 南上空から)
- 南辺城
- PL. 2 (1) 5次調査区1層柱穴群 (西から)
(2) 5次調査区2層柱穴群 (西から)
- PL. 3 (1) 築地 S A 091A・B (北から)
(2) 築地 S A 091A・B (東から)
- PL. 4 (1) 築地 S A 095 (東から)
(2) 築地 S A 095 (南から)
- PL. 5 (1) 溝 S D 093 (南から)
(2) 石積 S X 092 (北から)
- PL. 6 (1) 16次調査区 (東から)
(2) 溝 S D 363 (南から)
(3) 土坑 S K 365 (北から)
- PL. 7 (1) 23次調査区上層遺構 (西から)
(2) 23次調査区下層遺構 (西から)
- PL. 8 (1) 築地状遺構 S A 467, 溝 S D 468 (北から)
(2) 築地状遺構 S A 472 (北西から)
- PL. 9 (1) 溝 S D 485 (北から)
(2) 井戸 S E 480 (東から)
(3) 井戸 S E 480 枠 (東から)
(4) 礎敷 S X 487 (南から)
- PL. 10 (1) 28次調査区 (西から)
(2) 28次調査区 (南から)

- PL.11 (1) 土坑 S K521 (南から)
(2) 下層遺構東半部 (南から)
- PL.12 (1) 39-1次調査区 (西から)
(2) 井戸 S E870 (南から)
- PL.13 (1) 井戸 S E867 (南から)
(2) 井戸 S E867枠 (南から)
(3) 井戸 S E868 (西から)
- PL.14 (1) 井戸 S E868枠 (西から)
(2) 井戸 S E872 (北から)
(3) 井戸 S E872枠 (北から)
- PL.15 (1) 39-2次調査区 3 Tr 上層遺構 (東から)
(2) 39-2次調査区 4 Tr 下層遺構 (東から)
(3) 39-2次調査区 4 Tr 下層遺構 (西から)
- PL.16 (1) 掘立柱建物 S B884・889, 溝 S D890 (西から)
(2) 井戸 S E895 (南から)
(3) 井戸 S E895枠 (南から)
- PL.17 (1) 井戸 S E902 (南から)
(2) 土坑 S K913 (南から)
(3) 土坑 S K927 (南から)
- PL.18 (1) 土坑 S K911・912 (北東から)
(2) 瓦敷 S X917 (北から)
- PL.19 (1) 39-3次調査区 1 Tr (西から)
(2) 39-3次調査区 2 Tr (東から)
(3) 39-3次調査区 2 Tr (西から)
- PL.20 (1) 61次調査区 (南から)
(2) 61次調査区 (西から)
- PL.21 (1) 103次調査区 (南東から)
(2) 溝 S D3050 (南西から)
- PL.22 109次調査区全景 (空中写真, 西上空から)
- PL.23 (1) 109次調査区 (空中写真, 南上空から)
(2) 111次調査区 (空中写真, 北上空から)
- PL.24 (1) 109次調査区西半部 (北真上から)
(2) 109次調査区東半部 (北真上から)
- PL.25 (1) 109次調査区 (西から)
(2) 111次調査区西半部 (北から)
- PL.26 (1) 溝 S A3195, 溝 S D3190 (北から)
(2) 掘立柱建物 S B3205周辺 (北から)
- PL.27 (1) 掘立柱建物 S B3230 (東真上から)
(2) 掘立柱建物 S B3230 (北から)
- PL.28 (1) 井戸 S E3155周辺 (東から)

- (2) 井戸 S E3160 周辺 (北から)
- PL. 29 (1) 溝 S D3200 (南から)
(2) 溝 S D3200 (北から)
- PL. 30 (1) 溝 S D3290, 掘立柱建物 S B3304 周辺 (北から)
(2) 溝 S D3300 (西から)
- PL. 31 (1) 井戸 S E3145 (東から)
(2) 井戸 S E3150 (西から)
(3) 井戸 S E3155 (西から)
- PL. 32 (1) 井戸 S E3160 (東から)
(2) 井戸 S E3165 (西から)
(3) 井戸 S E3170 (北西から)
- PL. 33 (1) 井戸 S E3175 (西から)
(2) 井戸 S E3180 (東から)
(3) 井戸 S E3185 (東から)
- PL. 34 (1) 井戸 S E3215 (南東から)
(2) 井戸 S E3235 (北から)
(3) 井戸 S E3240 (西から)
- PL. 35 (1) 井戸 S E3245 (東から)
(2) 井戸 S E3250 (南から)
(3) 井戸 S E3255 (西から)
- PL. 36 (1) 井戸 S E3260 (西から)
(2) 井戸 S E3260 枠 (東から)
(3) 井戸 S E3265 (北から)
- PL. 37 (1) 井戸 S E3265 枠 (北西から)
(2) 井戸 S E3270・3275・3280, 土坑 S K3264 (北から)
(3) 井戸 S E3270 (北東から)
- PL. 38 (1) 井戸 S E3275 (北から)
(2) 井戸 S E3275 枠 (南から)
(3) 井戸 S E3280 (東から)
- PL. 39 (1) 土坑 S K3174 周辺 (西から)
(2) 土坑 S K3247 周辺 (北から)
- PL. 40 (1) 土坑 S K3246 (西から)
(2) 土坑 S K3247 (東から)
(3) 土坑 S K3259 (西から)
- PL. 41 (1) 土坑 S K3264 (北から)
(2) 土坑 S K3266 (東から)
(3) 土坑 S K3268 (北東から)
- PL. 42 (1) 土坑 S K3271 (北から)
(2) 土坑 S K3273 (西から)
(3) 土坑 S K3295 (北から)

- PL. 43 115次調査区全景 (空中写真, 南上空から 奥の建物は戒壇院本堂)
- PL. 44 (1) 115次調査区全景 (空中写真, 東真上から)
 (2) 115次調査区南南部 (東真上から)
- PL. 45 (1) 掘立柱建物 S B 3351, 溝 S D 3340 (東から)
 (2) 溝 S D 3338 (東から)
 (3) 溝 S D 3333・3335 (東から)
- PL. 46 (1) 井戸 S E 3345 (西から)
 (2) 井戸 S E 3350 (南から)
 (3) 井戸 S E 3350下部 (南から)
- PL. 47 (1) 117次調査区全景 (空中写真, 西上空から)
 (2) 調査区西半 Pit 群 (東から)
- PL. 48 (1) 溝 S D 3400A・B (北東から)
 (2) 溝 S D 3430・3440 (北東から)
- PL. 49 (1) 井戸 S E 3370 (南から)
 (2) 井戸 S E 3375 (東から)
 (3) 井戸 S E 3375枠 (南から)
- PL. 50 (1) 井戸 S E 3380・3385 (北から)
 (2) 井戸 S E 3380枠 (東から)
 (3) 井戸 S E 3390 (南東から)
- PL. 51 (1) 井戸 S E 3395 (東から)
 (2) 井戸 S E 3395下部 (東から)
 (3) 井戸 S E 3405 (東から)
- PL. 52 (1) 井戸 S E 3410 (北西から)
 (2) 井戸 S E 3415・3420 (北から)
 (3) 井戸 S E 3425 (南西から)
- PL. 53 (1) 122次調査区全景 (東から)
 (2) 122次調査区全景 (空中写真, 東上空から)
- PL. 54 (1) 掘立柱建物 S B 3660 (東真上から)
 (2) 掘立柱建物 S B 3660 (北から)
- PL. 55 掘立柱建物 S B 3660柱掘方断面
- PL. 56 (1) 掘立柱建物 S B 3670 (東から)
 (2) 溝 S D 3666, 石組 S X 3662 (北から)
- PL. 57 (1) 井戸 S E 3680上部 (北東から)
 (2) 井戸 S E 3680瓦出土状況 (北東から)
 (3) 井戸 S E 3680下部土器出土状況 (南から)
- PL. 58 (1) 井戸 S E 3680枠 (北西から)
 (2) 井戸 S E 3690 (北東から)
 (3) 井戸 S E 3690枠 (北東から)
- PL. 59 (1) 井戸 S E 3685 (東から)
 (2) 井戸 S E 3695 (東から)

- (3) 土坑 S K3677 (北から)
- PL. 60 (1) 130次調査区全景 (空中写真, 南東上空から)
(2) 130次調査区全景 (空中写真, 東上空から)
- PL. 61 (1) 130次調査区 (東から)
(2) 130次調査区 (西から)
- PL. 62 (1) 掘立柱建物 S B3862, 溝 S D3842 (南から)
(2) 掘立柱建物 S B3852・3862 (東から)
- PL. 63 (1) 護岸 S X3845 (西から)
(2) 護岸 S X3845細部 (西から)
- PL. 64 (1) 溝 S D3840竝出土状況
(2) 溝 S D3840竝出土状況
(3) 溝 S D3840層出土状況
- PL. 65 (1) 溝 S D3841 (南から)
(2) 溝 S D3843・3860・3865 (東から)
- PL. 66 (1) 溝 S D3855・3860 (南から)
(2) 溝 S D3854, S D3840下層遺構 (南から)
(3) 採土穴 S X3856, 土坑 S K3853 (南から)
- PL. 67 (1) 埋甕 S X3864 (南から)
(2) 埋甕 S X3867 (南から)
(3) 埋甕 S X3868 (南から)
(4) 埋甕 S X3872 (南から)
- PL. 68 (1) 154次調査区 (南から)
(2) 154次調査区 (東から)

東辺域

- PL. 69 (1) 20次調査区 (南から)
(2) 石垣 S X437 (南から)
- PL. 70 (1) 47次調査区 (南から)
(2) 47次調査区 (北から)
- PL. 71 (1) 掘立柱建物 S B1350, 土坑 S K1359 (南から)
(2) 井戸 S E1365 (東から)
- PL. 72 45次調査区全景 (南から)
- PL. 73 (1) 45次調査区 (北から)
(2) 45次調査区 (北東から)
- PL. 74 (1) 柵 S A1235, 溝 S D1230 (西から)
(2) 柵 S A1235, 溝 S D1230 (東から)
(3) 溝 S D1230 (北から)
(4) 柵 S A1235, 溝 S D1230 (北から)
- PL. 75 (1) 溝 S D1230 (南から)
(2) 溝 S D1230護岸石列 (南東から)
(3) 溝 S D1300 (南から)

- (4) 溝SD1230 (北から)
- (5) 唐三彩出土状況
- PL. 76 (1) 掘立柱建物SB1250 (西から)
- (2) 門遺構SB1240A・B (北から)
- PL. 77 (1) 井戸SE1180 (北から)
- (2) 井戸SE1181 (西から)
- (3) 井戸SE1181枠 (西から)
- PL. 78 (1) 井戸SE1182 (北から)
- (2) 井戸SE1183・1184 (西から)
- PL. 79 (1) 井戸SE1183枠 (西から)
- (2) 井戸SE1184枠 (西から)
- (3) 井戸SE1184下部 (西から)
- PL. 80 (1) 井戸SE1188・1189 (北から)
- (2) 井戸SE1188枠 (南から)
- (3) 井戸SE1189枠 (北から)
- PL. 81 (1) 井戸SE1186 (南から)
- (2) 井戸SE1190, 土坑SK1204 (西から)
- (3) 井戸SE1190 (西から)
- PL. 82 (1) 井戸SE1191 (北から)
- (2) 井戸SE1192・1193, 土坑SK1243 (西から)
- (3) 井戸SE1193 (西から)
- PL. 83 (1) 井戸SE1194・1195 (北東から)
- (2) 井戸SE1194枠 (南から)
- (3) 井戸SE1195 (北から)
- PL. 84 (1) 井戸SE1196 (西から)
- (2) 井戸SE1197・1199, 土坑SK1248・1249 (南から)
- (3) 井戸SE1198, 1199枠 (南から)
- PL. 85 (1) 井戸SE1201 (西から)
- (2) 井戸SE1202 (北から)
- (3) 土坑SK1205 (北から)
- PL. 86 (1) 土坑SK1211 (南から)
- (2) 土坑SK1248 (南西から)
- (3) 土坑SK1255 (西から)
- PL. 87 (1) 暗渠SX1245・1310 (北から)
- (2) 暗渠SX1245 (東から)
- PL. 88 (1) 暗渠SX1310 (南から)
- (2) 暗渠SX1310 (西から)
- (3) 積石塚SX1220 (北から)
- PL. 89 (1) 池SG1305, 排水施設SX1306, 溝SD1300 (北から)
- (2) 排水施設SX1306 (北から)

- (3) 排水施設 S X1306 (西から)
- PL. 90 119次調査区全景 (空中写真, 南上空から)
- PL. 91 (1) 119次調査区全景 (空中写真, 南上空から)
 (2) 119次調査区北半部 (東真上から)
- PL. 92 (1) 119次調査区全景 (北から)
 (2) 119次調査区全景 (南から)
- PL. 93 (1) 119次調査区北半部 (西から)
 (2) 橋 S A3561 (東から)
- PL. 94 (1) 橋 S A3527, 礎石建物 S B3460 (北から)
 (2) 掘立柱建物 S B3461 (西から)
 (3) 掘立柱建物 S B3565 (南から)
- PL. 95 (1) 溝 S D1230 (北から)
 (2) 溝 S D1230 (南から)
 (3) 溝 S D1300 (北から)
- PL. 96 (1) 溝 S D3550 (南から)
 (2) 溝 S D3550 (南から)
- PL. 97 (1) 井戸 S E3465 (南から)
 (2) 井戸 S E3470・3475, 土坑 S K3464 (北から)
 (3) 井戸 S E3470枠 (南から)
- PL. 98 (1) 井戸 S E3480 (西から)
 (2) 井戸 S E3490 (西から)
 (3) 井戸 S E3495 (北から)
- PL. 99 (1) 井戸 S E3505 (西から)
 (2) 井戸 S E3515 (西から)
 (3) 井戸 S E3525 (北から)
- PL. 100 (1) 井戸 S E3535 (東から)
 (2) 井戸 S E3535枠 (東から)
- PL. 101 (1) 井戸 S E3530 (西から)
 (2) 井戸 S E3540 (北から)
 (3) 井戸 S E3545 (北から)
- PL. 102 (1) 121次調査区全景 (空中写真, 西上空から)
 (2) 121次調査区全景 (北から)
- PL. 103 (1) 橋・建物群 (西真上から)
 (2) 橋 S A3622・3623, 溝 S D3637 (東から)
 (3) 橋 S A3625, 溝 S D3630 (南から)
- PL. 104 (1) 掘立柱建物 S B3610・3626 (東から)
 (2) 掘立柱建物 S B3615 (西から)
- PL. 105 (1) 掘立柱建物 S B3620 (南から)
 (2) S B3620柱痕 2
 (3) S B3620柱痕 3

- PL. 106 (1) 井戸 S E 3636 (西から)
 (2) 井戸 S E 3645 (北から)
 (3) 井戸 S E 3645 枠 (北から)
- PL. 107 (1) 井戸 S E 3645 下部 (北から)
 (2) 土坑 S K 3648 (南から)
 (3) 土坑 S K 3658 (西から)
- PL. 108 (1) 鋳造遺構 S X 3640 (東から)
 (2) 鋳造遺構 S X 3640 (北から)
 (3) 同 土層断面 (北から)

北辺城

- PL. 109 (1) 観世音寺北辺城 (空中写真, 北東上空から)
 (2) 観世音寺北辺城 (空中写真, 北西上空から)
- PL. 110 (1) 70次調査区上層遺構 (南から)
 (2) 70次調査区上層遺構 (西から)
- PL. 111 (1) 70次調査区下層遺構 (南から)
 (2) 70次調査区下層遺構 (西から)
- PL. 112 (1) 構 S A 1840 (東から)
 (2) 構 S A 1840 柱根 (東から)
 (3) 門建物 S B 1748 柱根 (南から)
- PL. 113 (1) 掘立柱建物 S B 1730・1735・1845・1855 (東から)
 (2) 溝 S D 1805 (西から)
- PL. 114 (1) 井戸 S E 1760 (北から)
 (2) 井戸 S E 1765 (北から)
 (3) 井戸 S E 1770 (東から)
- PL. 115 (1) 井戸 S E 1755, 土坑 S K 1750 (東から)
 (2) 井戸 S E 1775 (東から)
- PL. 116 (1) 井戸 S E 1780 (西から)
 (2) 井戸 S E 1785 (北から)
 (3) 井戸 S E 1790 (北から)
- PL. 117 (1) 井戸 S E 1795 (東から)
 (2) 井戸 S E 1795 枠 (東から)
- PL. 118 (1) 井戸 S E 1800 (南から)
 (2) 井戸 S E 1701 (東から)
- PL. 119 (1) 井戸 S E 1781 (南から)
 (2) 井戸 S E 1783, 土坑 S K 1782 (北から)
 (3) 土坑 S K 1740・1745 (北から)
- PL. 120 (1) 土坑 S K 1788 (南から)
 (2) 土器出土状況 (西から)
- PL. 121 (1) 石組土坑 S K 1685 (南から)
 (2) 石組 S X 1842 (東から)

- PL. 122 (1) 石列 S X 1690 (南から)
(2) 石列 S X 1690 (東から)
(3) 地鎮 S X 1810 (南から)
- PL. 123 (1) 下層暗渠群 (西から)
(2) 下層暗渠群 (東から)
- PL. 124 (1) 暗渠 S X 1831・1832・1833 (東から)
(2) 暗渠 S X 1831・1832 (西から)
- PL. 125 (1) 暗渠 S X 1831・1832 (北から)
(2) 暗渠 S X 1831・1832 (南から)
(3) 暗渠 S X 1833 (北から)
(4) 70次補足調査 暗渠 S X 1833, 溝 S D 1850 (西から)
(5) 同 暗渠 S X 1833 (東から)
- PL. 126 (1) 暗渠 S X 1834 (東から)
(2) 暗渠 S X 1834 (南から)
(3) 暗渠 S X 1834 (北から)
- PL. 127 (1) 70次補足調査 暗渠 S X 1834, 溝 S D 1850 (北から)
(2) 暗渠 S X 1835 (南西から)
(3) 暗渠 S X 1835 (北西から)
- PL. 128 (1) 120次調査区上層遺構 (北から)
(2) 120次調査区上層遺構 (北から)
- PL. 129 (1) 中層遺構 (北から)
(2) 橋 S A 3590・3595, 掘立柱建物 S B 3585 (東から)
(3) 橋 S A 3590・3595 (南から)
- PL. 130 (1) 下層遺構 (南から)
(2) 溝 S D 3605 (東から)
(3) 溝 S D 3605, 土坑 S K 3576 (北から)
- PL. 131 (1) 暗渠 S X 3572 (東から)
(2) 123次調査区 (東から)
(3) 掘立柱建物 S B 3700 (北から)
(4) 同 柱根 (北から)
- PL. 132 (1) 144次調査区上層遺構 (南西から)
(2) 144次調査区上層遺構 (北東から)
- PL. 133 (1) 48次調査区 (東から)
(2) 48次調査区 (南から)
- PL. 134 (1) 118次調査区 (東から)
(2) 土坑 S K 3451 (南から)

I 調査の組織と経過

(1) はじめに

観世音寺は、『続日本紀』元明天皇和銅2年(709)2月の詔に、「筑紫観世音寺、淡海大津宮御宇天皇(天智)奉_二為後岡本宮御宇天皇(斉明)_一誓願所_三基」とあり、天智天皇が母帝齐明天皇の善提を申うために発願された寺として著名である。

伽藍は天智天皇の発願から80余年を経た天平18年(746)に落慶を迎えた。その壮大な伽藍は鎮西第一の名刹であった。また、観世音寺の寺域は方3町と推定され、「府の大寺」と称された規模と壮麗さを誇っていた。天平宝字5年(761)には、僧尼に戒を授けるための建物—戒壇院が設置され、名実ともに西海道随一の寺院としての地位を確立した。

大宰権帥菅原道真が「都府樓は儘かに瓦色を看 観音寺は只鐘声を聴く」と詠った観世音寺であったが、寺院完成後は大宰府の盛衰と軸を一つにし、東大寺の末寺となるまでは大宰府管内諸寺の僧統位置に君臨した。その一方で観音信仰の霊場として大衆の崇敬を集めた。大宰府の庇護の下に隆盛を極めた観世音寺であったが、大宰府の衰退以後は急速に勢力を失うものの中世に入ると再び隆盛期を迎え、戒壇院・金光寺他49の子院を擁することになる。

その後、観世音寺は島津軍の北部九州遠征に巻き込まれ、島津軍は金堂を灰燼に帰すという暴挙に出る。さらに、観世音寺別当が九州に下向した豊臣秀吉の怒りを買ひ、寺領を没収されてしまう。これにより観世音寺は廃寺寸前までに追い込まれるが、江戸時代には黒田藩が中心となり再興がなされ、同藩の庇護のもと現在も法燈を保つに至った。

現在、観世音寺境内には、江戸時代再建の金堂と講堂の他、鐘樓・車裡・天智院(茶室)・宝蔵などの建物が存在する。また、元禄16年(1703)に観世音寺から分離した戒壇院には、本堂・車裡・鐘樓・茶室などの建物があり、観世音寺とともに古刹として人々に憩いの場を提供している。

(2) 調査経過

伽藍自体の調査経過に関しては、『観世音寺—伽藍編—』で詳述しているので、今回は寺域を中心に述べることにする。

大正8年(1919)、「史跡名勝天然記念物保存法」が制定され、同10年(1921)に大宰府政庁跡は水城跡・大野城跡・筑前国分寺跡とともに「大宰府跡」として面積約12haが国の史跡に指定された。昭和25年(1950)、新たに「文化財保護法」が制定され、それに伴い史跡「大宰府跡」・「大野城跡」・「水城跡」は特別史跡へと昇格したものの拡大追加指定はされなかった。

その後、昭和38年に、観世音寺から政庁跡背面にかけて宅地造成計画が福岡の大手不動産会社から出され、大宰府の遺跡は一挙に破壊の危機に瀕した。この状況を憂慮した福岡県と文化財保護委員会は、「大宰府学校院跡」と「観世音寺境内及び同子院跡」を新たに指定するとともに政庁跡についても追加指定することを検討し、昭和41年10月、福岡県教育委員会は追加指

戒壇院の設置

観音信仰の霊場

黒田藩による庇護

特別史跡へ昇格

追加指定

I 調査の組織と経過

定申請を行い、これを受けて文化財保護委員会は同年11月、特別史跡大宰府跡の追加指定と観世音寺境内及び同子院跡、学校院跡を新たに指定することとし、指定面積を約110haに拡大することを決定し、地元へ提案した。この広範囲にわたる追加指定は、住民の日常生活に強い規制をかけるものとして地元住民の猛反発にあり、追加指定反対の住民運動へと発展した。

指定反対の
住民運動

昭和42年6月、福岡県、太宰府町、地元住民代表及び学識経験者からなる「太宰府地区史跡等保護整備協議会」が結成され、さらに翌年7月には太宰府町議会に「史跡対策特別委員会」が設置され、指定拡大に絡む様々な問題点について幾度となく協議を重ねられた。

こうした長期にわたる間、福岡県、太宰府町、地元住民との協議を経て、昭和45年9月に特別史跡大宰府跡の追加指定並びに「大宰府学校院跡」と「観世音寺境内及び同子院跡」の新たな史跡指定が官報告示された。

史跡指定の
官報告示

一方、文化庁は昭和43年に「大宰府史跡発掘調査指導委員会」を組織し、その指導・助言の下に発掘調査を行い、遺構の解明に着手することとした。史跡の保存を行うには、ただその重要性を強調するだけでは一般住民の理解は得難く、発掘調査によって遺跡の状況を具体的に示し、その価値を明らかにすることが極めて重要である。また、遺跡を整備し、保存・活用を計るための基礎資料を得るためにも発掘調査は必要と言える。

発掘調査の
必要性

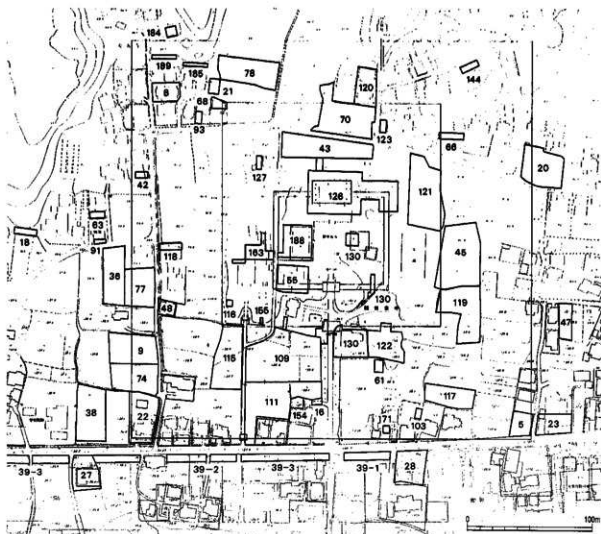


Fig. 1 観世音寺調査地域図 (1/3,000)

大宰府史跡発掘調査指導委員会は、国史学・考古学・建築史学の研究者10名で構成され、委員長に竹内理三氏、副委員長に鏡山猛氏が選任された。昭和43年7月、第1回目の会議が地元福岡で開催され、発掘調査の基本計画、当面の発掘調査箇所が協議された。昭和59年には「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改称し、造園学・都市工学の専門家を加えた13名の委員で構成され、今日に至っている。

さて、観世音寺の解明を目的とした発掘調査は、『延喜五年観世音寺資財帳』（以下、『資財帳』）及び『観世音寺絵図』を参考としながら、それらに記載された堂宇の規模を想定し、かつ残存している礎石などから調査範囲を決定している。当館が行った観世音寺の発掘調査は、昭和45年に大宰府史跡第5次調査として実施したのが一等最初であり、この時点での調査体制は十分なのではなく、トレンチによる小規模調査であったが、東西方向の新旧築地2基、南北方向の築地1基を検出した。今回の調査区は推定寺域の南東隅部で、鏡山条坊復原案による4条7坊の南東隅部に位置するものであった。

推定寺域の
南東隅部

観世音寺地区の本格的な調査に着手したのは、昭和51年に大宰府史跡第43次調査として実施した推定僧房跡の調査である。遺構面は後世の削平が著しかったものの、辛うじて礎石2個と礎石拵付穴33個が遺存しており、長大な東西礎石建物S B 1080を検出することができた。礎石拵付穴の規模・配列から建物の復原を試みた結果、『資財帳』記載の大房と寸法が近似することから大房建物と判断するに至った。

大房建物の
発見

引き続き、寺域の北限を確認するとともに『資財帳』に記された小子房・客僧房・馬道屋などの場所を確認することを目的として、昭和55年に大宰府史跡第70次調査を、平成元年には大宰府史跡第120次・70次補足調査を実施した。これらの調査の結果、第70次調査区北端で幅6.5mの版築状遺構から6条の瓦組暗渠施設を検出し、暗渠の北端が東西溝S D 1850に接続していることを確認した。通常、暗渠は建物基礎や回廊・築地塀などの基礎地形として埋設されるもので、版築状遺構を築地塀と考えることも可能であるが、大きな問題が生じる事となった。

瓦組暗渠

それは、この位置に築地を想定すると東辺・西辺築地の長さが65丈（195m）なので、南大門の推定位置を南側に15m程移動させる必要が生じ、新たな疑問として浮上した。また、特筆される点として、流路中の出土であったが、大和川原寺の軒丸瓦と同形の瓦が1点発見され、天智天皇ゆかりの寺であることを改めて認識した次第である。

川原寺と同
形の軒丸瓦

北辺城の第120次調査では、製塩土器を多量に廃棄した土坑が発見され、厨師施設が存在が想定できる。また、北辺築地の位置であるが、現南大門礎石付近を推定南辺築地とすると北辺築地は当調査区の北半部に位置することになる。しかしながら、版築積土などの北辺築地に関する遺構は検出できておらず、第70次調査検出の版築状遺構を築地関連遺構とすると『資財帳』記載の数値を検討し直す必要が生じる。

厨師施設

昭和62年から平成3年にかけては、寺域の東辺城及び南辺城に集中して調査を実施した。大宰府史跡第45次・119次・121次調査地は伽藍の東側で、東辺築地の推定地にあたる。調査箇所は宝蓋の北から南東側にかけてで、そこには南北に畦畔が走っており、堂宇の東側を囲する築地塀の存在が予測された。調査の結果、第121次調査区の東端において南北に走る8世紀後半の播S A 3625を検出した。『資財帳』には、「[■]□[■]陸拾伍丈板葺」と記されており、他の築地3面が瓦葺であるのに対し、東辺築地は板葺である。西側の学校院との境界は瓦葺の築地塀でもっ

S A 3625は
板葺

I 調査の組織と経過

て厳格に規制しているが、第121次調査で検出した遺構は板塀とみなせるものであり、第45次・119次調査区での遺構の広がり状況を勘案すると、東側は規制が緩やかであったことが窺われる。また、南北溝 S D1300から唐三彩三足盃（鏡）が出土したことは特筆されよう。

唐三彩の
出土

次に、推定南門跡の位置を手掛かりに、南辺築地の検出を目指した。昭和62年には大宰府史跡第109次・111次調査として推定築地跡南西部を、さらに昭和63年には大宰府史跡第115次調査として推定築地跡南西隅を調査対象地に選定し、平成2年は大宰府史跡第122次調査として推定築地跡南東部の発掘調査を進めた。翌平成3年には第122次調査の西隣を大宰府史跡第130次調査として実施した。この一連の調査により観世音寺前面域の様相が明らかになってきた。検出した遺構は、掘立柱建物・溝・井戸・土坑・落込などで、時期的には9～16世紀にかけてで、大きくⅢ時期に分けることが可能である。

懸案事項であった南辺築地は検出できなかったが、南門礎石をもとに築地を想定すると、築地想定ラインと平行する形で東西溝 S D3149が存在し、第115次調査で検出した S D3340に接続するものとみられる。また、参道側溝の南北溝 S D3200・3840の先端は東西溝付近で終焉しており、やはりこの付近に南辺築地を想定せざるを得なくなる。

第109・111次調査においては、13～16世紀にかけて掘削された小溝や堀によって区画された中世の集落跡が検出され、仏具・容器などの鋳型が多量に出土したことから鋳物師集団の集落跡の可能性が高まった。また、古代の遺構が検出されなかったことから、観世音寺南門前面域一帯は、寺院創建当時は一種の空地であったことが窺われた。

中世の鋳物
師集落か

さらに、推定南門跡から南に延びる現参道は、古い時代から存在していたと確定できたことは大きな成果であった。現参道の西側で幅8～11mの南北溝 S D3200を検出し、溝下層掘土中から「嘉元二年（1304）十一月卅日」の紀年銘を有する卒塔婆が発見された。また、参道を挟んだ第130次調査区の南北溝 S D3840からは「元亨三年（1323）」銘の木札が出土しており、両者は同時併存していることが確かめられた。中世の溝ではあるが、西溝の先端は推定南門跡付近から始まっており、参道を区画するため掘削された溝と考えられる。

第122次調査では梁行3間、桁行8間の南北棟建物 S B3660と井戸 S E3680が目される。

S B3660は
現場事務所

建物・井戸ともに8世紀前半の終焉で、観世音寺建築に際して設けられた仮設事務所的な性格が考えられる。伽藍の完成とともに廃棄されたものである。

昭和27年の発掘調査以後、福岡県教委及び九州歴史資料館が観世音寺の伽藍及び寺域周辺の調査に着手して48次数を数える。観世音寺は奈良時代の落度以降、幾たびかの災難に遭遇しては建物を修復しながら寺としての命脈を現代まで保ち続けてきた。それは大変素晴らしいことである。しかし、建物の改築、中世遺構による削平、後世の擾乱などによって創建伽藍の殆どがダメージを受けてしまった。一時代で終焉し、創建当時の状況を残す寺院とは歴史の重みを比すべくもないが、調査に携わった者として何かしら感慨深いものがある。

また、中門をはじめ鐘樓や経藏など、未だ建物の位置、規模・構造を把握するに至っていない現状である。これらの様々な課題については、将来的に解決されることを期待するに留めるが、今次報告書は、当館が実施した寺域周辺の調査成果をとりまとめ、大方の研究資料として供する次第である。

Tab. 1 観世音寺発掘調査地域一覧

次数	地区略号	調査箇所	面積㎡	調査期間	地番
		金堂・講堂他		昭和27年	観世音寺字堂廻
		講堂・東面回廊		昭和32年	◇
5	6KKZ-B-G	寺城南東隅部	60	700710~700730	観世音寺字露切73-1
16	◇ -B-P	南辺城	21	711125~711214	◇ 堂廻174
20	◇ -B-B	東辺城	130	720603~720703	◇ 朝日13-1
23	◇ -C-F	寺城南東隅部	240	720928~730110	◇ 露切74-1
28	6AYE-B	左郭五条七坊	77	730525~730613	◇ 露切96-1,96-2
39-1	6AYE-C	左郭五条六坊	279	751020~751127	◇ 露切98-8
39-2	◇ -D	左郭五条五坊	250	760202~760416	◇ 土井ノ内154他
39-3	◇ -C	左郭五条三~六坊	600	760630~760927	◇ 土井ノ内169-6他
43	6KKZ-B-K	僧房跡	970	761012~770224	◇ 堂廻183-4
45	◇ -B-M	東辺築地東面東部	1,570	770410~771007	◇ 今道50-52
47	◇ -C-E	東辺城	105	770405~770424	◇ 御所ノ内41-1
48	◇ -A-H	西辺城	20	770425~770427	◇ 堂廻191
55	◇ -B-M	西面回廊南西隅部	70	780403~780415	◇ 堂廻182
61	◇ -B-O	南辺城	48	781124~781205	◇ 今道63-2
66	◇ -B-H	東辺築地東面東部	50	800108~800111	◇ 山ノ井857
70	◇ -B-J	推定小子房跡	1,150	800406~801203	◇ 山ノ井845・846
71	◇ -B-P	南辺城	5	800410~800415	◇ 今道63-3
103	◇ -B-P	南辺城	13	861104~861120	◇ 今道62-9
109	◇ -B-O	南辺築地前面	1,790	870704~871224	◇ 堂廻178-1他
111	◇ -B-P	南辺城	1,480	880104~880617	◇ 堂廻176-1他
115	◇ -B-P	戒壇院南辺城	860	880708~881117	◇ 堂廻195・199
116	◇ -A-F	戒壇院境内地	11	880919~880926	◇ 堂廻192-2
117	◇ -B-O	南辺城	630	881110~890214	◇ 今道59
118	◇ -A-H	西辺城	35	881205~881214	◇ 堂廻190-2
119	◇ -B-N	東辺築地南東隅部	870	890322~890812	◇ 今道54-1・2
120	◇ -B-I	推定北辺築地跡	360	890821~891030	◇ 山ノ井893-3
121	◇ -B-L	推定東辺築地跡	1,235	891127~900516	◇ 今道48-3
122	◇ -B-O	南辺築地南面東部	630	900601~900917	◇ 今道62
123	◇ -B-H	僧坊跡北側	7	900810~900811	◇ 山ノ井847-1
126	◇ -B-L	講堂跡	800	891119~900809	◇ 堂廻182
126補	◇ -B-L	講堂跡	250	040119~040521	◇ 堂廻182
127	◇ -A-C	僧坊跡南西隅部	10	901114~901116	◇ 堂廻184-1
130	◇ -B-O	塔・南門・回廊跡	867	920109~921222	◇ 今道64他
144	◇ -B-H	北辺城	59	920729~920907	◇ 山ノ井862-1
154	◇ -B-O	南辺城	22	940117~940125	◇ 堂廻175-1
155	◇ -B-O	推定南辺築地跡	4	931224~940124	◇ 堂廻192-1
163	◇ -A-E	戒壇院庫裡	278	941017~950206	◇ 堂廻192-1
188	◇ -B-M	金堂跡	160	021001~030210	◇ 堂廻182

I 調査の組織と経過

(3) 調査組織

観世音寺境内及びその周辺域の発掘調査は、昭和27年に行った金堂・講堂跡の調査から子院跡を含めると通算48回を数える。本格的な発掘調査は、昭和44年に福岡県教育委員会に文化課が発足し、大宰府史跡を中心に調査を進めてゆくようになってからであり、観世音寺の発掘調査も大宰府史跡を解明する目的の一環として実施することになった。

発掘調査を実施するに際しては、諮問機関として10名の委員で構成される「大宰府史跡発掘調査指導委員会」(後に「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改名し、委員も13名に増員)を設置し、その指導・助言のもとに計画的に進められた。

九歴の発見 九州歴史資料館が昭和47年に発足してからは調査体制も整備され、大宰府史跡を総合的・学術的に解明することを目標に掲げ調査計画が立案された。しかしながら、当館における大宰府史跡の調査は、大宰府政庁跡や観世音寺のみならず、大野城跡・水城跡・学校院跡・筑前四分寺跡などの大規模かつ歴史的に重要な遺跡を数多く抱え、さらに大宰府政庁前面域の土地区画整理事業に係る緊急調査の対応に終始する有様であった。政庁前面域の調査においては、政庁

Tab. 2 大宰府史跡調査研究指導委員会委員 (在任年順、○は委員長経験者を表す)

氏名	分野	職(就任時)	在任期間
○竹内 理三	国史	早稲田大学教授	S43~S58
鏡山 猛	考古	九州大学教授	S43~S46
浅野 清	建築	大阪市立大学教授	S43~S62
井上 辰雄	国史	熊本大学教授	S43~S58
井上 光貞	国史	東京大学教授	S43~S56
大田 静六	建築	九州大学教授	S43~S58
○岡崎 敬	考古	九州大学助教授	S43~H2
岸 俊男	国史	京都大学教授	S43~S61
坂本 太郎	国史	國學院大学教授	S43~S55
坪井 清足	考古	奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部長	S43~H7
小田富士雄	考古	九州大学助手	S43~
○平野 邦雄	国史	東京女子大学教授	S59~H7
狩野 久	国史	奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	S59~
○佐山 晴生	国史	東京大学助教授	S59~
澤村 仁	建築	九州芸術工科大学教授	S59~
杉本 正美	園	九州芸術工科大学教授	S59~
中村 一	園	京都大学教授	S59~
○横山 浩一	考古	九州大学教授	S59~H11
渡辺 定男	都市工学	東京大学教授	S59~
八木 充	国史	山口大学教授	S63~
川添 昭二	国史	九州大学教授	S63~
鈴木 嘉吉	建築	奈良国立文化財研究所長	S63~
西谷 正	考古	九州大学教授	H4~
佐藤 信	国史	東京大学教授	H6~
坂上 康俊	国史	九州大学教授	H8~
田中 琢	考古	奈良国立文化財研究所長	H8~H10
町田 章	考古	奈良国立文化財研究所長	H11~H16
山中 章	考古	三重大学教授	H12~
田辺 征夫	考古	奈良国立文化財研究所長	H17~

関連の官衙域が御笠川付近まで広がっているという新たな事実が判明したが、それと引き替えに観世音寺及びその他の史跡の計画調査が遅々として進展しない状況にあった。その都度、年次計画を練り直し、指導委員会に諮るという有様であった。

また、観世音寺の発掘調査は、1970年の第5次調査から2003年の第188次調査までの33年間に及び、その間多くの職員が出入りした。それに加えて、平成11年度までは発掘調査成果を概

Tab. 3 観世音寺発掘調査関係者一覧

西暦	役職 名前 次	館長		副館長		参事						課長	参補	技術主査			主任技師			
		▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	▲ ▲	
1970	5											○								
1971	16											○		○						
1972	20					○						○	○							
1972	23					○						○	○							
1973	28					○						○	○							
1975	39					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1976	43					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1976	45					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1977	47					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1977	48					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1978	55					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1978	61					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1980	66					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1980	70					○		▲	▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1980	71					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1986	103					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲	○			
1987	109					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1988	111					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲	○			
1988	115					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1988	116					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1988	117					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1988	118					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1989	119					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1989	120					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1989	121					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1990	122					○		○	▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1990	123					○		○	▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1990	126					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲			▲	
1990	127					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1992	130					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲			▲	
1992	144					○		▲	▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1994	154					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1994	155					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
1994	163					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲				
2002	188					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲			▲	▲
2004	126補					○			▲	▲	▲	○	▲		○	▲			▲	▲

凡例 一： 在任期間，▲： 退職者，●： 調査主任，○： 調査担当，△： 調査関係者

1 調査の組織と経過

要報告書という体裁で刊行し、正式報告書を先送りしてきた経緯がある。大規模遺跡では、ある程度広範囲に調査を行わないと遺跡の全体像を把握できず、報告書の度に従前の見解を訂正する必要が生じる恐れを避けるための措置ではあったが、実際の調査に携わった担当者も数人現役を引退しており、全く調査に携わっていない者が報告書に関わる状況となっている。こうした弊害を将来に残さないために、平成12年度以降は概要報告書ではなく、報告すべき遺構・遺物を網羅した年次ごとの報告書を刊行し、従前のやり方を改めている。

昨今は地方分権・構造改革・民営化という言葉がもてはやされ、県庁にも機構改革の波が押し寄せている。当館調査課も御多分に漏れず、以前は課長以下5名いた課員が平成16年度は2名までに削減され、平成17年度は名目上4名になったが、実働は3名という厳しい状況下にある。なお、大宰府史跡第5次・16次調査は、福岡県教育委員会文化課が調査を担当し、大宰府史跡第20次調査以降は九州歴史資料館調査課が発掘調査を担当し、現在に至っている。

観世音寺に係る発掘調査関係者は、Tab.3のとおりである。各個人の役職は、退職者については調査に関与した最終時点での役職、現役の者は平成16年度時点での役職を示した。

なお、平成17年度の『観世音寺—寺域編—』に係る報告書関係者は、下記のとおりである。

九州歴史資料館

- | | | |
|------|------|-----------------------|
| <総括> | 館長 | 轟山 良一 (福岡県教育委員会教育長兼務) |
| | 副館長 | 濱田 信也 |
| | 参事 | 副島 邦弘 |
| <庶務> | 総務課長 | 浅野 健二 |
| | 副長 | 松井 安彦 |
| | 主任主事 | 白谷 有三 |
| <実務> | 調査課長 | 児玉 真一 |
| | 参事補佐 | 石丸 洋 |
| | 参事補佐 | 小田 和利 (執筆・編集) |
| | 主任技師 | 杉原 俊之 |
| | 主任技師 | 岡寺 良 |
- <整理> 大田千賀子 市川千香枝 中田千枝子 高田いく子 初山 淳子

なお、本報告書作成にあたり、観世音寺石田琳圃住職 (故人)、岡石田琳彰住職、戒壇院柏木文正住職、太宰府市文化財課諸氏には有益な御教示を得た。末筆ながら、記して感謝いたします。

(小田)

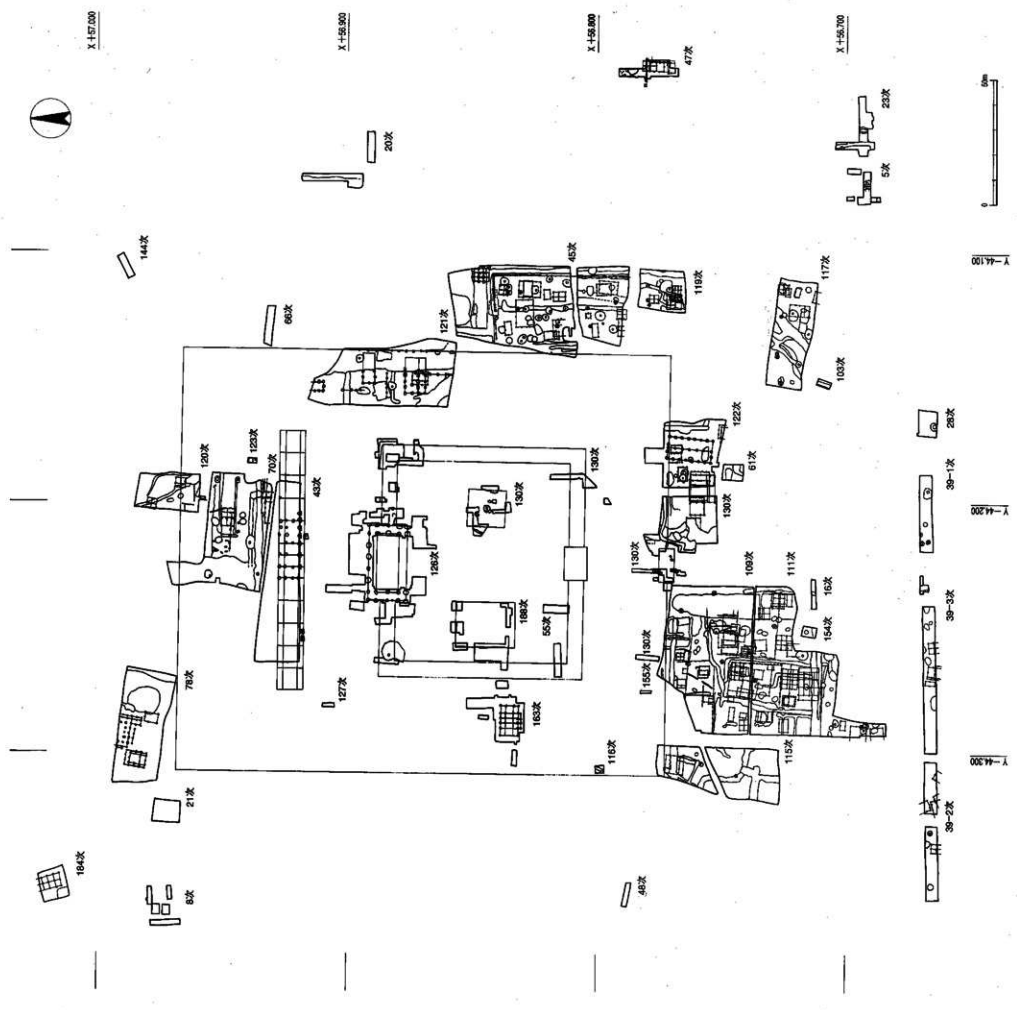


Fig. 2 宿舍区位置图 (1/1,500)

II 調査の概要

(1) 基本層序

今回の寺域層は、主要伽藍を除いた周辺部を南辺域・東辺域・北辺域・西辺域の4地区に区切り、各地区ごとに検出した遺構を報告するものである。各地区においては、土層の堆積状況が異なり、観世音寺全体の基本層序として一括できないので4地区ごとに記述を行う。

南辺域 (Fig.3)

Fig.3-1は第109次調査区南壁の土層図で、南壁のほぼ中央付近の堆積状況である。基本層序は上層から表土(1層)、床土(2層)、茶灰色土(3層)、暗褐色土(4層)、淡茶色土(5層)、黒灰色砂質土(6層)、灰褐色砂質土(7層)、黄白色粘土(地山)となる。4層の暗褐色土は床土下層の堆積土で、調査区全域にみられる。6層の黒灰色砂質土は遺構面を覆う土層で、北西部を除く全域に堆積している。この堆積土は発掘区の南端及び東側に向かって徐々に厚さを増している。

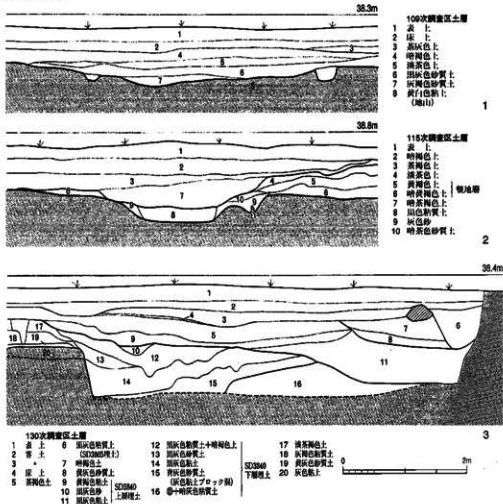


Fig. 3 南辺域土層図 (1/60)

II 調査の概要

Fig. 3-2は第115次調査区南壁土層図で、SD3333付近の地積状況を示す。上層から表土(1層)、暗褐色土(2層)、茶褐色土(3層)、淡茶色土(4層)、黄褐色土(5層)、暗黄褐色土(6層)を基調とし、8~10層はSD3333の埋土である。調査区北側は表土・床土を除去するとすぐさま地山面に達する。南側には中~近世の遺物を包含する暗褐色土(2層)が堆積しているが、南側に向かって厚くなっている。この暗褐色土を除去すると溝・ピットが検出される。南東部には黒色粘質土及び黒灰色粘質土が厚く堆積した箇所がみられるが、第109次調査区側には拡がっておらず、部分的な堆積である。

Fig. 3-3は第130次調査区南壁土層図で、SD3840付近の地積状況である。基本層序は上層から表土(1層)、客土(2・3層)、床土(4層)、茶褐色土(5層)、淡茶褐色土(17層)、灰褐色粘質土(18層)、黄灰色砂質土(19層)、灰色粘土(地山)が堆積している。6層はSD3865埋土、7・8層はSK3863埋土で、ともに茶褐色土から切り込んでいる。9~11層はSD3840上層埋土で、12~16層がSD3840下層埋土である。ただ、下層埋土の12層と13~16層とは堆積状況が異なり、12層が下層埋土の最終堆積層となっている。

東辺城 (Fig. 4)

Fig. 4-1は第45次調査区中央部の土層図で、暗渠SX1310付近の地積状況である。層序は上層から床土(1層)、黒褐色土(2層)、黄褐色土(3層)、黄灰褐色土(4層)、茶灰色土(5層)、灰色粘砂(6層)、青色粘土(7層)、黒茶色粘土(8層)、腐植土(地山)が堆積する。I期(8世紀中頃)の遺構は、5層上面から掘り込まれる。II期(12世紀前半~中頃)の遺構は4層から掘り込むもので、非戸・土坑・多数のピットなどが検出された。III期(13~14世紀代)の遺構は2層から掘り込むもので、溝・横・池・非戸・土坑などがある。

Fig. 4-2は第119次調査区北西隅部の土層図で、溝SD1230付近の地積状況である。土層は大きく暗褐色土(2層)、黄褐色土(3層)、暗茶褐色土(4層)、明褐色土(5層)に分けられる。6・7層がSD1230Bの埋土で、8・9層がSD1230Aの埋土である。黄褐色土を除去すると溝・ピットなどの遺構が検出される。3層の黄褐色土は明確な層位として捉えられる層位ではないが、形成された時期は第45次調査と同じ12世紀前半頃と考えられる。

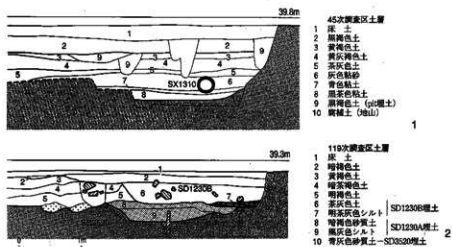


Fig. 4 東辺城土層図 (1/60)

北辺城 (Fig. 5)

Fig. 5は第120次調査区の南壁土層図で、井戸SE3570付近の土層堆積状況である。遺構との関係からすると、最上層(3層:茶灰色土)、上層(4・5層:黒褐色土、6層:黒色土)、中層(8層:淡茶色土、9層:明茶灰色土)、下層(11層:黄褐色整地土)で、上層の黒褐色土には鎌倉時代の遺物を多く包含している。中層上面には土坑・多くのピットが掘り込まれ、その密度は高い。また、奈良・平安時代の遺構は11層の黄褐色整地土上面から掘り込まれている。

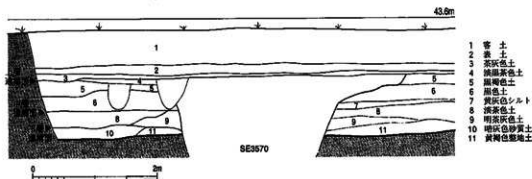


Fig. 5 北辺城土層図 (1/60)

西辺城 (Fig. 6)

Fig. 6は第118次調査区の北壁土層図で、溝SD3450周辺の土層堆積状況である。客土の下が暗褐色粘質土(2層)で、遺構はそれを除去して検出した。3～5層は溝SD3450の堀土である。

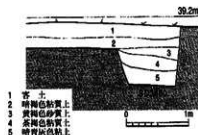


Fig. 6 西辺城土層図 (1/60)

(2) 遺構の概要

遺構の概要についても、南辺城(第5・16・23・28・39-1・39-2・39-3・61・103・109・111・115・117・122・130・154次調査)、東辺城(第20・45・47・66・119・121次調査)、北辺城(第70・120・123・144次調査)、西辺城(第48・118次調査)の4地区に分けて説明を加える。

1) 南辺城

第5・23次調査

住宅建設に伴う事前調査として実施した。寺域を方三町(鏡山案)とした場合、推定寺域の南東隅部にあたり、「観世音寺文書」の記事からも注目される場所である。調査の結果、築地状遺構・石積・ピットなどを検出した。これらは平安後半～中世の時期で、東西方向の築地状遺構SA091は同位置に2回建て替えられている。位置的には問題はないが、版築土層は認められず、築地とするにはやや疑問が残る。

第23次調査区は第5次調査区とは道路を隔てた東側に位置する。SA091の延長線上にあ

方三町の寺域

II 調査の概要

築地状の遺構 SA467

るが、それに関する遺構の検出はなかった。上層遺構として、調査区中央で築地状遺構 SA467、北西隅で井戸 SE480を検出した。下層遺構としては、襖敷の通路状遺構 SX487、柱列 SA488を検出している。

第28次調査

住宅建設に伴う事前調査で、寺城南辺部と条坊との関連について把握することを目的とした。調査の結果、中世の円形石積土坑 S K521と鑄造に関わる石組区画 S X525を検出した。遺構上面には保土穴が2箇所あり、銅滓が出土していることから工房跡とみられる。

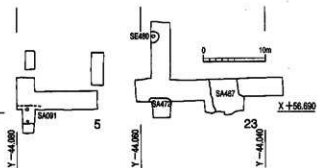


Fig. 7 第5・23次調査区 (1/600)



Fig. 8 第28次調査区 (1/600)

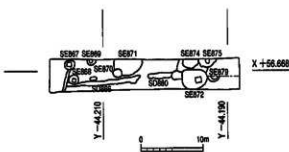


Fig. 9 第39-1次調査区 (1/600)

(第39-1・2・3次調査)

果道拡幅工事の事前調査として実施した。当該地は『筑前国統風土記附録』の挿絵によると「観世音寺公文所別当」の屋敷が存在した場所で、掘立柱建物9棟、井戸11基、土坑55基、溝10条、保土穴2基などを検出したが、調査区の幅が5mと狭いこともあり、公文所別当屋敷については判然としなかった。

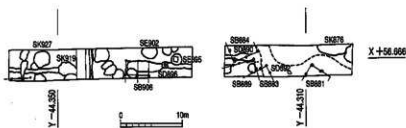


Fig. 10 第39-2次調査区 (1/600)

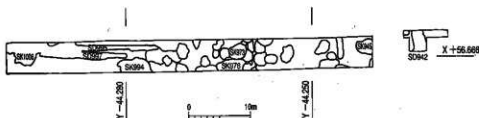


Fig. 11 第39-3次調査区 (1/600)

第16・109・111・154次調査

第16次調査は現参道の西側に接する部分で、現状変更（車庫建設）に伴うものである。旧参道についての知見を得る目的で調査を行った。南北方向の石組溝 S D363を検出したが、鎌倉後半頃のものである。調査範囲が狭小であり、詳細は不明。

第109・111次調査は南辺築地及びその前面域の状況を把握することを目的とした計画調査である。調査年度は異なるが、両調査区は南北に接し、遺構も連続しているので同時に報告する。遺構は大きく3期3層に及んでいる。I期は9～10世紀代、II期は11～13世紀前半代、III期は13世紀後半代～16世紀代に位置付けられる。

I期で明確に捉えられるのは、井戸 S E3150のみである。II期には掘立柱建物・井戸・土坑などの遺構があるものの、東西溝 S D3300以南で取まり、溝以北へは拡がらない。この事は、I期にはこの地域が空閑地であったこと、II期には S D3300が寺域の東西境界であったことを

I期は空閑地だった

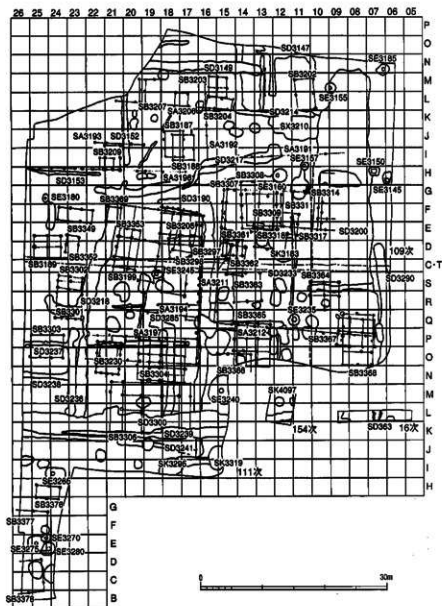


Fig.12 第16・109・111・154次調査区 (1/600)

Ⅱ 調査の概要

仏具製作工
房

示している。また、土坑・落込からは仏像・仏具類の鋳型が出土しており、近辺に仏具類を鋳造した工房の存在が指摘できる。

嘉元二年結
木 簡

Ⅲ期には区画溝及び溝で囲繞された掘立柱建物・井戸・土坑が存在し、中世集落の一端が窺える。南北溝S D3200は現在の参道と平行して掘削され、参道の西側溝とみられる。掘土層からは「嘉元二年(1304)」銘の卒塔婆が出土しており、中世には南門から南に参道が延びると言う現在の状況に近いものであったと考えられる。

第154次調査は現状変更(住宅改築)に伴い実施した。第111次調査地の南隣接地で、東西溝S D3300の延長と土坑、ピットなどを確認したにすぎない。

第115次調査

現戒壇院参道の西側に接する地区で、第109・111次調査区の西側にあたる。第109次調査において明らかにし得なかった南辺築地を把握する目的で行った計画調査である。調査の結果、古代の遺構は全く存在せず、13世紀後半～14世紀代の交差する数本の溝及び掘立柱建物・井戸が検出されたのみである。この溝の規模・形態は、第109・111次調査区の区画溝と類似しており、建物は1棟しか検出されなかったが、建物を囲繞する区画施設と考えられ、中世の集落が戒壇院前面以西に広がっていることが十分に測される。

中世集落は
戒壇院以西
にも拡大

懸案の南辺築地に関する遺構は検出できなかったが、東西溝S D3340以北には主立った遺構は延びておらず、第109次調査と同じ結果を呈することからS D3149・3340の北側に南辺築地を想定しても強ち無理はないものと思われる。

第61・122・130次調査

第61次調査は史跡環境整備(便所設置)に伴う現状変更

として行った。狭小な調査区で、溝・土坑を検出したに過ぎない。

第122・130次調査は南辺築地及びその前面域の状況を把握することを目的とした計画調査である。

調査の結果、7世紀末～8世紀前半代の掘立柱建物S B 3660、井戸S E 3680を検出した。建物は

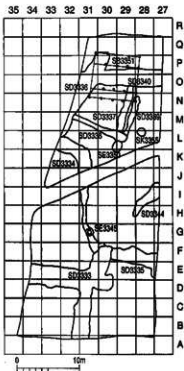


Fig. 13 第115次調査区 (1/600)

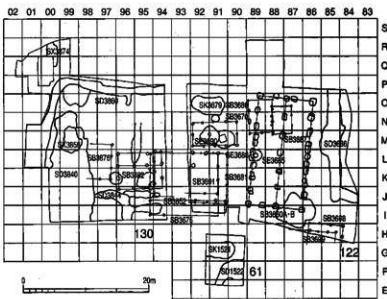


Fig. 14 第61・122・130次調査区 (1/600)

年代的に落慶以前の存在であること、推定御堂中心線から東へ6度傾くこと、掘方に比して柱痕が小さいこと、柱掘方の並びがやや変動的であることなどから一般的な建物とは考え難い。また、同時存在した井戸中からは建築部材、建築時に使用する道具、葦草の縄索が出土したことから、観世音寺建設に際して設けられた仮設事務所の性格の建物と判断された。

観世音寺
事務所

第130次調査区は第122次調査区に西接し、上層遺構として埋甕・埋桶・石組溝及び推定南門跡を鉤形に屈曲して流れる溝SD3865などがある。下層遺構としては、掘立柱建物・土坑及び第109・111次調査検出の南北溝SD3200と対になる溝SD3840がある。SD3840からは「元亨三年(1323)」紀年銘木札が出土しており、両溝の同時存在を裏付ける。当調査区においても南辺築地に関する痕跡は得られなかったが、SD3855・3860・3865何れの近世溝も南門を避けるかの如く屈折して流れていることから、この付近に南門及び南辺築地が想定される。

元亨三年銘
木札

第103次調査

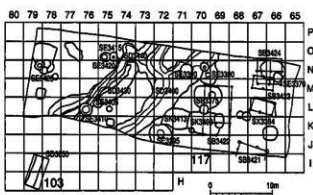
住宅改築に伴う現状変更として実施した。「筑前名所図会」の挿絵によると、当該地付近には小さな社が描かれ、「ぎおん」と記されている。現在でも、その参道の名残がみられる。この様なことから、古代・中世観世音寺に関連する遺構の検出を目的として調査を行った。調査の結果、12世紀初頭に埋没したとみられる溝1条を検出したに過ぎず、調査区も狭小であるため溝の規模・性格についても不詳。

ぎおん社

第117次調査

当該地は鏡山氏条坊復原案によれば観世音寺寺域内に含まれ、条坊で呼称すると左郭四条七坊にあたる。「観世音寺文書」には、長徳2年(996)、観世音寺に新たに施入された土地として左郭四条七坊の土地がみえる。寺地と郭地が相交わる所とされ、その四至が記載されていることから条坊復原の有力な手掛かりとされてきた。

調査の結果、3期(9～14世紀)にわたる溝・井戸・土坑・多数のピットなどの遺構を検出したものの、寺域を明示する遺構は捉えていない。



四至の範圍

Fig. 15 第103・117次調査区 (1/600)

2) 東辺域

第20次調査

寺域東辺の北部にあたる。調査の結果、溝状遺構SD435と石垣SX437を検出したが、いずれも中世のもので、古代観世音寺と関連するものはみられなかった。

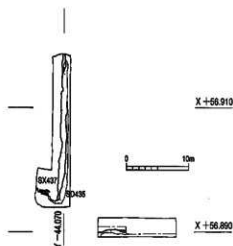


Fig. 16 第20次調査区 (1/600)

た。Ⅰ期は8世紀後半～11世紀後半代、Ⅱ期は12世紀前半代、Ⅲ期は12世紀後半～14世紀代である。注目される南北溝S D1300は11世紀まで降るものであり、東辺築地に関連する溝ではない。また、Ⅲ期の石組溝S D1230についての性格も明確にできなかった。

第121次調査

本次調査も東辺築地及び東辺地域の状況把握を目的として行った計画調査である。調査の結果、加蓋推定中軸線から東に84.8mの箇所で南北方向の溝S A3625を検出した。この距離は「資財帳」でいう南辺築地57丈(171m)の半分の距離85.5mに近似する数値である。版築積土による築地遺構ではないため、すぐさまS A3625を東辺築地と断定できなかったが、築地と同様な役割を果たす板塀と考えた。

東辺築地は
板塀

また、溝の内側では8世紀後半～9世紀中頃の掘立柱建物3棟、溝3条、それに9世紀前半～中頃の銚造遺構S X3640が営まれている。「西院」銘墨書土器が出土しており、第45次出土の「東院」銘墨書土器と対をなすものとして、これら建物との関連が注目される。

「西院」
銘墨書土器

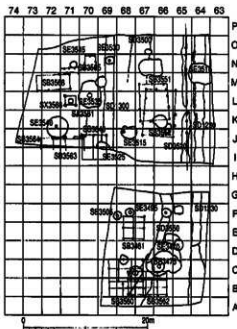


Fig. 19 第119次調査区 (1/600)

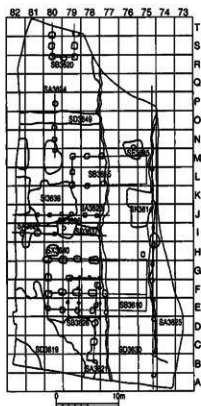


Fig. 20 第121次調査区 (1/600)

3) 北辺城

第70次・第123次調査

第43次調査で大房建物S B1080を検出していたため、その後方に推定される小子房の確認を目的として調査を行った。調査の結果、上層には中・近世の遺構が錯綜しており、古代の遺構の検出は困難を極めた。小子房に関する建物掘方などは見られなかったものの、規則的に並んだ土坑・溝によって区画された細長い空間地、その空間地の地下に掘設された数条の互組暗渠 互組暗渠

II 調査の概要

小子房が存在した

の存在は、何らかの構造物が存在した可能性を示唆し、黒膏土器・硯・瓦などの出土遺物は、小子房の存在を裏付ける。

第123次調査は浄化槽埋設に伴い調査を行った。狭小な調査区であったが、第70次調査検出のSD1786に接続すると考えられる溝SD3702と柱根1個を検出した。

第120次調査

第70次調査地の北側に接し、北辺築地推定地の

北門礎石

はほぼ中央部にあたる。北辺築地関連遺構の検出を目的として実施した計画調査である。かつて、この地付近から北門の礎石とされる軸振り穴を有する礎石が発見されており、そのことから注目される地域であった。調査の結果、奈良、平安後期、鎌倉期の遺構を検出したものの、築地に関する遺構は検出されなかった。

第144次調査

寺域の北東部にあり、住宅改築に伴う現状変更として実施した。調査地は小丘陵をカットして平坦地を造っており、遺構の存在が予測されたが、14～15世紀の遺物が若干出土した程度であった。

4) 西辺域

第48次調査

SD205は
学校院との
境界線

第9次調査で検出した南北溝SD205は、学校院と観世音寺の境界線の役目を果たす。溝の規模等を把握するために調査を行った。その結果、SD205の東岸とみられる肩部を検出した。この肩部が溝の東岸とすると幅14m程になる。

第118次調査

調査面積が狭小なこともあり、顕著な遺構は確認できなかった。

(小田)

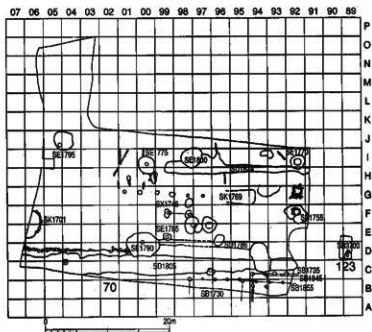


Fig. 21 第70・123次調査区 (1/600)

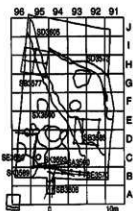


Fig. 22 第120次調査区 (1/600)

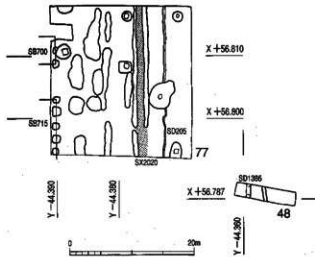


Fig. 23 第48・77次調査区 (1/600)

III 寺域の調査

鏡山条坊復原案によると、観世音寺は方三町の寺域が推定されている。主要伽藍は築地によって囲繞されており、築地から推定寺域までの間を東西南北の4地域に分けて報告する。

南辺域は推定南辺築地から県道筑紫野古賀線までの間とし、北辺域は僧房跡北側の東西道路から推定北辺築地間とした。東辺域は推定東辺築地の東西部分で、西辺域は推定西辺築地から学校院との推定境界付近までとした。

なお、出土遺物に関しては、「観世音寺-遺物・考察編-」で報告する。従って、各遺構の時期については大枠を示し、詳細な時期については遺物・考察編に譲る。

(1) 南辺域

南辺域では第5次・16次・23次・28次・39-1〜3次・61次・71次・103次・109次・111次・115次・117次・122次・130次・154次調査の17次にわたる調査を実施している。

1) 築地・柵

SA091A・B (Fig. 24, PL. 3)

第5次調査区の南西隅で検出した東西方向の築地で、第II整地面に構築している。新旧二時期あり、古期をSA091A、新期をSA091Bとした。古期は基底部幅2.25mで、寄柱は2個の検出に留まる。礎石形式のもので、礎石には25×35cmの扁平な花崗岩を用いる。柱間は心々で2.05mを測る。狭小なトレンチでの確認であるため桁行規模は不詳。

SA091Bは基底部幅2.2mで、寄柱はSA091Aより0.2m程南側にずらしている。寄柱礎石は北側のみの遺存であるが、南側は抜き取られたものであろう。柱間は心々で1.97mを測る。礎石の表面は火熱により赤変し、焼壁片とみられる焼土塊も出土しており、新期の築地は火災により崩壊したものと考えられる。また、築地に伴う瓦の出土がないことから屋根は板葺ないしは草葺とみられる。当築地も桁行規模は不詳。

SA095 (Fig. 24, PL. 4)

第5次調査区の中程で検出した南北方向の築地で、第V整地面に構築している。積土は暗茶色砂質土・茶灰褐色粘質土を積んでいるが、版築を呈するものではない。寄柱は掘立柱形式で、掘方内には5〜10cm大の礫を充填していた。築地の基底部幅3.1m、寄柱の心々距離は2.27mを測る。築地の東半部が砂礫層で覆われていることから、御笠川の氾濫がこの近辺まで及んだことが窺われる。

SA467 (Fig. 25, PL. 8-1)

第23次調査区の中央部で検出した築地で、上層の遺構である。南北両端が調査区外に延びるため長さは4.7mの検出に留まる。築地基壇の版築土として黄色土(5層)、暗灰茶色砂質土(6層)を交互に積んでおり、基部幅は4.6mを測る。寄柱は掘立柱形式で、柱穴は径0.5mの円形を呈し、深さ0.2〜0.3m。柱間は心々で2.76mを測る。柱穴の中には小石を詰めており、根固めとして入れたものであろう。SD468は築地に伴う西側溝であるが、東側には側溝を設けて

二時期の築地

寄柱は礎石形式

屋根は板葺か草葺

寄柱は掘立柱形式

御笠川の氾濫

寄柱は掘立柱形式

III 寺域の調査

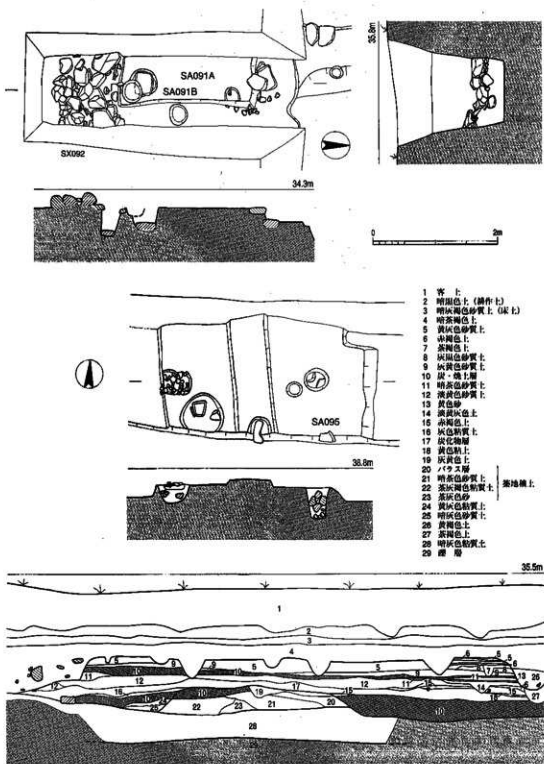


Fig. 24 築地 S A091・095実測図 (1/60)

いない。また、築地下層には茶色粗砂がみられ、河川の氾濫後に築いている。調査区が狭小なこともあり、第5次調査で検出した東西築地 S A091との関係は明らかではない。

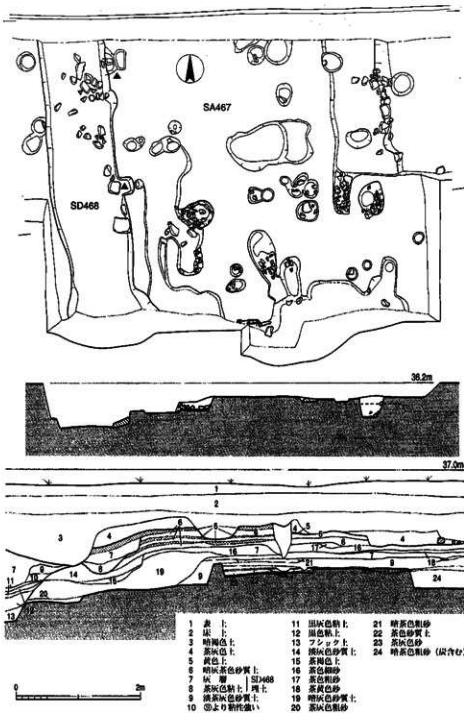


Fig. 25 築地 S A 467, 溝 S D 468実測図 (1/60)

S A 472 (Fig. 26, PL. 8-2)

第23次調査区の西側で検出した上層の築地である。石列が検出されたため南側に拡張したが、基部幅などつかめていない。北側面には角礫を並べており、長さ2.9mを測る。積土は黄色粘質土、暗茶灰砂質土を積んでおり、上面には焼土層が堆積していた。狭小な調査区であったため支柱は検出できていない。また、S A 467とは同一レベルで検出しており、両者の間隔は約5mを測る。同時期に存在したとすると両者間に通路を想定することが可能である。

通路が存在

III 寺域の調査

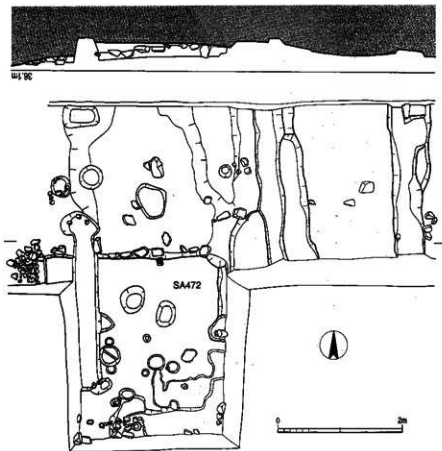


Fig. 26 築地 S A472実測図 (1/60)

S A 488 (Fig. 93, PL. 9-4)

第23次調査区の南北 Tr で検出した下層の柱列で、井戸 S E 480 に切られ、S X 487 と重複する。柱穴 5 個を確認したが、北端の柱穴も併うとしたら井戸の掘方部分で屈折することになる。柱穴は隅丸方形を呈し、径 0.2~0.4m、深さ 0.15~0.35m を測る。

S A 940 (Fig. 28)

第39-3次調査 2 Tr の東側で検出した南北方向の構で、4 間以上を検出した。長さにして 3.3 m 分であるが、南北両側に延びるものと思われる。柱穴は円形を呈し、径 0.3m 前後、深さ 0.3 m 前後を測る。柱間は 0.7~1.0m と若干ばらついている。構の方向は真北を示す。

S A 3191 (Fig. 27)

第109次調査区の北東側に位置する東西方向の構で、長さ 19m 分を検出した。S D 3217・3200 と重複するが、一部溝に切られ柱穴を失うため構が先行するものと思われる。柱穴は 11 間分 7 個遺存し、柱間は 1.5~1.75m の間隔。径 0.25~0.4m の円形を呈し、深さ 0.2m 前後を測る。

区画施設

なお、南北構 S A 3192 とは直交関係にあり、両者で南門南西隅の一角を区切る。内部施設として掘立柱建物 S B 3202、井戸 S E 3155 が存在する。構の方位は東から北に 2 度 30 分振っている。

S A 3192 (Fig. 27)

S A 3191 と直交関係にある南北方向の構で、S B 3204・S D 3217 と重複する。柱間 7 間分の長さ 12.3m を検出したが、東西溝 S D 3149 以北へは延びない。柱穴は径 20cm、深さ 20cm 前後と S A 3191 に比してやや小振りのものであった。柱間間隔は 1.7~1.9m を測る。構の方位は北か

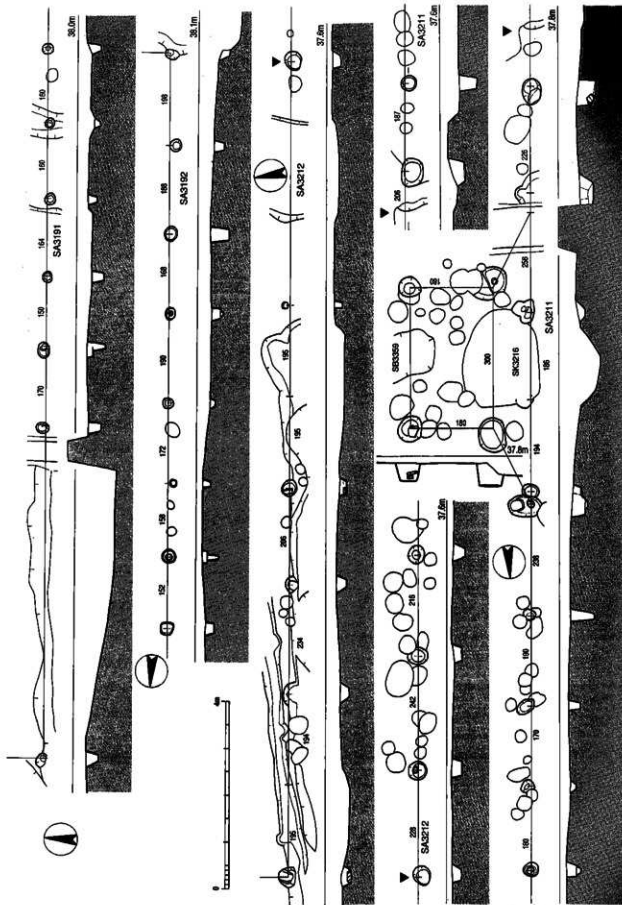


Fig. 27 南边城墙基剖面图① (1/80)

■ 寺域の調査

ら西へ3度振っている。

S A 3193 (Fig. 33)

第109次調査区の北側に位置し、S D3149と重複する。東西方向の構で、4間分(4.3m)を検出した。柱穴は円形を呈し、径0.15~0.3m、深さ0.2~0.35m、柱間0.8~1.2mを測る。欄のすぐ南に位置するS B3203の目隠塼と考えられる。

S A 3194 (Fig. 29)

第111次調査区の北西側に位置し、S D3234と重複する。東西方向の構で、S A3195以東には延びない。7間分(12.5m)で北に折れ、S A3208と接続する。東端柱穴から西に5.5mの箇所は開口が2.0mと広くっており、門を想定できる。柱穴は円形を呈し、径0.2~0.3m、深さ0.2~0.3m、柱間間隔1.2~1.6mを測る。欄の方位は東から南に2度振っている。S A 3194・3208の中には掘立柱建物S B3219と井戸S E3245があり、それを囲む施設とみられる。

S A 3195A・B (Fig. 28, PL.26-1)

第109次調査区の南端から第111次調査区の中程にかけて検出した。南北方向の構で、S D3190の西側部と併走している。溝寄りの方をS A3195B、やや西側のものをS A3195Aとした。両者には切合い関係があり、古期がS A3195A、新期がS A3195Bである。

古期のS A3195Aは掘立柱建物S B3205と重複しているが、建物が後出する。柱間14間分(20.4m)で西に折れ、当構とは直交関係にある東西構S A3197に接続する。また、南端の柱穴から北に4間分は開口が広くっており、門建物S B3357を設けている。柱穴は円形を呈し、径0.2~0.3m、深さ0.3m前後を測る。中には柱根を残す柱穴もみられた。欄の方位は北から東に4度振っている。

新期のS A3195Bは12間分(23.5m)を検出した。柱穴は径0.3~0.4mの円・楕円形を呈し、深さ0.3~0.4mで、柱間間隔は0.9~1.5mとばらつきがある。欄の方位は北から東に1度30分振っている。また、柱穴は東西溝S D3300北岸から北に7.5mの箇所まで西に折れ、東西構S A3198に接続する。欄の西側には十数棟の掘立柱建物及び井戸・土坑が存在し、S A3195・3198はこれらの遺構を圍繞する区画施設である。

S A 3196A・B (Fig. 28)

第109次調査区の北西側に位置する東西方向の構で、S B3209と重複する。また、新旧二期あり、南北構S A3195Bと直交関係にある方をS A3196Aとした。S A3196Aは5間分(9.3m)を検出したが、東西両方向には延びていない。柱穴は不整形を呈し、径0.4~0.5mとS A3196Bよりも大振りであり、S A3196B構築に際して、柱を抜き取ったと考えられることからS A3196Aの方が先行するとみられる。欄の方位は東から南に3度振っている。

S A3196Bは柱間11間分(20.5m)を確認したが、東側はS D3217により失われ、西側は調査区外に延びるものと思われる。柱穴は円形を呈し、径0.2~0.3m、深さ0.2m前後を測る。柱間間隔は1.8~2mであるが、西から6間分の箇所は開口が2.3mと他よりも広く、北側に控えの柱穴がみられることからこの箇所を門建物S B3356とした。欄の方位は東から南に2度振っている。

S A 3197 (Fig. 29)

南北欄S A3195Aに接続する東西構で、13間分(16m)確認したが、S D3236以西へは延び

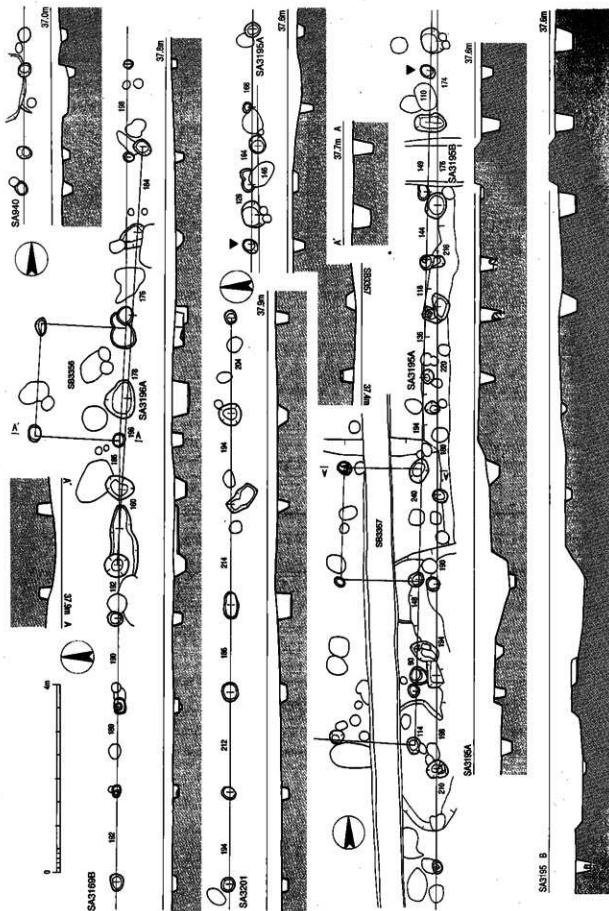


Fig. 28 南边城榫头断面图② (1/80)

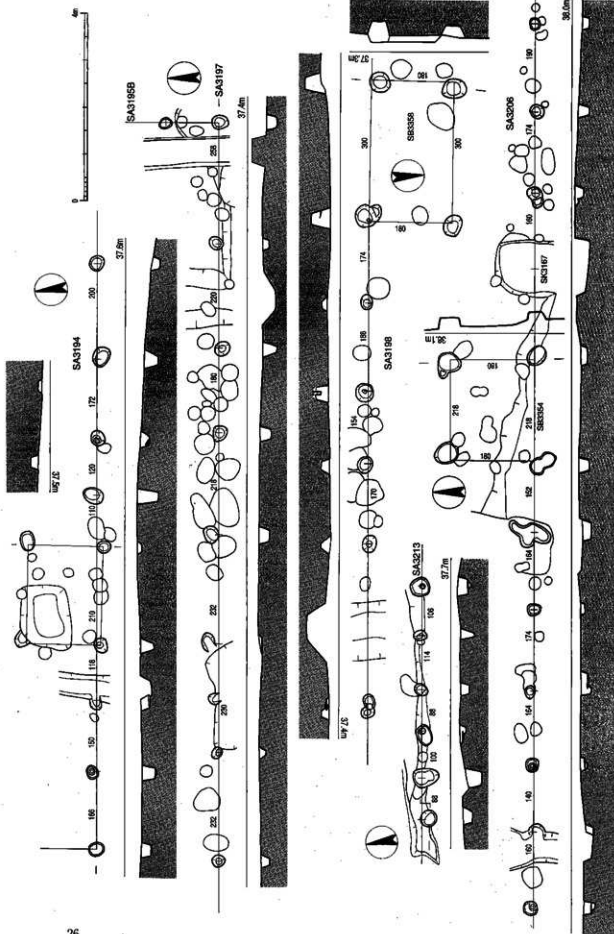


Fig. 29 南辺城構头源区③ (1/80)

ていない。S D3285に切られ、S K3292と重複する。柱穴は円形を呈し、径0.2~0.4m、深さ0.2m前後、柱間隔は1.2~1.5mを測る。

S A3198 (Fig. 29)

南北橋 S A3195B に接続する東西橋で、8 間分 (13m) 確認した。S B3230・3304 と重複するが、S B3230 と関連する溝 S D3285 に柱穴が切られていることから建物の方が後出する。また、柱穴の西端部分が門建物 S B3358 となっており、さらに柱列を西に延長すると掘立柱建物 S B3303 の南桁柱列と重なり、建物を取り込んだ橋とみられる。柱穴は0.3m前後の円形を呈し、深さ0.3m前後、柱間隔はほぼ1.8m等間である。

S A3201 (Fig. 28)

第109次調査区の北西側に位置し、S D3152と重複する。東西方向の橋で、6 間分 (12m) を検出した。柱穴は径0.3~0.4mの円形を呈し、深さ0.25m前後で、柱間は2mの等間。

S A3206 (Fig. 29)

第109次調査区の北西側に位置し、S B3204・3207、S K3167と重複する。東西方向の橋で、柱間12間分 (19m) を確認した。西端柱穴から7 間分に門建物 S B3354 を設けている。柱穴は0.3m前後の円形を呈し、深さ0.2m前後を測る。柱間隔は1~1.5mを測る。

S A3208

S A3213のすぐ南に位置し、S B3205と重複する。S A3194とは直交関係にある東西橋で、西側へ柱間7 間分 (11.2m) で南に折れ、同橋に接続する。柱穴は0.3m程の円形を呈し、深さ0.2m前後、柱間隔は1.2~1.5mを測る。南北橋 S A3195A と関連するものと考えられる。

S A3211 (Fig. 27)

南北橋 S A3195A の2.5m東側に位置し、同橋と平行する南北方向の橋である。南端は S D3231・3291 と重複し、北端は S D3217 に切られるが、同溝以北へは延びていない。北端柱穴から8m以南には柱穴が途切れ、若干引込んだ形であるが門建物 S B3359 を設けている。S B3359 が区画の中心とすると南北長24mに復原できる。柱穴は円形を呈し、径0.2~0.5m、深さ0.2m前後で、柱間隔は1.1~1.5mとばらつきがある。なお、東西方向の橋 S A3212 は、当橋とは直交関係にあり、両者で参道西側の一角を区切っている。また、S D3190 との間は1m余りの犬走となっている。

参道西側の
一角を区画

S A3212 (Fig. 27)

南北橋 S A3211 に接続する東西方向の橋で、東西長25.6mを確認した。S D3231、S K3242・3269・3277 に切られ、S B3267・3268・3365 と重複する。新期の参道側溝 S D3290 との関連が注目されるが、参道との関係からすると溝の手前で北に折れるものと考えられる。柱穴は円形を呈し、径0.3m前後、深さ0.3m前後を測る。

S A3213 (Fig. 29)

第109次調査区の南側で検出した東西方向の橋で、5 間分 (5.3m) を確認した。柱穴は0.3~0.4mの円形を呈し、柱間隔は0.9~1.1mを測る。なお、2m南に位置する S B3297 の梁

目録欄

(小田)

III 寺域の調査

2) 建 物

第39次・109次・111次・115次・117次・122次・130次調査において建物を検出している。何れの調査区でも柱穴が密集し、恐らくは報告分以上に建物が存在すると思われるが、柱穴同士の間隔を明確にできないため建物として確定と思われるものを図示するに留めた。

SB881 (Fig. 30)

第39-2次調査3Trの南東側に位置する。柱穴3個を検出した程度であるが、他のピットより大きく、中に石が入っていた事から建物とみなした。梁行・桁行とも1間以上の掘立柱建物で、柱間が1.8mと長い方が梁行側で、桁行側の柱間は1.65mを測る。柱穴は0.4~0.6mの楕円形を呈し、深さは0.2~0.4mを測る。桁行方位は北から西に35度振っている。

SB883 (Fig. 30)

第39-2次調査3Trの南西側に位置し、SK887を切り、SB889と重複する。梁行1間以上、桁行2間以上の掘立柱建物で、大半が調査区外にある。柱間は東側が1.3m、西側が1.1m・1.45mを測る。恐らく東側が梁行になろう。柱穴は0.3m前後の円形を呈し、深さは0.1~0.2mであった。桁行方位は北から東に64度振っている。

SB884 (Fig. 30)

SB883の2.9m北側に位置し、同建物とは平行関係にある。SD890と重複するが、前後関係は不詳。梁行2間(4.2m)、桁行1間以上の掘立柱建物で、柱間は梁行側が2.1m等間、桁行側が1.8mを測る。柱穴は0.3m前後の円形を呈し、深さ0.1~0.2mを測る。桁行方位は北から西に26度振っている。

SB889 (Fig. 30, PL. 16-1)

SB884の南に位置し、SB883と重複する。柱間間隔が広い東側が梁行で、柱間は1.65mを測る。桁行は3間以上の検出で、柱間は北東隅柱から1.1m・1.27m・1.05mとばらついている。柱穴は0.3m前後の円形を呈し、深さ0.25m前後。梁行方位は北から西に13度振っている。

SB906 (Fig. 31)

第39-2次調査4Tr東側に位置し、土坑SK907、落込SX903と重複する。梁行2間(3.68m)、桁行1間以上(2.32m)の掘立柱建物であるが、2×2間の総柱建物になる可能性が高い。柱穴は円形を呈し、径0.3m前後、深さ0.2m前後を測る。桁行方位は東に6度振っている。

SB950 (Fig. 31)

第39-3次調査2Tr東側に位置し、土坑SK960・963・964・967・970と重複する。梁行2間(4.27m)、桁行1間以上(2.1m)の掘立柱建物で、南半部は未調査であるが、2×2間の総柱建物になろう。柱穴は円形を呈し、径0.25~0.5m、深さ0.2m前後を測る。桁行方位は西に6度振っている。

SB985 (Fig. 31)

SB950の5m西側に位置し、SB990と重複するが前後関係は不詳。また、土坑SK976・983と切合い関係にある。梁側柱穴4個を検出した程度で、全体の規模はつかめていない。梁行3間(4.86m)で、柱間は東から1.63・1.44・1.79mとばらつきがある。柱穴は0.3~0.4mの円形を呈し、深さは0.3m前後の遺存状態である。

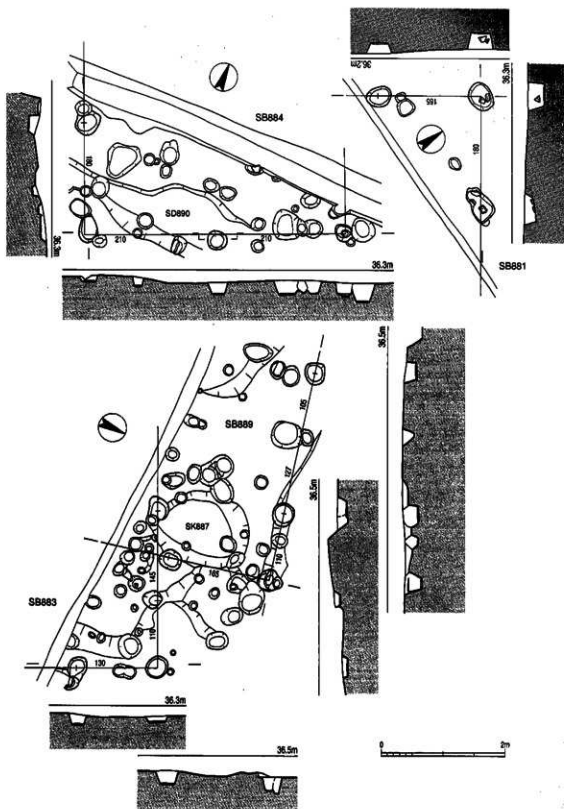


Fig. 30 南辺城建物実測図① (1/60)

S B 986 (Fig. 31)

S B 986の1.2m西側に位置し、S B 990とは並列関係にある。土坑 S K 988・989と重複するものの前後関係は判然としない。梁行1間 (1.75m) ×桁行2間 (3.7m) の南北棟据立柱建

Ⅲ 寺域の調査

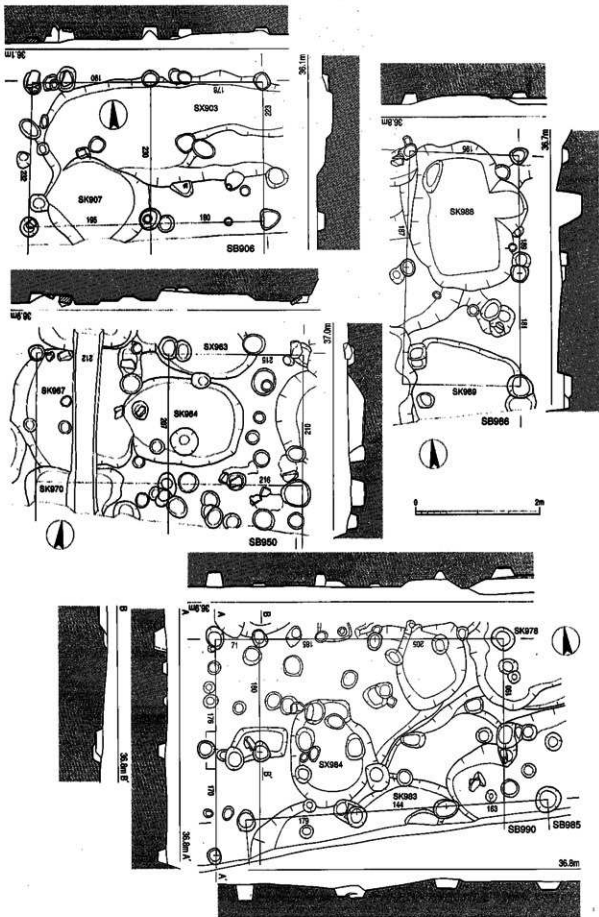


Fig. 31 南辺域建物実測図② (1/60)

物で、桁行の柱間は1.81~1.89m間隔。柱穴は0.3~0.4mの円形を呈し、深さは0.2mの遺存状況であった。桁行方位は東に5度振っている。

SB990 (Fig. 31)

SB986の1.2m東側で、同建物と平行する形で検出した。SB985及び土坑SK976・978・980・983・984と重複する。梁行2間(3.9m)×桁行1間以上の南北棟掘立柱建物で、西桁行側に廂を付設している。片廂建物

SB3187 (Fig. 32)

第109次調査区の北西側に位置し、SB3188と重複する。当建物の東桁行側柱穴は、何れも掘方が大きく不整形を呈することから柱を抜き取ったと考えられ、SB3188を建てるための所作とみられることから当建物が先行する。梁行2間(3.06m)×桁行3間(4.12m)の南北棟掘立柱建物であるが、北梁行の棟柱柱穴は確認し得ていない。柱間は梁行側が1.5m・1.56m、桁行側は1.24~1.48mとばらつく。柱穴は径0.3~0.6m前後の円形を呈し、深さ0.2mの遺存状況である。建物の1.1m東側にあるL字形の小溝(長さ1.5m、幅0.2m)は、当建物に伴う区画溝と考えられる。なお、西側の桁行方位は、北から西に3度振っている。

建物に伴う
区画溝

SB3188 (Fig. 32)

SB3187の東側に重複して位置し、同建物の建替えとみられる。梁行2間(3.5m)×桁行3間(4.22m)の南北棟掘立柱建物であるが、西桁行の南隅柱から2個目の柱穴は確認し得ていない。柱間は梁行が1.46~2.04m、桁行は1.32~1.42mとばらついている。柱穴は径0.26~0.34m前後の円形を呈し、深さは0.2mを測る。西側の桁行方位は北から西に1度30分振っている。

SB3189 (Fig. 32)

第109次調査区の南西隅に位置する。現状で1×2間の東西棟掘立柱建物であるが、111次調査区へは延びていないことから梁行2間(3.8m)×桁行2間(4.24m)の総柱建物の可能性がある。柱穴は径0.3~0.55mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。

SB3199 (Fig. 33)

SB3189の9m東側に位置し、SB3353・SA3194・SE3245と重複する。建物の南半分は第111次調査区で確認した。梁行2間(4.4m)×桁3行間(6.6m)身舎の西桁行側に廂を付設した片廂建物である。身舎の柱間は梁行側が2.0~2.4m、桁行側は1.7~2.44mとばらつきがみられる。柱穴は径0.3~0.4mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に9度振っている。片廂建物

SB3202 (Fig. 32)

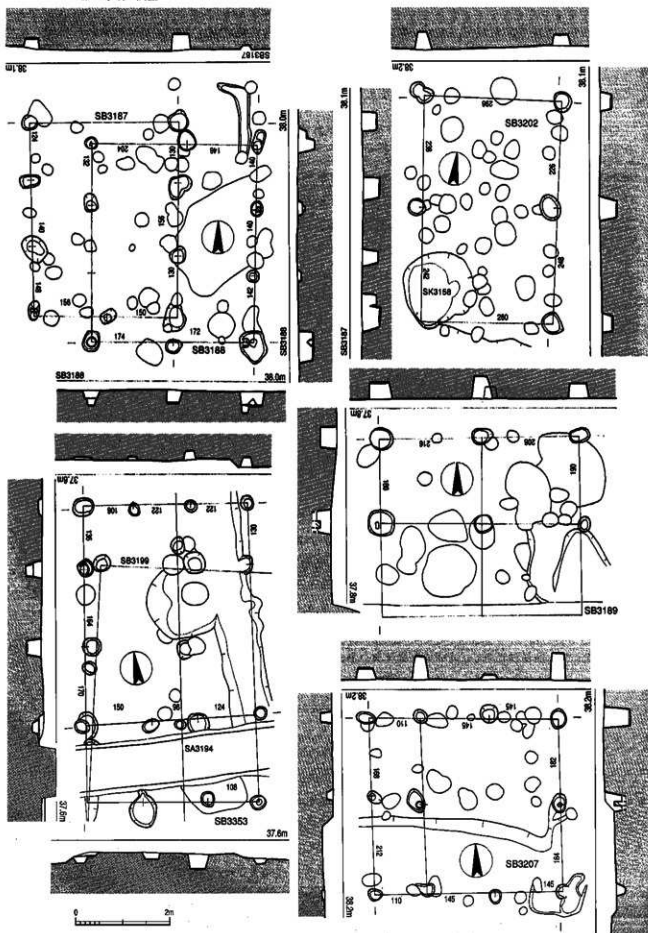
第109次調査区の北東側に位置し、SK3158に南西隅柱を切られる。梁行1間(2.96m)×桁行2間(4.74m)の南北棟掘立柱建物である。桁行の柱間は2.26~2.48mとばらつく。柱穴は径0.4m前後の円形で、深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から西に4度振っている。

SB3203 (Fig. 33)

SB3202の11m西側に位置し、SB3204と重複する。梁行2間(3.16m)×桁行2間(3.26m)の総柱建物である。西桁行側の柱間は1.44m・1.7mを測る。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し、深さは0.4m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に2度振っている。また、建物の0.9m北側には建物と平行する形でSA3193が存在し、目隠溝と考えられる。

目隠溝

III 寺域の調査



S B 3204 (Fig. 33)

S B 3203の南側に位置し、同建物と重複するが、前後関係は不詳。梁行1間(2.1m)×桁行2間(3.98m)の小規模な掘立柱建物である。桁行側の柱間は1.9~2.06mとばらつきがある。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。西側の梁行方位は北から東に14度と他の建物に比して大きく傾く。

S B 3205 (Fig. 34, PL. 26-2)

第109次調査区の南中央で検出した。S A 3195・3208, S B 3297・3298, S D 3190, S K 3182と重複する。梁行2間(3.1m)×桁行4間(6.9m)身舎の南桁行側に廂を付設した片廂建物片廂建物である。身舎の柱間は梁行側が1.46~1.64mで、桁行側は1.4~2.0mとばらつく。柱穴は径0.3~0.4mの円形を呈し、深さは0.4m前後を測る。棟柱列にも柱穴が2個みられるが、側柱柱穴に比して小さいことから床束柱穴と考えられる。東側の梁行方位は北から東に3度振っている。

S B 3207 (Fig. 32)

S B 3203の7m西側に位置し、S A 3206・S K 3168と重複する。梁行2間(2.9m)×桁行2間(3.8m)身舎の西桁行側に廂を付設した片廂建物片廂建物である。身舎の柱間は梁行側が1.45m等間、桁行側は1.68~2.12mとばらつく。柱穴は径0.3~0.4mの円形を呈し、深さは0.2m前後を測る。東側の桁行方位は北から西に30分振っている。

S B 3209 (Fig. 35)

S B 3187の7m東側に位置し、S A 3196A・Bと重複する。柱穴が大きく、不整形を呈するのは、S A 3196B構築に際して柱を抜き取ったためと考えられる。梁行1間(2.4m)×桁行2間(4.0m)の小規模な掘立柱建物である。桁行の柱間は2m等間とした。柱穴は長さ0.5~0.8mの不整形を呈し、深さは0.4mを測る。南東隅柱には柱根が遺存していた。西側の桁行方位は北から東に2度振っている。

S B 3219 (Fig. 33)

S B 3199の1.5m東側に位置し、S K 3252を切っている。梁行1間(3.8m)×桁行2間(4.0m)の小規模な掘立柱建物である。桁行側の柱間は1.9~2.06mとばらつきがある。柱穴は径0.3~0.5m前後の円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。柱穴の中には礎盤として扁平な石を礎盤あり入れているものもある。西側の桁行方位は北から東に7度30分振っている。なお、当建物は東西横S A 3194と方位を等しくして配されていることからS A 3194区画内の主要建物とみられる。

S B 3230 (Fig. 35, PL. 27)

第111次調査区の西側で検出した南北棟掘立柱建物で、S K 3292・S D 3289に切られる。また、当建物の0.6m北側に位置するL字形溝S D 3347は建物を囲む区画施設と考えられる。規模は梁行4間(3.75m)×桁行5間(4.95m)の側柱建物で、梁行の柱間は0.9~1.05mで、桁行側は0.9~1.3mを測る。桁行の中央間が1.3mと広いことからこの位置に扉を設けていたことが判る。柱穴は円形を呈し、径0.4~0.7m、深さ0.4m前後を測る。なお、底面には石を据え、礎盤としている。柱間間隔が狭く、礎盤を敷いていることから高床倉庫と考えられる。高床倉庫西側の桁行方位は北から4度60分東に振っている。

S B 3297 (Fig. 35)

S B 3219の3m北側に位置し、S B 3205・3298, S K 3182と重複する。桁行は3間(4.4m)

III 寺城の調査

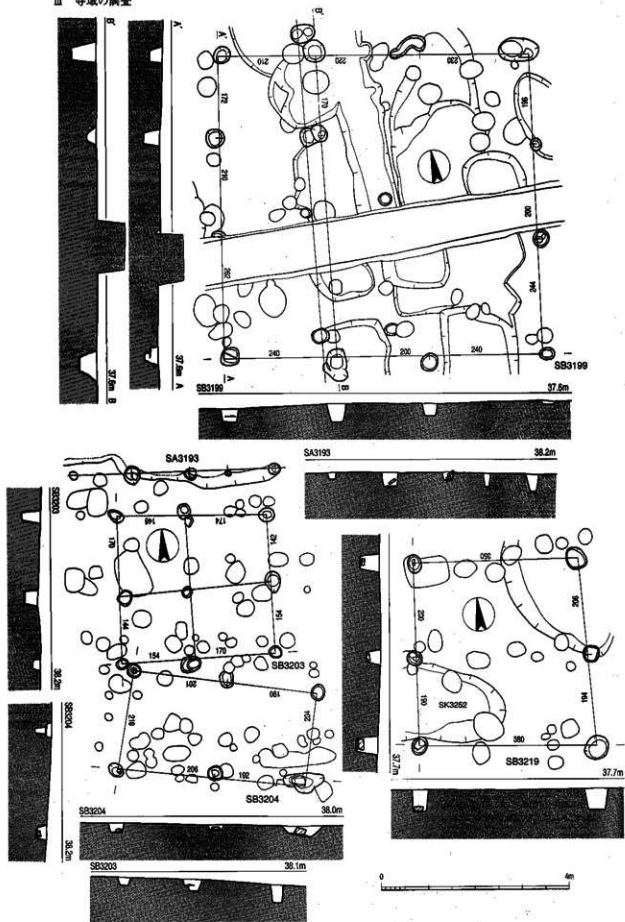


Fig. 33 南辺城建物実測図④ (1/80)

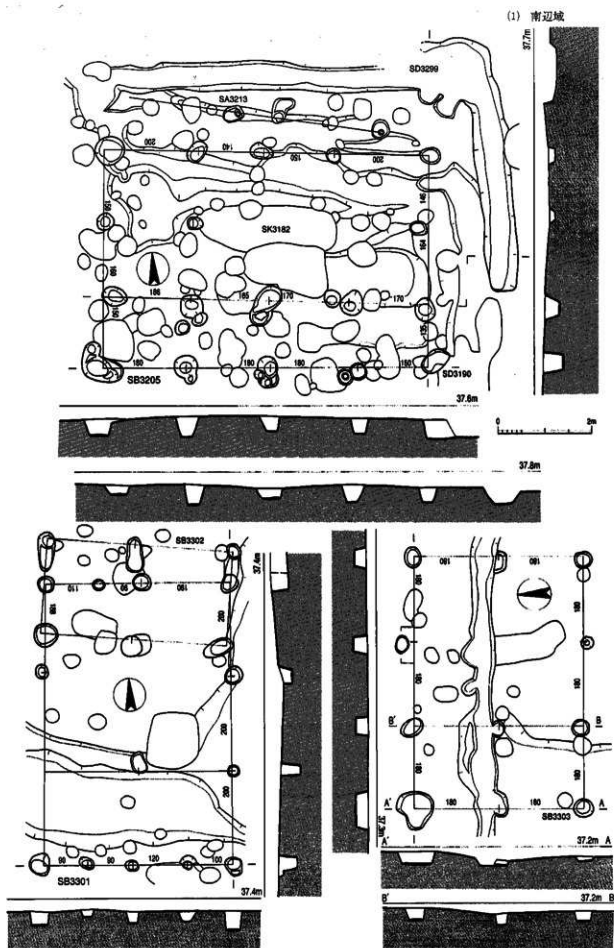


Fig. 34 南辺城建築物実測図③ (1/80)

Ⅷ 寺城の調査

であるが、梁側には横柱が見あたらないことから1間(3.18m)と思われる。桁行の柱間は1.2~1.68mとばらつきがある。柱穴は円形を呈し、径0.4m前後、深さは0.3m前後を測る。西側の桁行方位は北から東に12度30分振っている。

S B 3298 (Fig. 35)

S B 3297の南側に重複して位置するが、前後関係は不詳。無数の柱穴が存在する中、梁行2間(3.2m)×桁行2間(3.26m)の方形プランの独立柱建物として復原した。柱間は1.5~1.84mとばらつきがある。柱穴は円形を呈し、径0.4m前後、深さは0.3m前後を測る。西側の桁行方位は北から西に5度振っている。

S B 3301 (Fig. 34)

片廂建物 S B 3189の2.5m南側に位置し、S B 3302と重複し、S D 3218に切られる。梁行2間(3.9m)×桁行2間(4.0m)の身舎の南梁行側に廂を付設した片廂建物であるが、北梁側は3間で、入鋪柱は2間、廂部分は4間と変則的である。身舎の桁行柱間は2m等間で、廂の柱間は0.9~1.2mとばらつく。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し、隔柱柱穴は0.3~0.4mと深く、しっかりしている。東側の桁行方位は北から東に3度振る。

S B 3302 (Fig. 37)

S B 3301の北側に位置し、同建物と重複する。柱を抜き取っていることから当建物がS B 3301より先行するものと考えられる。梁行1間(2.04m)×桁行2間(3.94m)の小規模な独立柱建物である。桁行の柱間は1.84~2.08mとばらつきがある。柱穴は径0.5~0.8mの楕円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。東側の梁行方位は北から東に11度30分振っている。

S B 3303 (Fig. 34)

片廂建物 S B 3301の2.5m南側に位置し、S D 3237に切られる。梁行2間(3.6m)×桁行2間(3.6m)身舎の西側柱間に廂を設けた片廂建物で、柱間は身舎・廂とも1.8mに復原した。柱穴は径0.3~0.8mの円形を呈し、深さは0.3m前後。西側の梁行方位は北から東に3度振っている。

S B 3304 (Fig. 36)

S B 3230の3m東側に位置し、S D 3285に切れ、S A 3197・3198、S B 3306と重複する。無数の柱穴が存在する中、梁行3間(6.5m)×桁行4間(7.5m)の東西棟総柱建物として考えた。東梁行の柱間は北から2.15・2.1・2.25mと中央間が若干狭い。北桁行の柱間は東から2・1.9・2・1.6mとばらつきが見られる。柱穴は円形を呈し、径0.4~0.7m、深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に4度振っている。

S B 3306 (Fig. 36)

二面廂建物 S B 3230の1m南側に位置し、S D 3285・3300に切れ、S B 3304、S E 3255、S K 3258・3284と重複する。当建物も無数の柱穴が存在する中、梁行4間(8.3m)×桁行3間(9m)身舎の東西梁行側に廂を設けた二面廂建物として考えた。身舎の柱間は西梁行側が北から2・2.2・2.2・1.8mで、桁行は3.0m等間とした。柱穴は円形を呈し、径0.4~0.6m、深さは0.2m前後を測る。西梁行方位は北から東に1度30分振っている。規模的に南面域において主体となる建物と考えられる。

S B 3307 (Fig. 38)

第109次調査区の南東側で、横S A 3211と平行して位置する。また、S B 3308・3309・3318

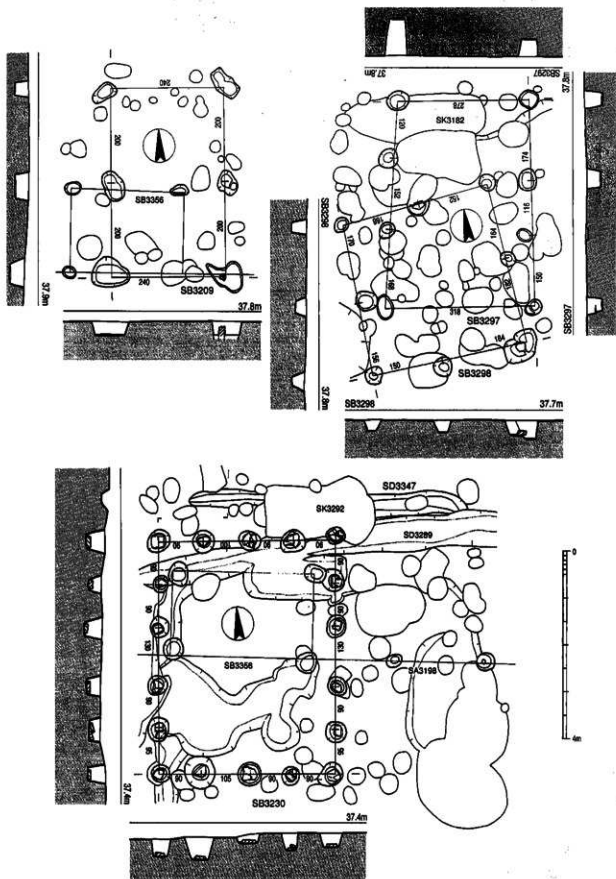


Fig. 35 南边城建筑物平面图⑥ (1/80)

Ⅲ 寺域の調査

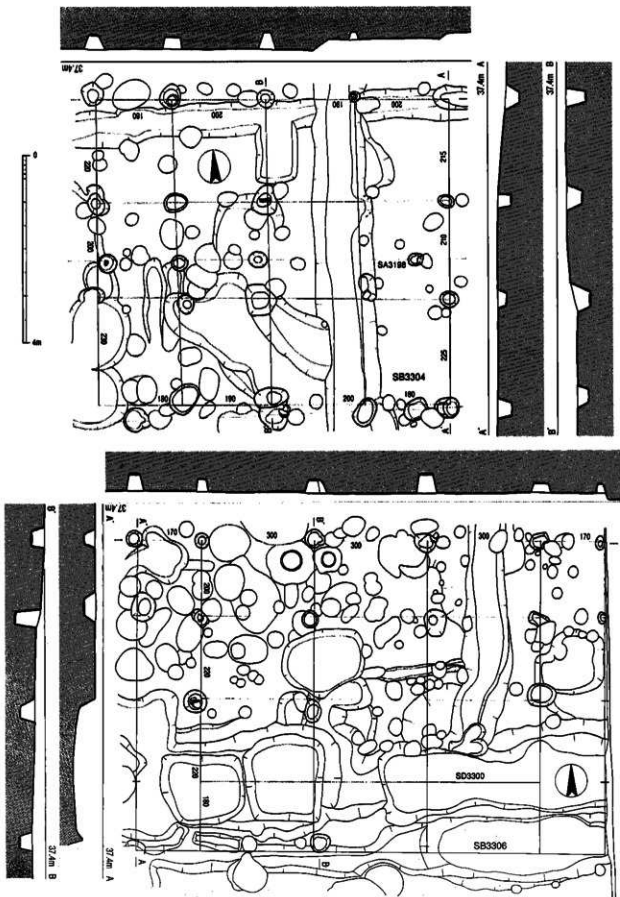


Fig. 36 南辺城建物実測図⑦ (1/80)

と重複するが、前後関係は不詳。無数の柱穴が存在するが、梁行3間(4.7m)×桁行3間(6.6m)身舎の西桁行側に廂を付設した片廂建物として考えた。身舎の柱間は梁行側が1.55~2.25m、桁行側が1.8~2.65mとばらつきがある。柱穴は径0.3~0.4mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に2度振っている。構S A3211とは0.5mと近接するが、建物方位は構と平行していることから同時併存も考えられる。

片廂建物

S B3308 (Fig.38)

S B3307の東側で、S B3307・3309・3317・3318と重複する。無数の柱穴が存在する中、梁行2間(3.8m)×桁行4間(7.5m)身舎の西桁行に廂を付設した片廂建物として考えた。梁行側の柱間は1.9m等間で、桁行側は1.8~2.0mとばらつきがみられるが、桁側も本来は1.9m等間で設計されたものであろう。柱穴は径0.5mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。建物方位は真北を示す。

片廂建物

S B3309 (Fig.39)

S B3307の東側で、S B3307・3308・3311・3317・3318と重複し、S K3181に切られる。当建物も近辺に無数の柱穴が存在するが、梁行3間(5.2m)×桁行3間(5.7m)の圓柱建物として考えた。梁行側の柱間は1.7~1.8mで、桁行側は1.6~2.2mとばらつきがある。柱穴は径0.4mの円形を呈し、深さは0.2m前後を測る。東側の梁行方位は北から東に1度30分振っている。

S B3311 (Fig.39)

S B3309の東隣で、S B3314・3317と重複し、S K3273に切られる。梁行3間(6.6m)×桁行4間(6.6m)の総柱建物である。梁行側の柱間は1.9~2.64mで、桁行側は1.5~1.9mとばらつきがみられる。柱穴は径0.5mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。東側桁行方位は北から西に3度振っている。

S B3314 (Fig.39)

S B3311の東側で、同建物と重複して位置する。また、大半が調査区外にあるため詳細は不明。現状で桁行3間以上(5.4m)、梁行1間以上の掘立柱建物で、南梁行側に廂を付設している。柱穴は円形を呈し、径0.2~0.6m、深さ0.15mを測り、身舎部分の柱穴はやや大きめである。桁行方位は北から東に3度60分振っている。

S B3315 (Fig.42)

S A3212の1.8m南側に位置し、S B3365・3366と重複するが、柱穴同士の間隔はなく、前後関係は明らかではない。南半部は調査区外に位置するため現状で1×4間の東西棟掘立柱建物であるが、梁行2間(4.9m)×桁行4間(5.8m)の総柱建物と考えた。梁行の柱間は2.5mで、桁行側は1.4~1.5m。柱穴は径0.3~0.4mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。掘土中に礫を入れているものがあり、根固めとしていたものか。

根固めの礫

S B3317 (Fig.40)

第109次調査区の南東側で、S B3308・3309・3311・3318、S D3233と重複する。梁行2間(3.55m)×桁行3間(4.1m)の東西棟掘立柱建物で、柱間は梁行が1.35~1.9m、桁行が1.2~1.55mとばらつきがある。柱穴は円・楕円形を呈し、径0.3~0.5m、深さ0.3m前後を測る。隅柱及び棟柱柱穴は他の穴に比して大きい。東側の梁行方位は7度東に振っている。

III 寺域の調査

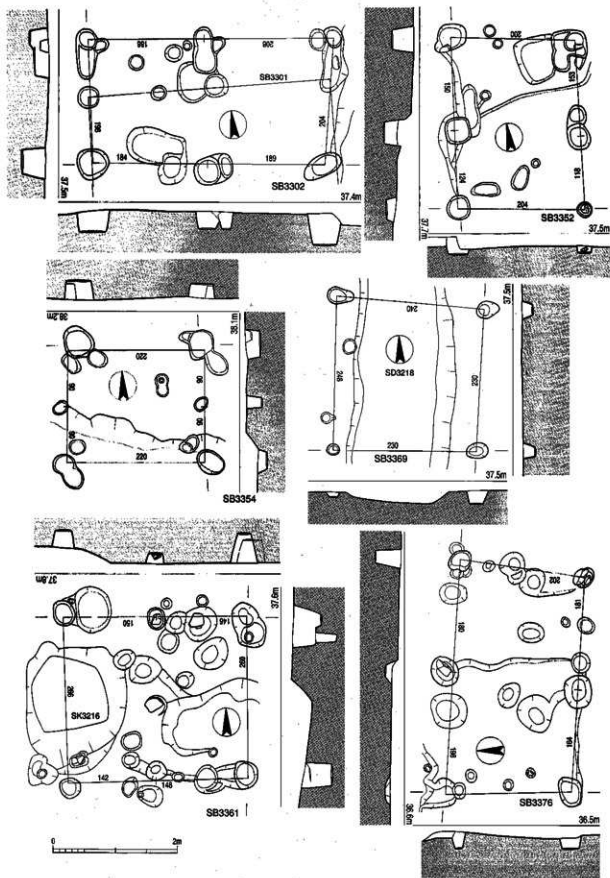


Fig. 37 南辺域建物実測図⑧ (1/60)

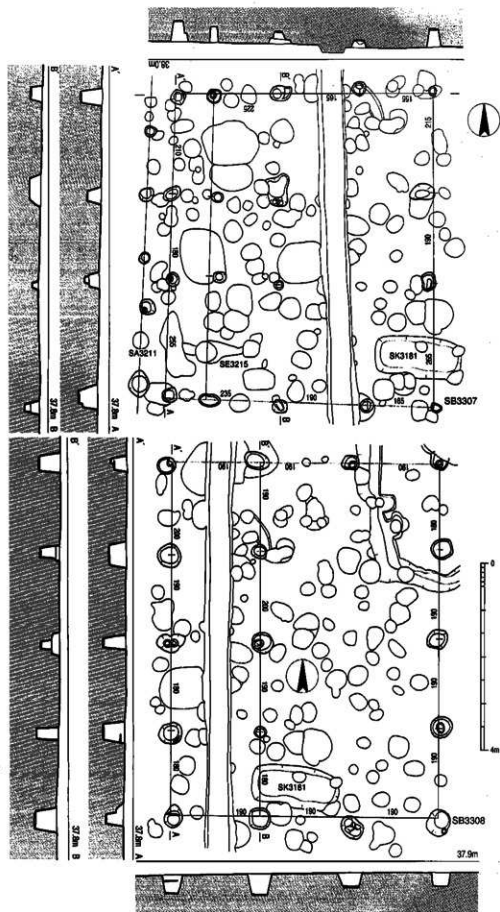


Fig. 38 南边城建物实测图⑨ (1/80)

III 寺域の調査

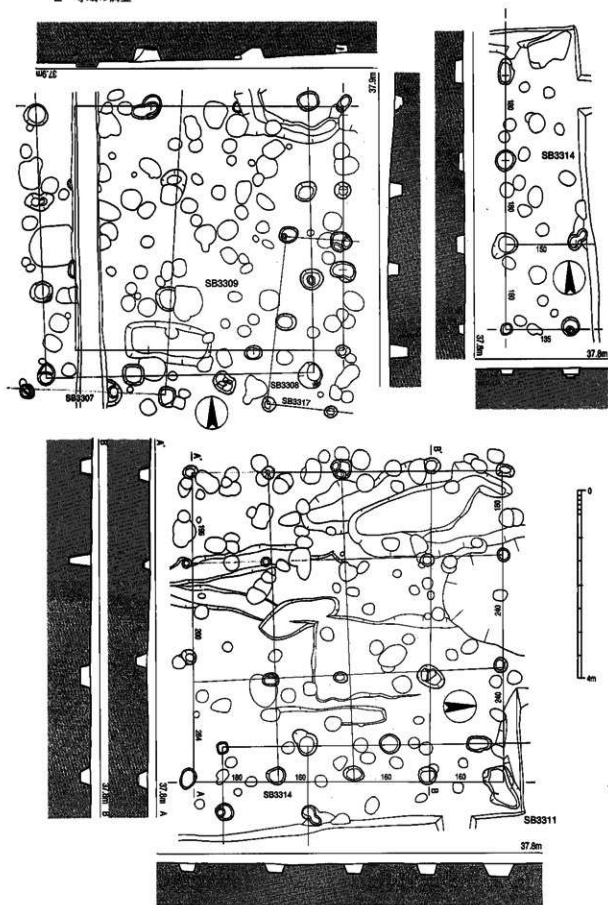


Fig. 39 南辺城建物実測図⑩ (1/80)

S B 3318 (Fig. 40)

第109次調査区の南東側に位置し、S B 3307・3308・3317、S K 3179と重複し、S K 3184に切られる。梁行1間(3.0m)×桁行2間(4.1m)の小規模な東西棟掘立柱建物で、柱間は梁行側が3.0m、桁行側は1.9・2.2mを測る。柱穴は円形を呈し、径0.3m前後、深さも0.3m前後を測る。西側の梁行方位は9度東に振っている。

S B 3348 (Fig. 33)

南北櫓S A 3194に伴う南側の門で、土坑と切り合う。間口一間(2.18m)で、北側には控柱の柱穴を持つ。

S B 3349 (Fig. 41)

S B 3189の2.5m北側に位置し、S A 3208西延長線とは平行関係にある。梁行1間(2.2m)×桁行3間(5.4m)の東西棟掘立柱建物で、柱間は梁行側が2.2m、桁行側は1.5~1.8mを測る。柱穴は円形を呈し、径0.2~0.4m前後、深さ0.2m前後を測る。西側の梁行方位は6度東に振っている。当建物の西側に位置するS K 3174及び南に位置する長円形土坑は建物を囲むように位置し、関連するものと考えられる。

S B 3351 (Fig. 41, PL. 45-1)

第115次調査区の北側に位置し、S D 3336・3337・3339・3340に切られる。棟柱を溝に切られて失うが、梁行2間(4.0m)×桁行4間(7.5m)身舎の南北桁側に廂を付設した二面廂建物である。桁行の柱間は1.69~1.86mとばらつきがある。柱穴は円形を呈し、径0.3~0.4m前後、深さ0.3m前後を測る。柱穴内には礫が入っており、礎盤として入れたものか。東側の梁行方位は5度東に振っている。

S B 3352 (Fig. 37)

S B 3189のすぐ東隣で検出した。梁行1間(2.04m)×桁行2間(2.74m)の小規模な南北棟掘立柱建物である。桁行の柱間は1.18~1.53mとばらつきがある。柱穴は径0.3~0.5mの円形を呈し、深さは0.2m前後であった。西側の梁行方位は北から東に7度振っている。

S B 3353 (Fig. 32)

S B 3369の1m南側に位置し、S B 3199・S A 3194と重複する。廂部分は第111次調査区で確認した。梁行3間(3.5m)×桁行3間(4.7m)身舎の南梁行側に廂を付設した片廂建物である。身舎の柱間は梁行側が1.06~1.22m、桁行側が1.3~1.7mとばらついている。柱穴は径0.25~0.5mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に7度振っている。

S B 3354 (Fig. 29・37)

S B 3207の2m東側に位置し、S D 3151に切られる。東西櫓S A 3206に設けられた門建物である。間口一間(2.2m)で、控柱柱穴が4個あることから門の形式は一間一戸四脚門となる。間口が狭いものの、櫓に付随する寺域の門建物の中にあつては比較的立派な門と言える。

S B 3356 (Fig. 28)

第109次調査区の西側で、東西櫓S A 3196Bに設けられた門建物である。間口一間(2.4m)で、北側1.8mの箇所には控柱柱穴を持つ。

S B 3357 (Fig. 28)

南北櫓S A 3195Aに設けられた門建物である。間口一間(2.4m)で、本柱と控柱とは1.7m

III 寺域の調査

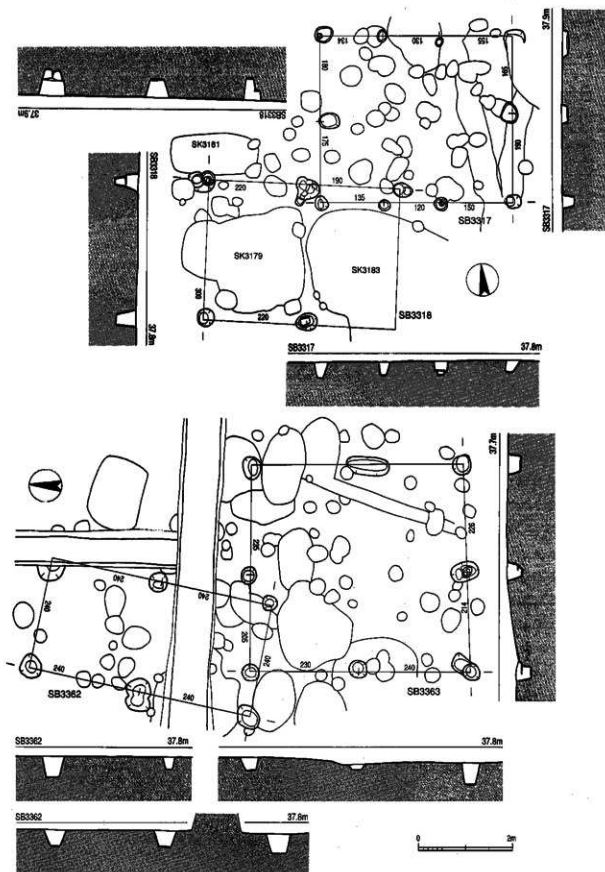


Fig. 40 南辺城域実測図① (1/80)

(1) 南边城

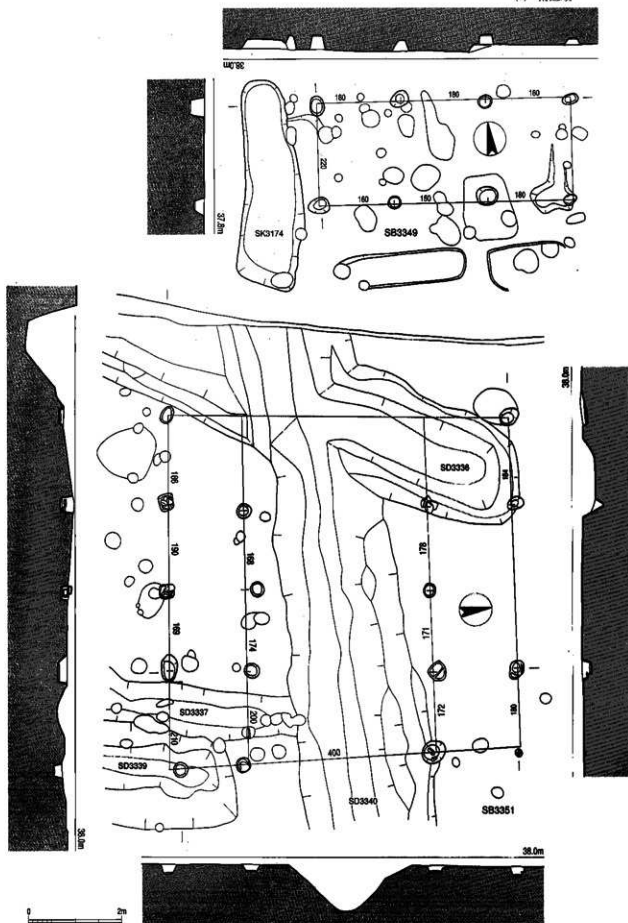


Fig. 41 南边城建物实测图② (1/80)

Ⅲ 寺域の調査

離れている。柱穴は円形を呈し、本柱が50cm、控柱が30cmの大きさ。

S B 3358 (Fig. 29)

第111次調査区の西側で、東西橋 S A 3198 に設けられた門建物である。S B 3230 と切り合うが、前後関係は不詳。間口一間 (3.0m) で、本柱と控柱の間隔は1.8mを測る。柱穴は円形を呈し、径0.5m、深さ0.4mを測る。

S B 3359 (Fig. 27)

南北橋 S A 3211 の中程に設けられた門建物である。S B 3361・3362 と切り合すが、当建物が最も古い。櫓との取付きは「只」字形に内側に引込めている。間口一間 (3.0m) で、本柱と控柱の間隔は1.8mを測る。柱穴は楕円形を呈し、径0.4~0.8mの大きさ。なお、門建物及

改築した門

S B 3361 (Fig. 37)

S B 3307 の1.5m南側に位置し、S B 3359・3362 と重複する。梁行1間 (2.66m) ×桁行2間 (2.9m) の小規模な東西棟独立柱建物である。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。西側の梁行方位は真北を示す。

S B 3362 (Fig. 40)

第109次調査区と第111次調査区に跨って検出した。門建物 S B 3359 を切り、S B 3361・3362 と重複する。梁行1間 (2.4m) ×桁行2間 (4.8m) の小規模な南北棟独立柱建物である。柱穴は径0.3~0.5m前後の円形を呈し、深さは0.4m前後としっかりしていた。西側の桁行方位は北から東に11度振っている。

S B 3363 (Fig. 40)

S B 3362 の南側で、同建物を重複する。梁行2間 (4.4m) ×桁行2間 (4.7m) の側柱建物である。柱穴は径0.3~0.4m前後の円形を呈し、深さは0.3mを測る。西側の桁行方位は北から東に11度振っている。

S B 3364 (Fig. 42)

S B 3363 の8m東側に位置し、S K 3244 と重複する。梁行2間 (4.5m) ×桁行2間 (4.6m) の総柱建物である。柱間は2.1~2.5mとばらつきがある。柱穴は径0.3~0.4mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。東側の梁行方位は真北を示す。

S B 3365 (Fig. 42)

S B 3363 の3m南側に位置し、S B 3315・3366 と重複し、S D 3232、S K 3281 に切られる。現状で、梁行3間 (5.7m) ×桁行2間以上 (4.6m) の総柱建物であるが、桁行は3間になる可能性がある。柱間は1.8~2.4mとばらつきがみられる。柱穴は径0.5mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。柱穴の中には偏平な石を入れ、礎盤としている。東側の桁行方位は北から東に2度振っている。

S B 3366 (Fig. 42)

第111次調査区の南側に位置し、S E 3240 に切られ、S B 3315・3365、S K 3251 と重複する。南半部は調査区外に延びるため現状で梁行3間 (5.35m)、桁行2間以上の建物であるが、桁行は4間になるものと思われる。また、西桁行側に廂を付設している。柱穴は円形を呈し、径0.3~0.6mで、深さは0.5mとしっかりしている。西側の桁行方位は北から東に2度振っている。

片廂建物

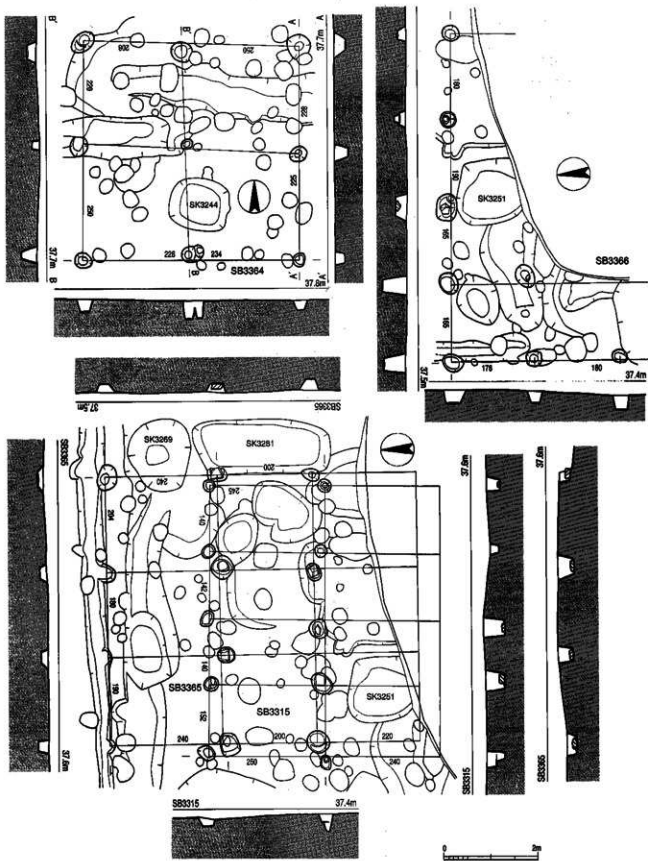


Fig. 42 南边城建筑物实测图⑬ (1/80)

Ⅲ 寺域の調査

S B 3367 (Fig. 43)

第111次調査区の南東隅に位置し、S A 3212・S B 3368と重複する。この近辺もピットが無数に存在するが、比較的大きなものを柱穴として抽出し、梁行2間(4.5m)×桁行3間(5.7m)の総柱建物として考えた。柱間は梁行側が2.1~2.3m、桁行側が1.6~2.1mとばらついている。柱穴は径0.3~0.6mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に4度60分振っている。

S B 3368 (Fig. 43)

第111次調査区の南東隅に位置し、S A 3212・S B 3367と重複する。梁行2間(4.95m)×桁行3間(6.0m)身舎の南梁行に廂を付設した片廂建物である。梁行の柱間は2.3m・2.65m、桁行側は1.85~2.1mを測る。柱穴は径0.3~0.6mの円・楕円形を呈し、深さは0.3m前後。東側の桁行方位は北から東に3度分振っている。

S B 3369 (Fig. 37)

第109次調査区の西側で、S B 3349の2m東側で検出した。丁度、S D 3218を跨ぐ格好で位置する。桁行・梁行とも1間で、柱間は大概2.4mを測る。

S B 3376 (Fig. 37)

第111次調査区の南西隅で検出した。梁行1間(2.03m)×桁行2間(3.78m)の小規模な東西棟の独立柱建物である。柱穴は径0.3~0.5mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。柱穴の中には石を詰めているものがあった。

S B 3377 (Fig. 43)

第111次調査区の南西拡張部で検出した。S K 3264、S E 3270・3275・3280に切られる。西半部が調査区外にあるため梁行1間以上、桁行3間(6.4m)の規模であるが、梁行2間だと南北棟建物となる。柱穴は径0.4mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。柱穴の中には柱根を留めるものがあり、10cm程の大きさであった。東桁行方位は北から東に4度振っている。

S B 3378 (Fig. 43)

第111次調査区の南西拡張部で検出した。S K 3266・3267と重複する。西半部が調査区外にあるため梁行1間以上(2.35m)、桁行3間(5.1m)の規模であるが、当建物も梁行が2間だと南北棟建物になる。桁行側の柱間は、北から1.5m・1.8m・1.8mとした。柱穴は径0.25~0.5mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。隅柱の柱穴は他の穴に比してやや大きい。東桁行方位は北から東に4度振っている。また、S B 3377とは桁行の柱筋が通り、方位も等しいことから同時併存と考えられる。

S B 3421 (Fig. 44)

第117次調査区の南東隅で検出した。南半部が調査区外にあるため梁行は3間(4.5m)で、桁行は1間以上(1.12m)を確認したに過ぎない。梁行の柱間は1.5m等間とした。柱穴は0.5m前後、深さは0.3m前後を測る。柱穴の中には角礫が入っているが、礎盤として入れたものであろう。桁行方位は北から東に17度振っている。

S B 3422 (Fig. 44)

第117次調査区の東側に位置し、S E 3375、S K 3399・3409・3411に切られる。ピットが無数に存在する中、比較的大きなものを柱穴として抽出し、梁行2間(4.4m)×桁行3間(5.9

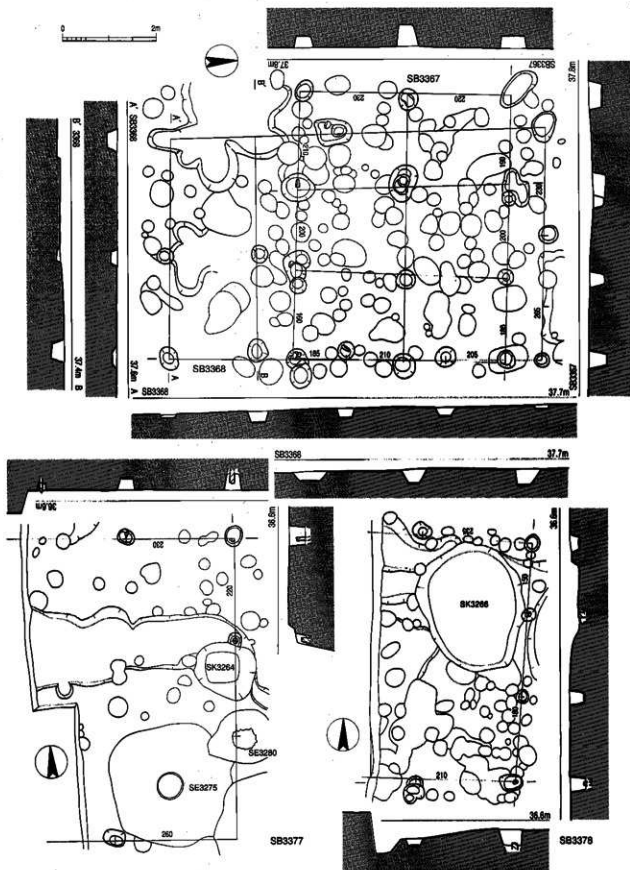


Fig. 43 南边城建物实例图④ (1/80)

Ⅲ 寺域の調査

片廂建物 m) 身舎の南梁行に廂を付設した片廂建物と考えた。柱間は梁行側が2～2.36m、桁行側は1.9～2.12mとばらつく。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し、深さは0.2m前後。東側の桁行方位は北から東に3度振っている。

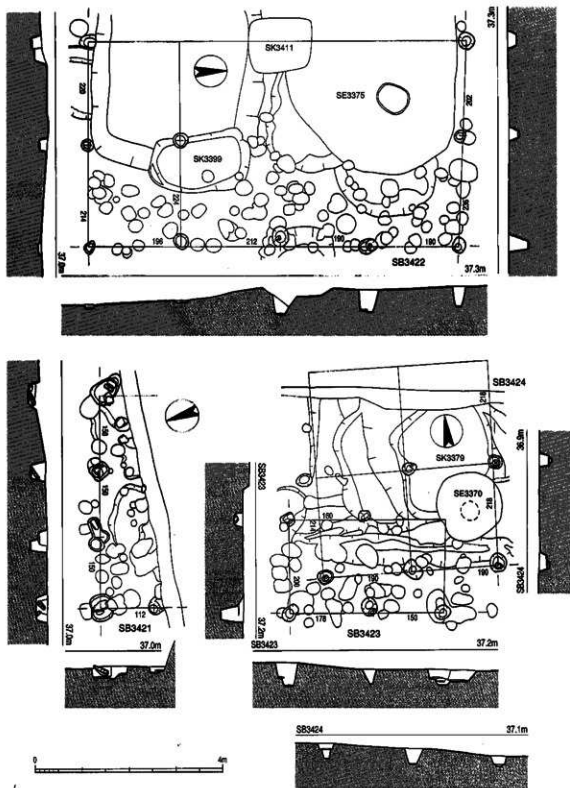


Fig. 44 南辺城跡実測図⑬ (1/80)

S B3423 (Fig.44)

第117次調査区の東側に位置し、S E3370切られ、S B3424・S D3435と重複する。当建物もピットが無数に存在する中、梁行1間(2.0m)×桁行2間(3.3m)の小規模な東西棟獨立柱建物とした。柱間は梁行側が2.0m、桁行側は1.5~1.78mとばらつく。柱穴は径0.4m前後の円形を呈し、深さは0.2m前後を測る。西側の梁行方位は北から東に6度振っている。

S B3424 (Fig.44)

S B3423と重複し、同建物の北側に位置する。S K3379に切られ、北半部は調査区外にあるため現状で梁行2間(3.8m)、桁行1間以上の建物であるが、2×2間の総柱建物になる可能性が高い。柱間は梁行側が1.9m等間である。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し、深さは0.2m前後。東側の梁行方位は北から東に3度振っている。

S B3660 A・B (Fig.45, PL.54-55)

第122次調査区の中央やや東側で検出した掘立柱建物で、S B3686・3687、S E3685、S D3663・3668・3669、S K3672、S X3682などの遺構に切られる。前回の報告では、古期の南北棟建物(梁行3間×桁行8間)をS B3660とし、それと重複する新期の建物(梁行3間×桁行7間)をS B3665として報告していたが、同一建物の同一場所における建替えなので、今回は古期建物をS B3660A、新期建物をS B3660Bとして報告する。

前回、S B3660Aは梁行3間×桁行8間で、中央柱列を有する建物としていた。しかし、新期・古期建物とも梁行を3間とした場合、梁行に古期建物の痕跡が全くみられないのは大きな疑問であった。今回は梁行2間(8.7m)×桁行8間(17.5m)で、中央柱列を有する建物と考えた。柱穴掘方は0.8×1.1m程の長方形を呈し、径20cm余りの柱痕を確認した。柱穴掘方が新期建物と重複していないものには柱痕があり、建替えに際しては柱を掘り抜かず切断している。柱間は梁行が4.35mで、桁行は2.2~2.5mを測る。また、中央柱列は6間で、柱間は2.65~3.0mであり、梁行側から3目目で桁行側柱掘方と揃う。掘方は深く、しっかりしていることから榑木支え柱の掘方と考えられる。

榑木支え柱

S B3660Bは梁行3間(8.7m)×桁行7間(17.8m)の側柱建物で、柱間は梁行が2.75~2.95mで、桁行が2.18~2.96mとばらつく。柱穴掘方は0.8mの方形ないしは長方形を呈し、25cm前後の柱痕を確認した。また、掘方は整然と並ばず、左右にぶれる。建物方位は6度東に振れている。当建物は古期建物と同一場所に建て替えられており、逆の見方をすると、何らかの理由により限定されたこの場所でしか建替えができなかった。その理由の一つとして、周囲が資材置き場になっていたことなどが考えられよう。なお、建物北部は推定南辺築地S A3880と重複するが、築地の完成が天平18年の観世音寺供養と同じであるなら、建物は既に終焉していたことになる。

供養時には終焉

S B3670 (Fig.46, PL.56-1)

S B3660の2.5m西側に位置し、S E3680を切り、S E3690・3695、S K3674と重複する。前回の報告では梁行2間×桁行3間の掘立柱建物としていたが、図面検討の結果、梁行2間(3.6m)×桁行4間(7.16m)の東西棟建物とした。柱間は梁行が1.72~2.04m、桁行は1.54~1.84mとばらつく。柱穴は円形を呈し、径0.3m前後、深さ0.4mを測る。中には柱根を留める柱穴がみられる。東側の梁行方位は北から西に3度30分振っている。

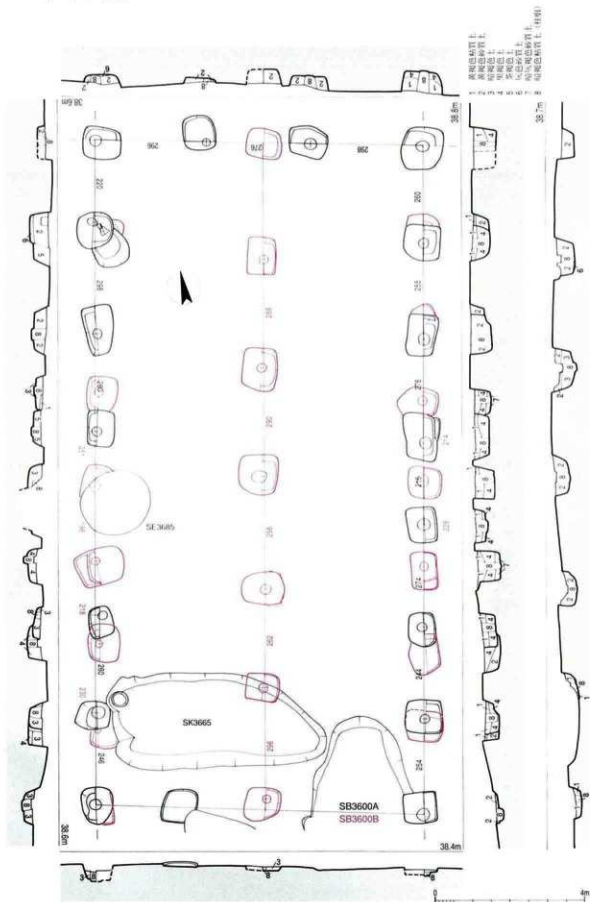


Fig. 45 南邊城建物実測図⑩ (1/100)

(1) 南边城

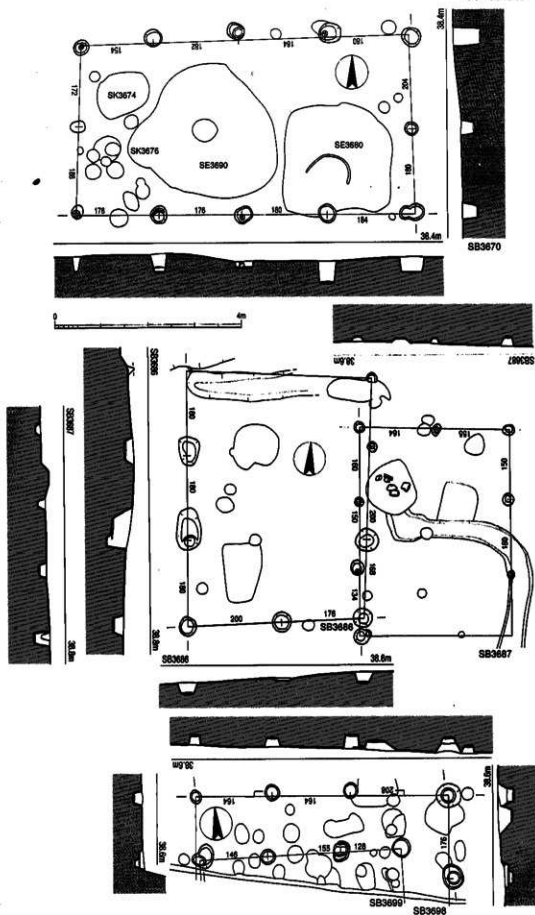


Fig. 46 南边城建筑物实测图⑦ (1/80)

Ⅲ 寺域の調査

SB3675 (Fig. 47)

SB3852と完全に重複するが、当建物が新しい。梁行3間(7.65m)×桁行5間(10.7m) 片廂建 物 身舎の南桁行に廂を付設した片廂掘立柱建物である。柱間は梁行側が2.24~2.76mで、桁行側は1.92~2.38mとばらつく。柱穴は円形を呈し、径0.5前後m、深さ0.3mを測る。柱根を残す柱穴が2個あり、径14cm程であった。

SB3681 (Fig. 48)

第122次調査区の西側で、SB3675・3691と重複する。西側桁行は調査区外にあるが、恐らく、梁行間3(6m)×桁行5間(8.1m)の南北棟掘立柱建物になろう。柱間は梁行側が1.8~2.4m、桁行側は1.35~1.75m間隔。柱穴は円形を呈し、径0.2m前後と小振り、深さは0.2mを測る。桁行の方位は北から東に2度振っている。

SB3686 (Fig. 46)

第122次調査区の北側に位置し、SB3660を切っている。また、SB3687と重複するが、柱穴を抜き取っているので当建物がSB3687に先行すると考えられる。梁行2間(3.66m)×桁行3間(5.4m)の南北棟掘立柱建物で、柱間は梁行側が1.66・2.0m、桁行側は1.46~1.8mを測る。柱穴は径0.4~0.9mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。西側の桁行方位は北から西に4度振っている。

SB3687 (Fig. 46)

SB3686の東隣に重複して位置する。南東隅柱をSD3663に切られて失うが、梁行2間(3.2m)×桁行3間(4.46m)の南北棟掘立柱建物である。柱間は梁行側が1.55・1.64m、桁行側は1.34~1.6mの間隔。柱穴は円形を呈し、径0.2m、深さ0.2mと小振り。西側の桁行方位は北から西に2度振っている。

SB3691 (Fig. 48)

第122次調査区の西端部に位置し、SB3675・3681と重複するが、前後関係は不詳。また、調査区外の西側に延びているので、規模も把握できていない。現状で桁行3間(6.7m)、梁行1間以上の建物であるが、梁行が2間だとすると南北棟掘立柱建物となる。桁行側の柱間は北から2.2m・2.2m・2.3mの間隔。柱穴は円形を呈し、径0.4m前後、深さ0.2m前後を測る。建物の方位は北から東に2度30分振っている。

SB3698 (Fig. 46)

第122次調査区の南東側に位置し、SB3699と重複するが、前後関係は不詳。南半部が調査区外にあるため現状で梁行3間(5.4m)×桁行1間以上の掘立柱建物とした。梁行側の柱間は1.64~2.08mを測る。柱穴は径0.3~0.5mの円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。

SB3699 (Fig. 46)

SB3698の南側で、同建物と重複する。当建物も大半が調査区外に延び、梁行側と考えられる柱穴4個を確認したに過ぎない。こちらが梁行とすると梁行3間(4.2m)の南北棟掘立柱建物となる。梁行側の柱間は東から1.28m・1.55m・1.46mを測る。柱穴は円形を呈し、径0.4m、深さ0.25m前後を測る。

SB3852 (Fig. 47, PL. 62-2)

第122次調査区西端から第130次調査区東端に跨って検出した東西棟の掘立柱建物で、SB

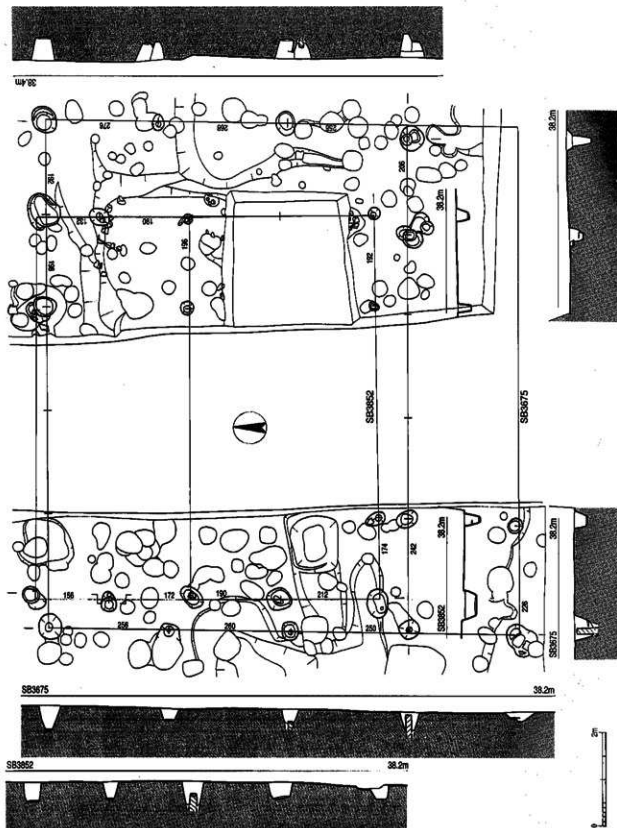


Fig. 47 南边城建筑物平面图 (1/80)

III 寺域の調査

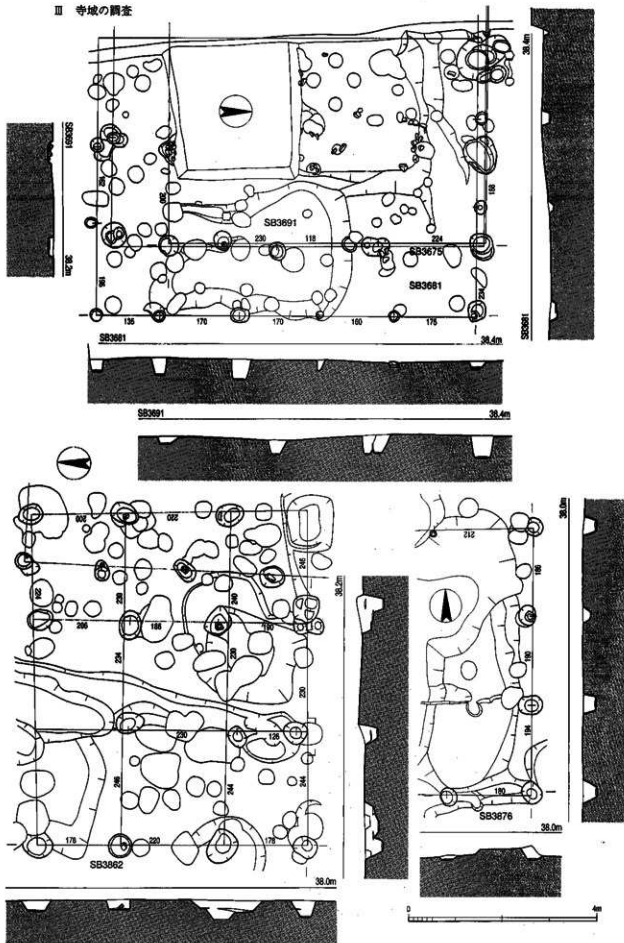


Fig. 48 南辺城建物実測図⑨ (1/80)

3675に切られる。建物規模は梁行4間(7.3m)×桁行4間(8.2m)で、梁行の中央に柱列を有する。柱間は梁行側が1.56~2.12m、桁行側が1.74~1.96mの間隔を測る。柱穴は円形を呈し、径0.3~0.6m、深さ0.2mと小振り。柱穴の中には礎を入れたものがあり、柱の根固めと柱の横固めしたものか。西側の梁行方位は真北を示す。

S B 3862 (Fig. 48, PL. 62)

第130次調査区の東側に位置し、S B 3675・3852と重複するが、前後関係は判然としない。梁行3間(5.84m)×桁行3間(7.2m)の東西棟総柱建物で、柱間は梁行側が1.68~2.2m、桁行側は2.24~2.46mを測る。柱穴は円形を呈し、径0.6m前後と比較的大きく、深さ0.2mを測る。西側の梁行方位は北から2度西に振っている。

S B 3876 (Fig. 48)

第130次調査区の中程で検出した。S D 3840に切られるため現状で梁行3間(5.7m)×桁行1間以上の掘立柱建物である。梁行の柱間は北から1.86・1.9・1.94mとばらつく。柱穴は径0.5mの円形を呈し、深さ0.3mを測る。東側梁行方位は北から東に3度振っている。(小田)

3) 溝

S D 093 (PL. 5-1)

第5次調査区の西側で検出した南北溝で、幅0.8m、深さ0.2mを測る。長さ2m余りを検出した程度で、詳細は不明。

S D 363 (Fig. 49, PL. 6-2)

第16次調査区で検出した石組溝で、長さはトレンチ幅の1.5mに留まるが、幅0.6m、深さ0.56mを測る。兩岸に自然石による護岸を施しており、2段分が残っていた。埋土には暗灰色粘土が堆積していた。

S D 468 (Fig. 25, PL. 8-1)

第23次調査区の中程で検出した上層の溝で、築地S A 467の西側溝と考えられる。南北長は 築地の御溝

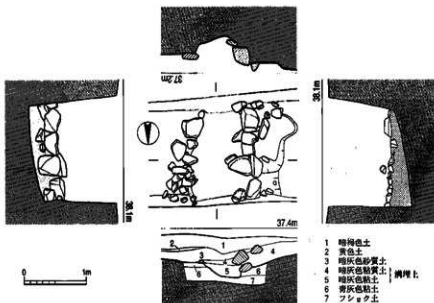


Fig. 49 溝 S D 363実測図 (1/60)

III 寺域の調査

両端が調査区外に延びるため長さ4.8mの検出であるが、上面幅1.1m、検出面からの深さ0.2mを測る。なお、▲印を付した箇所は円形に抉れ、西側は2.1mの間隔を有することから塚板支柱の柱穴と考えられる。

SD485 (PL.9-1)

第23次調査区の中程で検出した下層の溝で、南北両側は調査区外に延びる。上面幅2.2m、深さ0.6mを測る。一応、溝としたものの調査区が狭小なこともあり、詳細は不明。掘土は黒色粘土・黒灰色粘土で、最下層には腐植土が堆積していた。

SD522 (PL.11-2)

第28次調査区東半部で検出した下層の溝状遺構である。SD523と接続し、L字形をなす。上面幅1.1m、深さ0.3mを測り、掘土中から多量の土師器が出土した。

SD523 (PL.11-2)

SD522と連続する下層の南北溝である。上層遺構SX525を残した状態で掘り下げたため溝の幅はつかめていない。SD522・523とも調査区外に延びるため規模等は明らかでないが、何らかの区画施設と思われる。

SD866 (PL.12-1)

第39-1次調査区の西側で検出した東西溝で、井戸SE868に切られる。上面幅0.5m、深さ0.1mで、長さ12.3mの箇所北に折れ曲がる。当溝の東に位置する東西溝SD880との間が1.4m程途切れており、出入り口になるか。ただ、門的な施設は検出していない。

SD880

SD866の1.4m東側に位置し、同溝とは直線関係を有する東西溝である。規模的にもSD866と等しく、上面幅0.6m、深さ0.15mを測る。東半部は下層遺構を把握する目的で掘り下げたため溝全体の長さはつかんでいない。恐らく、SD866とで北側に存在する施設を囲む区画溝と考えられる。

SD890 (PL.16-1)

第39-2次調査3Trの西端で検出した南北溝で、長さ4.3mを確認した。

SB884と重複するが、前後関係は不詳。西端での幅0.46m、深さ0.2mで、東側が広がっている。

SD892 (Fig.50)

第39-2次調査3Trで検出した下層溝で、調査区をS字形に蛇行する。北端部での上面幅2.1m、深さ0.4mで、掘土上層が暗灰色砂で、下層には黒茶

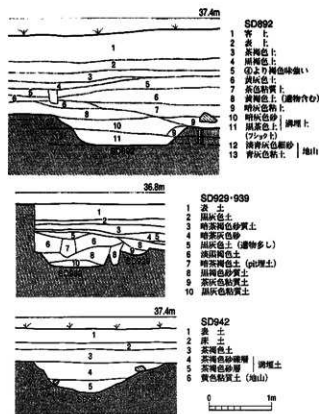


Fig. 50 溝SD892・929・939・942土層図 (1/60)

色土（腐植土）が堆積していた。埋土中から古墳時代の須恵器・土師器が出土しており、同時期の自然河川と考えられる。

自然河川

SD896 (PL.15-2)

第39-2次調査4Trの東側で検出した東西溝で、西側は落込SX903に接続し、東側は39-2次調査3Trまで延びていることから全長18.5mになる。上面幅0.6~0.9m、深さは15cmと浅い。

SD916 (Fig.51)

第39-2次調査4Trの途中で検出した南北溝で、長さ4.7mを確認した。上面幅0.4m、深さ0.2mで、東壁は20cm大の花崗岩自然石で護岸されているが、西壁は素掘りのままとまっている。また、北西側には杭が20cmの間隔で5本打ち込まれており、しがらみを敷けていたものか。底面は北側が下がっている。

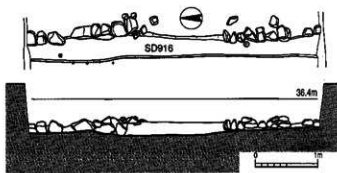


Fig.51 石組溝SD916実測図(1/60)

SD929

第39-2次調査4Trの西側で検出した東西溝で、SK919・935に切られる。西端は調査区外に延びているが、東端部はSD916以東へは延びない。長さ7.8mを確認した。上面幅0.3~0.5m、深さ0.2mを測る。埋土には茶灰色粘質土が堆積していた。

SD939

SD929のすぐ南で検出した東西溝で、東側はSK926に切られる。長さ3.4m分を確認した。上面幅1.2m、深さ0.3mを測り、西側に流れている。

SD942

第39-3次調査1Trの西側で検出した南北溝で、長さ3.4m分を確認した。上面幅2.2m、底面幅0.8~1.6m、深さ0.5mを測る。埋土は上層が茶褐色砂礫層、下層が茶褐色砂層である。

SD947

第39-3次調査2Trの東側で検出した東西溝で、SD948と対をなす新期の溝である。上面幅0.28mで、深さは5cm足らずと浅いため両端部は削平により失う。

SD948

SD947の0.9m南側に位置し、同溝と平行する。上面幅0.32mで、深さは5cmと浅いため両端部は削平されたものと考えられる。

SD995

第39-3次調査2Trの西側で検出した東西溝で、長さ13m分を検出した。上面幅0.6mで、深さは8cmと浅いが、西側に向かって下がっている。

SD997 (PL.19-3)

SD995の南側で検出した東西溝で、SK1006を切る。長さ19.1m分を確認した。西側は調査区外に延びるが、東端はSK993の2.9m手前で終わっている。上面幅0.7~1.4m、西端部で

III 寺域の調査

の深さ0.25mを測る。

SD1522 (PL.20-1)

第61次調査区の南東部で検出したL字形溝で、溝の南岸には20cm大の礫がみられることから腰岸を施していたものと考えられる。上面幅1.1~3.2m、深さ0.4mを測る。埋土は上層が暗茶灰色土、下層が暗褐色砂質土であった。

SD3050 (PL.21)

第103次調査区で検出した南北溝で、長さ4.7mを確認した。上面幅1.3m、深さ0.3mで、両端とも調査区外に延びるが、規模・埋土の状況からみてSD3050は第117次調査SD3430に接続するものと考えられる。なお、溝の東岸には0.9m間隔で腰岸のため杭が打ち込まれていた。埋土は上層が黒灰色粘質土で、下層は灰色粗砂で、多量の土師器・陶磁器が出土している。

SD3146

第109次調査区の北東側で検出した東西溝で、SD3156と重複する。小規模な溝で、長さ5.5m、上面幅0.5m、深さ0.3mを測る。

SD3147

第109次調査区の北側で検出した溝で、逆L字形を呈する。北へ6mの地点で東に折れ、5m行ったヶ所でさらに南に屈曲する。上面幅0.6~1.2m、深さ0.2~0.3mを測る。

SD3148

SD3147の南北方向溝と平行して西側に位置する。小規模な溝で、長さ8.9mを確認したが、SD3147以北へは延びていない。北側の溝は長さ2.65mで一且途切れている。溝と平行して直線的に並ぶ柱穴4が個存在し、柱穴を橋とした場合、雨落ち溝的性格になろう。

SD3149

第109次調査区の北側で検出した東西溝で、SA3193と重複する。上面幅1.4m、深さ0.1mを測り、長さ18.6mを確認した。方向・規模的に第115次調査の東西溝SD3340に接続すると考えられ、南辺築地に関わる溝の可能性を有する。

SD3151

第109次調査区の北西側に位置し、SA3206・SB3354と重複する。北東~南西に走る溝で、SA3196以南へは延びない。2箇所途切れるが、全長15.7m、上面幅0.25~0.5m、深さ0.1~0.2mを測る。南側部分は長さ2mの間隔を有し、この部分は通路となるか。

SD3152

第109次調査区の北西部で、SD3151の2m西側に位置する南北溝で、長さ11.3mを確認した。北側は調査区外に延びるが、南端はSA3196以南には延びず、橋とは0.7m空いている。東西溝SD3153とは直交関係にある。上面幅0.7~1.1mで、深さ0.15mを測る。

SD3153

SA3196のすぐ南側を東西に走る溝である。東西長15.3mで南に折れ、SD3218と切り合う。西側は調査区外に延びる。西端幅0.25m、深さ0.08m、東端幅1.05m、深さ0.2mで、東側に向かって溝幅・深さを増す。

SD3154

SD3153の南を東西に走る溝で、西端はSD3153と重複するが、東に8.4m行った箇所で一

且途切れる。S D3218と一連の溝と考えられる。上面幅0.45m、深さ0.1mを測る。

S D 3156

第109次調査区の北東部で検出した逆L字形の溝で、S D3146と重複し、南部分はS D3233となる。東西長6.2m、上面幅0.4~0.6mで、深さは5cmと削平が著しい。

S D 3190 (PL.26-1)

第109・111次調査区の中央で検出した溝で、溝の北側はS D3299と重複し、中程はS D3291・3232と重複し、南端はS D3200と重複する。全体としてコ字形を呈し、東辺長38mを測るが南端部分の肩部は必ずしも明瞭ではない。上面幅0.6~1.3m、深さ0.3~0.4mを測る。溝の西側部には南北橋S A3195があり、溝・橋で一連の区画施設を構成する。

S D 3200 (PL.29)

第109・111次調査区の東部で検出した南北溝である。北端はS D3149付近から始まり、南側は調査区外に延びる。溝幅は北端で4.5m、南側で9mと南側に向かって広がる。深さは南側で0.7mを測る。掘土上層が暗灰色粘土、下層には黒色粘質土が堆積しており、掘土下層の黒色粘質土からは「嘉元二年十一月卅日」の紀年銘を有する卒塔婆ほか、多数の木製品が出土している。第130次調査で検出したS D3840と対をなす溝で、中世観世音寺の参道側溝と言え

「嘉元二年」
銘木簡

S D 3214

第109次調査区の北端に位置する溝で、S D3149と重複する。調査区の北端から南へ10.5mの箇所まで東に屈曲する。南北部分は上面幅1.1~1.5m、深さ0.1m、東西部分の長さは13m、上面幅0.9m、深さ0.25mで、南東側に向かって深くなる。

S D 3217

第109次調査区の中央に位置し、北側はS A3191・S D3146と重複し、南端部はS D3218と切り合う。北東から南西方向に鉤形に走る溝で、長さ17mを検出した。東側での上面幅1.5m、深さ0.1mを測る。

S D 3218

第109次調査区の北西側から第111次調査区の西側にかけて検出したL字形の溝で、南端はS D3300に接続する。東西長16.5m、南北長35.5mを確認したが、南側部分の肩部は明瞭ではない。上面幅は北側の屈曲部分で幅1.5m、深さ0.15mを測る。

S D 3231

第111次調査区の東側で検出した東西溝で、西端はS D3190に接続し、東端はS E3235付近で不明瞭となる。また、S B3365を切り、S A3212と重複する。検出長11.3m、上面幅0.5m、深さ0.15mで、S D3190に向かって深くなっている。

S D 3232

S D3231の南隣に位置し、S E3269に切られ、S A3212・S B3365・S K3276と重複し、当溝も西端はS D3190に接続する。東に10m行った箇所まで南に折れ、南端は調査区外に延びる。上面幅0.65~1.05m、深さ0.2mを測る。

S D 3233

第109次調査区の南東側から第111次調査区の北東側にかけて走る南北溝である。北端はS D

III 寺域の調査

3156と接続し、南端はS E 3235に切られるが、S D 3231とは直交関係にあるため両者は一連の溝になる可能性が高い。また、S E 3235の2.5m北側では溝が一旦途切れ、すぐ西隣に同溝と平行して小溝が存在する。軸がずれているもの一連の溝と考える。上面幅0.5m、深さ0.1mを測る。

S D 3234

第111次調査区の北西部で検出した南北溝で、北端はS K 3253と切り合い、南端はS A 3197の手前で終焉する。検出長6.5m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。

S D 3236

第111次調査区の南西側に位置する南北溝で、S B 3303と重複する。南端はS D 3300と接続するが、中程はS D 3238、建物部分でS D 3237と重複する。南北長14m、北端幅1.2m、深さ0.3mで、S D 3300に向かって下がっている。

S D 3237

第111次調査区の北西側に位置する東西溝で、S B 3303と重複する。東端はS D 3236と接続し、西端は調査区外に延びる。検出長6.9m、上面幅0.4~0.6m、深さ0.2mを測る。

S D 3238

第111次調査区の北西側に位置する東西溝で、S K 3296に切られる。東端はS D 3236と接続し、西端は調査区外に延びる。検出長7.3m、上面幅0.8m、深さ0.1mを測る。S D 3237とS D 3238の距離は4.5mで、S D 3238からS D 3300までの距離は5.6mを測り、両溝で小区画を形成する。

S D 3239 (Fig. 52)

第111次調査区の南側で検出した東西溝で、S D 3300の南縁と併走するが、前後関係は不詳。東端での上面幅1.7m、深さ0.5mを測り、東側に深くなっている。埋土中から礫の鉤型が出土しているが、S K 3295及びS X 3305に関わるものと推測される。

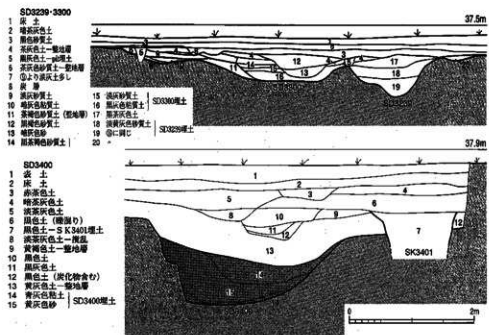


Fig. 52 溝 S D 3239・3300・3400土層図 (1/60)

S D 3241

S D 3239の南側で、同溝とはほぼ併走する東西溝で、S K 3259・3261と重複する。東端はS D 3190に接続するが、西側については擾乱されているため延長を確認できない。東端部での幅0.7m、深さ0.4mで、東側に深くなっている。

S D 3285

第111次調査区の西側に位置し、S A 3197・3198、S B 3304・3306、S D 3289と重複する。S B 3230の7.5m東側に位置し、同建物を区画するコ字形溝である。南北長14.5mで、南端はS D 3300に接続する。幅は北側で1.3m、深さ0.5mで、南側に向かって深くなる。

S D 3289

第111次調査区の西側に位置する東西溝で、S B 3230・3304・3358、S K 3292と重複する。西端はS D 3218と接続し、東端はS D 3190に接続する。東端での幅0.65m、深さ0.3mを測る。溝底はS D 3218に向かって深くなる。

S D 3290 (PL. 30-1)

第109・111次調査区の東端部で検出した南北溝で、S D 3200の上層遺構となる。溝の先端は第109次調査区北東隅から29mの地点で終焉する。北端幅1.35mで、南側に向かって深くなる。位置的にS D 3200埋没後の参道西側溝と考えられる。

参道西側溝

S D 3291

第111次調査区の中央やや北側に位置するL字形溝で、S A 3194・3195・3211・3212、S D 3190と重複する。溝の西端はS D 3218と接続し、東端はS D 3231と接続するが、同溝以南には延びていない。北東隅部での幅0.6m、深さ0.15mを測る。

S D 3299 (Fig. 34)

第109次調査の中央やや南側で検出したL字形溝で、S B 3205を囲んでいる。北辺長8.1m、東辺長5.1m、上面幅0.5~0.7mで、深さ0.3mの遺存状況である。建物との間隔は北辺隅・東辺隅とも1m程であった。

S D 3300 (Fig. 52, PL. 30-2)

第111次調査区の南側に位置する東西溝で、S B 3306と重複し、S D 3190・3218・3236・3304と接続する。東延長部分は第154次調査でも確認しているが、西端は調査区外にある。上面幅は東端側で2.1m、西端側で2.4mを測る。溝の中央部の底面は凹凸が激しく、方形土坑が連続した形状を呈する。粗土下層は灰褐色粘質土が堆積していた。

S D 3333 (Fig. 53, PL. 45-3)

第115次調査南区の南西部で検出した鋸形に巡る溝である。西側と南側は調査区外となる。上端幅2.2m、下端幅は東西溝が1.6m、南北溝が0.8m、深さ0.6mを測る。溝の内側には護岸のための杭が打ち込まれ、南北溝の西肩部には傘大から人頭大の石が配されている。

護岸の杭

S D 3334 (Fig. 53)

第115次調査北区から南区にかけて位置し、途中S D 3333と切り合うが、S D 3335と一連の溝と考えられる。北西から南東に蛇行し、上面幅1.2~2.4m、深さ0.4mを測る。

S D 3335 (PL. 45-3)

第115次調査南区東側で検出した。前述した如く、途中S D 3333と切り合うが、S D 3334に

III 寺域の調査

接続するとみられる。

SD3336

第115次調査北区の北西部に位置し、SD3340に切られ、SB3351を切っている。北東から南西に走る溝で、長さ15.4mを検出した。北端での上面幅2.0m、深さ1.1mを測る。

SD3337

第115次調査北区の中央部で検出した南北溝で、SB3351と重複する。北端はSD3340に接続し、南はSD3338と接続する。上面幅0.8~1.5m、深さ0.2mを測る。

SD3338 (PL.45-2)

第115次調査北区の中央部で検出した溝で、北西-南東方向に走る。西側は調査区外に延びる。上面幅0.7~1.2mで、深さは10cmと浅い。

SD3339

SD3337の東側に位置する南北溝で、SD3338とは直交関係にある。検出長7.1mで、北端幅1.8m、深さ0.15mを測る。

SD3340 (Fig.53, PL.45-1)

第115次調査北区の北側で検出した東西溝で、SB3351を切っている。西側は調査区外に延びるが、東側は第109次調査の東西溝SD3149に接続するものとみられる。東端部での上面幅2.6m、深さ1.1mで、断面形はV字形をなす。埋土は上層が黄灰色砂で、下層は黒灰色粘質土・灰色粘土であった。

SD3344

第115次調査南区の北東側に位置し、北東-南西方向に走る。検出長7.5m、幅2.6mで、深さは0.2mを測る。

SD3347 (Fig.35)

区画施設 第111次調査区の西側で検出したL字形溝で、SB3230の区画施設と考えられる。SK3292・SD3289に切られるため遺存状況は悪い。溝の東西長5.9m、上面幅0.5mで、SB3230の東側柱列から3m東の箇所まで南に折れる。建物の東側が空いているのは、こちらに通用口を設けた

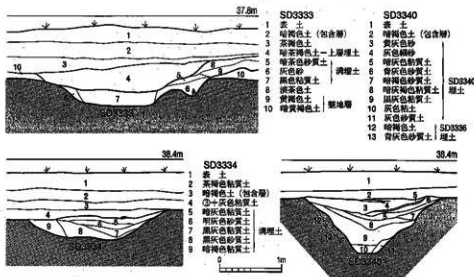


Fig.53 溝SD3333・3334・3340土層図 (1/60)

ためとみられる。

S D3400 A・B (Fig. 52, PL. 48-1)

第117次調査区の中央部で検出した北東から南西に走る溝である。北側から流れる2本の溝が調査区の北部で合流する。溝埋土の堆積状況は西溝埋土に東溝埋土が乗っかることから西溝をS D3400Aとし、東溝をS D3400Bとしたが、溝の時期差を示すものではなく、堆積の違いとして捉えられる。合流地点での幅4.4m、深さ1.3m、南端部での幅2.6m、深さ1.1mで、南側に向かって深くなる。溝の断面形状は逆台形を呈し、埋土は上層が青灰色粘土、下層が黄灰色砂であった。中・下層から多量の土器が出土している。S D3400BはS E3380・3385・3390に切られる。

S D3430 (PL. 48-2)

S D3400の3.5m西側に位置し、S E3405に切られる。北東から南西に走る溝で、遺構検出段階ではS D3440との切り合いは判然としなかったが、下層で二つの流れに分かれ、S D3440がこれを切っている。上面幅1.8m、深さ0.4mを測る。溝の断面形状はU字形を呈し、埋土は上層が黒色粘質土、下層が茶灰色粗砂である。

S D3432

第117次調査区の西側で検出した東西溝で、西端をS K3437に切られ、東端はS D3440に切られる。溝中央部での幅0.7mで、深さは5cmと浅い。

S D3435

第117次調査区の北東側で検出した東西溝で、S B3423・3424、S E3370に切られる。検出長6.2mで、東側は調査区外に延びる。上面幅0.75m、深さ0.3mを測る。

S D3440 (PL. 48-2)

第117次調査区の西側に位置し、北東から南西に流れる。S E3410に切られ、S D3430を切っている。上面幅1.9m、深さ1.1mを測り、埋土には灰色砂が堆積していた。

S D3663

第122次調査区の中央部で検出した南北溝で、S B3660掘方を切る。北側は北西方向に蛇行している。上面幅0.4~0.7m、深さ0.2mを測る。

S D3664

第122次調査区の南東部で検出した東西溝で、西端はS X3682に切られる。検出長5.5m、上面幅0.4~0.6m、深さ0.3mを測る。

S D3666 (PL. 56-2)

第122次調査区の東端で検出した南北溝で、埋土上面には石列S X3662が構築されている。南北長18mで、東西溝S D3667と接続する。上面幅1.6m、深さ0.6mを測り、断面形はU字形を呈する。

S D3667

第122次調査区の東端で検出した東西溝で、S D3666と接続する。上面幅1.4m、深さ0.8mを測る。東側は調査区外に延びるため東西長2.8mを検出したに過ぎない。

S D3668

第122次調査区の北側で検出した東西溝で、S B3660を切る。東西長11.2m、幅1.2m、深さ

Ⅲ 寺域の調査

0.3mを測る。

S D 3669

S D 3668に並走する東西溝で、S B 3660・3686を切る。東西長10.6m、幅0.4m、深さ0.2mを測る。

S D 3671

第122次調査北拡張区で検出した東西溝で、上面幅0.9m、深さ0.2mを測る。削平が著しく、溝東端は消滅している。

S D 3840 (PL. 60-2, 64)

第130次調査区の西端で検出した下層の南北溝で、北端は調査区南端から12m付近で終焉する。上面幅8.5m、深さ0.7mを測る。溝の東肩には、護岸施設S X 3845がある。溝の北端近くで「元亨三年」(1323)銘墨書木札を含む多量の漆器・木製品が出土した。第109・111次調査区で検出したS D 3200と対になり、中世観世音寺の参道側溝とみられる。

「元亨三年」
銘 木 札

護岸施設

S X 3845 (Fig. 54, PL. 63)

第130次調査区の南西で検出した。観世音寺参道の東側溝S D 3840に伴う護岸施設である。溝の東肩部に設けられ、長さ5.4mを測る。比較的簡易な造りで、先ず30~50cm間隔で杭を打ち込み、次に横板を渡し、最後に掘方と板との隙間を掘削土で充填している。板材は長さ150cm、幅15cmのものであった。なお、板材の前面から完形の土師器坏が2点出土した。

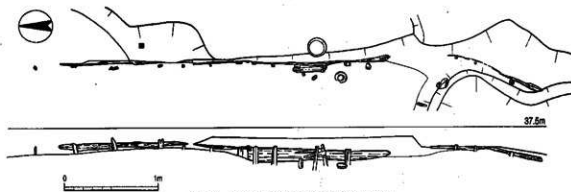


Fig. 54 護岸施設 S X 3845実測図 (1/40)

S D 3842 (PL. 62-1)

第130次調査区の東側で検出した南北溝で、S B 3862, S K 3848・3849を切り、S D 3843に切られる。南北長5.8mで、幅1.4m、深さ0.1mを測る。

S D 3843 (Fig. 55, PL. 65-2)

第130次調査区の北東部で検出した石組溝で、長さ7mを検出した。上端幅0.4m、深さ0.2mで、20~40cm大の花崗岩を並べている。

S D 3844 (PL. 62-1)

第130次調査区の南側で検出した溝で、S D 3846と一連の遺構と考えられる。幅1.2m、深さ0.2mを測る。

S D 3846 (Fig. 55, PL. 62-1)

第130次調査区の南東側で検出した東西溝で、S D 3847と一連のコ字形に巡る溝である。上

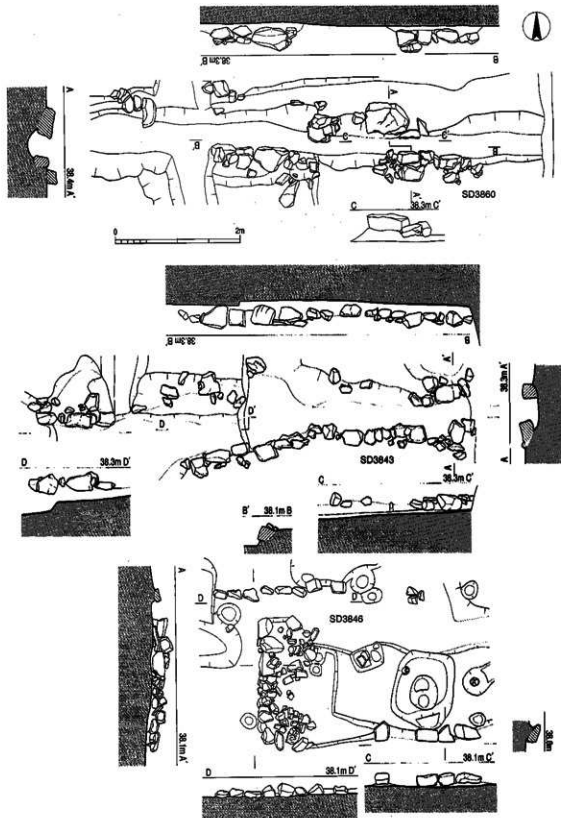


Fig. 55 石組溝 S D3843・3846・3860実測図 (1/60)

Ⅲ 寺域の調査

端幅0.8m、深さ0.2mを測る。北側の一部に石列が遺存している。

S D 3847 (PL. 62-1)

S D 3846の1.5m南側で検出した。同溝に関連するコ字形の溝である。上端幅0.5m、深さ0.3mを測る。北縁の一部とS D 3846との西縁に石列が遺存している。

S D 3854 (PL. 66-2)

S D 3840の北側で、S K 3853の西縁を湾曲して流れる下層溝で、8m余り検出した。幅0.8m、深さ0.3を測る。

S D 3855 (PL. 66-1)

第130次調査区の西側で検出した。調査区の東端部から西に向かって延び、調査区に沿って鋸形に南に折れる。上端幅0.5m、深さ0.4mを測る。

S D 3860 (Fig. 55, PL. 65-2, 66-1)

第130次調査区の北端部に沿って西に流れ、南門跡地を避けるように南に屈曲し、さらに西方向に鋸形に折れる。上面幅0.3m、深さ0.3mを測る。溝の年代は近世に属し、S D 3865に切られる。

S D 3865 (PL. 65-2)

第130次調査区の北東側から9.5m程南に延び、そこから西へ屈曲し、さらに調査区の西壁際で南に折れる鋸形の溝である。幅1.0m、深さ0.5mを測る。溝の北方では石組による護岸が、東西方向では溝に沿って竹による護岸を施していた。S D 3855・3860を切る。(小田)

4) 井戸

井戸は第23次・39-1次・39-2次・109次・111次・115次・117次・122次調査で検出した。井戸の形態分類については、横田賢達(賢次郎)の分類に従った¹⁾。

S E 480 (Fig. 56, PL. 9-2-3)

第23次調査区の上層遺構面の北西で検出した桶側構造の井戸で、掘方の西側は調査区外に延びる。井戸枠は裾開きとなる桶側最下段の下半部のみ確認した。桶側の下端径0.68m。桶側は幅10cm程の板材18枚からなる。Ⅳ類。井戸埋土中からは多くの箸が出土した。

S E 867 (Fig. 56, PL. 13-1-2)

第39-1次調査区の西端で検出した方形縦板枠と曲物を組み合わせる構造の井戸である。縦板枠は一部が残存しているのみであるが、一辺0.7m程であることが知れる。曲物は径53cm、高さ29cmを測る。Ⅱ-B-b類。

S E 868 (Fig. 56, PL. 13-3, 14-1)

S E 867の南側で検出した方形縦板枠の下部に曲物を据える構造の井戸である。井戸枠は一辺0.7m、高さ0.5mで、四隅に角柱を立て、縦板を上下2段の横棧で止めている。縦板は8~20cm、厚さ3cm程の板材を一辺に5枚使用する。曲物は径63cm、高さ43cmを測る。底面には丸瓦・平瓦が敷き詰められている。Ⅱ-B-b類。(吉村)

S E 869

S E 867の2m東側に位置し、北半部は調査区外に延びる。掘方は径1.3mの円形を呈し、中には井戸枠の残骸と思われる板材が残っていた。(小田)

多量の箸が
出土

(1) 南边城

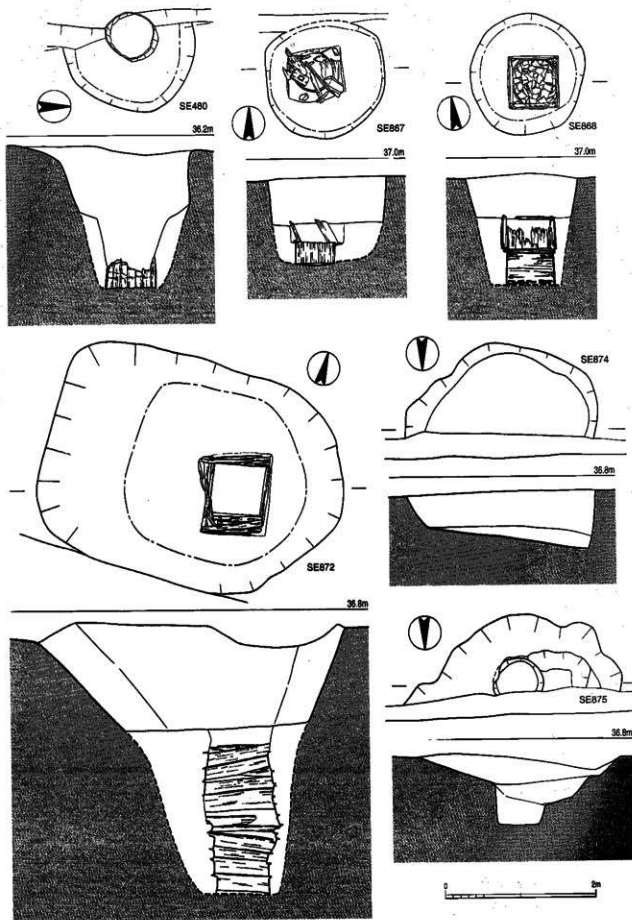


Fig. 56 南边城井戸実測图① (1/50)

Ⅲ 寺城の調査

SE 870 (Fig. 57, PL. 12-2)

第39-1次調査区の西側で検出した。井戸枠が内側に倒壊し、原状を留めていなかったが、方形縦板構造の井戸と考えられる。SE 871を切る。II-A類か。曲物の底と考えられる円形の板材や下駄が出土した。

SE 871 (Fig. 57)

第39-1次調査区の西側で検出し、井戸枠部分は調査区外の北側となる。SE 870に切られる。

SE 872 (Fig. 56, PL. 14-2-3)

第39-1次調査区の東側で検出した。方形横板構造の井戸である。井戸枠は掘方の東側に寄って作られている。枠全体が土圧によって変形しているが、一辺0.75m程を測る。板材は幅15~25cm、厚さは10cmと分厚い。11段からなっていたようである。板材の端部に凹凸の柄を設け、上段と下段の柄の出入りが互い違いになるように組み上げている。また、枠の板材が二重になっており、外側の板材は内側の板材の空隙を埋めるように配されていた。I-B類。 (吉村)

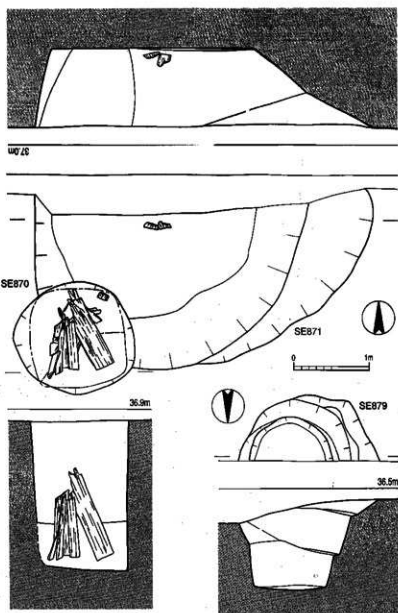


Fig. 57 南辺城井戸実測図② (1/50)

S E 874 (Fig. 56)

S E 872のすぐ北側で検出した。北半部は調査区外に延びるが、隅丸方形を呈するものと思われる。短軸2.25m、深さ0.6mを測る。一応、井戸としたが、土坑の可能性が高い。

S E 875 (Fig. 56)

S E 875の東隣に位置し、北半部は調査区外にある。掘方は不整形を呈し、中央がすり鉢状に窪む。素掘りの井戸か、若しくは曲物が抜き取られたⅢ類井戸になるか。中央の径0.64m、深さ0.52mを測る。

S E 879 (Fig. 57)

S E 872の西隣で検出した。トレンチ的に一部を掘り下げて検出したため北半は未掘となった。掘方は円形を呈し、東西長1.9m、深さ1.15mを測る。井戸枠は遺存しておらず、素掘りの井戸と思われる。(小田)

S E 895 (Fig. 58, PL. 16-2-3)

第39-2次調査4 Tr東端で検出した。方形縦板枠の下部に曲物を据える構造である。井戸枠は一辺0.8m、深さ1.6mで、三段の横棧で縦板を固定している。板材は幅20cm、厚さ1cmで、縦板は一辺に5枚使用する。曲物は径40cm、高さ22cm。Ⅱ-B-b類。

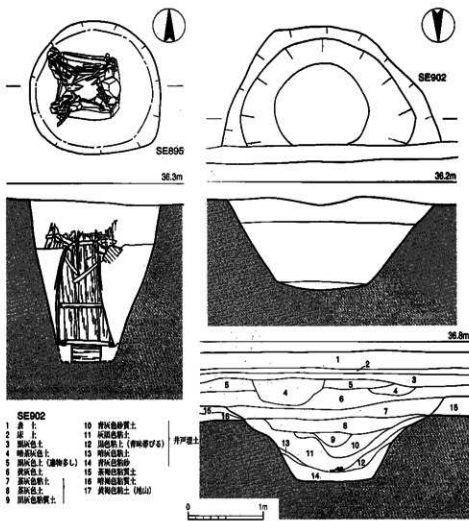


Fig. 58 南辺城井戸実測図③ (1/50)

Ⅲ 寺域の調査

S E 902 (Fig. 58, PL. 17-1)

S E 892の西側に位置する。井戸枠は抜き取られ、構造は判らない。深さ1.2mを測る。

S E 3145 (Fig. 59, PL. 31-1)

第109次調査区の東側で検出した。井戸枠の残存状況は悪いが、上部が石組、下部が方形縦板構造のものと思われる。板材は抜き取られていたが、平瓦を枠の補修材として使用していた。瓦を補修材として使用

Ⅱ-B-a類。

S E 3150 (Fig. 59, PL. 31-2)

S E 3145の西隣で検出した。方形縦板構造の井戸である。枠は一辺0.8mで、高さ0.5mが残存している。板材の幅は8~12cmで、一辺に8枚使用する。井戸枠は隅柱となる角材を打ち込んで支柱とし、枘を掛けて横棧を架している。なお、横棧には自然木を使用する。Ⅱ-A類。

S E 3155 (Fig. 59, PL. 31-3)

第109次調査区の北東側で検出した。花崗岩の自然石を用いた石組構造の井戸である。上面での内径0.8m、底部では0.6mを測る。石組は5段が残存する。V類。 (吉村)

S E 3157 (Fig. 59)

第109次調査区の北東側に位置する。平面形は円形を呈し、径1.32m、深さ0.92mを測る。井戸枠はみられず、素掘りの井戸になろう。 (小田)

S E 3160 (Fig. 59, PL. 32-1)

S E 3157の南西隣で検出した。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方の西に片寄って置かれている。三段が残存するが、最上段の桶側は腐朽が著しい。中段の桶側は上端径63cm、下端径68cm、高さ75cm以上。下段の桶側は上端径63cmで、下部は腐朽している。板材は中段のもので、幅7.5cm、厚さ3cmを測る。Ⅳ-A-a類。

S E 3165 (Fig. 59, PL. 32-2)

第109次調査区の中央部に位置し、S K 3183を切っている。人頭大の花崗岩自然石を用いた石組構造の井戸である。上面での内径0.5m、底部では0.4mを測る。石組は6~9段が残存する。V類。

S E 3170 (Fig. 60, PL. 32-3)

第109次調査区の北端で検出した。桶側構造の井戸であるが、掘方が狭く、また、桶側が裾広がりにならないなど、通常の例と違って溜槽的な用途であったと考えられる。井戸枠は径0.43~0.5mを測る。7~9cm幅の板材を15枚使用している。

S E 3175 (Fig. 60, PL. 33-1)

第109次調査区の南西側に位置し、S B 3205と重複する。曲物を2段に重ねる構造の井戸である。上部の曲物の外側には、6枚の縦板を立てて増強材とする。曲物の径は37cm、高さ27cmを測る。Ⅲ類。 (吉村)

S E 3176 (Fig. 60)

第109次調査区の南西隅に位置し、S D 3290に切られる。掘土上層の枕列はS D 3290の護岸として打ち込んだものである。北壁側には別遣構と切り合うためテラスを有する。長軸1.65m、深さ0.6mを測る。井戸枠がみられないので、素掘りの井戸になろう。 (小田)

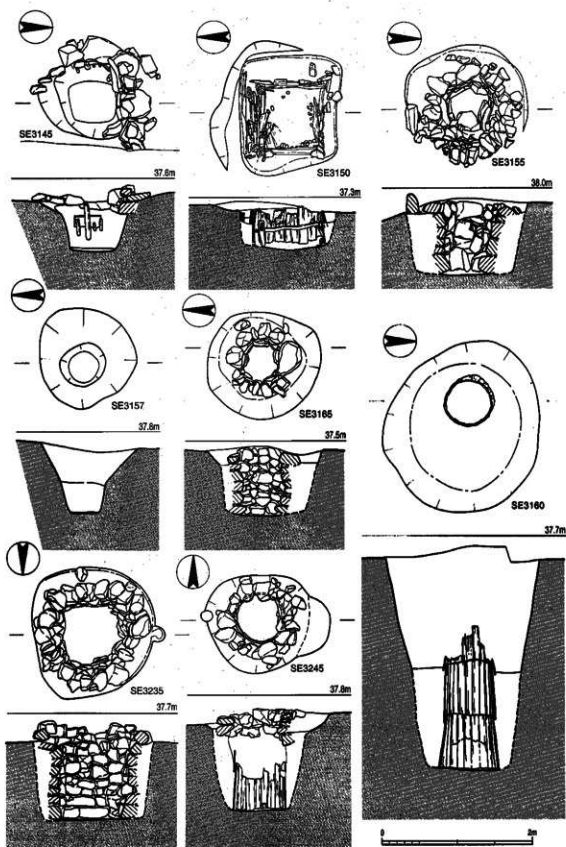


Fig. 59 南边城井戸突測図④ (1/50)

III 寺城の調査

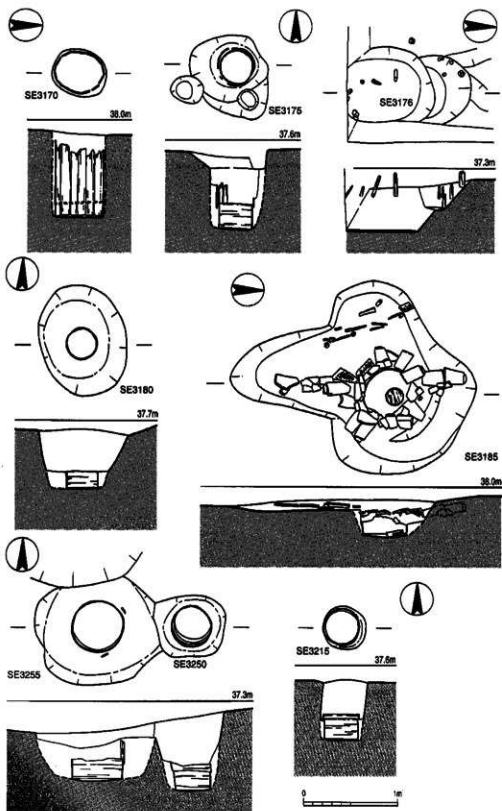


Fig. 60 南辺城井戸実測図⑤ (1/40)

SE3180 (Fig. 60, PL. 33-2)

第109次調査区の西端で検出した。円形の掘方下部に曲物を据える構造の井戸である。曲物の径は34cm, 高さ21cmを測る。Ⅲ類。

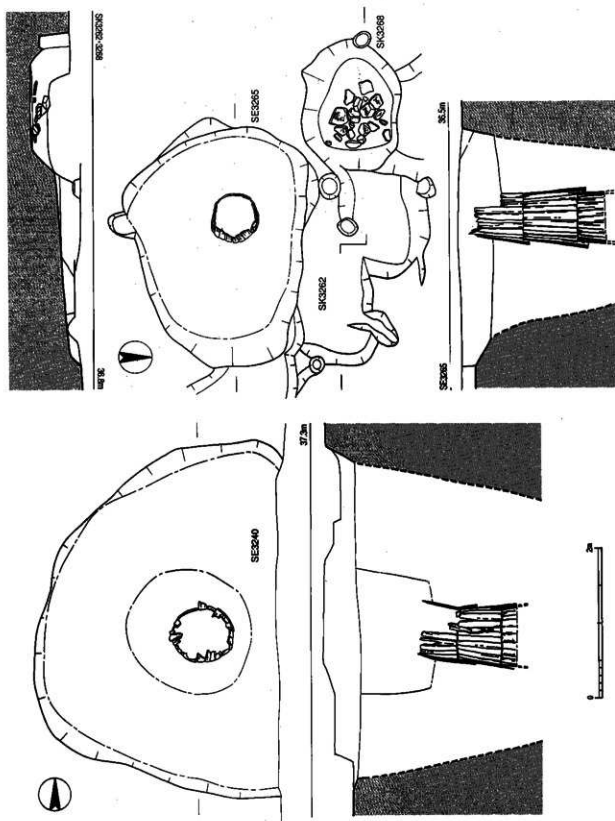


Fig. 61 南边城井户基测部④ (1/50)

III 寺域の調査

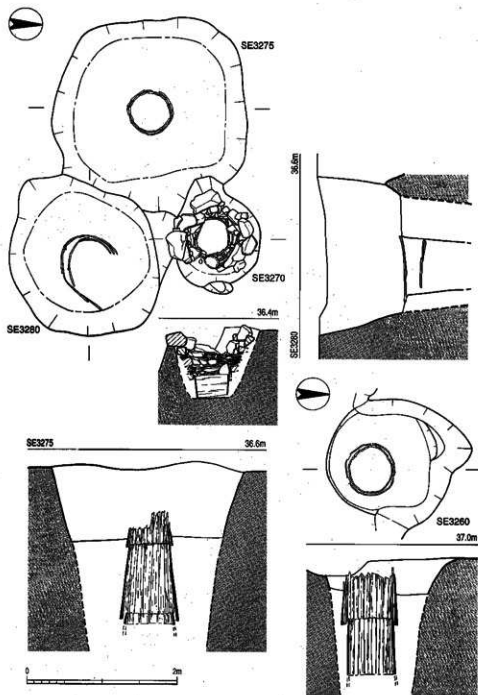


Fig. 62 南辺城井戸実断面⑦ (1/50)

S E 3185 (Fig. 60, PL. 33-3)

溜槽状の施設

第109次調査区の北東隅で検出した。浅い掘方に曲物を据える溜槽状の施設である。曲物は径45cm、高さ18cmを測る。曲物の縁には完形の丸瓦を放射状に置き、隙間に平瓦を配する。南北に延びる瓦列部分が暗渠になる可能性も考えられたが、下部は溝状を呈していない。掘土からは、ここで使用したとも考えられる小形の曲物（径18cm、高さ6cm以上）が出土した。Ⅲ類。

S E 3215 (Fig. 60, PL. 34-1)

第109次調査区の南側に位置し、S B 3307と重複する。曲物を2段に重ねる構造の井戸である。上部の曲物は腐朽が著しいが、下部の曲物は径37cm、高さ23cmを測る。Ⅲ類。

S E 3235 (Fig. 59, PL. 34-2)

第111次調査区の東側で検出した。人頭大の花崗岩自然石を用いた石組構造の井戸である。上面での内径1.05m, 底部では0.75mを測る。石組は9段が残存する。V類。

S E 3240 (Fig. 61, PL. 34-3)

第111次調査区の中央やや南側に位置し, S B 3366と重複する。桶側構造の井戸である。3段が残存するが, 最上段の桶側は腐朽が著しい。中段の桶側は上端径68cm, 下端径87cm, 高さ82cm。下段の桶側は上端径77cmを測る。板材は中段のもので, 幅7~9cmのものを25枚使用している。IV-A類。

S E 3245 (Fig. 59, PL. 35-1)

第111次調査区の北部で検出した。上部が石組, 下部に桶側を配する構造の井戸である。上部の石組は花崗岩の自然石を使用し, 5段が残存する。下部の桶側は腐植が進んでいるが, 下端径は70cmを測る。井戸枠の一枚には枘穴が穿たれていた。IV-B-a類。

S E 3250 (Fig. 60, PL. 35-2)

第111次調査区の中央やや西側に位置し, S B 3306と重複する。曲物を2段に重ねる構造の井戸である。上部の曲物は腐朽が著しいが, 径42cm, 下部の曲物は径37cm, 高さ21cmを測る。Ⅲ類。

S E 3255 (Fig. 60, PL. 35-3)

S E 3250の西隣に位置するが, 前後関係は不詳。桶側の下部に曲物を配する構造の井戸である。桶側は遺存状況が悪く, 2枚が残るのみである。曲物は径52cm, 高さ22cmを測る。IV-B-b類。

S E 3260 (Fig. 62, PL. 36-1-2)

第111次調査区の南西側に位置し, S X 3305と重複する。桶側構造の井戸である。2段が残存する。上段の桶側は腐朽が進んでいるが下端径74cmを測る。下段の桶側は上端径52cm, 高さ75cm以上を測る。板材は幅4~7cmのものを使用している。IV-A類。

S E 3265 (Fig. 61, PL. 36-3, 37-1)

第111次調査区の南西側で検出した。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方の西側に片寄って配され, 枠は3段が残存する。上段の桶側は腐朽が進んでいるが下端径68cmを測る。中・下段の桶側は上端径62cm, 中段の桶側の高さ78cm以上を測る。板材は幅5~10cmのものを使用し, 中段が21枚, 下段が22枚からなる。IV-A類。

S E 3270 (Fig. 62, PL. 37-2-3)

第111次調査区の南西側に位置し, S E 3275を切っている。上部に石と瓦を積み, 下部に曲物を据える構造の井戸である。上部の石組は4段が残存する。下部の曲物は径45cm, 高さ30cmを測る。IV-B-a類。

S E 3275 (Fig. 62, PL. 37-2, 38-1-2)

S E 3270の西隣に位置し, これに切られる。桶側構造の井戸である。井戸枠は3段が残存する。上段の桶側は腐朽が進んでいるが, 下端径62cmを測る。中段は上端径54cm, 下端径69cm, 高さ109cmを測る。下段の桶側は上端径62cmで, 板材は幅8~10cmのものを使用する。IV-A類。

(吉村)

Ⅲ 寺城の調査

SE 3280 (Fig. 62, PL. 37-2, 38-3)

SE 3270のすぐ南に位置し、SE 3275とは切合い関係を有するが、前後関係は判然としない。掘方は長軸2.44m、短軸2.02mの偏円形を呈し、深さは2mまでしか確認していない。井戸枠はすでに抜き取られ、掘方上面から1.2mと1.4m掘り下げた部位で竹のタガを検出したのみであるが、上面径0.75mを測ることから桶側構造の井戸と考えられる。(小田)

SE 3345 (Fig. 63, PL. 46-1)

第115次調査南区の北側で検出した。床面より僅かに浮いた状態で竹タガが遺存していた。桶側構造か。SD 3334に切られる。

SE 3350 (Fig. 63, PL. 46-2-3)

第115次調査北区の南端で検出した。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方の北側に片寄って配される。上部の枠は抜き取られ、最下段の桶側のみ残存する。桶は上端径60cm、下端径70cm、高さ82cmを測る。板材は幅8~14cmである。井戸枠の一枚には枘穴が穿たれていた。なお、先頭部を尖らせ、節を抜いた竹が突き立てられており、廃棄に伴って井戸祭祀を行っている。竹の下端は底面から30cm程浮いた状態であった。IV-A類。

SE 3370 (Fig. 64, PL. 49-1)

第117次調査区の北東隅で検出した。SD 3435・SK 3379に切られ、SB 3424と重複する。掘方の中央で井戸枠が抜かれた痕跡を確認したが、構造については明らかではない。深さ1.8

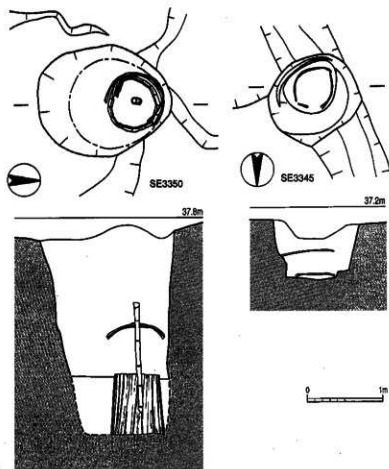


Fig. 63 南辺城井戸実測図⑧ (1/50)

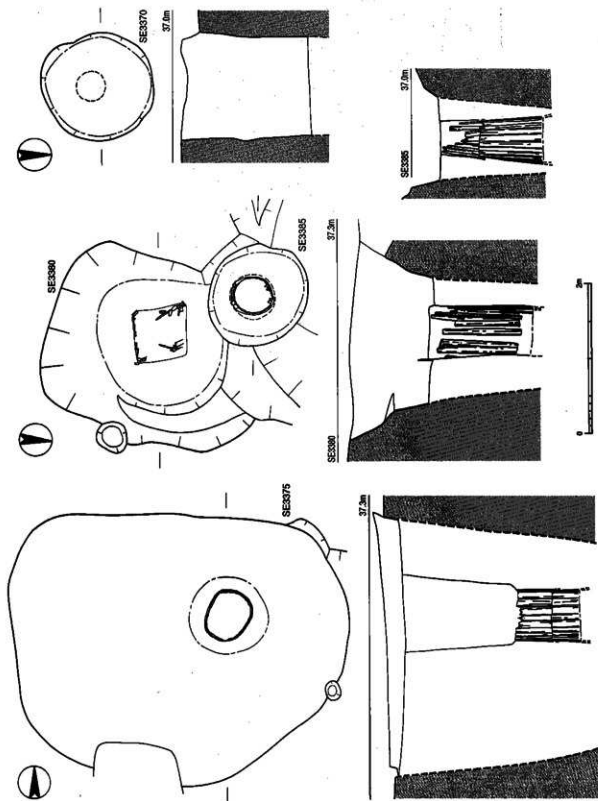


Fig. 64 南边城井坑遗址④ (1/50)

III 寺域の調査

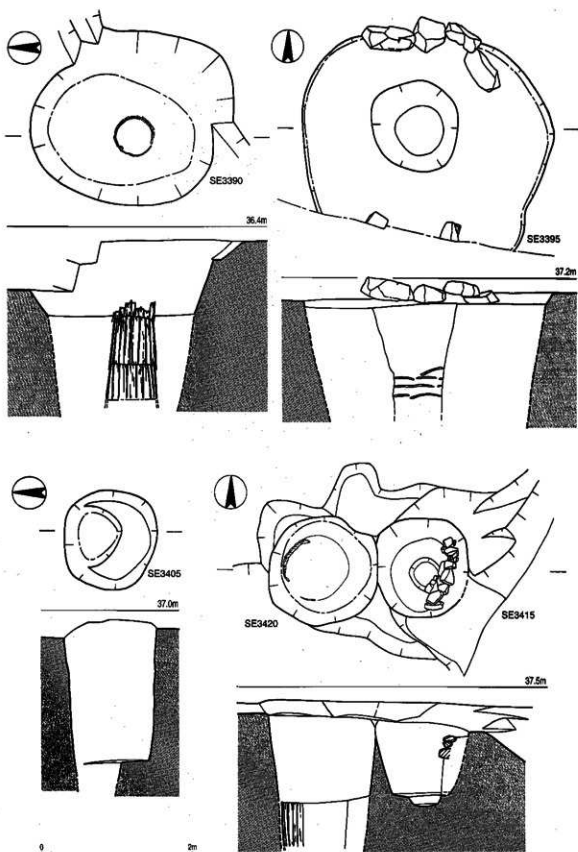


Fig. 65 南辺城井戸実測図⑩ (1/50)

m程掘り下げたが、底面にまでは達していない。

S E 3375 (Fig. 64, PL. 49-2-3)

第117次調査区の東側で検出した。S K3411に切られ、S B3422・S K3412を切る。桶側構造の井戸で、井戸枠は掘方の東側に片寄って置かれている。崩壊の危険があったため、桶側を2段分確認するに留めた。上・下段とも桶側の上端径67cmを測り、幅7~10cmの板材を2枚使用している。IV-A類。

S E 3380 (Fig. 64, PL. 50-1-2)

S E 3375のすぐ北側で検出した。方形縦板構造の井戸である。枠は一部しか残存していないが、一辺0.7m程で、深さ1.35mまで掘り下げた。板材は幅7~10cmで、8枚が遺存しており、一辺に10枚使用していたものと考えられる。II類。S E 3385に切られている。

S E 3385 (Fig. 64, PL. 50-1)

S E 3380のすぐ北側に位置し、同井戸とS D3400Bを切っている。桶側構造の井戸である。上段の桶側は腐蝕が著しい。下段の桶側は上端径47cm、高さ85cm以上を測り、幅9cm程の板材を19枚使用している。IV-A類。

S E 3390 (Fig. 65, PL. 50-3)

S E 3385の西側に位置し、S D3400Bを切っている。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方の南側にやや片寄って配されている。桶側は三段確認したが、最上段は腐蝕が著しい。中段の桶側は上端径46cm、下端径64cm、高さ78cm、板材は幅8~10cm、厚さ1~2cmを測る。下段の桶側の上端径は56cmで、板材は幅8~14cmと中段のそれよりも厚めになっている。IV-A類。

S E 3395 (Fig. 65, PL. 51-1-2)

第117次調査区の南端中央に位置し、S K3413を切っている。桶側構造と考えられる井戸である。井戸枠は抜き取られているが、竹タガが残っていた。S K3413と切り合う箇所には50~70cm大の花崗岩割石4個があり、壁面の補強として置いたものと考えられる。IV-A類。

S E 3405 (Fig. 65, PL. 51-3)

第117次調査区の南西側に位置し、S D3430を切っている。井戸枠は抜き取られて残存していない。深さ2m程の部分が三日月形のテラスになっている。埋土は黒灰色粘質土である。

S E 3410 (Fig. 66, PL. 52-1)

S E 3405の0.5m南西に位置し、S D3430を切る。石組構造の井戸であるが最下段の石積みが残存するのみである。その下部に曲物を据えるものであろうか。北壁際には廃棄時の井戸祭 井戸祭 祀 祀に関わると考えられる長さ44cm以上の竹が残っていた。

S E 3415 (Fig. 65, PL. 52-2)

第117次調査区の北西部で検出した。井戸枠は遺存していないが、底部に曲物を据えた可能性がある。上層においてみられた自然石の集積は、井戸廃棄後の沈下を防ぐための所業か。

S E 3420 (Fig. 65, PL. 52-2)

S E 3415の西隣で検出した。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方の西側に片寄って配されている。幅10cm、厚さ1cm程の板材が8枚遺存していた。IV-A類。

S E 3425 (Fig. 66, PL. 52-3)

第117次調査区の西端に位置し、S K3438・3439・3442を切っている。方形縦板と曲物を組

III 寺城の調査

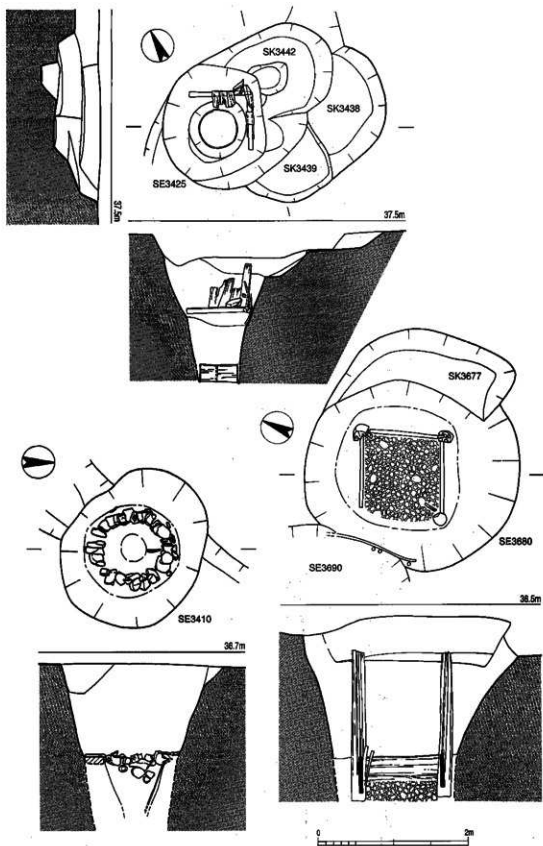


Fig. 66 南辺城井戸突図① (1/50)

み合わせる構造の井戸である。上部の方形縦板枠は一辺0.8mを測る。底面に組んだ横木と隅木・横棧で縦板を留める。支柱には横棧を通すための柄孔が穿たれている。下部の曲物は径51cm、高さ23cmを測る。II-B-b類に類似するが、上部井戸枠と下部曲物との約50cm間には枠がなく、地山壁面を枠として利用する特異な構造である。

(吉村) 地山面を枠として利用

SE3680 (Fig. 66, PL. 57, 58-1)

第122次調査区の西側に位置し、SE3690・SB3670に切れ、埋土上層にはSK3677が存在する。掘方は円形を呈し、長径2.86m、底部までの深さ2.35mを測る。掘方東側の段落ちはSK3677の名残である。井戸枠は方形横板構造のもので、支柱3本と最下部の横板3枚を留める程度であった。支柱は長さ2mを測り、2面をL字形に面取し、横板を落とし込む溝を設けている。残存する板の幅が46cmなので横板は4段に復元できる。井戸底には15cmの厚さで小礫を敷き詰めているが、水を濾過するためと考えられる。井戸の堀土中からは観世音寺創建伽藍に使用したとみられる老司I式軒丸・軒平瓦が出土しており、作業事務所的性格のSB3660に付

SB3660に付随する

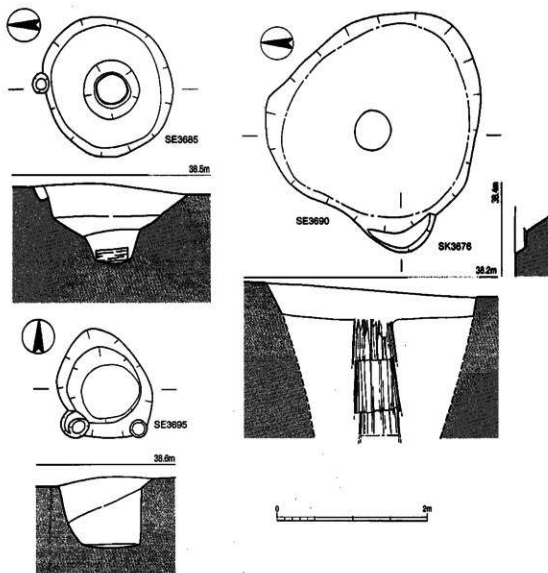


Fig. 67 南辺城井戸実測図⑫ (1/50)

Ⅲ 寺域の調査

随するものである。土器・瓦類の他に白木碗・椀・藤蓆の縄などの木製品等も出土している。

(小田)

SE3685 (Fig. 67, PL. 59-1)

第122次調査区の中央部で検出した。底部に曲物を据えるものである。曲物は径42cm、高さ16cm以上で、上部は欠失している。Ⅲ類と考えられる。SB3660A・Bの柱据方を切る。

SE3690 (Fig. 67, PL. 58-2-3)

第122次調査区の西側に位置し、SE3680・SK3676を切り、SB3670と重複する。桶側構造の井戸である。桶側は三段確認したが、最上段は腐植が著しい。中段の桶側は上端径52cm、高さ70cm以上で、幅7~13cmの板材を18枚使用する。下段の桶側上端径は50cmで、幅8~12cmの板材15枚からなる。上段の板材の枚数は22枚。Ⅳ-A類。

SE3695 (Fig. 67, PL. 59-2)

SE3690の北側に位置し、SB3670に切られる。長軸1.4m、深さ0.9mを測る。井戸枠は検出されていないが、掘方の形状や埋土からみて井戸と考えられる。(吉村)

5) 土坑

SK365 (Fig. 68, PL. 6-3)

第16次調査区の東端に位置し、南半部は調査区外に延びる。平面形は円形を呈し、径1.25m、深さ0.2mを測る。掘土中には角礫が詰まっていた。

SK521 (Fig. 68, PL. 11-1)

第28次調査区南側で検出した。石積土坑で、南半は調査区外に延びる。一辺2m、深さ0.5mの方形土坑の四周に10~40cm大の角礫を積み上げたものであるが、石積みはかなり粗い。底面が粘質土であることからSX525に関連する水溜槽と考えられる。

SK524

第28次調査区東半部で検出した下層遺構で、SD522のすぐ北側に位置する。長さ1.8m、幅0.52mを測る長円形の土坑で、土坑内には角礫が投棄されていた。

SK873 (Fig. 69)

第39-2次調査3Trの北東隅に位置し、SK876と重複する。東半部が調査区外に延びるため詳細は不明。検出長2.1mで、深さは10cmと浅い。底面は平坦面をなす。

SK876 (Fig. 69)

SK873の西隣に位置するが、北半部が調査区外にあるため詳細は不明。東西長4.66m、検出幅1.2mで、深さが10cmと浅いことから段落ち的なものになるか。底面はフラットであるが、西側に緩傾斜している。

SK877 (Fig. 70)

第39-1次調査区の西側で検出した。隅丸長方形を呈する小土坑で、長軸1.13m、短軸0.53mで、深さは10cmと浅い。

SK878 (Fig. 70)

第39-1次調査区の東側に位置し、SD880・SE872を切っている。隅丸長方形を呈する土坑で、長軸2.1m、短軸1.25mで、深さは0.3mを測る。底面は平坦をなす。

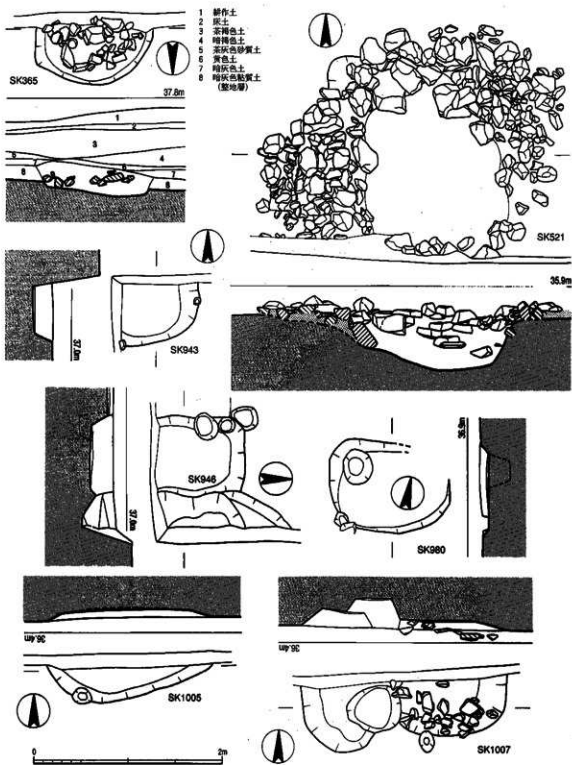


Fig. 68 南辺域土坑実測図① (1/40)

S K 885

第39-2次調査3 Tr北側で検出した。大半が調査区外にあるため詳細は不明。深さは0.2m。

S K 886 (Fig. 70)

S K 885のすぐ南側で検出した。不整形を呈し、小土坑二つが繋がった形態をなす。長軸1.6

Ⅲ 寺域の調査

m, 短軸0.87m, 深さ0.2~0.3mを測る。

S K 887 (Fig. 70)

S K 886の4.5m南西に位置し, 掘立柱建物 S B 883・889に切られる。平面形は倒形を呈し, 長軸1.68m, 短軸1.22m, 深さ0.2mの大きさ。底面は平坦をなす。

S K 891 (Fig. 70)

第39-2次調査 3 Tr 南西隅に位置し, S B 889と重複する。西壁の大半が調査区外にあるため詳細は不明であるが, 平面形は方形を呈するか。南北長1.38m, 深さ0.25mで, 底面は平坦面をなしている。

S K 897 (Fig. 70)

第39-2次調査 4 Tr の北東部に位置し, S K 898を切っている。北壁は調査区以外にあるが, 円形を呈しよう。東西幅1.2m, 深さ0.55mで, 埋土下位には泥炭層が堆積していた。

S K 898

S K 897のすぐ南西側で, 同土坑に切られて位置する。北半部は調査区外に延びるが, 円形を呈しよう。検出幅1.46m, 深さは10cmと浅い。

S K 907 (Fig. 70)

第39-2次調査 4 Tr 中央で検出した土坑で, S B 906・S X 903に切られる。隅丸方形を呈し, 長軸1.65m, 短軸1.42m, 深さ0.22mを測る。底面は平坦である。

S K 910 (Fig. 69)

S K 907のすぐ西側で検出した土坑で, S K 911・912と連なっている。南半部は調査区外に延びる。検出幅1.48m, 深さ0.3mを測る。

S K 911 (Fig. 69)

S K 910・912との中間に位置する。楕円形を呈し, 長軸2.1m, 短軸1.4m, 深さ0.35mを測る。底面は平坦面をなす。埋土上位には長さ90cmの焼土塊があり, フィゴ羽目が出土しているものの, 当土坑とは直接関係はない。

焼土・細羽
口の出土

S K 912 (Fig. 69, PL. 18-1)

S K 911の北隣で検出した。平面形は楕円形を呈し, 長軸1.83m, 短軸0.9m, 深さ0.35mを測る。底面は平坦面をなす。

S K 913 (Fig. 69, PL. 17-2)

S K 912のすぐ北側に位置する。北壁は調査区外にあるが, 平面形は隅丸長方形を呈しよう。検出長1.94m, 幅2.15m, 深さ0.42mを測る。埋土は上層が黒灰色土, 下層は黒灰色粘質土と腐植土の互層となっている。南西隅には灰層が認められた。

S K 919 (Fig. 69)

第39-2次調査 4 Tr の西側で検出した下層の土坑で, S K 920に切られ, S D 929と重複する。平面形は偏円形を呈し, 径2.38m, 深さ0.3mを測る。底面は中央がやや窪んでいる。

S K 920 (Fig. 69)

S K 919の南側で, 同土坑を切って位置する。円形を呈するようであるが, 大半が調査区外にあるため詳細は不明。

S K 926 (Fig. 69)

第39-2次調査4 Trの西側に位置し、S D939と重複する。東西幅1.75m、深さ0.6mを測る。南半部が調査区外にあるため詳細は不明。青磁碗・土師器環などが出土している。

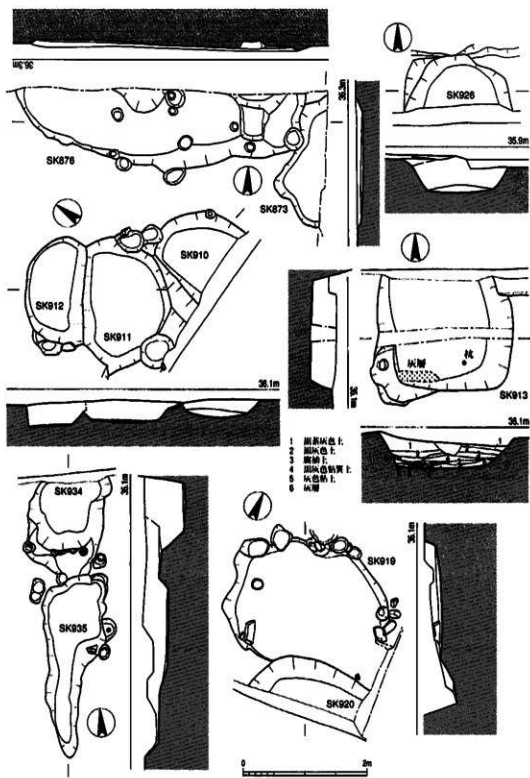


Fig. 69 南辺城土坑実測図② (1/60)

III 寺城の調査

SK927 (Fig. 71, PL. 17-3)

SK919の1.6m北西に位置する下層土坑で、SK928を切っている。平面形は不整形を呈し、東西長2.5m、深さ0.52mを測る。土坑中央に8×13cmの角柱を立てているが、何を意図するのかわからない。埋土には灰層が厚く堆積していた。

SK928 (Fig. 71)

SK927に北東壁を切られて位置する。南北長1.06mの隅丸方形を呈し、深さは0.28mの遺存状況であった。底面は平坦をなす。

SK934 (Fig. 69)

SK927の0.5m西側で検出した下層遺構。土坑の南壁はSK935に切られている。北壁は調査区外にあるが、平面形は楕円形を呈しよう。検出長1.5m、幅1.2m、深さ0.64mを測る。白磁碗が出土した。

SK935 (Fig. 69)

SK934の南に位置し、同土坑を切っている。また、東西溝SD929・939と切合い関係にあるが、前後関係はつかめていない。南北に長い溝状を呈する土坑で、長軸2.95m、短軸1.03m、深さ0.4mを測る。底面は北側に緩く下がっている。

SK943 (Fig. 68)

第39-3次調査1Trの北西隅で検出したが、北壁を確認した程度で詳細は不明。深さは0.2mを測る。

SK945 (Fig. 71)

第39-3次調査2Trの東端で検出したが、大半が調査区外に延びる。南北長2.4m、深さ0.3mを測り、底面はフラットである。

SK946 (Fig. 68)

第39-3次調査2Trの北東隅で検出したが、北壁を確認した程度で詳細は不明。東壁は別土坑と重複する。長方形を呈し、北壁長0.8m、深さは0.25mを測る。

SK952 (Fig. 71)

SK945の2.1m西側に位置する溝状の土坑で、SD947・948に切られる。検出長3.5m、上面幅0.96m、深さ0.2mを測る。底面はフラットである。埋土中には炉壁と考えられる焼土片と炭化物が含まれていた。

SK954 (Fig. 71)

SK952のすぐ西側に位置し、SK958を切り、SK956と重複する。東側がやや長い楕円形を呈し、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.4mを測る。底面は平坦であった。

SK955 (Fig. 71)

SK952の1m南側に位置し、SK956と重複する。大半が調査区外に延びるため詳細は不明。検出長2.2mで、深さは0.4mを測る。

SK956 (Fig. 71)

SK954・955に挟まれる形で位置し、SK958を切っている。不整形を呈し、東西長3.1m、深さ0.6mを測る。埋土は暗灰色土で、炭化物が含まれていた。

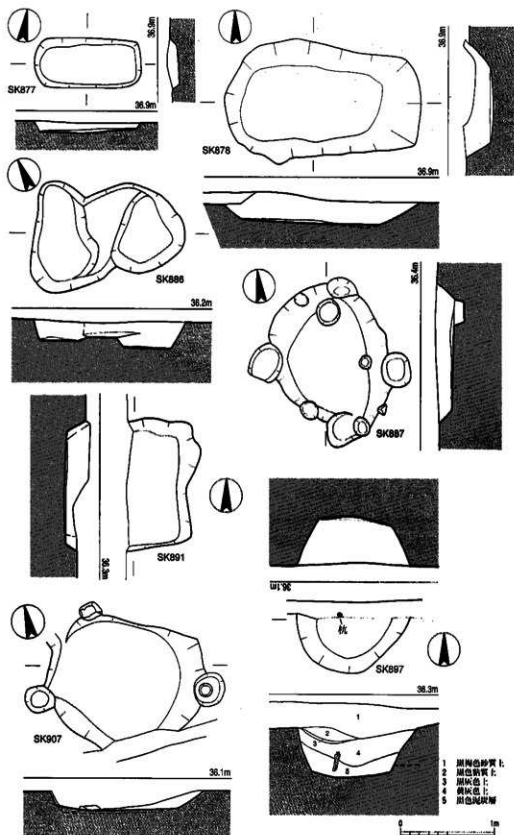


Fig. 70 南辺域土坑実測図③ (1/40)

S K 957 (Fig. 71)

S K 954のすぐ北側に位置する。不整形を呈する土坑で、長軸2.38m、短軸1.76m、深さ0.26

III 寺城の調査

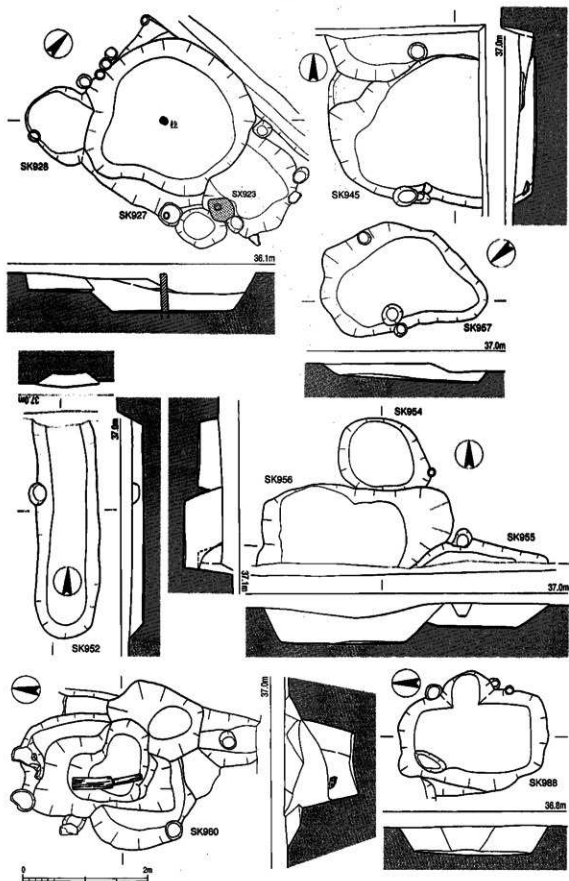


Fig. 71 南辺城土坑実測図④ (1/60)

mを測る。底面は南側にやや下がっている。

S K 958

S K 954・956・957に切られるため規模等詳細。壁高は0.2mを測る。底面は平坦をなす。

S K 960 (Fig. 71)

S K 957の3.5m西側に位置し、S B 950を切っている。上面は土坑が切り合った不整形を呈し、中央部は長軸1.6m、短軸1.3m、深さ1.1mの方形土坑となる。埋土中から長さ65cmの板材が出土したが、板材の長さや穴の大きさからすると井戸にはなりえない。

S K 963 (Fig. 72)

S K 963～984は第39-3次調査 2 Tr の中央部で検出した土坑群で、大小の楕円形土坑が切り合っている。S K 963はS K 966に切られるが、楕円形を呈し、残存長1.94m、短軸1.02mで、壁高は0.13mと著しい削平を受ける。埋土中には礫が多く含まれていた。

S K 964 (Fig. 72)

S K 963のすぐ南側に位置し、S K 967を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.92m、短軸1.4m、深さ0.12mを測る。底面は平坦をなす。

S K 965 (Fig. 72)

土坑群の北端に位置し、S K 966を切る。北半部は調査区外にある。円形を呈し、検出長2.4m、深さ0.3mを測る。土坑の中央には角礫が集積されていた。

角礫の集積

S K 966 (Fig. 72)

S K 965に北東壁を切られて位置し、S K 963・967を切っている。平面形は長円形を呈し、長軸2.15m、短軸1.64m、深さ0.2mを測る。底面は平坦をなす。

S K 967 (Fig. 72)

S K 966に北壁を、S K 964に東壁を、S K 970に南壁を切られるため南北長は1.8mの残存状況である。東西幅は2.04mで、深さは0.2mを測る。

S K 968 (Fig. 72)

S K 966のすぐ西隣に位置する。北壁はS K 971に切られ、南壁はS K 974と重複する。楕円形を呈し、残存長1.8m、東西幅1.33m、深さ0.24mを測る。

S K 970 (Fig. 72)

S K 967の南壁を切って位置するが、南半は調査区外にあるため詳細は不明。東西幅1.56m、深さ0.24mを測る。

S K 971 (Fig. 72)

土坑群の北端に位置し、S K 968・972を切る。北半部は調査区外にある。円形を呈し、検出長1.5m、深さ0.4mを測る。

S K 972 (Fig. 72)

S K 968のすぐ西隣に位置する。北壁はS K 971に切られ、南壁はS K 973に切られる。東西長0.95mの小土坑で、深さは0.3mであった。

S K 973 (Fig. 72)

S K 968のすぐ西隣に位置し、S K 972・974・978を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸3.02m、短軸2.26m、深さ0.55mを測る。土坑群にあっては比較的大きな土坑である。底面

III 寺城の調査

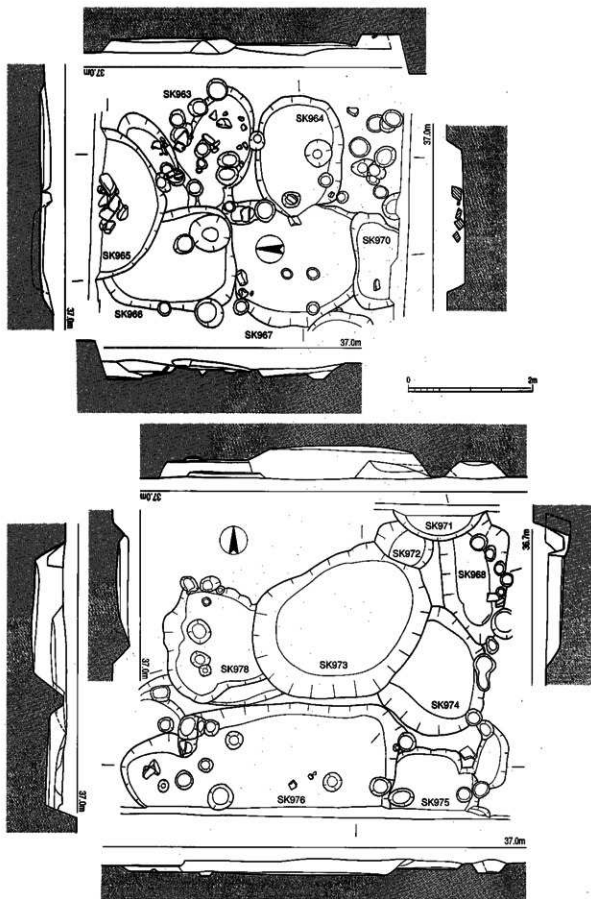


Fig. 72 南辺城土坑実測図⑤ (1/60)

は中央が僅かに下がっている。

SK974 (Fig. 72)

SK973に北西壁を切られて位置し、SK968と重複する。楕円形を呈し、残存長1.44m、東西幅1.8m、深さ0.2mを測る。底面は中央部がやや下がっている。

SK975 (Fig. 72)

SK974のすぐ南側に位置し、西壁をSK976に切られる。また、大半が調査区外にあるため詳細は不明。壁高も10cm程度の遺存状況である。

SK976 (Fig. 72)

SK973のすぐ南側に位置し、SK975を切っている。南壁の大半が調査区外にあるため規模など詳細は不明。東西長4.4mの大きさ。埋土は暗灰色土で、炉壁・焼土が含まれていた。また、完形の土師器丸底坏・白磁碗などが出土している。 炉壁・焼土
の出土

SK978 (Fig. 72)

SK973に東壁を切られて位置する。南北長1.86m、深さ0.26mを測る。

SK980 (Fig. 68)

SK978のすぐ北側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.26m、短軸0.96mで、深さは9cmと削平が著しい。

SK983 (Fig. 73)

SK976の西側に位置し、SB985・SK984に切られ、SB990と重複する。北壁の一部を検出した程度であるが、平面形は円形を呈するか。検出長3.7m、深さ0.15mを測る。

SK984 (Fig. 73)

SK983のすぐ北側に位置し、同土坑を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.7m、短軸1.4m、深さ0.15mを測る。底面はフラットである。

SK988 (Fig. 71)

SK984の2.3m西側に位置し、SB986と重複する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.4m、短軸1.6m、深さ0.46mを測る。底面は平坦をなし、埋土には暗灰色土が堆積していた。

SK989 (Fig. 73)

SK988の0.8m南側に位置し、SB986に切られる。南壁は調査区外にあるが、平面形は隅丸長方形を呈しよう。東西幅1.7mで、壁高は12cmの遺存状況であった。

SK993

SK988の西隣で、同土坑に東壁を切られる。不整形円形の土坑で、東西長5.8m、南北幅2.1m、深さ0.2mを測る。

SK994 (Fig. 73)

SK993のすぐ西側に位置する。不整形を呈し、東西長1.8mで、壁高は10cmと著しい削平を受ける。底面は平坦で、柱穴が数個みられるが、土坑に伴うものではない。

SK999 (Fig. 73)

SK994のすぐ西側に位置する。大半が調査区外にあるが、平面形は方形を呈するか。北壁長3.4mで、壁高は18cmの遺存状況である。また、東壁側には幅0.8mのアラスを有する。底面は中央部が若干窪んでいる。

III 寺域の調査

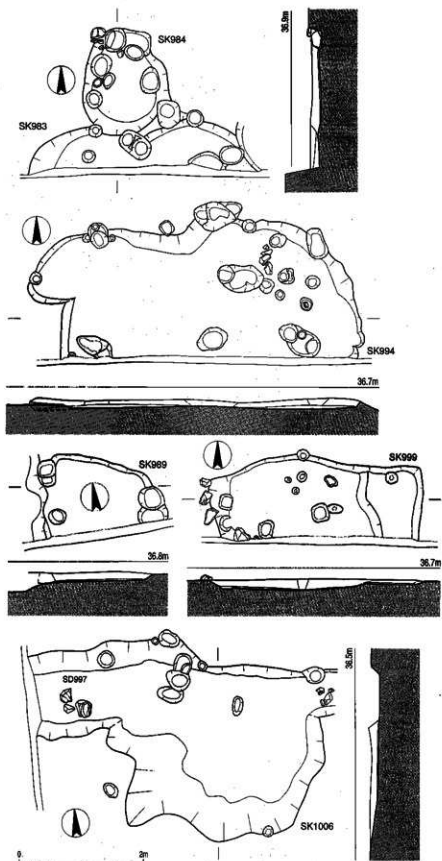


Fig. 73 南辺城土坑実測図⑥ (1/60)

S K 1005 (Fig. 68)

第39-3次調査2Trの西側で検出したが、南壁を確認した程度で詳細は不明。検出幅1.76m、深さ8cmで、隅丸方形を呈するか。

S K 1006 (Fig. 73)

S K 1007のすぐ南に位置し、東西溝S D 997に北壁を切られる。不整形を呈し、東西長3.5m、壁高0.15mを測る。埋土には焼土層が堆積していた。

S K 1007 (Fig. 68)

S K 1005の1m西側に位置するが、当土坑も南壁を確認した程度で規模等詳細は不明。南壁の上層から裸・瓦が出土している。東西幅2.18m、深さ0.2mを測る。

S K 1521 (Fig. 92, PL. 20)

第61次調査区の北側で検出した。長円形を呈すると考えられるが、西側は調査区外にあるため詳細は不明。検出長2.1m、幅1.4m、深さ0.3mで、底面は東側に向かって下がっている。埋土中からは古墳時代の須恵器及び獣形土製品が出土している。

S K 3158 (Fig. 74)

第109次調査区の北東側に位置し、S B 3202と重複する。平面形は円形を呈し、長軸1.6m、短軸1.5m、深さ0.3mを測る。底面は平坦をなす。

S K 3159 (Fig. 74)

S K 3158の6.5m南西側で検出した。平面形は円形を呈し、長軸1.6m、短軸1.55m、深さ0.5mを測る。底面は中央が若干窪んでいる。また、埋土下層から自然木を検出したが、土坑の下に潜るため当土坑とは直接関係はない。

S K 3161 (Fig. 75)

第109次調査区の北東側に位置し、S K 3162と重複する。平面形は楕円形を呈するが、東横は調査区外に延びる。検出長2.1m、東西幅2.2m、深さ0.6mを測る。底面は平坦をなす。

S K 3162 (Fig. 75)

S K 3161に北東横を切られて位置する。楕円形を呈し、長軸2.7m、短軸2.05m、深さ0.5mを測る。底面はフラットである。

S K 3163 (Fig. 75)

S K 3159の1m西に位置し、S K 3164を切っている。楕円形を呈し、長軸2.25m、短軸1.42m、深さ0.4mを測る。底面は平坦で、壁も垂直に立ち上がる。

S K 3164 (Fig. 75)

S K 3163の北西に位置し、同土坑に切られる。偏円形を呈し、長軸1.8m、短軸1.5m、深さ0.38mを測る。

S K 3166 (Fig. 74)

S K 3163の2m南に位置し、S D 3217に切られる。円形を呈し、東西幅1.45m、深さ0.2mを測る。底面は平坦面をなす。

S K 3167 (Fig. 74)

S K 3164の4m北西側に位置し、S A 3206と重複するが、前後関係はつかめていない。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.95m、短軸1.22m、深さ0.28mを測る。底面は平坦であるが、

III 寺域の調査

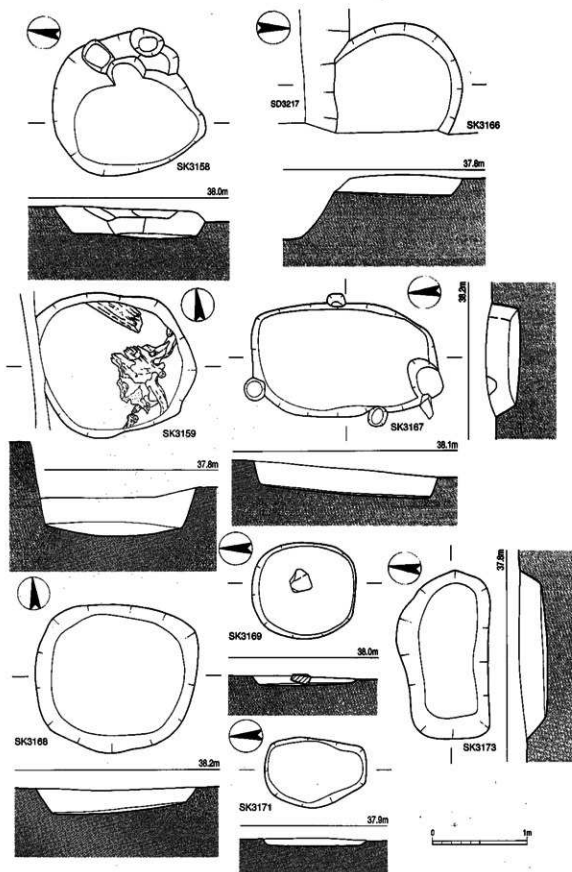


Fig. 74 南辺城土坑実測図⑦ (1/40)

南側に下がっている。

S K 3168 (Fig. 74)

S K 3167の6 m北西側に位置し、S B 3207と重複するが、前後関係は不詳。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.7m、短軸1.58m、深さ0.3mを測る。底面は平坦であるが、西側に下がる。

S K 3169 (Fig. 74)

S K 3167の6.2m西側で検出した。円形を呈し、長軸1.12m、短軸1.03mで、深さは10cmと削平が著しい。底面は平坦で、中央から花崗岩の割石が出土した。

S K 3171 (Fig. 74)

S K 3169の2.5m西側で検出した。不整形円形を呈する小土坑で、長軸1.1m、短軸0.75mで、深さは0.8cmと著しい削平を受ける。

S K 3172 (Fig. 76)

S K 3171のすぐ南側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.7m、短軸1.02m、深さ0.15mで、北壁側に三日月形のテラスを有する。

S K 3173 (Fig. 74)

S K 3172の7 m南側で検出した。不整形長方形を呈する土坑で、長軸1.8m、短軸1.0m、深さ0.32mを測る。底面は平坦である。

S K 3174 (Fig. 75)

第109次調査区の南西部で検出した。隅丸長方形を呈し、長軸4.55m、短軸1.35m、深さ0.25 mを測り、底面はフラットである。

S K 3177 (Fig. 77)

S D 3200の上層で検出した土坑で、掘土には黒灰色粘質土が堆積していた。平面形は不整形長方形を呈し、長軸6.85m、短軸2.6m、深さ0.34mを測る。底面は平坦をなし、西横側に歪なテラスを有する。

S K 3178 (Fig. 76)

第109次調査区の南端中央で検出した。隅丸長方形を呈し、長軸1.5m、短軸1.14m、深さ0.48 mを測り、底面は東側に緩く傾斜している。

S K 3179 (Fig. 76)

S K 3178の1 m北側に位置し、S B 3388と重複する。隅丸方形を呈する土坑で、長軸1.9m、短軸1.82m、深さ0.32mを測る。壁面は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。

S K 3181 (Fig. 76)

S K 3178の1 m北側に位置し、S B 3309と重複する。隅丸長方形を呈する土坑で、長軸1.87 m、短軸1.88m、深さ0.4mを測る。底面は平坦をなす。

S K 3182 (Fig. 76)

第109次調査区の南側に位置し、S B 3297に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸2.95m、短軸0.83m、深さ0.38mを測り、底面は中央部が僅かに窪んでいる。また、西側にテラスを有する。

S K 3183 (Fig. 75)

S K 3166の6.5m南西側に位置し、S B 3318を切っている。平面形は不整形を呈し、長軸

III 寺域の調査

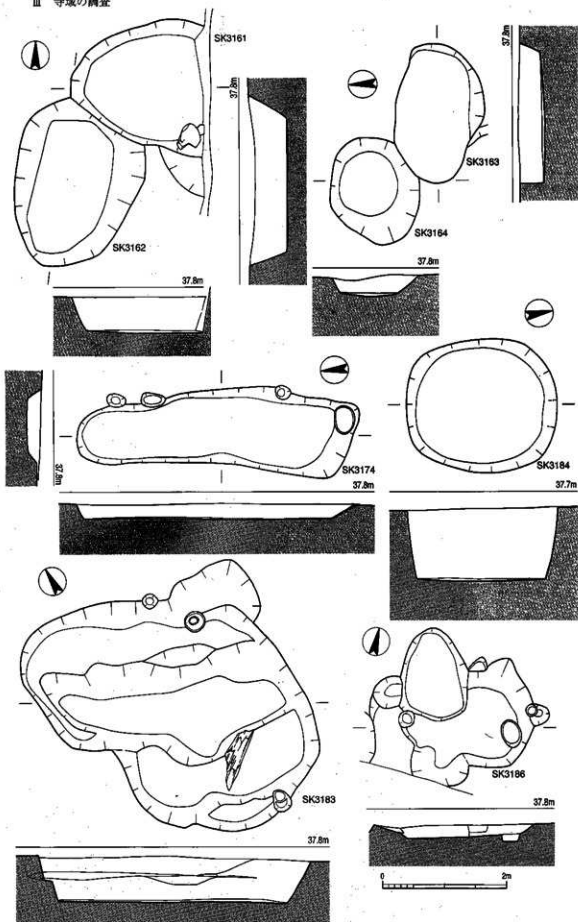


Fig. 75 南辺城土坑実測図③ (1/60)

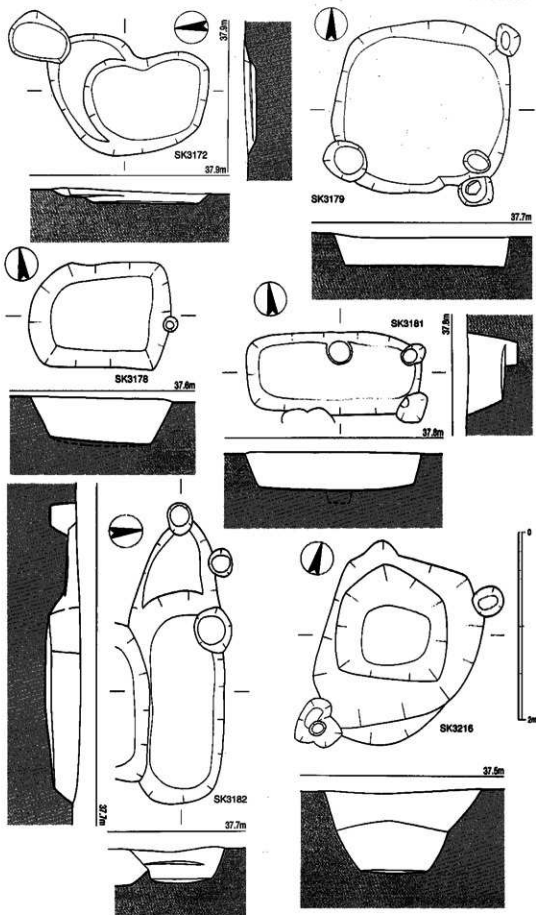


Fig. 76 南边城土坑平面图③ (1/40)

Ⅲ 寺域の調査

5.0m, 短軸3.2m, 深さ0.7mを測る。底面は中央が下がり, 北・南側にテラスを有する。また, 南テラス側からは木片が出土している。

S K 3184 (Fig. 75)

S K 3179東側に位置し, S E 3165・S D 3190に切られる。円形を呈し, 長軸2.43m, 短軸2.12m, 深さ1.2mを測る。

S K 3186 (Fig. 75)

第109次調査区の南側に位置し, S B 3199・3297と重複する。平面形は不整形を呈し, 長軸2.62m, 短軸1.47m, 深さ0.2mを測る。北側は別の土坑と重複している。

S K 3216 (Fig. 76)

S K 3178の3.5m西側に位置し, S B 3361に切られ, 門建物 S B 3359と重複する。隅丸長方形を呈する土坑で, 長軸2.03m, 短軸1.63m, 深さ0.85mを測る。割合深い土坑で, 底面は平垣をなす。

S K 3242 (Fig. 77)

第111次調査区の南東側に位置し, 東西櫓 S A 3212と重複し, S K 3243に切られる。平面形は不整形を呈し, 長軸2.8m, 短軸2.2mで, 深さは0.14mと浅い。底面は中央が若干窪む。

S K 3243 (Fig. 77)

S K 3242の北側で, 当土坑を切って位置する。楕円形を呈する土坑で, 長軸2.32m, 短軸1.78m, 深さ0.25mを測る。底面は中央が若干窪んでいる。

S K 3244

S K 3243の2m北東側に位置し, S B 3364と重複する。平面形は長軸1.26m, 短軸1.12mの隅丸方形を呈するが, 調査時点で下場のレベルを入れ忘れたため図示できない。

S K 3246 (PL. 40-1)

S K 3244の2.5m東側で検出した。平面形は径1.45mの円形を呈する。調査時点で下場のレベルを入れ忘れたため図示できないが, 写真を見ると深そうであり, 或いは井戸となる可能性を有する。

S K 3247 (Fig. 78, PL. 40-2)

S K 3246の2.5m東側で検出した。隅丸方形を呈する土坑で, 長軸2.5m, 短軸1.65mを測る。断面図が完結していないのは, 調査時点で下場のレベルを入れ忘れたためによる。

S K 3248 (Fig. 81)

S K 3247の6.5m西側に位置し, S A 3211に切られる。不整形を呈する土坑で, 長軸2.23m, 短軸1.5m, 深さ0.33mを測る。底面はV字状に下がっている。

S K 3249 (Fig. 79)

第111次調査区の南東側で検出した。平面形は不整形を呈し, 長軸3.66m, 短軸1.82m, 深さ0.32mを測る。両端部に三日月形のテラスを有する。底面は中央が下がっている。

S K 3251 (Fig. 78)

第111次調査区の南端に位置し, S B 3366と重複する。南壁は調査区外にある。平面形は隅丸方形を呈し, 東西幅1.36m, 深さは0.38mで, 底面は東側に下がっている。

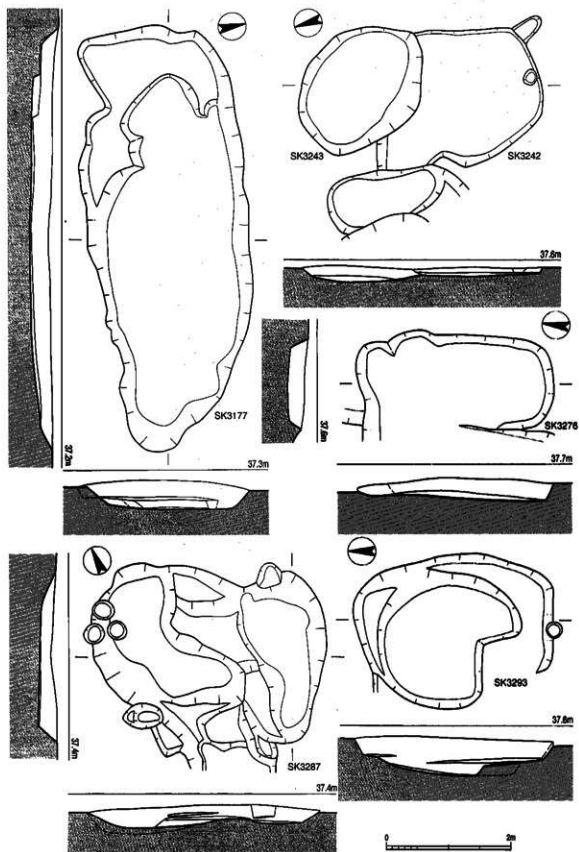


Fig. 77 南边城土坑实测图⑨ (1/60)

Ⅲ 寺域の調査

S K 3252 (Fig. 78)

第111次調査区の北端に位置し、S B 3219に切られる。楕円形を呈し、長軸2.95m、短軸1.56m、深さ0.15mを測る。底面は平坦をなす。

S K 3253 (Fig. 79)

S K 3252の1m西側に位置し、S B 3199と重複する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.2m、短軸1.6m、深さ0.3mを測る。底面は平坦をなす。

S K 3254 (Fig. 78)

S K 3252の2m南西側で検出した。偏円形を呈する土坑で、長軸1.4m、短軸1.18mで、深さは8cmと削平が著しい。底面は平坦をなす。

S K 3256 (Fig. 78)

S K 3254の1.5m南西側で検出した。不整形を呈し、長軸2.7m、短軸2.1mで、深さ0.16mを測る。底面は平坦である。

S K 3257 (Fig. 78)

S K 3254の0.7m西側に位置し、南北溝S D 3218に切られる。隅丸方形を呈し、長軸2.35m、短軸1.65m、深さ0.46mを測る。底面は中央が窪み、南壁側に幅0.4mのテラスを有する。

S K 3258 (Fig. 80)

第111次調査区の南西側に位置し、S B 3306と重複する。平面形は長円形を呈し、長軸2.3m、短軸1.65m、深さ0.45mを測る。底面は平坦であるが、東側に傾斜している。

S K 3259 (Fig. 80, PL. 40-3)

S K 3258の5m南側に位置し、S D 3241に切られる。偏円形を呈し、長軸2.13m、短軸1.84m、深さ0.88mを測る。底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。

S K 3261 (Fig. 80)

S K 3259の3.5m西側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.35m、深さ0.75mを測る。底面は平坦をなし、壁面は垂直気味に立ち上がる。

S K 3262 (Fig. 61)

第111次調査区の南西側に位置し、S E 3265・S K 3268に切られる。不整形を呈し、土坑二つが合わさった形態を呈し、残存長2.6m、深さ0.3mを測る。底面は平坦であるが、西側に下がっている。

S K 3263 (Fig. 80)

第111次調査区の南西側に位置し、西壁は調査区外に延びる。楕円形を呈し、検出長1.95m、幅1.48m、深さ0.6mを測る。底面は中央が窪んでいる。埋土中から木が出土している。

S K 3264 (Fig. 80, PL. 37-2・41-1)

第111次調査区の南西側に位置し、S B 3377と重複する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.3m、短軸1.15m、深さ1.13mを測る。埋土中位から木製の椀が出土している。底面は平坦で、壁面は直線的に立ち上がる。

S K 3266 (Fig. 79, PL. 41-2)

第111次調査区の南西隅に位置し、S B 3378と重複する。平面形は楕円形を呈し、長軸2.76m、短軸2.24m、深さ0.7mを測る。底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。

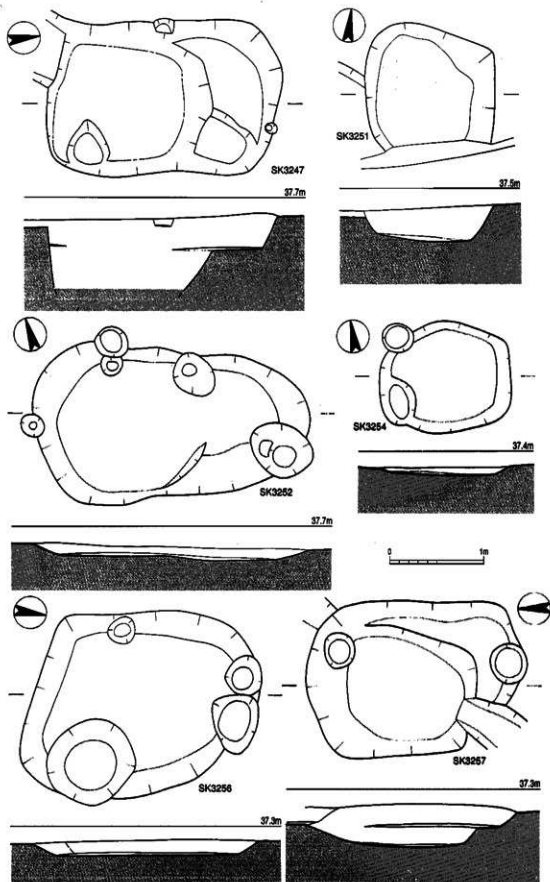


Fig. 78 南边城土坑实例图① (1/40)

Ⅲ 寺域の調査

S K 3267 (Fig. 79)

第111次調査区の南西隅に位置し、東半部は調査区外に延びる。平面形は楕円形を呈し、南北長3.16mを測る。底面は中央がやや窪む。

S K 3268 (Fig. 61, PL. 41-3)

S K 3262を切り、その西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.76m、短軸1.26m、深さ0.5mを測る。埋土下位には焼けた石や平瓦片がみられた。

S K 3269 (Fig. 81)

第111次調査区の東側に位置し、S A 3212・S B 3365と重複する。偏円形を呈し、長軸1.55m、短軸1.33m、深さ1.2mを測る。断面形状は尖底をなす。

S K 3271 (PL. 42-1)

S K 3269の2.5m南側で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.85m、短軸1.42mを測る。調査時点でレベルを入れ忘れたので図示できない。

S K 3272 (Fig. 81)

第111次調査区の北側に位置し、S B 3363と重複する。円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.98m、深さ0.27mを測る。底面は中央がやや窪む。

S K 3273 (Fig. 79, PL. 42-2)

S K 3177の1m西側に位置する上層遺構。平面形は楕円形を呈し、長軸3.36m、短軸3.0m、深さ0.4mを測る。東壁には0.2~0.4m大の石を積んでおり、底面中央には径0.9m、深さ0.45mの穴を有する。形態的には井戸状であるが、中央土坑が浅すぎるきらいがある。

S K 3274 (Fig. 81)

第109次調査区の南西で、S B 3349の西隣に位置する。長方形を呈し、長軸1.86m、短軸1.02m、深さ0.28mを測る。底面は平坦をなす。

S K 3276 (Fig. 77)

第111次調査区の南東側に位置し、S A 3212と重複する。隅丸方形を呈し、長軸3.18m、短軸1.48m、深さ0.3mを測る。底面は平坦であるが、南側に下がっている。

S K 3277 (Fig. 81)

S K 3276の東隣に位置し、S A 3212と重複する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.9m、短軸0.95m、深さ0.27mを測る。底面は平坦であるが、北側に下がる。

S K 3278 (Fig. 79)

S K 3247のすぐ北側に位置する。楕円形を呈し、長軸2.48m、短軸1.56m、深さ0.43mを測る。底面は平坦をなす。

S K 3279 (Fig. 79)

S K 3278の東隣に位置する。偏円形を呈し、長軸1.42m、短軸1.36mで、深さは0.15mと浅い。底面は平坦をなす。

S K 3281 (Fig. 81)

S K 3276の西隣で検出した。西壁はS B 3365に切られる。隅丸長方形を呈し、長軸2.95m、短軸1.16m、深さ0.28mを測る。底面は平坦をなす。

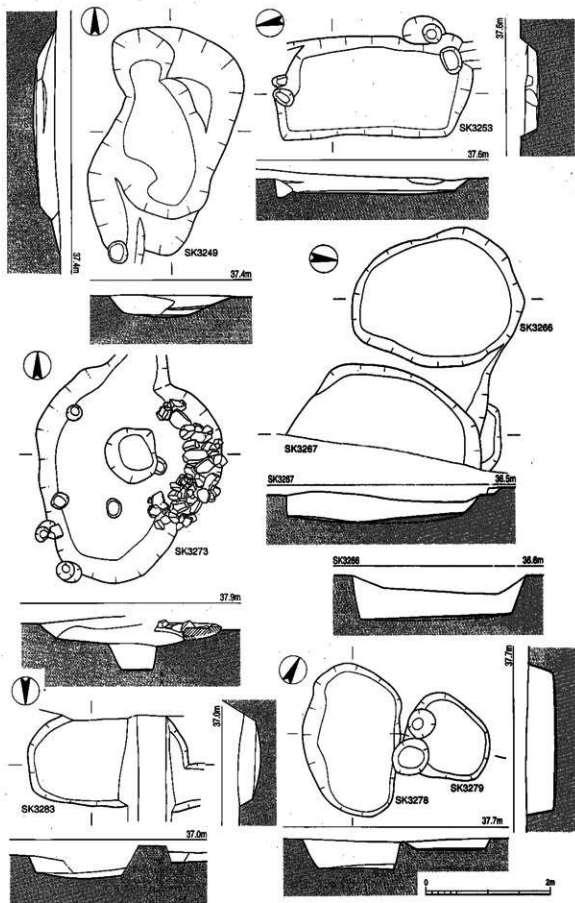


Fig. 79 南边城土坑实测图⑫ (1/60)

Ⅲ 寺域の調査

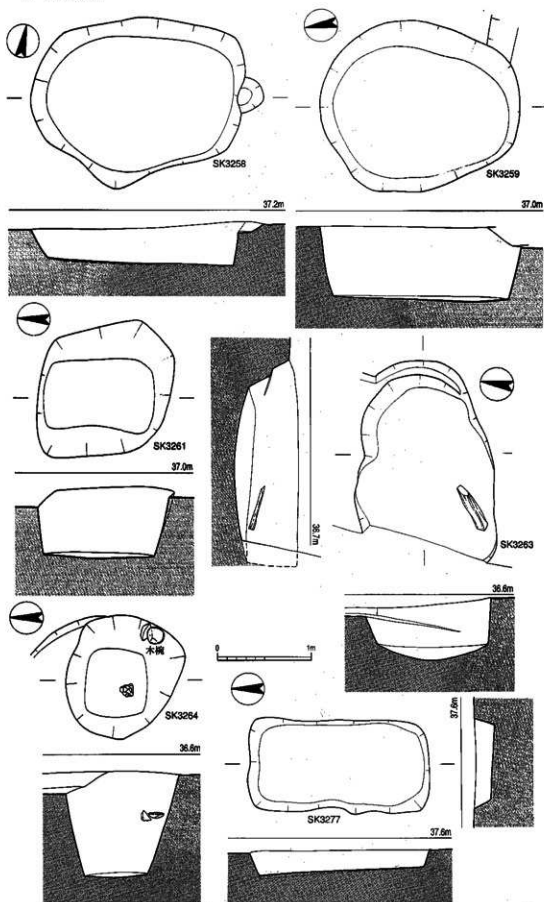


Fig. 80 南辺城土坑実測図③ (1/40)

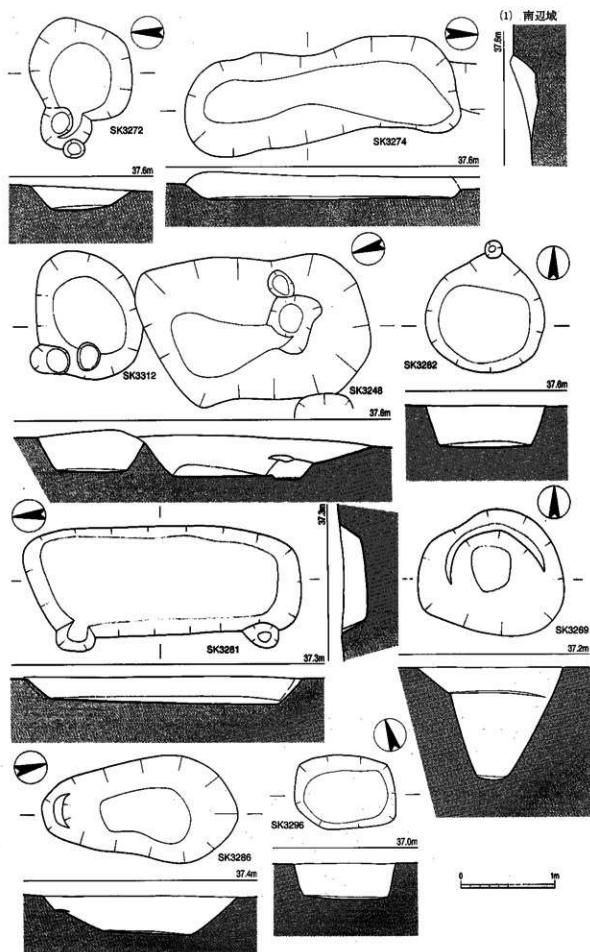


Fig. 81 南辺城土坑突測図① (1/40)

III 寺域の調査

SK3282 (Fig.81)

SK3243の東隣で検出した。円形を呈し、長軸1.26m、短軸1.12m、深さ0.43mを測る。底面は平坦をなす。

SK3283 (Fig.79)

第111次調査区の南端中央に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸2.56m、短軸1.43m、深さ0.28mを測る。底面は中央が窪んでいる。

SK3284 (Fig.82)

第111次調査区の南側に位置し、SB3306切られる。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.82m、短軸1.76m、深さ0.33mを測る。底面は中央が窪んでいる。

SK3286 (Fig.81)

第111次調査区の中程で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸2.05m、短軸1.15m、深さ0.43mを測る。底面は北側に若干下がっており、南側に僅かなテラスを有する。

SK3287 (Fig.77)

第111次調査区の中程に位置し、SA3195・3212と重複し、SD3190・3232に切られる。不整形を呈し、長軸3.75m、短軸2.48m、深さ0.32mを測る。底面は凹凸が著しい。

SK3288 (Fig.82)

SK3259の2m南で検出した小土坑。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.34m、短軸1.26m、深さ0.28mを測る。

SK3292 (Fig.82)

SK3256の0.5m南側に位置し、SA3197と重複する。不整形を呈し、長軸3.2m、短軸2.5m、深さ0.6mを測る。底面は中央が窪み、北・南側にテラスを有する。

SK3293 (Fig.77)

SK3293の南側に位置し、SA3197、SB3358と重複する。隅丸方形を呈し、長軸2.33m、短軸1.1m、深さ0.38mを測る。底面は中央が若干窪む。

SK3294 (Fig.82)

SD3300底面で検出した一連の土坑で、一辺0.9~2.2mの方形土坑8個が連続した形態をなす。SD3200は排水溝とするより、土取りのために掘削した土坑が結果的に連続したものとみられる。

SK3295 (Fig.83, PL.42-3)

第111次調査区の南端中央で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸4.05m、短軸2.6m、深さ1.15mを測る。二段に掘り込まれ、下段径2.5mで、断面は逆台形を呈する。下段土坑の縁に沿って木杭が6本程打ち込まれているが、倒れた状態で出土した。杭は長さ100cm、径10cm程の大きさで、先端を尖らせている。埋土中からは多く銅型片が出土しており、「南无□□」の墨書がある卒塔婆も発見された。なお、当土坑の西側には銅型を含む落込SX3305があり、付近に鑄造工房が存在するものとみられる。

SK3296 (Fig.81)

第111次調査区の西端に位置し、SD3238に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.09m、短軸0.78m、深さ0.4mを測る。

卒塔婆が出土

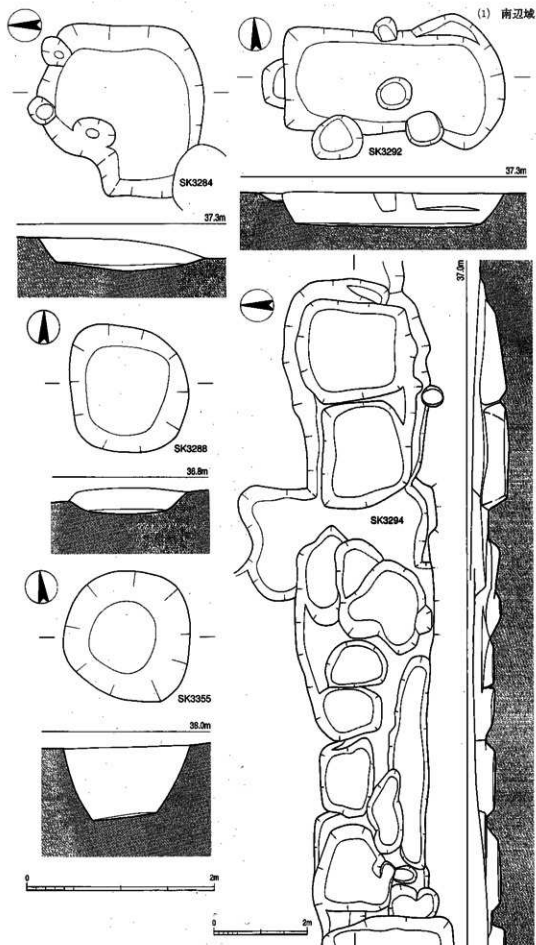


Fig. 82 南边城土坑实测图⑤ (1/40 · 1/80)

Ⅲ 寺域の調査

S K 3312 (Fig. 81)

S K 3248のすぐ北側に壁を接して位置する。円形を呈し、長軸1.42m、短軸1.1m、深さ0.4mを測る。断面形は逆台形をなす。

S K 3319 (Fig. 83)

S K 3295の4m東側に位置し、落込S X 3313と重複する。東半部は調査区外にあるが、平面形は楕円形を呈し、長軸3.88m、深さ0.7mを測る。北西側には扇形のテラスを有する。

S K 3355 (Fig. 82)

第115次調査北区の南東側に位置する。円形を呈し、長軸1.46m、短軸1.4m、深さ0.75mを測る。断面形状は逆台形を呈する。

S K 3373 (Fig. 83)

第117次調査区の南東側で検出した。一辺2.3mの隅丸方形を呈し、深さは0.4mを測る。南側には浅い土坑があり、重複している。

S K 3379 (Fig. 83)

第117次調査区の北東隅に位置し、S B 3423・3424と重複し、井戸S E 3370に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、長軸3.9m、短軸2.8m、深さ0.3mを測る。底面は平坦で、東西両側にテラスを有する。埋土中には多量の焼土と人頭大の石が投棄されていた。

S K 3391 (Fig. 84)

第117次調査区の東側に位置し、S K 3392と重複する。平面形は不整形を呈し、長軸1.58m、短軸1.22m、深さ0.55mを測る。

S K 3392 (Fig. 84)

S K 3391の西隣に位置する。不整形を呈し、長軸1.15m、短軸1.02m、深さ0.48mを測る。断面形状は摺鉢状を呈する。

S K 3399 (Fig. 84)

第117次調査区の東側に位置し、S K 3409、S B 3422を切る。平面形は隅丸方形を呈し、長軸2.25m、短軸1.26m、深さ3.3mを測る。底面は平坦で、南側に三日月形のテラスを有する。

S K 3401 (Fig. 84)

第117次調査区の南側で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.18m、短軸1.16m、深さ0.96mを測る。埋土は泥炭層の単一層で、完形の土師器・白磁が一括出土した。

S K 3404 (Fig. 84)

第117次調査区の東側に位置し、S K 3409に切られる。径0.9mの円形を呈し、深さは0.8mを測る。底部穿孔土師器が数点出土した。

S K 3409 (Fig. 84)

第117次調査区の東側に位置し、S K 3411・3413・3399に切られ、S K 3404を切っている。平面形は長方形を呈し、残存長5.22m、幅3.66m、深さ0.86mを測る。埋土は黄褐色土ブロックが混入した黒灰色土で、人為的に埋められている。

S K 3411 (Fig. 84)

第117次調査区の東側に位置し、S E 3375・S K 3409を切る。隅丸方形を呈し、長軸1.36m、短軸1.16mで、深さは5cmと遺存状態は悪い。底面中央には焼土・炭がみられた。

人為的な埋
め直し

(1) 南边城

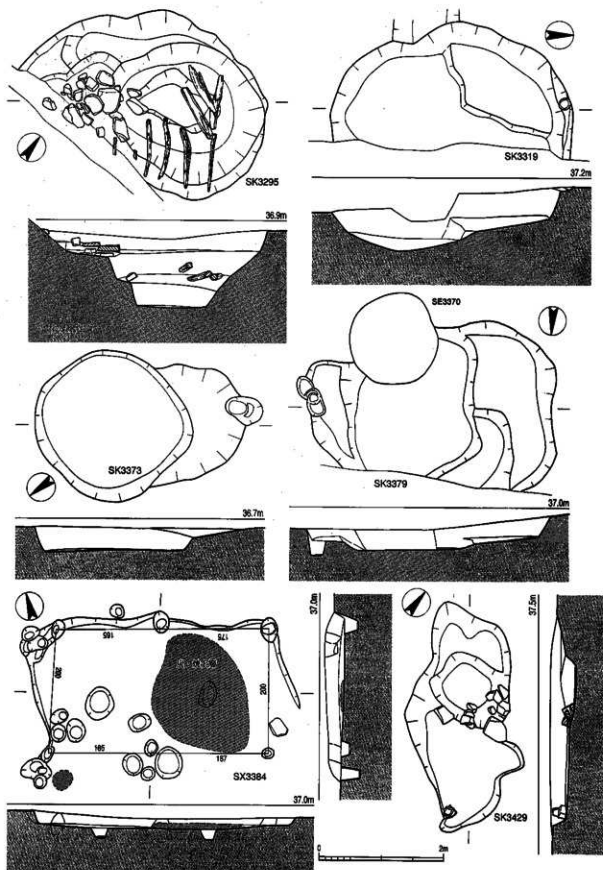


Fig. 83 南边城土坑实测图② (1/60)

Ⅲ 寺域の調査

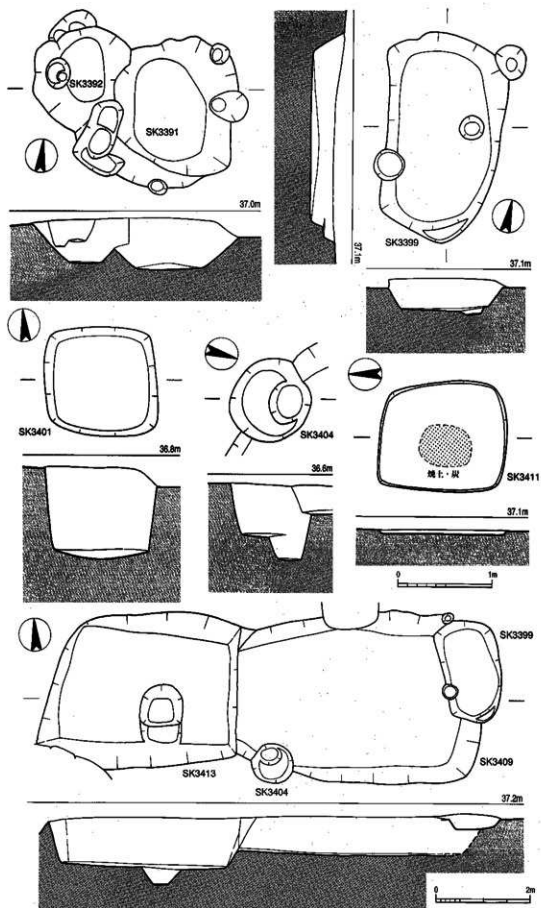


Fig.84 南辺城土坑実測図① (1/40・1/80)

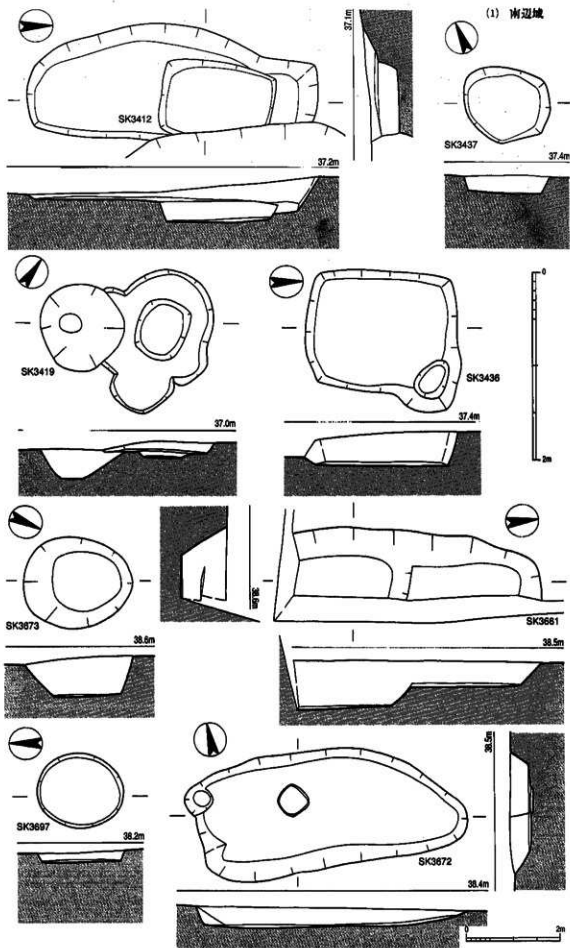


Fig. 85 南边城土坑实测图⑩ (1/40 · 1/80)

Ⅲ 寺域の調査

S K 3412 (Fig. 85)

第117次調査区の中程に位置し、S E 3375に切られる。隅丸長方形を呈し、長軸3.1m、短軸1.23m、深さは0.35mを測る。底面の北壁寄りに方形土坑が掘り込まれている。

S K 3413 (Fig. 84)

第117次調査区の中程に位置し、S K 3409を切り、S E 3395・S D 3400に切られる。長方形を呈し、長軸4.1m、短軸3.3m、深さ1.1mを測る。底面の南壁寄りには0.9m程の穴が掘削されている。埋土は一気に埋め戻された状況を呈する。

S K 3419 (Fig. 85)

S K 3401の1m北側に位置する。柱穴状の小土坑で、径0.9m、深さ0.3mを測る。断面形状は摺鉢形をなす。

S K 3429 (Fig. 83)

第117次調査区の北西で検出した。不整形を呈する土坑で、長軸3.7m、短軸1.68m、深さ0.4mを測る。底面中央が窪み、北西側にテラスを有する。埋土中には角礫が投げ込まれており、石鱗片も出土している。

S K 3436 (Fig. 85)

第117次調査区の南西隅で検出した。方形を呈し、長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.38mを測る。底面は平坦面をなす。

S K 3437 (Fig. 85)

S K 3436の2m北東側に位置する小土坑で、S D 3432と重複する。円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。

S K 3438 (Fig. 66)

第117次調査区の西端で検出した。S K 3438・3439・3442は連続する土坑で、S E 3425に切られる。三つの土坑の中では最も古い。残存長2.3m、深さ0.4mを測るが、東壁の一部を残す程度で、詳細は不明。

S K 3439 (Fig. 66)

S K 3438の西隣で、同土坑を切り、S E 3425に切られる。東西幅2.3m、深さ0.85mを測るが、南壁の一部を残す程度で詳細は不明。

S K 3441 (Fig. 86)

第117次調査区の西端部に位置し、S E 3425・S K 3442に切られている。不整形を呈し、東西幅は3.4m、深さ0.5mを測り、底面は中央が下がっている。

S K 3442 (Fig. 66・86)

S K 3438・3439の北側で、同土坑を切り、S E 3425に切られる。残存長2.1m、東西幅2.46m、深さ0.6mで、底面中央には円形の小土坑(径0.9m、深さ0.5m)が掘られている。

S K 3447 (Fig. 86)

第117次調査区の北端部に位置し、S D 3400Aに切られている。西壁を残す程度で詳細は不明。土器の出土があったことから土坑として報告した。

S K 3661 (Fig. 85)

第122次調査区の南東隅に位置し、大半が調査区外にあるため詳細は不明。検出長2.63mで、

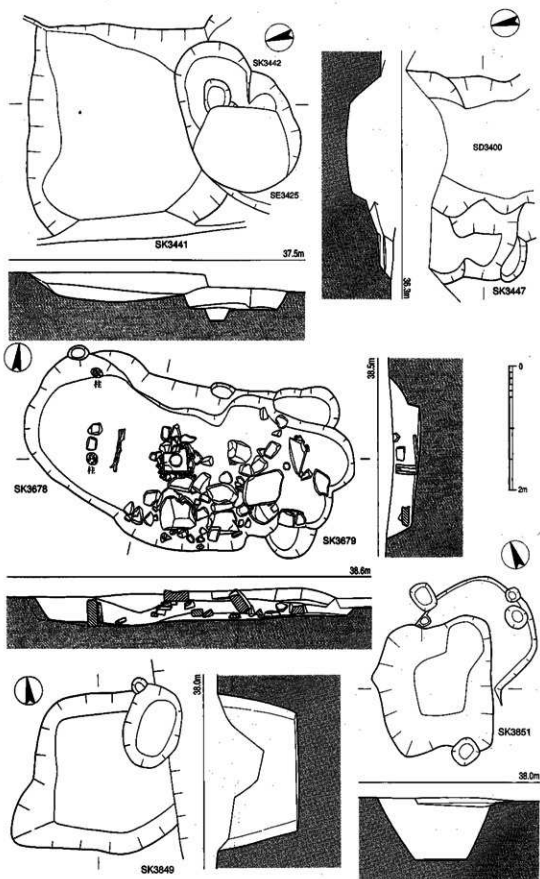


Fig. 86 南边城土坑实测图⑩ (1/60)

Ⅲ 寺域の調査

深さ0.5mを測る。北側にはテラスを有する。

S K 3672 (Fig. 85)

第122次調査区の南側に位置し、S B3660を切る。平面形は長円形を呈し、長軸5.78m、短軸2.53m、深さ0.46mを測る。底面は中央に下がっている。

S K 3673 (Fig. 85)

第122次調査区の北側に位置し、S B3660B掘方に切られる。平面形は円形を呈し、長軸1.15m、短軸0.98m、深さ0.43mを測る。

S K 3674 (Fig. 87)

第122次調査区の西端に位置し、S B3670と重複する。平面形は偏円形を呈し、長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.45mを測る。底面には柱が遺存していたが、対になる土坑は存在せず、柱掘方ではない。

S K 3676 (Fig. 67)

S E3690に東半部を切られるため詳細は不明。残存長1.05mで、深さは15cmの遺存状態。底面は平坦を呈するようである。

S K 3677 (Fig. 87, PL. 59-3)

井戸S E3680の最終埋没過程で掘り込まれている。隅丸方形を呈し、一辺2.2m、深さ0.7mを測る。下部から葦の縁木が出土している。また、南側に見える木柱は井戸枠の支柱である。

S K 3678 (Fig. 86)

第122次調査区の北西側に位置し、東壁をS K3679に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、長軸2.34m、深さ0.4mを測る。土坑内に木柱が2本あるが、土坑に伴うものかは不明。

S K 3679 (Fig. 86)

S K3678の東で、同遺構を切って位置する。平面形は不整形を呈し、S K3678を含めた長さは5.3m、幅2.7mを測る。埴土中には多量の自然石・瓦片が含まれており、中央部には五輪塔の地輪が据わった状態で確認された。

S K 3697 (Fig. 85)

S K3677の1m南東側に位置する小土坑。円形を呈し、長径0.93m、短径0.8mで、深さ10cmを測る。底面は平坦をなす。

S K 3848 (Fig. 87)

第130次調査区の東側に位置する下層遺構で、S B3862下部で検出した。楕円形を呈し、長軸1.75m、短軸1.35m、深さ0.9mを測る。底部は中央に下がっており、底面から自然木が出土した。北壁側と東壁にテラスを有する。

S K 3849 (Fig. 86)

S K3848の西側に位置する下層遺構で、S B3862・S D3842に切られる。平面形は不整形を呈し、南北長2.6m、深さ1.3mを測る。底面は平坦をなす。

S K 3851 (Fig. 86)

S K3848の1m南に位置し、平面形は隅丸方形を呈する。長軸2.05m、短軸1.8m、深さ1.05mを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈する。

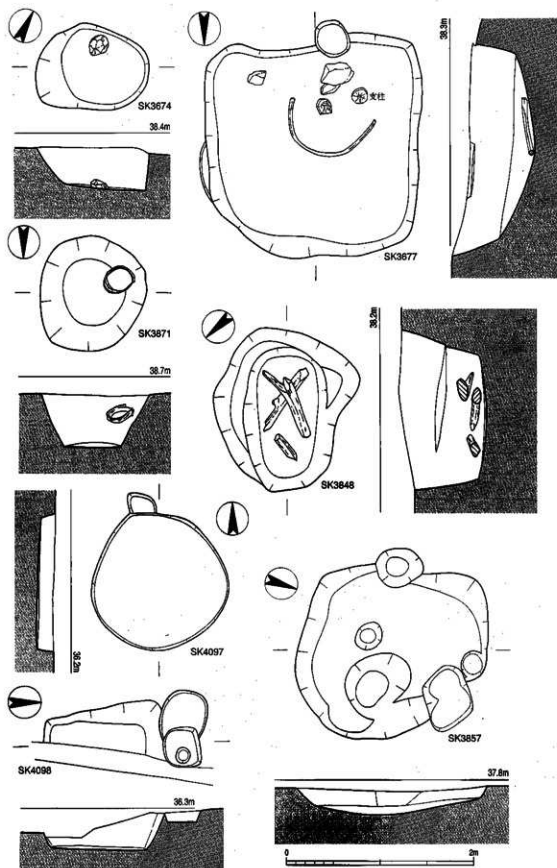


Fig. 87 南边城土坑实例图② (1/40)

Ⅲ 寺域の調査

S K 3853 (Fig. 88, PL. 66-3)

第130次調査区の北西側で検出した下層遺構で、採土穴 S X 3856 に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸3.9m、短軸3.4m、深さ0.84mを測る。底面はほぼ平坦である。

S K 3857 (Fig. 87)

S K 3851 の2 m西側に位置し、S B 3862・3876 と重複する。不整形円形を呈し、長軸2.24m、短軸1.85mで、深さは25cmと削平を受ける。

S K 3863

第130次調査区の南西隅に位置する。S D 3840 に切り込むもので、プランを明確にしえなかった。土師器・陶磁器・動物形燵台などが出土している。

S K 3871 (Fig. 87)

第130次調査区の南西に位置する上層遺構。円形を呈し、径1.2m、深さ0.56mを測る。畑土上層から曲物が出土している。

S K 4097 (Fig. 87, PL. 68)

第154次調査区の中央部で検出した。径1.45mの円形を呈し、深さは15cmの遺存状況であった。底面は平坦をなす。

S K 4098 (Fig. 87, PL.)

第154次調査区の東壁中央に位置し、大半が調査区外にある。西壁長1.25m、深さ0.4mを測る。底面はフラットである。

(小田)

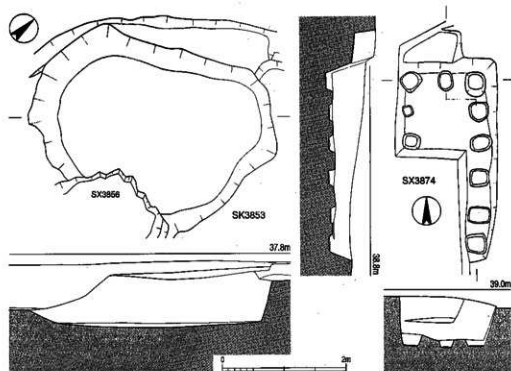


Fig. 88 土坑 S K 3853, 防空壕 S X 3874 実測図 (1/60)

6) 鋳造関連遺構

S X 525 (Fig. 89, PL. 10)

第28次調査区の北西隅で検出したが、大半が調査区外に延びる。方形の基壇状を呈し、南辺には10~30cm大の花崗岩割石を並べており、石積は2段遺存する。また、東辺にも割石を並べているが、南側は擾乱が著しい。基壇は黒茶灰色土・茶灰色砂質土・暗茶灰色粘質土を積んでおり、現状で南辺長5.4m、東辺長4.02mを測る。上面には保土穴S X 527があり、銅滓が出土している。この面には焼土・炭層がみられることから鋳造関連の遺構と考えられる。

鋳造関連

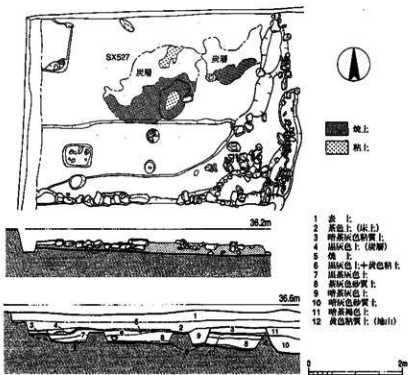


Fig. 89 石組区画 S X 525実測図 (1/80)

S X 527 (Fig. 89)

S X 525の上面で検出した保土穴で、50×90cmの大きさを測る。壁面は強い火熱により赤変しており、上面には焼土・炭層が堆積している。また、堀土中から銅滓が出土した。

S X 901 (Fig. 90)

第39-2次4 Tr 上層の東側で検出した保土穴である。掘方は長さ63cm、幅48cm、深さ20cmの楕円形を呈し、

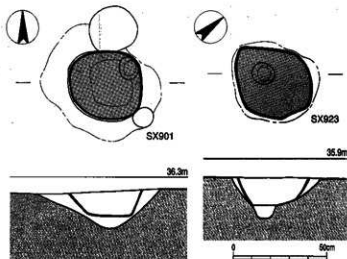


Fig. 90 保土穴 S X 901・923実測図 (1/20)

Ⅲ 寺域の調査

掘方内に黄褐色粘土を詰めた後、35×40cmの穴を掘り込んでいる。壁面は強い火熱を受ける。

S X 923 (Fig. 90)

当遺構も第39-2次4 Tr 上層の西側で検出した保土穴である。構築方法はS X 901と同じく、径45×50cm、深さ15cmの掘方壁面に黄褐色粘土を貼付している。壁面は強い火熱を受け、厚さ1cm余りが赤化していた。

S X 3384 (Fig. 83)

第117次調査区の東側で検出した堅穴遺構で、内部に柱穴を有する。削平により南壁を失うが、平面形は隅丸長方形を呈しよう。長軸4.0mで、短軸は柱穴との関係から2.4m程になるも

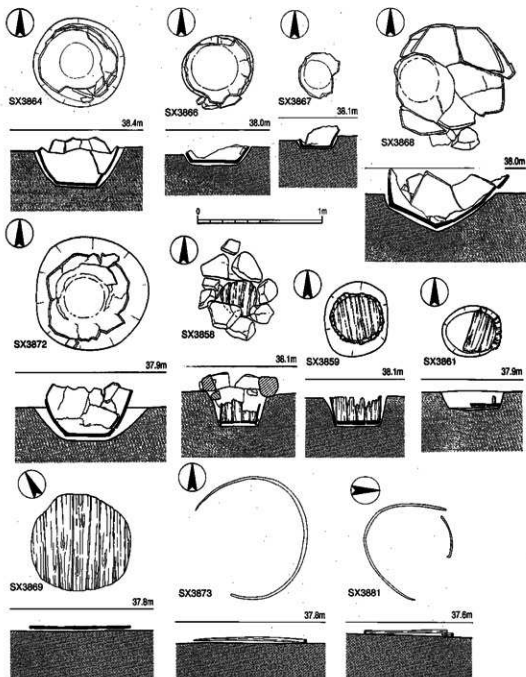


Fig. 91 掘方・掘坑実測図 (1/30)

のと思われる。竪穴内部には乗行1間(2m)×桁行2間(3.52m)規模で、径0.2~0.3m、深さ0.1~0.15m大の柱穴がある。床面は平坦で、東半部には炭・焼土が厚く堆積していた。形態的に金属製品工房と考えられる。(小田)

7) 埋甕・埋桶

埋甕・埋桶は第130次調査西部で検出した上層遺構で、床土除去後に検出した。何れも後世の削平により上半部を失う。埋甕は土師質甕を埋置したもので、埋桶は木桶を埋置したものである。用途としてはトイレ遺構、水溜施設などが考えられよう。

便所遺構?

S X 3858 (Fig. 91)

小型の埋桶で、調査区の中央で検出した。掘方上部に石組を行い、下部に桶を掘える構造をなす。桶は径29cm、残高18cmの遺存状況で、底板は4枚。石積は2段数える。

S X 3859 (Fig. 91)

小型の埋桶で、S X 3858の2m北西で検出した。掘方径50cmで、桶は径40cm、残高22cmを測る。桶側は板材を14枚使用する。底板は4枚である。

S X 3861 (Fig. 91)

小型の埋桶で、S X 3859の2.8m南西側で検出した。掘方は楕円形を呈し、径50cm。桶は板材を欠損するが、径40cm程になろう。桶側の板材と底板2枚が残る程度であった。

S X 3864 (Fig. 91, PL. 67-1)

中型の埋甕で、調査区の北西部に位置する。掘方径70cm、甕の残高は37cmを測る。底面は水平に近いが、東側に向かって僅かに傾斜している。

S X 3866 (Fig. 91)

小型の埋甕で、S X 3864の1.6m南に位置する。掘方径56cmで、甕は著しい削平により残存高14cmに過ぎない。底面は水平をなす。

S X 3867 (Fig. 91, PL. 67-2)

小型の埋甕で、S X 3866の5.3m南に位置する。掘方径35cm、甕の残高は17cm。底面は水平。

S X 3868 (Fig. 91, PL. 67-3)

大型の埋甕で、S X 3867の2m南西で検出した。掘方径90cm、甕の残高45cmであった。甕を東側に傾けて埋置している。甕の内部には漆喰状の膠着物がみられた。

S X 3869 (Fig. 91)

埋甕S X 3868の西隣に並存する。大型の埋桶で、桶の底板のみ残存していた。底板径は80cmで、8枚の板材を使用している。

S X 3872 (Fig. 91, PL. 67-4)

中型の埋甕で、S X 3871の2.5m南西に位置する。掘方径90cm、甕の残高40cmを測る。

S X 3873 (Fig. 91)

S X 3864の西3.5mに位置する。タガのみ遺存していたが、埋桶と考えられる。タガの径は95cmを測る。

S X 3881 (Fig. 91)

S X 3866の50cm南側で検出した。当遺構もタガのみの遺存であったが、埋桶であろう。(小田)

Ⅲ 寺域の調査

8) 落込

S X 903

第32-2次調査4 Tr 東側で検出した。溝状の落込で、東壁はS D896と接続する。長さ5.2m、幅1.7m、深さ0.3mを測る。

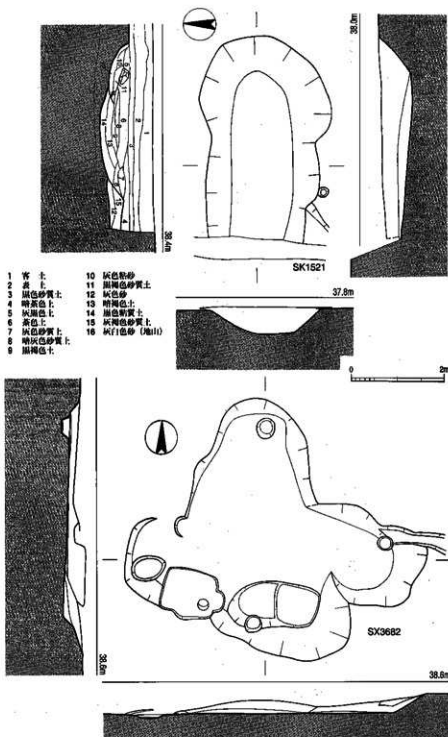


Fig. 92 土坑SK1521, 落込SX3682実測図 (1/80)

S X 3210

第109次調査区の北東部で検出した。不整形の落込で、明瞭な掘方を呈するものではない。底面は北側に向かって下がり、深さは0.2mを測る。堀土は黒色土であり、南西隅の堀土中から金銅製如來立像が出土した。

金銅仏の出土

S X 3305

第111次調査区の南西部で検出した。溝状を呈し、堀土上面には焼土・炭を多く含む層が4×9mの範囲で広がっており、菩薩形頭部・錫杖などの鋳型が出土した。多数の鋳型を出土したS K 3295の西に接する。こうしたことから、この近辺に鋳造遺構が想定される。

仏具類鋳型の出土

S X 3310

第111次調査区の南西部で検出した不整形の落込で、S K 3268と切り合う。西側は調査区外に延びている。深さは10~20cmと浅い。

S X 3313

第111次調査区の南端部で検出した不整形の落込で、南側に下がっている。現状で南北2.1×東西7.3m程の大きさ。

S X 3682 (Fig. 92)

第122次調査区の南東部で検出した不整形の落込で、S B 3660A・Bを切る。南北長5.5m、東西長6.4mで、最も深い箇所0.4mを測る。

S X 3841 (PL. 65-1)

第130次調査区北西隅で検出した下層遺構で、東西幅5.2m、深さ1.2m、長さ18mを確認した。堀土下層には灰色砂、最下層には腐植土が堆積しており、自然流路と考えられる。堀土中自然流路には古墳時代後期の須恵器が包含されていた。(小皿)

9) その他の遺構

石積

S X 092 (Fig. 24, PL. 5-2)

第5次調査区南西隅部で、築地S A 091と平行して検出した。20~50cm大の花崗岩自然石を50cm程積み上げたもので、南側を面として揃えている。この石積は第I層を切込んで構築しており、築地より後出するものである。

通路

S X 487 (Fig. 93, PL. 9-4)

第23次調査区下層の北西側で検出した礫敷遺構で、S E 480に切られる。北側は調査区外に延び、検出長13.1m、幅1.4mを測り、南端で西側に屈曲する。溝内には5~15cm大の礫を密に敷き詰めており、通路遺構と考えられる。

礫敷通路

S X 917 (PL. 18-2)

第39-2次4 Tr 上層の西側で検出した瓦敷遺構である。南北両側は調査区外に延びる。10cmの瓦片を1.2m幅で敷いているが、疎らであった。通路遺構になるか。

石列

S X 3341

III 寺域の調査

第115次調査南区の南西側で検出した。南北方向の石列で、25~33cm大の花崗岩自然石5個を長さ1.4m並べており、西側に面を描えている。どういった性格かは判らない。

S X 3662 (PL. 56-1)

第122次調査区の北東で検出した。S D 3666が完全に埋没した後には構築している。南北方向の石列で、長さ2.9mを確認したが、南側2個は軸からずれている。石材は20×30cm大の花崗岩角礫で、西側に面を描える。石列と関連する遺構を検出しておらず、性格は不詳。

探土穴

S X 3856 (PL. 66-3)

第130次調査区の北西部で検出した。当調査区西側から109次調査区東半部にかけては、下層に暗青灰色粘土の堆積層が広がっており、この粘土を採掘した土取り遺構である。壁面には掘削具の痕跡が鋸歯状に残っており、埋土中からは粘土運搬に用いたとみられる蓆及び笊がそれぞれ1点出土している (PL. 64)。

土取り穴

なお、採土遺構は大宰府政庁前面の不丁地区を中心として第58次・73次・83次・84次・86次・87次・131次・134次・156次調査、及び日吉地区の第153次調査でも確認しており、時期的には9世紀代を上限として14世紀代を下限とする。

防空壕

S X 3874 (Fig. 88)

第130次調査区の北西隅で検出した。長方形を呈し、長さ3.3m、幅1.6m、深さ0.8mの大きさである。北面には敷上高0.3m、踏面幅0.5mのテラスを1段設け、入口部としている。床面の壁際には30cm前後の方形柱穴を0.5~0.6m間隔で巡らせており、屋根を支える角柱の痕跡とみられ、半地下式の防空壕と考えられる。なお、埋土上層からは「昭和15年」銘の一銭銅貨1点と五銭硬貨1点が出土しており、太平洋戦争中に掘削されたものであろう。(小田)

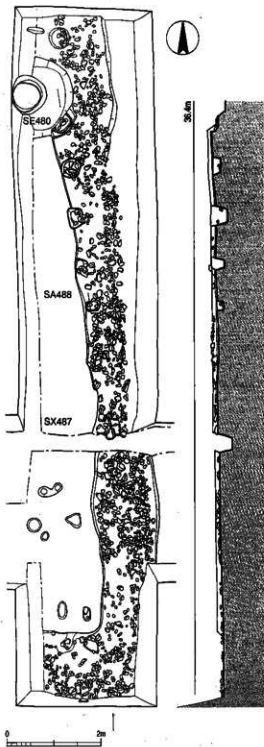


Fig. 93 柱列S A 488、通路S X 487断面図 (1/80)

註1 横田賢次郎「大宰府検出の井戸」
九州歴史資料館研究論集3 1977

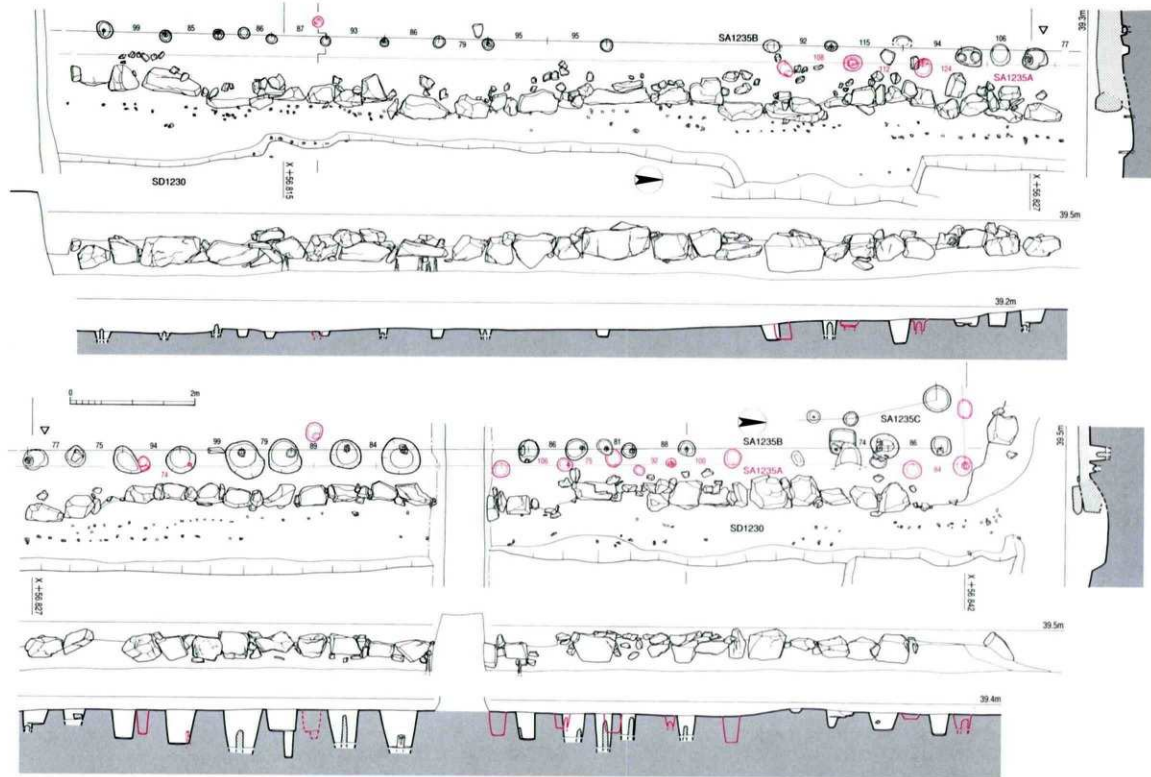


Fig.94 横SA1235A-C、溝SD1230実測図 (1/60)



Fig. 95 柵 S A1235A - C実測図 (1/60)

(2) 東辺域

東辺域の調査としては、大宰府史跡第20次・45次・47次・66次・119次・121次調査がある。第45次・119次・121次調査は観世音寺の解明を目的とした計画調査であるが、他は現状変更(住宅改築等)に伴う確認調査として実施した。なお、第66次調査では顕著な遺構が検出されなかったため、「Ⅱ調査の概要」の項でふれるに留めた。

1) 櫓

S A 1235 A・B・C (Fig. 94・95, PL. 74-1・2-4)

第45次・119次調査北区で検出した。溝 S D 1230 と併走して設けられている。前回の報告では、新旧二時期と報告していたが、図面の詳細な検討の結果、三時期あることが判明し、古期を S A 1230 A、新期を S A 1230 B、最新期を S A 1230 C とした。S A 1230 A は溝側に近接するもので、東西長 25.5 m、南北長 19 m を確認した。柱穴は径 0.2~0.3 m、深さ 0.3~0.7 m で、柱間 0.9 m を測る。古期のものには柱根が良好な状態で遺存している。

S A 1230 B は S A 1230 A の 0.3 m 西側に設けられたもので、南北長 17.5 m を確認した。柱穴は径 0.3~0.6 m、深さ 0.4~0.6 m、柱間は 0.9~1.1 m の間隔を測る。

S A 1230 C は東西方向の櫓で、S A 1230 A の 0.3 m 南側に位置する。径 0.3~0.5 m で、深さが 15 cm と浅いことから S A 1230 B とは別物で、東西長 16 m 分検出した。櫓の内側には建物・井戸・土坑などの遺構が密集しており、櫓で囲まれた狭い範囲に故意に隔離した感がある。

S D 1230 に併う櫓

S A 1271 (Fig. 96)

第45次調査区の西端に位置し、柱穴 6 個が南北方向に並ぶもので、11.7 m 分検出した。柱穴は径 0.3~0.4 m、深さ 0.1~0.15 m で、柱間は 1.78~3.4 m を測る。溝 S D 1233 と併走していることから両者の関連が窺われる。

S A 1272 (Fig. 96)

第45次調査区の西端に位置し、S D 1236 と重複する。径 20~30 cm 穴、深さ 10 cm 前後の柱穴 7 個が 10~35 cm 間隔で南北方向に並んでいる。溝の北端部だけに集中し、長さ 3 m を測る。

S A 1352 (Fig. 97)

第47次調査区の中央に位置する東西方向の櫓で、S A 1353 を切っている。3 間以上 (6 m) 検出したが、東西両端は調査区外に延びる。柱穴は径 0.3 m の円形を呈し、深さ 0.3 m 前後を測る。柱間は東側から 1.95 m、2.06 m、1.64 m とばらつきがある。底部に偏平な石を据え礎盤としている。S B 1350 とは柱筋・方向を等しくすることから、同建物に関連するとみられる。

S A 1353 (Fig. 97)

S A 1352 のやや北側を東西方向に走る櫓で、4 間以上 (8.1 m) 検出したが、東西両端は調査区外に延びる。柱穴は径 0.2~0.3 m の円形を呈し、深さ 0.1~0.3 m を測る。柱間は 1.95 m とほぼ等間である。S A 1352 同様、底部に偏平な石を据え礎盤としている。主軸方位は北から西に 86 度振っている。

III 寺域の調査

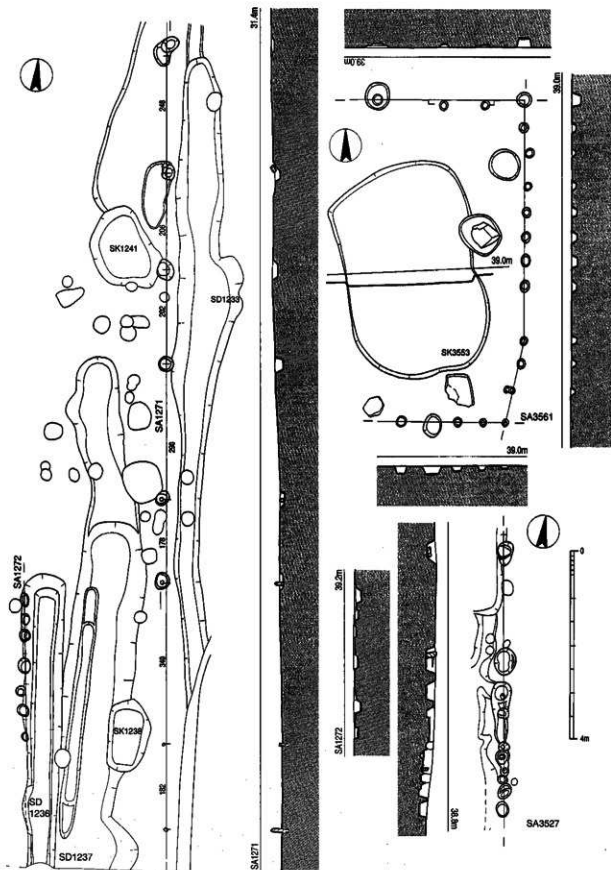


Fig. 96 東辺城柵実測図① (1/80)

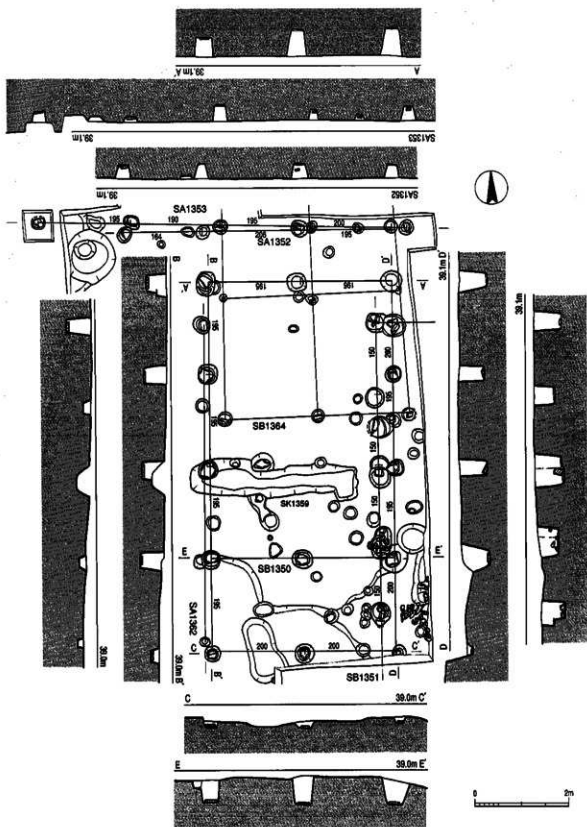


Fig. 97 東辺城構架測図② (1/80)

Ⅲ 寺域の調査

S A1362 (Fig. 97)

S B1350の西側柱列と重複して検出した。前後関係は、建物が横を切っている。4間分(7m)確認したが、もう1間分南側に延びる可能性がある。柱穴は径0.18~0.34mの円形を呈し、深さ0.2~0.5mを測る。北端の柱穴のみ礎盤を有し、深さも0.5mとしっかりしていた。S B

目 録 1351と軸を等しくすることから同建物の目隠堀的役割が考えられる。

S A3527 (Fig. 96, PL. 94-1)

第119次調査北区の南側で検出した。柱穴が7個ばかり連続するもので、中には柱根が遺存しているものがあった。柱穴は径20~30cmを測り、柱間は0.5~1mの間隔であった。方位は北から西に9度振っている。

S A3561 (Fig. 96, PL. 93-2)

S A3527の3m西側で検出した上層遺構。径10cm程の小ピットが「コ」字形に巡るもので、その中に位置するS K3553との関連が窺われる。柱間は0.25~0.45mの間隔で、密に並んでいる。土坑及び溝の性格は不明。

S A3567 (Fig. 107)

第119次調査北区の西側で検出した。L字形の溝で、柱穴は径0.2~0.3cm、深さ0.2cm。柱根が一部遺存しており、柱間は0.6m間隔を測る。溝の南側にS B3568が存在することから建物

目 録 の目隠堀と考えられる

S A3621 (Fig. 98)

第121次調査区の南端に位置する南北方向の溝で、S B3610と重複し、S B3626に切られる。前回の報告では、2間分を確認したと報告したが、図面検討の結果、3間以上になるものと判断した。柱掘方は一辺0.8m程の隅丸方形ないしは長方形を呈し、残りの良いもので深さ0.6mを測る。柱間は北側から3.1m, 2.96m, 2.9mを測る。主軸方位は東に3度振っている。

S A3622 (Fig. 99, PL. 103-2)

S B3610の4m北側に位置する東西方向の溝で、S D3630・3637に切られる。東端部には築地塀S A3625が存在するため、それより東側には延びないものと考えられる。前回は4間分確認したと報告していたが、5間分と訂正する。柱掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.6~0.9m、深さ0.3~0.5mを測る。西側2個に柱痕が遺存し、径0.3m、柱間2.56mの間隔。

S A3623 (Fig. 99, PL. 103-2)

S A3622とほぼ平行してその3.2m北側で検出した。6間分検出したが、もう数間東方向に延びるものと思われる。柱掘方は隅丸方形を主体とし、一辺0.4~0.7mの大きさ。深さは削平により、0.1~0.3mと浅めであった。また、柱痕が遺存していないため正確な柱間は測り得ないが、底面中央で1.64~2.18mの間隔である。

S A3624 (Fig. 98)

S A3623の4m北側に位置する南北方向の溝で、S I3638を切り、S D3649及びS K3644に切られる。柱掘方6個を検出したが、途中、溝・土坑に切られるため7間以上の溝になる。柱掘方は一辺0.7mの隅丸方形を呈し、掘方の底面は南側に下がっている。柱痕が遺存していないため柱間は測り得ない。主軸方位は東に1度振っている。

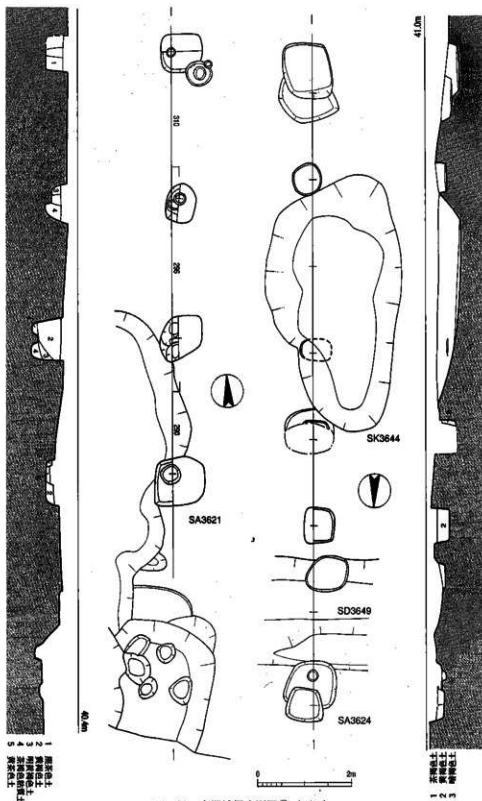


Fig.98 東辺城実測図③ (1/80)

S A 3625 (Fig. 100, PL. 103-3)

第121次調査区の東端に位置する南北方向の櫓で、長さ30.1m分を検出した。SD3630に切られ著しい削平を受けるが、柱掘方12個を確認した。柱掘方は方形を呈し、一辺0.5m程の大きさで、深さは0.3m前後である。柱痕が残っていないため正確な柱間は不明であるが、掘方

III 寺城の調査

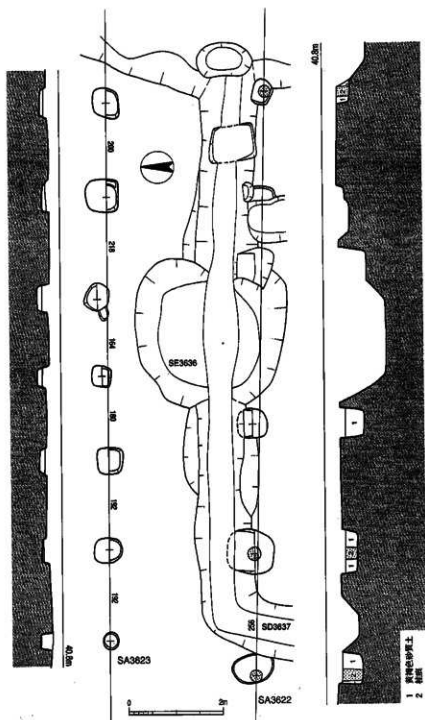


Fig.99 東辺城構実測図④ (1/80)

心々で3~3.2mの間隔を測る。また、第45次調査でもSA3625の南端柱掘方から35.9m南側で方形の柱穴を検出しており、一連の柵と考えられる。SA3625は観世音寺推定中軸線から東に84.8mの箇所であり、この距離は『資財帳』でいう南辺築地57丈(171m)の半分の距離85.5mに近似する数値である。(小田)

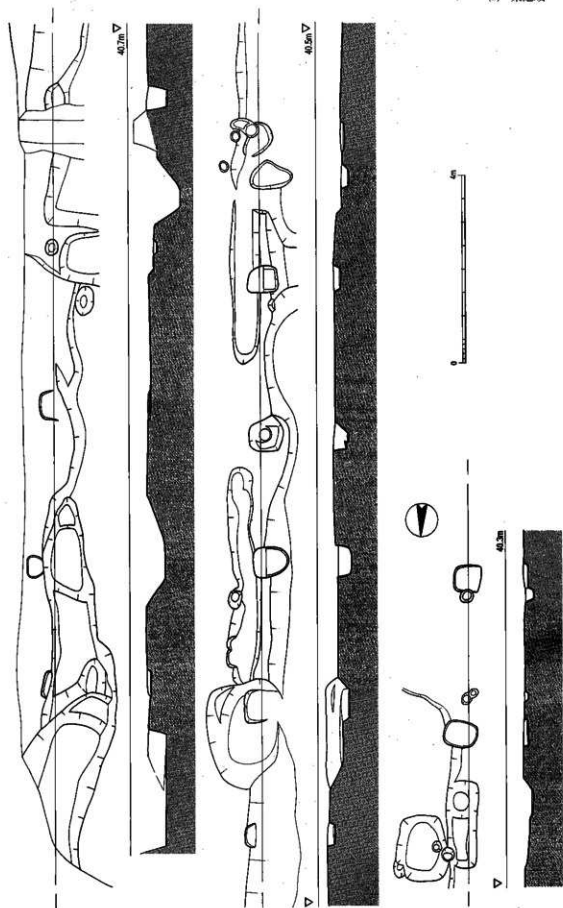


Fig. 100 築地 S.A.3625 発掘図 (1/80)

Ⅲ 寺城の調査

2) 建物

各次調査において建物を検出しているが、第45・119次調査区においては柱穴が錯集しているため建物として確実なものを図示するに留めた。

S B 1240 A・B (Fig. 95, PL. 76-2)

第45次調査区の北部で検出した東西1間分の礎石建物である。それぞれ S A 1235 A・S A 1235 B に伴い、門的な機能を持つと考えられる。S B 1240 A が旧期で、新期の S B 1240 B は礎石位置を0.6m程南側にずらしている。前者は70cm×40cmと50cm×35cmの扁平な石材を礎石として使用している。礎石の心々距離は3.2mを測る。後者は西側の掘方内に40cm×25cmの礎石が残るが、東側については根石のみしか遺存していなかった。礎石の心々距離は3.2mを測る。(吉村)

S A 1235 に
伴う門建物

S B 1250 (Fig. 101, PL. 76-1)

第45次調査区の北東隅に位置する掘立建物で、S K 1265 を切り、S D 1230・S K 1211 に切られる。前回は、2×3間の総柱建物と報告していたが、図面検討の結果、S D 1230 に切られ

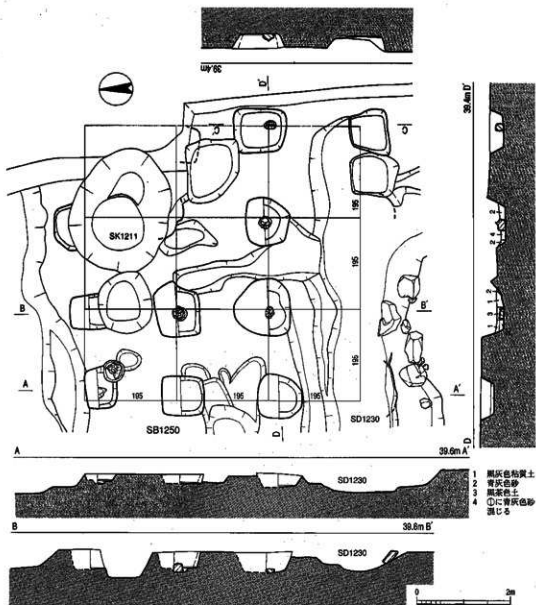


Fig. 101 東辺城建物実測図① (1/80)

る格好で南東隅柱の掘方が遺存しているので、梁行・桁行とも3間(5.85m)の総柱建物とした。ただ、建物の東側は調査区外であるため、もう1間分柱掘方が存在する可能性があり、或いは梁行3間×桁行4間規模になるかもしれない。

柱掘方は0.9~1.1mの隅丸方形を主体とし、深さ0.4m程を測る。また、4個の掘方に径30cm足らずの柱根が遺存しており、柱根をもとに柱間を復原すると1.95m等間となる。梁行方位は東に2度30分振っている。

S B 1275 (Fig. 102)

第45次調査区の東側に位置し、S B 1276と重複する掘立柱建物で、梁行1間(1.98m)×桁行2間(3.69m)の東西棟建物とした。柱穴は径0.3~0.5m、深さ0.2mを測る。桁行の柱間は東側が1.64m、西側が2.05mと西側が広がっている。梁行方位は西に5度振っており、S A 1230Aの東西柱列と方位を等しくする。

S B 1276 (Fig. 102)

S B 1275と重複して位置し、S E 1183・1184に切られる。南側柱穴2個は井戸に切れ失うが、梁行2間(3.7m)×桁行2間(3.76m)の総柱建物として復原した。柱穴は円形を呈し、径0.3~0.5m、深さ0.2~0.3mを測る。柱間は等間ではなく、ばらつきがある。西側の梁行方位は東に7度振っている。

S B 1296 (Fig. 102)

第45次調査区の北西側に位置し、S E 1201と重複する掘立柱建物である。また、南側柱列は南東の隅柱を検出したのみで、他の柱穴は土層観察ベルトの下に潜る。梁行2間(2.8m)×桁行3間(5.22m)の東西棟建物である。柱穴は円形で、径0.24~0.4m、深さ0.2m前後を測る。東梁行方位は西に7度振っている。桁行はS A 1230Aの東西柱列と方位を等しくする。

S B 1315 (Fig. 103)

S B 1317の1m西隣に位置し、S E 1193・1197・1198・1199、S K 1216・1249・1251・1270と重複するが、当建物が先行する。梁行3間(7m)×桁行5間(10.6m)の東西棟建物で、梁行方位はS A 1230Aの南北柱列と同じくする。柱穴は円形を呈し、径0.3~0.5m、深さ0.3m前後を測る。西梁行方位は西に2度振っている。

S B 1316 (Fig. 102)

S B 1276の4m南側に検出した掘立柱建物で、S E 1202に切られ、S B 1317と重複する。梁行2間(3.62m)×桁行3間(5.92m)の東西棟建物である。柱穴は円形を呈し、径0.34~0.42m、深さ0.4m前後を測る。桁行の柱間は1.74~2.64mとばらつきがみられる。西梁行方位は東に2度振っている。柱筋はS A 1230Aに揃えている。

S B 1317 (Fig. 102)

S B 1316、S E 1182・1202と重複して位置し、S K 1213に切られる。南北棟建物で、梁行3間(6.48m)×桁行4間(8.68m)の規模を有する。柱穴は円形を呈し、径0.3~0.64m、深さ0.4m前後を測る。柱間は梁行が1.7~2.64m、桁行が1.82~2.7mを測り、ばらつきがある。東桁行方位は東に4度30分振っている。

S B 1318 (Fig. 103)

S B 1317の1.5m南側に位置する掘立柱建物で、梁行2間(2.62m)×桁行2間(3.74m)

III 寺域の調査

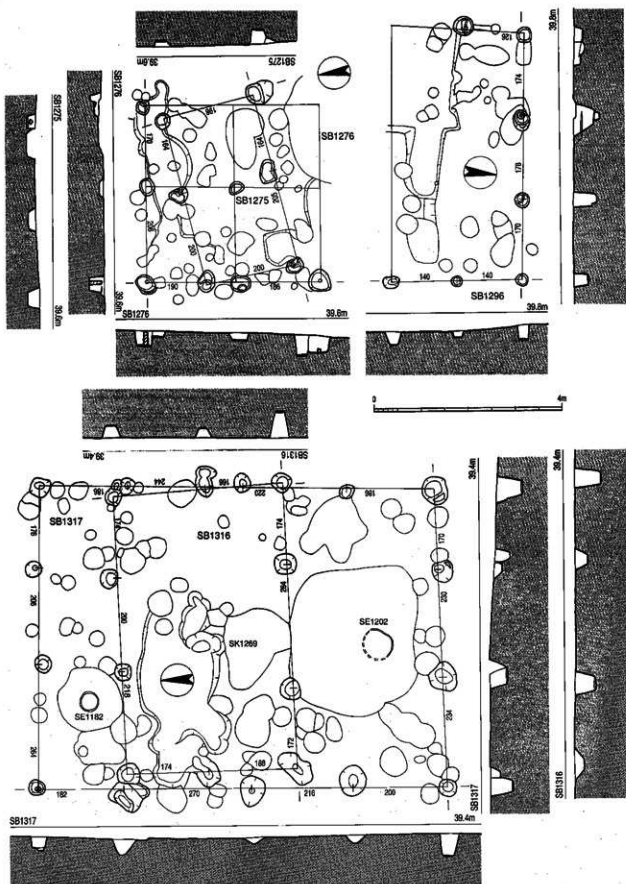


Fig. 102 東辺城建物実測図② (1/80)

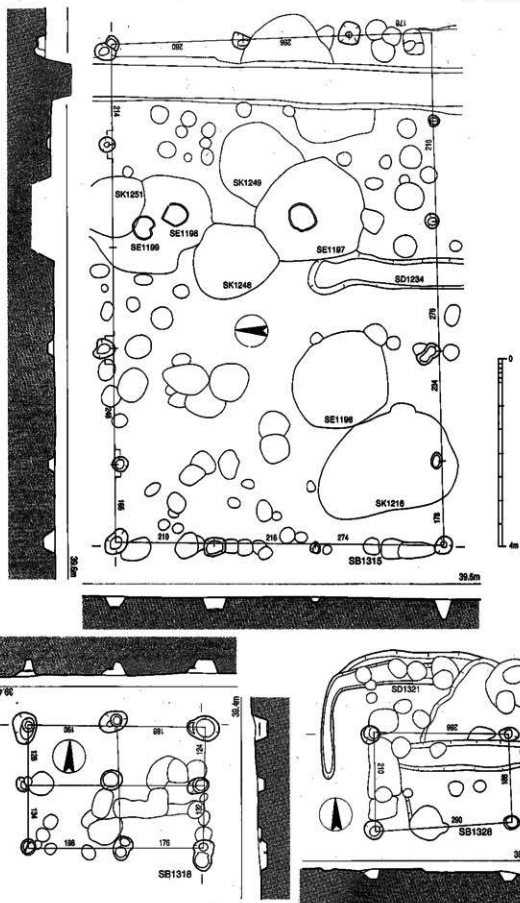


Fig. 103 東辺城建物実測図③ (1/80)

III 寺域の調査

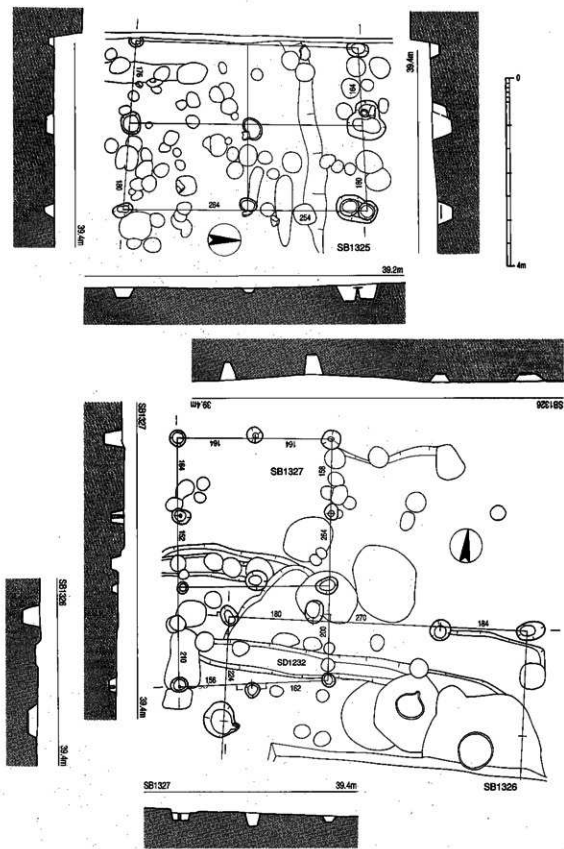


Fig. 104 東辺城建物実測図④ (1/80)

の総柱建物として考えた。柱穴は円形を呈し、径0.3~0.54m、深さ0.3m前後を測る。西側梁行柱筋はS B 1315の東側梁行柱列と筋を揃えており、同時存在が考えられる。

S B 1325 (Fig. 104)

S B 1317の1.5m南側に位置する掘立柱建物で、梁行2間(3.56m)×桁行間2(5.48m)の総柱建物として考えた。柱穴は円形を呈し、径0.3~0.5m、深さ0.2m前後を測る。梁行の柱間は1.64~1.8mであるが、桁行の柱間は2.64mと長すぎるきらいがある。東側桁行方位は西に2度振っている。

S B 1326 (Fig. 104)

第45次調査区の南西側に位置する掘立柱建物で、S B 1327・1328、S E 1188・1189と重複する。南側柱列が積石塚S X 1220の下に潜り込むため全体の規模は不明であるが、柱間が短い南北方向が桁行とすると梁行は3間(6.34m)で、現状で桁行1間以上の南北棟建物となる。梁行の柱間は東から1.84m・2.7m、1.8mの間隔を有する。柱穴は円形を呈し、径0.3~0.7m、深さ0.2m前後であった。西側の桁行方位は3度西に振っている。

S B 1327 (Fig. 104)

S B 1326・1328、S D 1231・1232と重複する掘立柱建物である。梁行2間(3.28m)×桁行3間(5.26m)の南北棟建物で、南から1間目に東柱掘方を有する。柱穴は円形を呈し、径0.2~0.4m、深さ0.2m前後を測る。東桁行方位は西に5度振っている。

S B 1328 (Fig. 103)

S B 1326・1327、溝S D 1232と重複する。梁・桁行とも1間で、西側梁行2.1m、南側桁行2.9mを測る。柱穴は円形を呈し、径0.3~0.4m、深さ0.2m前後を測る。梁行方位は東側に2度振っている。また、建物の1m北側には「コ」字形を呈する小溝S D 1231があり、建物を囲繞していることから両者の関連が窺われる。

S B 1350 (Fig. 97, PL. 71-1)

第47次調査区の南半において検出した。S A 1362・S B 1364と重複し、S B 1351及びS K 1359に切られる。前回の報告では、梁行2間×桁行3間の南北棟建物と報告していたが、図面検討の結果、前回報告のS B 1355北側柱列を当建物の崩部分とみなし、今回は、梁行2間×桁行3間の身舎の南側柱列に崩を付加した2×4間建物として復原した。

片層建物

建物規模は身舎で梁行3.9m、桁行5.9mを測る。身舎の柱穴は円形を呈し、径0.3~0.6m、深さ0.6m前後と大きめであるが、それに比して崩部分の3個は小振りで、深さも0.2mと浅めであった。桁行方位は東に2度振っている。

S B 1351 (Fig. 97)

S B 1350の東側柱列を切って位置する。西側柱列4間分(6.5m)の検出に留まるが、もう1間分南側に延びる可能性を有し、梁行2間×桁行5間の建物規模が想定される。柱穴は隅丸方形に近い円形を呈し、径0.4m、深さ0.4~0.6mを測る。柱間は1.5m等間として復原した。柱穴内には角礫が数個入っており、柱押さえとして入れたものであろう。桁行方位はS B 1350と同じく東に2度振っている。

柱押さえの石

S B 1355 (Fig. 105)

第47次調査区の南端に位置し、S B 1350・1351と重複するが、前後関係は判然としなない。ま

III 寺域の調査

た、建物の南東部は調査区外であるが、一応梁行2間(2.9m)×桁行3間(4.8m)の東西棟建物としておく。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し、深さ0.3m程を測る。柱穴内には礎盤を敷いたものや、角礫を入れたものがみられた。柱間は桁側が1.6m等間、梁側が1.45m等間とした。梁行方位は西に4度振っている。

S B 1364 (Fig. 105)

S A 1352・1353, S B 1350・1351と重複するが、前後関係は明らかでない。当初、梁行1間(2.54m)×桁行2間(3.98m)の東西棟建物としたが、北側柱列の柱穴は小さく、深さも浅めであることから隅柱とはみなし難いため2間×2間の総柱建物と考えた。柱穴は円形を呈し、径0.15~0.3m、深さ0.1~0.3mである。柱穴の底部には扁平な石を据え礎盤としている。桁行方位は東に2度振っている。(小田)

S B 3460 (Fig. 106, PL. 94-1)

第119次調査南区の南側で検出した梁行2間×桁行1間以上の総柱礎石建物である。南側は調査区外となる。礎石は一辺20~40cm程で、原位置を動いているものもある。柱間は梁・桁行とも2m等間に復元される。

S B 3461 (Fig. 106, PL. 94-2)

第119次調査南区の北西で検出した梁行2間以上×桁行2間以上の建物である。5ヶ所に径10cm程の柱根が残っており、柱間は梁側が1.52m・1.68m、桁側が1.8m等間に復元される。2間×2間の総柱建物として完結する可能性もある。(吉村)

S B 3551 (Fig. 107)

第191次調査北区の東側に位置する掘立柱建物である。建物の周囲10m程には井戸・土坑な

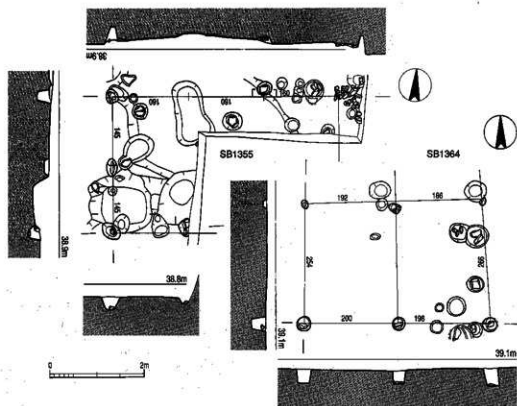


Fig. 105 東辺城建物実測図⑤ (1/80)

(2) 東辺城

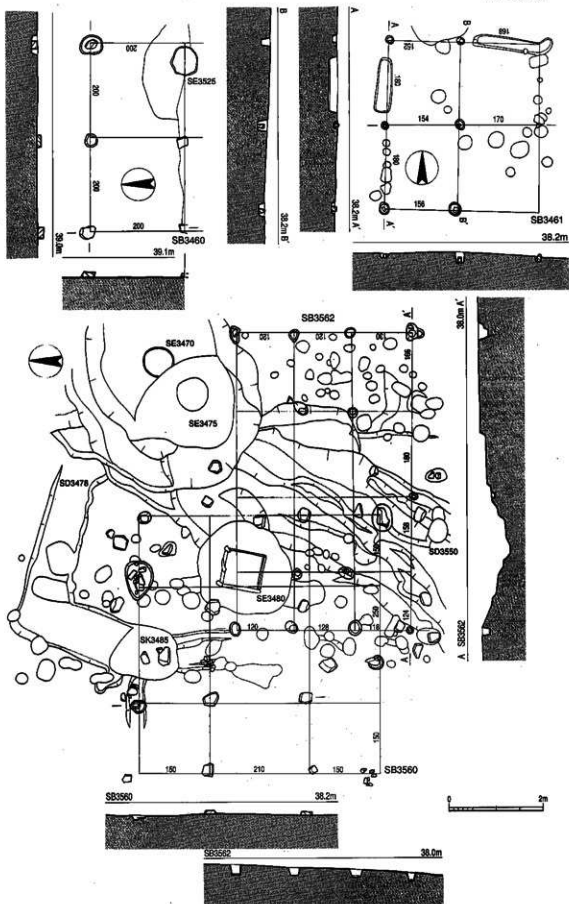


Fig. 106 東辺城建物実測図② (1/80)

III 寺域の調査

どの主立った遺構はなく、柱穴が無数に存在している。中でもやや大振りの柱穴を抽出し、S B3551・3552とした。他にも纏まる柱穴がみられるが、建物としての確証が得られないので上記2棟を提示するに留めた。

S B3551は梁行2間(4.7m)×桁行3間(5.8m)の南北棟建物で、柱穴は円形を呈し、径0.3~0.4m、深さ0.2m前後を測る。柱間は梁行間が2.04~2.58m、桁行間が1.54~2.22mで、かなりばらつきがある。東側桁行方位は西に3度振っている。

S B3552 (Fig.107)

SB3551の南側で、同建物と重複して位置する。梁行3間(5.06m)×桁行4間(7.86m)の南北棟建物とした。柱穴は0.4mの円形を呈し、深さ0.2m前後である。柱間は梁行間が1.46~1.94m、桁行間が1.6~2.18mの間隔を測る。東側桁行方位は東に3度振っている。

S B3560 (Fig.106)

第119次調査南区の南西側で検出した上層の礎石建物である。S B3562、S D3478・3550、S E3480と重複するが、当建物が最も新しい。東西3間(5.5m)×南北3間(5.1m)の総柱建物としたが、西側へ延びる可能性がある。礎石には一辺20~30cm大の偏平な割石を用いている。柱間は梁側が1.5m・2.1m・1.5mで、桁間は1.5m、2.5m、1.5mで、中央間が広くなっている。梁行方位は座標北を示す。

S B3562 (Fig.106)

S B3560の東側に位置し、同建物と重複する掘立柱建物で、S D3550、S E3475・3480に切られる。梁行3間(3.7m)×桁行4間(6.34m)の総柱東西棟建物としたが、西端側柱列の柱間が1.24mと他に比して短いことから廂とも考えられる。柱穴は径18~26cmと小さなもので、深さは30cm前後である。梁行方位はS B3560と同じく座標北を示す。

S B3563 (Fig.107)

S B3460の西側で、同建物と重複して位置するが、層的には下層の掘立柱建物である。大半が調査区外にあるが、梁行3間(5.12m)×桁行1間以上(1.28m+a)の南北棟建物とした。柱穴は円形を呈し、径0.2~0.35m、深さ0.2m前後を測る。

S B3564 (Fig.107)

S B3563と重複している。柱穴3個を検出したのみであるが、東西及び南北方向へは延びていないことから梁行は2間(4m)となる。調査区内においては、桁側柱穴は検出できなかったので、柱間は1.4m以上有ることになる。柱穴は径0.4mの円形で、深さ0.3mを測る。

S B3565 (Fig.107, PL.94-3)

第119次調査北区の西側で検出した上層の掘立柱建物である。梁行間2(1.74m)×桁行3間(2.46m)の小規模な南北棟建物で、柱穴は円形を呈し、径0.22~0.46mで、深さは15cm前後を測る。柱間は0.78~0.98m間隔と非常に狭く、恒常的に起居する建物とは考え難い。

S B3568 (Fig.107)

第119次調査北区の西側で、S A3567の1.1m南側に位置する。梁行1間(2.4m)×桁行3間(5.34m)の東西棟建物とした。柱穴は円形を呈し、径0.2~0.4m、深さ0.3m前後を測る。桁行の柱間は東から1.78m・1.84m・1.72mを測る。当建物と平行して位置するS A3567は、建物の目隠蔽的な施設と考えられる。

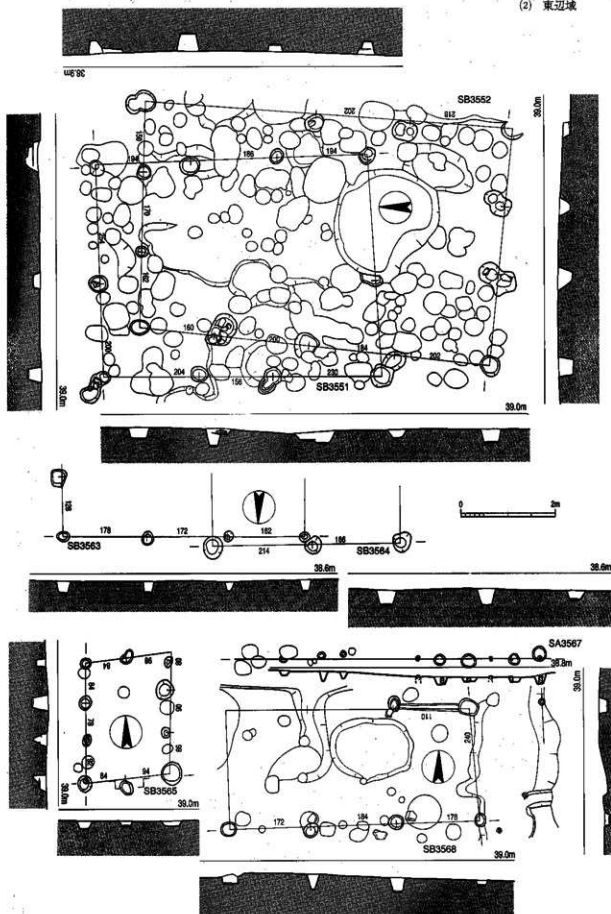


Fig. 107 東辺城建物実測図⑦ (1/80)

III 寺域の調査

S B 3610 (Fig. 108, PL. 104-1)

第121次調査区の南側に位置する東西棟の摺立柱建物で、S A 3621・S B 3626と重複するが、柱掘方の小さいS B 3636が最も後出する。S D 3630によって建物の東半部を切られるため桁行4間以上の建物であるが、桁行5間だと寸詰まりの感があり、7間だと同時期のS A 3625に重複するため、桁行6間としておく。

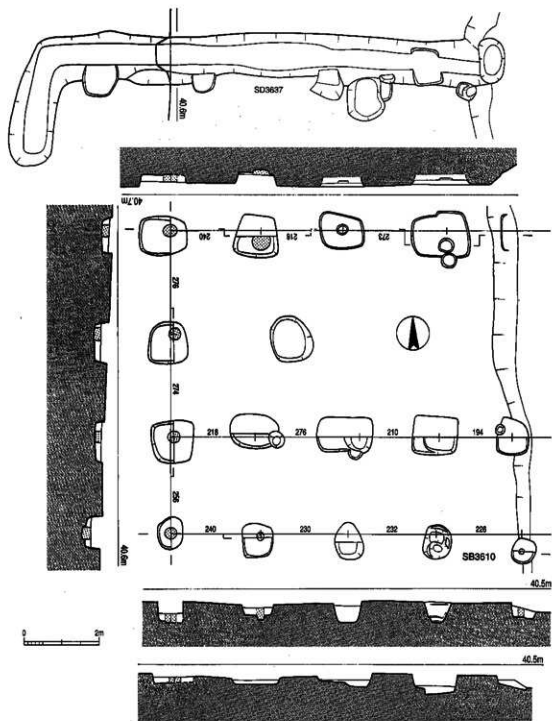


Fig. 108 東辺域建物実測図⑤ (1/100)

当建物は梁行2間(5.52m)×桁行6間(14m)の身舎の南側桁行に廂を付加した所謂片廂片廂建物形式である。身舎部分の柱掘方は方形ないしは長方形を呈し、一辺0.9~1.3mの大きさであるが、廂部分の柱掘方は一辺0.8mと一回り小さい。また、梁行側の掘方では柱痕を検出してお

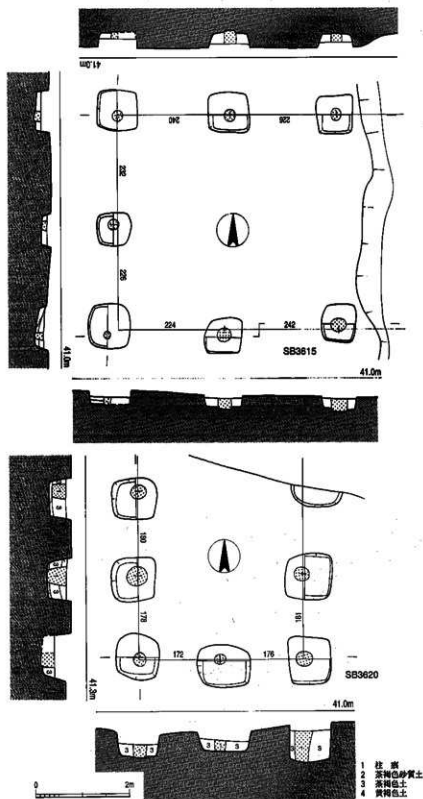


Fig. 109 東辺城建物実測図⑨ (1/80)

III 寺域の調査

り、径0.3m前後、柱間2.74m等間を測る。桁行側は柱痕のすべてを確認し得ていないが、2.4m間隔になるか。なお、梁行方位は15分西に振っている。

SB3615 (Fig. 109, PL. 104-2)

SB3610の11m北側に位置する東西棟の掘立柱建物で、SI3638を切り、SD3630に切られる。また、SB3641とは重複関係にあるが、SB3641が後出するものと考えられる。当建物もSD3630によって建物の東半部を切られるため梁行2間(4.58m)×桁行2間以上の建物であるが、SA3625との位置関係からすると桁行は5間(11.5m)となる。柱掘方は一辺0.7~0.9mの隅丸方形を呈し、30cm前後の柱痕を確認した。柱痕部分が掘方底面より下がっているのは建物の自重によるものであろう。梁行方位は東に30分振っている。

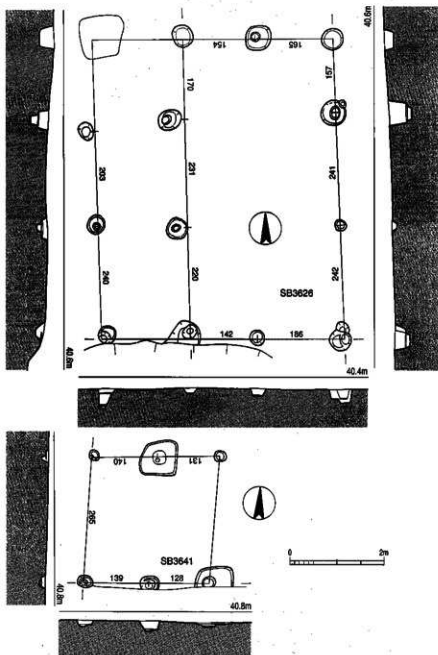


Fig. 110 東辺域建物実測図⑩ (1/80)

S B 3620 (Fig. 109, PL. 105)

第121次調査区の北端に位置する南北棟の掘立柱建物で、柱掘方は調査区外の北側に延びる。建物規模は梁行2間(3.46m)×桁行2間以上(3.58m)で、柱掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.9~1.1m、深さ0.5~0.8mを測る。柱痕は30cm前後であった。また、西側桁行の柱掘方は底面に黄褐色土を突き固め、その上に柱を立てていた。桁行方位は東に15分振っている。

S B 3626 (Fig. 110, PL. 104-1)

S B 3610・S A 3621と重複し、両者を切っている。前回は当建物の北側梁行柱掘方3間分を東西方向の横S A 3659と報告していたが、今回は掘立柱形式の片廂建物と訂正する。建物は梁行2間(3.28m)×桁行間3(6.4m)の身舎の西側桁行側に廂を付設したもので、柱掘方は径0.3~0.5mの円形を呈し、柱穴が二重に掘り込まれているものもある。一段下がった部分は径15cm程であり、柱痕跡を示すとみられる。桁行の柱間は1.57~2.42mとばらつきがある。桁行方位は東に30分振っている。

S B 3641 (Fig. 110)

S B 3615の南側柱列と重複して検出したが、柱穴が小さい当建物が後出するものと考ええる。梁行2間(2.7m)×桁行1間(2.7m)の南北棟掘立柱建物で、柱穴を結んだ線はやや歪な方形を呈する。柱穴は0.2~0.4mの円形を呈し、柱間は梁側が1.28~1.4m、桁側が2.65~2.7mを測る。桁行方位は北から東に2度30分振っている。(小田)

3) 竪穴住居

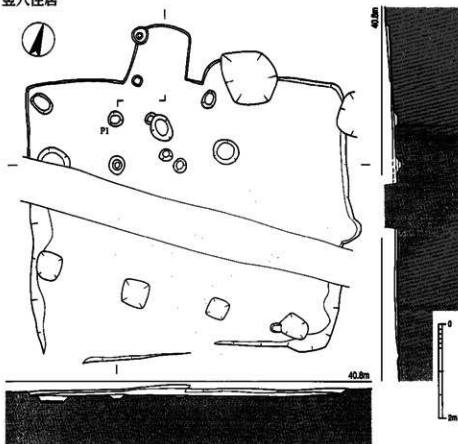


Fig. 111 竪穴住居 S I 3638実測図 (1/80)

Ⅲ 寺域の調査

S I 3638 (Fig. 111)

第121次調査区の中央やや西側に位置し、S A3623・3624、S B3615、S D3637に切られる。平面形は東西側に長い方形を呈し、北壁長6.68m、東壁長5.56mを測り、壁高は削平により10cmの遺存状態である。北壁のやや西りに幅1.32m、奥行き1.18mの張出しがあり、突出型のカマドとみられるが、袖部・煙道は留めていない。また、P1を主柱穴と見なしたものの浅すぎるきらいがある。埋土中からは古墳時代の土器が出土しており、観世音寺造営以前は集落であったことが判る。(小田)

4) 溝

S D435

第20次調査の南北Trで検出した。南北方向に走る溝で、検出長24m、深さ0.5mを測る。西岸のみの検出であるが、東西Trに東岸はかかっていないので溝幅は5m未満と推定される。ただ、大宰府政庁中軸線から約750m(≒7町)東の位置にあり、寺域との関連が窺える。

S D1210

第45次調査区南東隅に位置し、S E1180に切られる。南北方向に走る溝状の落ちで、南端での幅2.6mで、深さは6cm程であった。

S D1230 A・B (Fig. 94・95・112, PL. 74, 75-1・2・4, 95-1)

第45次調査区及び第119次調査区で検出した。第119次調査南区ではS D3520と番号を付したが、当溝とは一連のものである。45次調査区の北西隅から14m程南に流れ、一旦東に向きを変える。東側に26m程流れた後、更に南側に流れを変えている。クランク形を呈する溝で、溝幅は北端部分で2.7m、深さ0.6m、東西部分で幅2.5~2.6m、深さ0.35~0.5m、南北部分で幅0.8~2.2m、深さ0.4mを測る。第119次調査分を含めると南北部分の長さは78mにも及ぶ。

当溝は新旧二時期あり、古期をA、新期をBとした。A溝は素掘りの溝であるが、調査区の東辺部の溝底には溝と平行して20cm程の間隔で杭が2列打ち込まれており、しがらみを組んでいたものと思われる。上面幅1.5mを測り、黒色砂・黒灰色砂泥が堆積していた。A溝埋没後にB溝を掘削しているが、B溝は溝の内側に石で護岸したもので、長さ40~110cmの花崗岩を用いている。北辺部分では護岸の石は殆どが抜き取られていた。また、溝に接して溝S A1235を設けており、橋の内側には建物・井戸・土坑などの遺構が蟻集しているが、溝の北東部においては池状の落込S X1200が存在する程度であった。

S D1231 (Fig. 103)

第45次調査区の南西側で検出した。S B1327と重複し、東端は土坑に切られる。現状でL字形を呈し、東西長3.2m、南北長2.1m、中央部での幅0.68mで、深さは削平により壁高13cmを留めるにすぎない。溝の1m南側には掘立柱建物S B1328があり、それを囲む施設になろう。

S D1232

S D1231の1.2m南側に位置する東西溝で、S E1188・1189、S K1222に切られる。残存長6.6m、中央部幅0.64mで、壁高は5cmを留める程度であった。

S D1233 (Fig. 96)

S D1231のすぐ西隣に位置する。南北方向に走る溝で、南端は積石塚S X1220の下に潜り込

む。検出長19.7m, 最大幅1.3mで、深さは12cmと浅い。北側6m程は幅が一回り小さくなっている。また、この溝と平行して西肩際^西に1.8~2.8m間隔で柱根を有する柱穴列があり、横S A1271の番号を付した。

SD1234

第45次調査区の中央やや南側で検出した。S B1315と重複し、S E1187・1320, S K1203・1204・1227に切られる。調査区の中央部から南端にかけて走る溝で、検出長15.2m, 幅0.6~1.1m, 深さ0.1~0.26mを測り、南側に向かって深くなっている。

SD1236 (Fig.96)

第45次調査区の南西隅で、SD1233の2.5m西側に位置し、SD1237を切る。検出長6.25m, 幅0.88m, 深さ0.63mを測る。溝の西肩際^西には10~40cm間隔で小ピットが連続しており、柱穴列S A1272とした。

SD1237 (Fig.96)

SD1233とSD1236の間に位置する南北溝で、S K1238を切り、南端をSD1236に切られる。検出長10.85m, 幅1.5mで、深さは15cm程であった。

SD1266

第45次調査区の北側に位置し、S K1264を切っている。南北長5.8m, 深さ0.2mを測り、南端はSD1230と重複する。

SD1268

第45次調査区の東西掘下げTrで確認した。東西幅1.8m, 深さ0.23mを測るが、下層遺構であるため詳細は不明。S K1267に切られる。

SD1300A・B (Fig.112, PL.75-3,89-1,95-2)

第45次調査区中央を南北方向に流れる溝で、第119次調査北区でも検出しており、検出総長48.5mを測る。溝の心は観世音寺推定中軸線から東に103mの距離に位置する。溝の幅は北端で2.1m, 深さ0.25m, 45次調査区南端で幅2.05m, 深さ0.53m, 119次調査北区南端で幅1.85m, 深さ0.5mで、両端部での比高差は70cmを測り、断面は逆台形を呈する。

溝の埋土は上層(B溝)・下層(A溝)とに分けられ、SD1300Aの北端は石組排水施設S X1306を介して池S G1305に接続する。また、SD1300Bの先端は東側に屈曲し、瓦組暗渠S X1245に接続している。上層埋土中からは「厨」・「主^主」銘墨書土器が、下層埋土中からは「由」・「□寺」銘墨書土器、唐三彩壺片が出土した。

墨書土器・
唐三彩が
出土

SD347B

第119次調査南区の西側で検出した。L字形を呈する溝で、東半部はSD3550に切られ、南先端部はS K3485と重複する。中央部での幅0.9m, 深さ0.16mを測る。

SD3500 (Fig.112)

第119次調査北区の掘下げTrで検出した。45次調査区側へ延びるものと思われるが、掘り下げていないため確認し得ていない。検出長18mで、溝幅は北端で3.1m, 南端で3.2mを測り、深さは0.65mの遺存状況である。断面は逆台形を呈し、埋土は黒色粘質土を主体とする。割合多くの土器が出土した。

III 寺域の調査

SD 3520 (Fig. 112)

第119次調査北区の東側を南北に流れる溝で、南端は南区の北壁から3.6mの位置で終わっている。北端での幅1.82m、深さ0.15mで、南端での幅0.9m、深さ0.2mを測る。前回の報告では、新旧二時期あり、古期のものをSD3520A、東側の新期溝をSD3520Bとし、SD1230Aと一連の溝として報告していたが、土層図の関係からするとSD3520BはSD1230Bの下層溝であるSD1230Aに該当し、SD3520Aは全く別の溝であるため訂正しておく。

SD 3550 (PL. 96)

第119次調査南区の中央部を弓なりに流れる溝で、SD3478を切り、SB3560・3562、SE3470・3475・3480・3490に切られる。南側は調査区外に延びるが、北区では検出していないことから溝の北端は両区の中程にある。溝の幅は北側で1.75m、深さ0.32m、南端で溝幅2.7m、深さ0.6mを測る。南壁から北側5mにかけての壁面には護岸のための杭が打ち込まれていた。

SD 3555

第119次調査南区の南西端部に位置する溝状の墓込で、検出長9.5mを測る。方向的にはSD1300と同じであるが、調査中に壁面が崩壊し、掘り下げを断念したため詳細は不明。

SD 3619

第121次調査区の南西隅で検出した。北西から南東方向に流れる大溝で、瓦溜SX3618に切

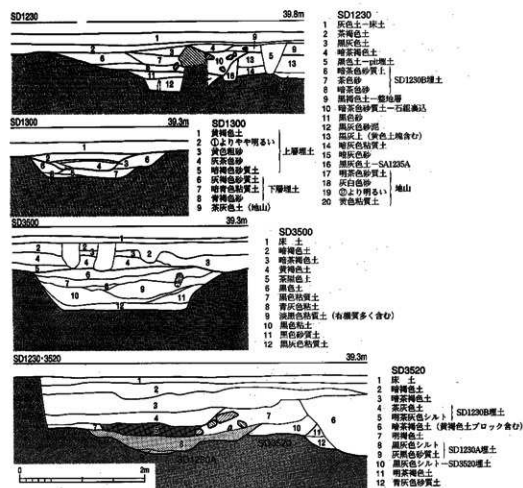


Fig. 112 溝SD1230・1300・3500・3520土層図(1/60)

られ、埋土上層には土器溜 S X3655 が掘り込まれている。中央部での幅 5.3m、深さ 0.5m を測る。埋土は粘質土で、百濟系単弁軒丸瓦が出土した。

SD3628

第121次調査区の南西側に位置し、南北方向に走る。S X3640 に切られ、S B3610 を切る。長さ 10.5m を検出したが、南端は S X3618 と切り合う。幅 1.14m、深さ 15cm の浅い溝である。

SD3629

SD3619 の北側に位置し、同溝と切合い関係にある。長さ 3.5m、幅 1.15m、深さ 0.2m 程の小溝である。

SD3630 (PL.103-3)

第121次調査区の東半部を占める幅広の南北溝で、橋・建物・井戸・土坑などの遺構を切っている。幅 7.5~8.4m、深さ 0.2~0.3m を測る。溝の底面は土坑が密集したかの如く起伏が著しく、或いは土取りの結果、溝状を呈するに至ったとみられる。

底面は連続土坑状

SD3637 (Fig.108, PL.103-1)

第121次調査区の中程で検出した。S A3622・S E3636 を切り、東側は SD3630 に繋がる。現状で L 字形を呈し、東西長 11.6m、中央での幅 1.3m、同深さ 0.37m を測る。底面は SD3630 側に傾斜している。

SD3649

SD3637 の 16.5m 北側に位置する東西溝で、S A3624 を切る。西側は調査区外に延びているが、東側は S X3650 に切られる。検出長 13m で、中央幅 2.3m、深さ 0.2m で、溝底は SD3630 側に緩傾斜している。

(小田)

5) 井戸

SE1180 (Fig.113, PL.77-1)

第45次調査区の南東隅で検出した桶側構造の井戸である。南半分は調査区外となる。上段の桶側の一部を確認したのみである。板材は幅 11~13cm である。IV-B 類か。

SE1181 (Fig.113, PL.77-2-3)

SE1180 の北側で検出した。石組の下部に桶側を据える構造の井戸である。石組は径 1.52m、深さ 2.4m を測り、14段積まれている。石組下部 40cm 程の高さまでは 10 数 cm 程度の小振りの石を用いている。下部構造の桶側は上端径 82cm、高さ 70cm 以上である。IV-B-a 類。

SE1182 (Fig.113, PL.78-1)

第45次調査区の中央やや東側で検出した。S K1213 に切られる。底部に曲物を据える井戸である。径 39cm、高さ 17cm の曲物の外側に、さらに径 43cm、高さ 17cm の曲物を重ね置きしている。Ⅲ類。

SE1183 (Fig.114, PL.78-2, 79-1)

SE1182 の 3m 北側で検出した。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方のやや北東側に偏って配され、枠は 2 段が残存する。上段の桶側は上端径 62cm、高さ 100cm 以上を測る。下段の桶側は上端径・下端径とも 59cm、高さ 116cm を測る。通常と同類の井戸の桶側のように枠下方が開かず直立している。板材は幅 8~10cm のものを使用している。底面は礫敷きである。S E

III 寺域の調査

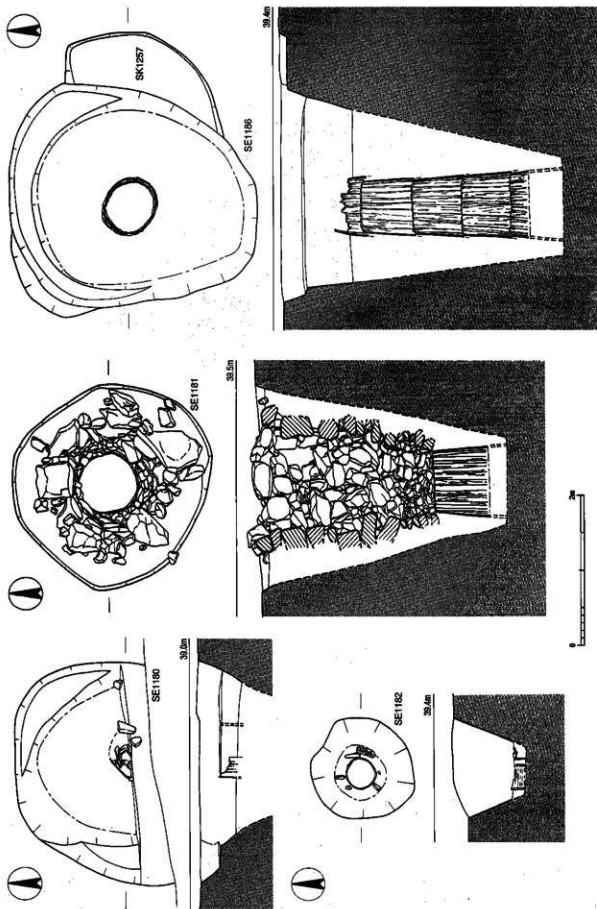


Fig. 113 東辺城井戸実測図④ (1/50)

1184を切る。IV-A類。

SE1184 (Fig. 114, PL. 78-2, 79-2-3)

SE1183の西隣で、同井戸に切られる。方形縦板枠の下部に桶側を据える構造の井戸である。方形縦板枠は内法で48-53cm、深さ1.28mを測る。横棧は3本あり、凹凸に柄を穿って組み合わせる。縦板は通常の板材ではなく半裁した竹を使用するが、東側の一部には、幅22cm、長さ148cm、厚さ約2cmの木板を立てている。下部の桶側は上端径61cm、下端径42cm、高さ71cmで、タガが2箇所に残る。通常の桶側構造の桶とは逆に下方の径が小さくなっている。II-B-c類。

SE1185 (Fig. 114)

SE1154の西隣に位置し、SK1222と重複する。底部に自物を据える井戸である。曲物は径41cm、高さ22cm以上である。III類と考えられる。

SE1186 (Fig. 113, PL. 81-1)

SE1183のすぐ北東側に位置し、SK1257を切る。桶側構造の井戸である。枠は5段目まで確認した。最上段の桶側は腐食が著しいが、以下、上端径・高さは66cm・78cm、69cm・73cm、75cm・72cm、82cm・22cm以上を測る。板材は幅7-15cmのものを使用し、2段目が23枚、3段目22枚、4段目23枚からなる。IV-A類。

SE1187 (Fig. 115)

第45次調査区の南端で検出した。三辺に横木のみが残っており、一辺47cm程の井戸枠が復元できる。方形横板構造の井戸の可能性もある。底部には一面に瓦片が敷き詰めであった。

SE1188 (Fig. 115, PL. 80-1-80-2)

SE1187の4m北側に位置し、SE1189を切る。桶側構造の井戸である。枠は3段確認した。上段部の上端部は腐食が進んでいるが径74cm、高さ81cmを測る。中段部はそれぞれ68cm・97cm、下段部は54cm・54cmを測る。下段部の桶は一回り小形で、径の大きい方を上向きに据える。底部は隙敷きである。板材は7-12cmで、厚さは3cmを測る。各桶側の接続部には隙間がみられるが、ここには小石を充填して補強している。IV-A類。

SE1189 (Fig. 115, PL. 80-1-80-3)

SE1188の西に位置し、同井戸に切られる。桶側構造の井戸である。枠は3段であるが、上段の桶側は腐食が著しい。2段目は上端径48cm、高さ82cm。3段目はそれぞれ52cm、136cmである。板材は幅7-10cmで、厚さ3cmを測る。IV-A類。

SE1190 (Fig. 114, PL. 81-2-3)

SE1188の3m北東で検出した。桶側構造の井戸である。SK1225・1226と切り合う。枠は3段であるが、上段の桶側は腐食が著しい。2段目は上端径68cm、高さ78cm。3段目はそれぞれ54cm、90cmである。板材は幅7-10cmで、厚さ3cmを測る。IV-A類。

SE1191 (Fig. 115, PL. 82-1)

SE1190のすぐ北側に位置する。枠は抜き取られ遺存していないが、底面の中央部で先端を斜めに切断した竹が出土しており、井戸廃棄時の井戸祭祀を行ったものと考えられる。井戸祭祀

SE1192 (Fig. 115, PL. 82-2)

第45次調査区の南西で検出した。SE1193を切り、SK1243と重複する。井戸枠は存在しないが、形状等からみて井戸と考えられる。

III 寺城の調査

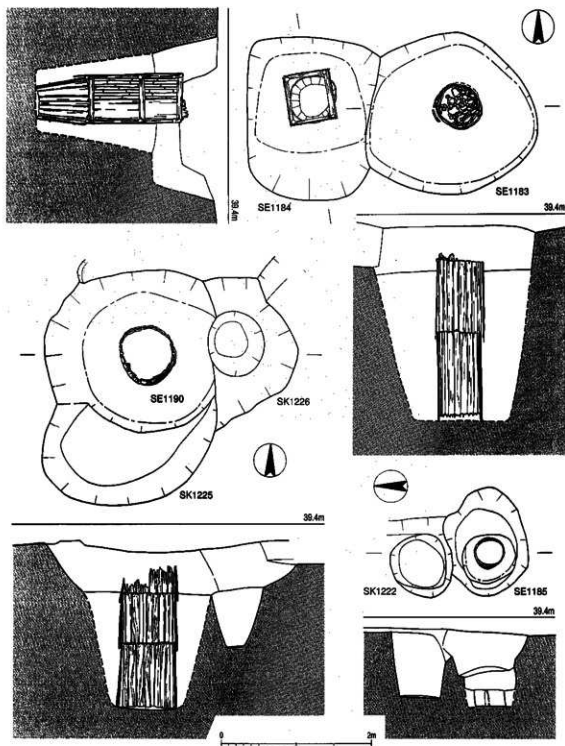


Fig. 114 東辺城井戸実測図② (1/50)

SE1193 (Fig. 116, PL. 82-2-3)

SE1192に南壁を切られる。井戸枠は存在しない。検出面から底面まで3.6mと深く、形状等からみて素掘りの井戸と考えられる。

SE1194 (Fig. 116, PL. 83-1-2)

SE1193のすぐ北側に位置する。桶側構造の井戸である。枠は4段確認した。上段部の上端

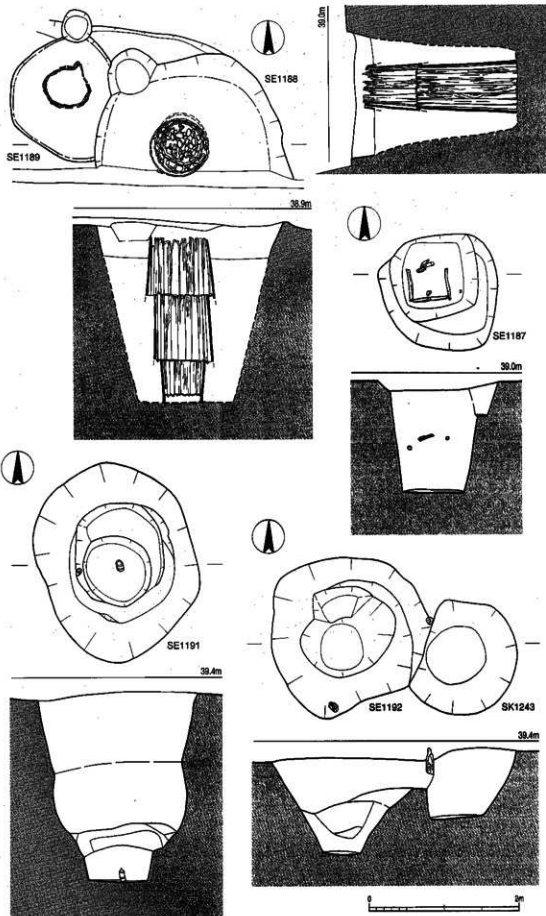


Fig. 115 東辺城并戸突測図③ (1/50)

Ⅲ 寺域の調査

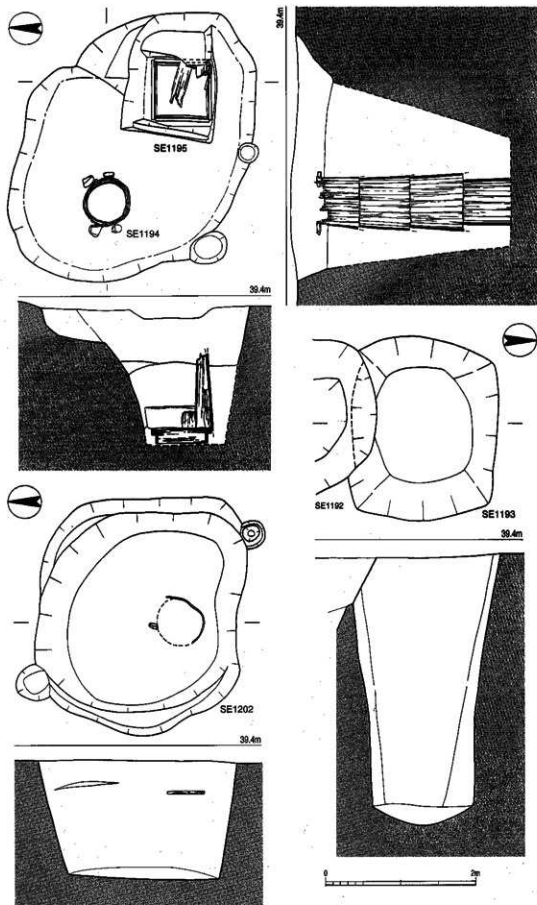


Fig. 116 東辺城井戸実測図④ (1/50)

は腐食が進んでいる。2段目は上端幅62cm・高さ73cm, 3段目はそれぞれ63cm・74cm。最下段は53cm・63cmと一回り小形で、桶側が膨らみになり、上端径と下端径が同一径となる。板材は6~10cmで、厚さは3.5cmを測る。S E 1195を切る。Ⅳ・A類。

S E 1195 (Fig. 116, PL. 83-1-3)

S E 1194の東側で、S E 1194に切られる。方形横板構造の井戸である。最下部に一辺77cm, 幅18cmの横板を方形に組み、その外側を厚さ5cm程の横棧で留めている。横棧は凹凸に柄を切る。そして、横棧の外側に幅19cm, 長さ107cm, 厚さ2.5cm程の横板を組み上げている。掘方は隅丸方形である。I・B類。 (吉村)

S E 1196 (Fig. 118, PL. 84-1)

S E 1191の2.3m北側に位置する。平面形は不整形形を呈し、長軸2.28m, 短軸2.08m, 深さ0.86mを測る。断面形状は上部が大きく開口する摺鉢形をなし、枠などもみられないことか

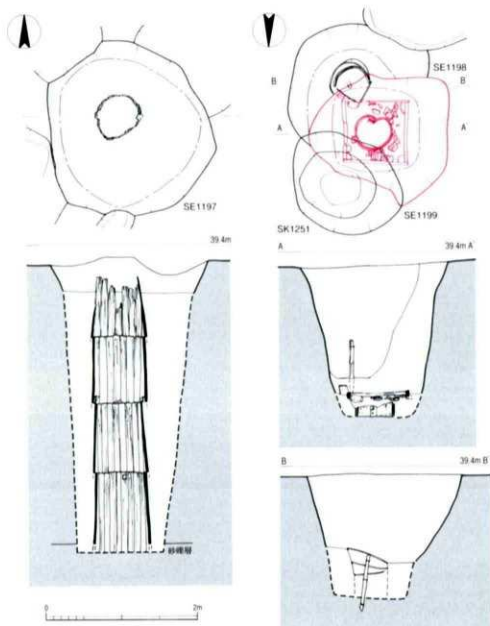


Fig. 117 東辺域井戸実測図5 (1/50)

III 寺域の調査

ら土坑とした方が妥当であろう。

(小田)

SE1197 (Fig.117, PL.84-2)

SE1196の1.5m東側に位置する。桶側構造の井戸である。枠は4段確認した。上段部の上端部は腐植が進んでいる。1段目は上端幅54cm・高さ88cm, 2段目はそれぞれ65cm・93cm, 3段目は58cm・98cm, 最下段は62cm・106cmを測る。4段目の上端部近くに12cm×12cmの枿穴が

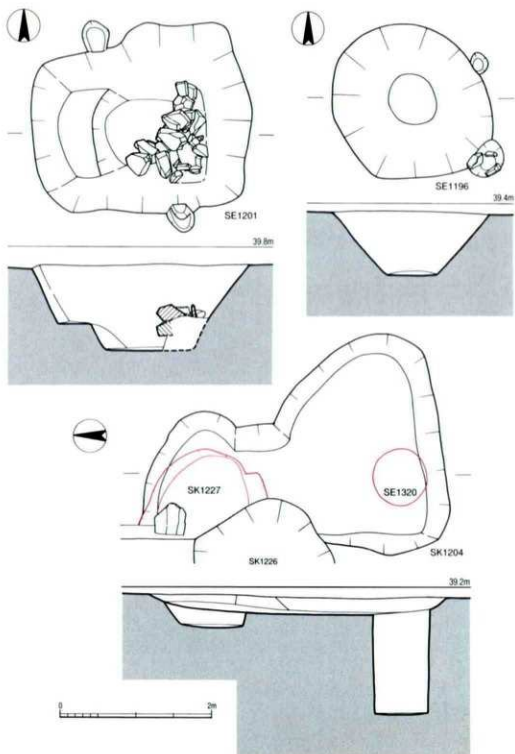


Fig.118 東辺城井戸実測図⑥ (1/50)

穿たれている。板材は幅7～9cmで、厚さは3cmを測る。IV-A類。

SE1198 (Fig.117, PL.84-3)

SE1197の北側に位置する。井戸枠は抜き取られ遺存していないが、竹タガが3段に残っていることから橋脚構造の井戸と考えられる。井戸の中央には、節を抜いて先端部を尖らせた竹が突き刺さっており、井戸祭祀を行っている。SE1199を切る。IV類か。

井戸祭祀

SE1199 (Fig.117, PL.84-2-3)

SE1198に南壁を切られる。井戸枠は多くが抜き取られ遺存状態が悪いが、方形縦板の井戸枠の下部に曲物を据えるタイプである。上部の井戸枠の最下部の横棧は方形に組まれ、一辺63cmを測る。材の幅は8cm、厚さ5cm。下部の曲物は二重になっており、それぞれ径46cm・高さ19cm、48cm・16cmを測る。横棧と曲物との隙間には瓦片が敷かれている。II-A類。(吉村)

SE1201 (Fig.118, PL.85-1)

第45次調査区の西側で検出した。掘方は隅丸長方形を呈し、長軸2.91m、短軸2.5m、深さ1.15mを測る。東壁側に2段の石積みが残存しており、石積み構造の井戸と考えられる。また、西壁にはテラスを設けている。

SE1202 (Fig.116, PL.85-2)

SE1182の3.5m南側に位置する。平面形は不整形を呈する。井戸枠は抜き取られ、曲物の一部が浮いた状態で出土した。

SE1320 (Fig.118)

SK1204を掘り下げて検出した。円柱形を呈する素掘りの井戸で、径0.72m、深さ1.38mを

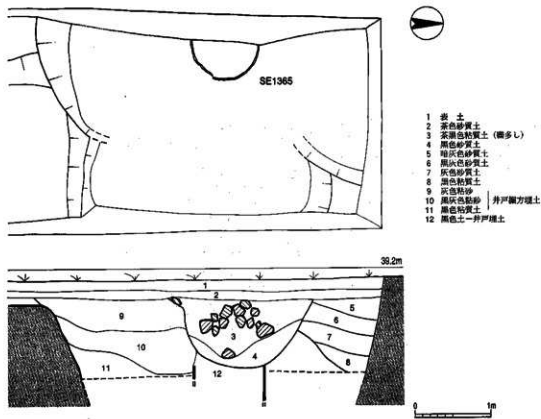


Fig.119 東辺域井戸実測図⑦ (1/50)

III 寺域の調査

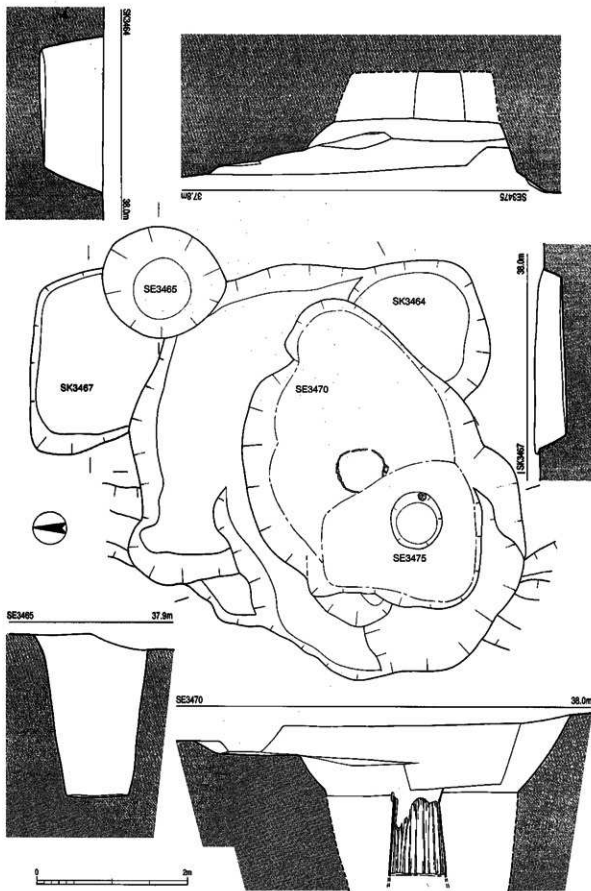


Fig. 120 東辺城井戸実測図⑧ (1/50)

測る。井戸底から「東院」銘墨書土器が出土している。

(小田) 「東院」銘
墨書土器

SE1365 (Fig. 119, PL. 71-2)

第47次調査区の北側で検出した桶側構造の井戸である。西側は調査区外となる。周辺が軟弱な土質であるために、井戸枠の一部を確認するに留めた。井戸枠の上端径は88cmで、板材の幅は5~13cmを測る。IV-A類。井戸枠上部に土坑状の落ち込みがあるが、自然石が多く含まれていることから、井戸枠部の沈下に伴う人為的な埋め戻しと考えられる。

SE3465 (Fig. 120, PL. 97-1)

第119次調査南区の中央部で検出した。井戸枠は遺存しておらず、形状等からみて素掘りの井戸と考えられる。底面は砂礫層に達する。SK3467を切っている。

SE3470 (Fig. 120, PL. 97-2-3)

第119次調査南区の中央部で検出した桶側構造の井戸である。枠は2段確認したが、上段についてはほとんど腐蝕し、僅かに3枚分の板材を確認し得たのみである。2段目は上端径56cm、高さ110cm以上で、幅9~10cmの板材を約20枚使用している。SE3475に切られる。IV-A類。

SE3475 (Fig. 120, PL. 97-2)

第119次調査南区の中央部で検出した。枠は残存していないが、桶側構造の井戸と考えられる。井戸枠の際に、径10cm程の杭が打ち込まれている。枠部の堀土は茶灰色粘質土。

SE3480 (Fig. 121, PL. 98-1)

SE3475の東側で検出した。方形縦板構造の井戸である。縦板は幅12cmのものが2枚残るのみである。井戸枠は一辺73cm×70cmを測る。枠下端部の南・東辺には幅9cm、厚さ2cmの板材を、北・西辺には径7cm程の丸木を横桟として組む。隅木は径8cmの丸木である。底面から曲物が出土した。II-A類。

SE3490 (Fig. 121, PL. 98-2)

第119次調査南区の北側で検出した。底部に曲物を据える井戸である。曲物は径44cm、高さ18cmである。SD3550に切られる。III類。唐三彩蜜の胴部破片が出土している。

唐三彩蜜片
の出土

SE3495 (Fig. 121, PL. 98-3)

SE3490の西側に位置する。方形縦板の井戸枠の下部に曲物を据える井戸である。上部の井戸枠は52cm×55cmで、深さ88cmを測る。板材の幅は11~13cmで、各辺に5枚ずつ使用する。曲物は38cm、高さ20cmを測る。II-B-b類。

SE3505 (Fig. 121, PL. 99-1)

SE3495の西側に位置する。方形縦板構造の下部に桶側を置き、さらにその下に曲物を据える構造の井戸である。上部の縦板は東側に5枚残っており、板材の幅は12cm前後を測る。桶側は上端径60cm、下端径56cm、高さ62cm。板材は幅10cm、厚さ1cm程のものを18枚使用している。上部の縦板枠との間の隙間には、人頭大の石や瓦を敷いている。曲物は径50cm、高さ30cmを測る。II-B類。

SE3510 (Fig. 121)

第119次調査北区の北東部で検出した。掘方の東側は調査区外となり、壁面の崩壊の恐れがあったため掘り下げていない。枠と考えられる部分には径60cm程の自然石が投げ込まれていた。SD1230を切る。

III 寺域の調査

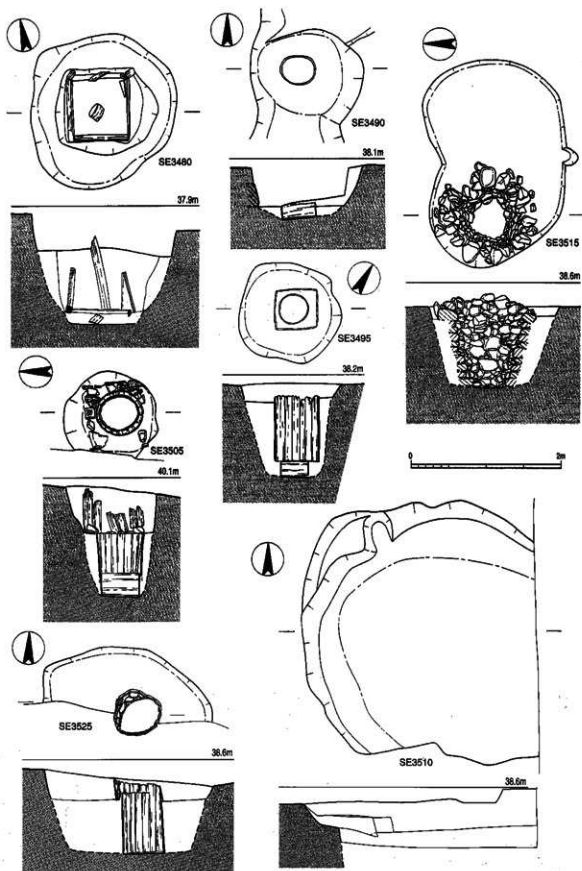


Fig. 121 東辺城井戸実測図② (1/50)

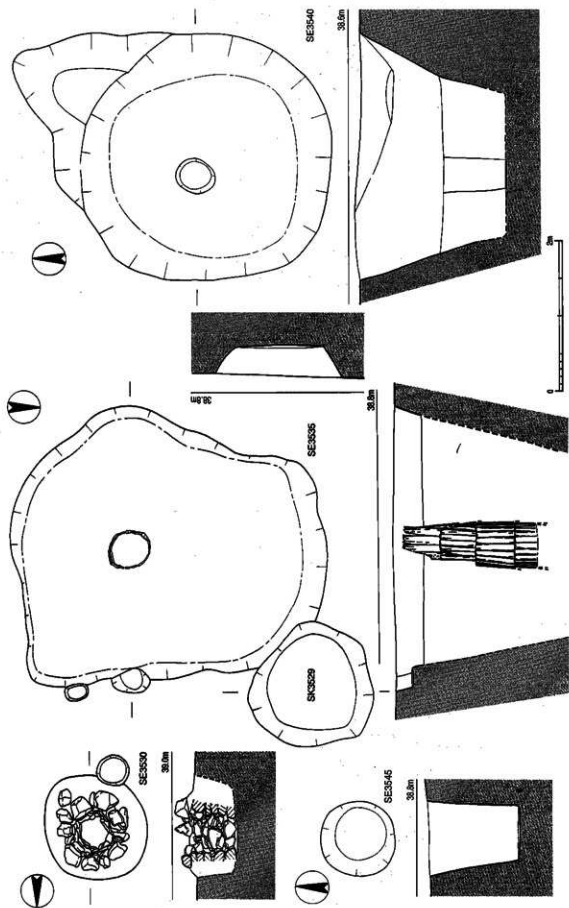


Fig. 122 東辺城井戸基跡① (1/50)

III 寺域の調査

S E 3515 (Fig. 121, PL. 99-2)

第119次調査北区の南側で検出した石組構造の井戸である。上端径0.8m、底径0.4mを測る。花崗岩の自然石による石積みは12段が残る。V類。

S E 3525 (Fig. 121, PL. 99-3)

S E 3515の南側に位置する。桶側構造の井戸である。南側は調査区外となる。井戸枠は2段を確認した。上部の枠は腐食が著しく、下端部が遺存するのみである。板材は21枚を使用している。下段の桶側は上端径47cm、下端径54cm、高さ79cmを測る。板材の幅は9~11cmで、20枚を使用している。上部の枠との隙間には小石を詰める。IV・A類。なお、埋土中から「香願天冥忌々如律令」銘の土師器皿が出土している。

S E 3530 (Fig. 122, PL. 101-1)

第119次調査北区の北側で検出した石組構造の井戸である。上端径0.58m、下端径0.38mを測る。花崗岩の自然石による石積みは6段が残る。V類。

S E 3535 (Fig. 122, PL. 100-1・2)

S E 3530の南西に位置する。桶側構造の井戸で、枠は4段確認した。上段部の上端部は腐食が進んでいる。板材は幅14~15cmと下部のものよりも幅広の材を用いている。2段目は上端径54cm、3段目は53cm、最下段は55cmを測る。板材の幅は8~10cmで、2段目~4段目はそれぞれ

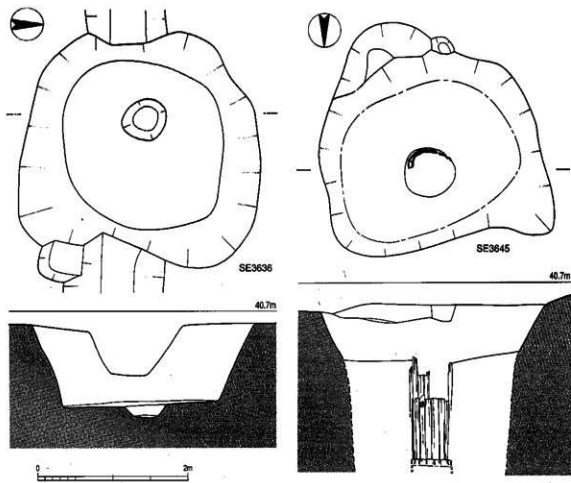


Fig. 123 東辺域井戸実測図① (1/50)

れ19枚を使用している。IV-A類。

SE3540 (Fig.122, PL.101-2)

SE3535の4m南西側に位置する。枠は遺存しないが桶側構造であると考えられる。

SE3545 (Fig.122, PL.101-3)

SE3540の5m西側に位置する。井戸枠は残っていないが、規模・形状からみて井戸と考えられる。

SE3636 (Fig.123, PL.106-1)

第121次調査区の中央部で検出した。井戸枠は残っていないが桶側構造の井戸と考えられる。枠は掘方の西に偏っている。SD3637に切られる。

SE3645 (Fig.123, PL.106-2・3,107-1)

第121次調査区の北東部で検出した桶側構造の井戸である。井戸枠は3段確認した。いずれの桶側も完存していない。2段目の板材には柄穴が穿たれているものがある。板材の幅は9～10cmを測る。IV類。SD3630に切られる。
(吉村)

6) 土坑

SK1203 (Fig.124)

第45次調査区の南端に位置し、SD1300を切り、SE1187と重複する。南半部は調査区外に延びるため詳細不明。東西長2.55m、深さ0.23mを測る。

SK1204 (Fig.118, PL.81-2)

第45次調査区の南側に位置し、SE1320を切り、SK1226に切られる。平面形は隅丸三角形状を呈し、長軸2.76m、深さ0.2mを測る。底面は平坦をなす。

SK1205 (Fig.124, PL.85-3)

第45次調査区の西側で検出した。偏円形を呈し、長径2.8m、深さ1.1mを測る。西壁の中程にテラスを有する。底面は平坦をなす。

SK1211 (Fig.124, PL.86-1)

第45次調査区の北東側に位置し、SB1250を切っている。楕円形を呈し、長軸2.62m、短軸2.04m、深さ1.34mを測る。東壁側には低いテラスを有する。

SK1213

第45次調査区の中程で検出した上層遺構で、SE1182を切っている。楕円形を呈し、長軸1.95m、短軸1.32mを測る。浅めの土坑であるが、土師器が割合多く出土している。

SK1215 (Fig.124)

SE1193に西端を切られて位置する。楕円形を呈し、残存長1.6m、南北幅1.14m、増高0.2mを測る。

SK1216 (Fig.124)

SK1215の2.5m東に位置する。長円形を呈し、長軸3.02m、短軸2.12m、深さ0.3mの大きさ。底面は平坦をなす。

SK1222 (Fig.114)

SE1185と重複しているが、遺構検出時点では土坑が井戸を切っていると判断した。円形を

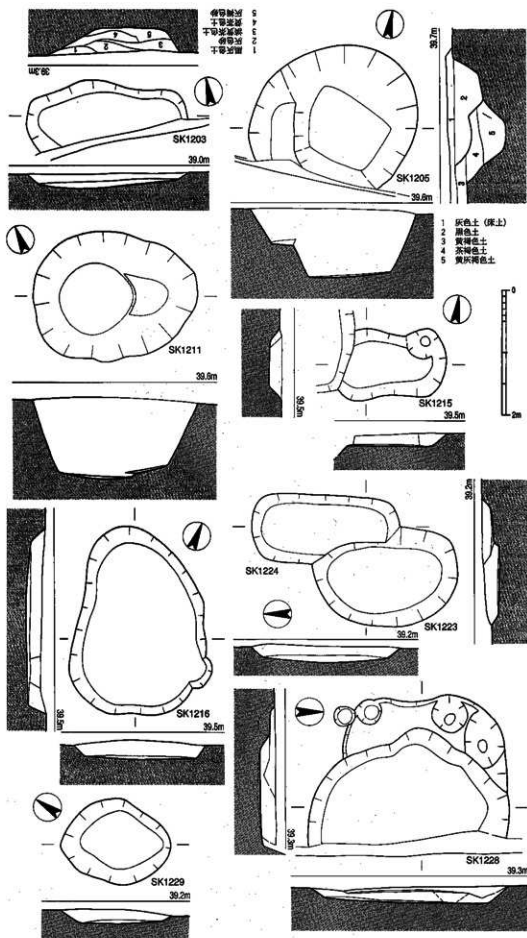


Fig. 124 東边城土坑实测图① (1/60)

呈し、長径0.86m、短径0.73m、深さ0.87mを測る。形態的に井戸の可能性もある。

SK1223 (Fig. 124)

SK1204の1.5m南西に位置し、SK1224を切っている。楕円形を呈し、長軸2.3m、短軸1.6mで、深さは0.26mと浅めの土坑である。

SK1224 (Fig. 124)

SK1204のすぐ南西側に位置し、SK1223に南西壁を切られる。隅丸長方形を呈し、長軸2.38m、短軸1.12m、深さ0.18mを測る。底面はほぼフラットである。

SK1225 (Fig. 114)

SE1190に北半部を切られる。楕円形を呈し、残存長2.32m、幅1.98m、深さ0.25mを測る。埋土中には炭化物が多く混入していた。

SK1226 (Fig. 114)

第45次調査区の南側で、SE1190・1320、SK1227を切っている。上面は長軸1.86mと広がるが、途中で径0.87mと窄まり、底部は径0.26mを測る。

SK1227 (Fig. 118)

SK1226に西壁の大半を切られるため詳細は不明。残存長1.2m、最大幅1.65m、深さ0.44mで、底面は平坦である。

SK1228 (Fig. 124)

SK1204の1m北東側に位置し、SD1300を切っている。東壁は土層観察ベルトの下になり、西壁は別遺構と重複する。南北長3.22m、深さ0.24mで、底面は平坦面をなす。

SK1229 (Fig. 124)

SK1225の2.3m西側に位置する。菱形状を呈する浅い土坑で、長軸1.75m、短軸1.4m、深さ0.24mを測る。

SK1238 (Fig. 125)

第45次調査区の南西側に位置し、SD1237と重複する。楕円形を呈し、長軸1.55m、短軸0.88mと小型であるが、深さは0.83mと大きさに比して深めの土坑である。

SK1241 (Fig. 125)

第45次調査区の南西側で、SK1229の6m北西側で検出した。不整形を呈し、長軸1.68m、短軸1.27m、深さ0.28mを測る。

SK1243 (Fig. 115, PL. 82-2)

SE1192の東隣に重複して位置する。径1.57m、深さ0.9mを測り、底面は平坦である。埋土中には土器・瓦片が多量に入っていた。

SK1244 (Fig. 126)

SK1243の南側で、同土坑と壁を接して検出した。長軸4.14m、短軸2.62mの不整形を呈し、深さは0.2mと浅い。底面はフラットをなす。

SK1246 (Fig. 125)

SK1215の1.5m北側に位置し、SE1195に南西隅を切られる。平面形は隅丸方形を呈し、長軸2.78m、短軸2.02mの大きさで、壁高は0.15mの遺存状況。底面はフラットである。

III 寺域の調査

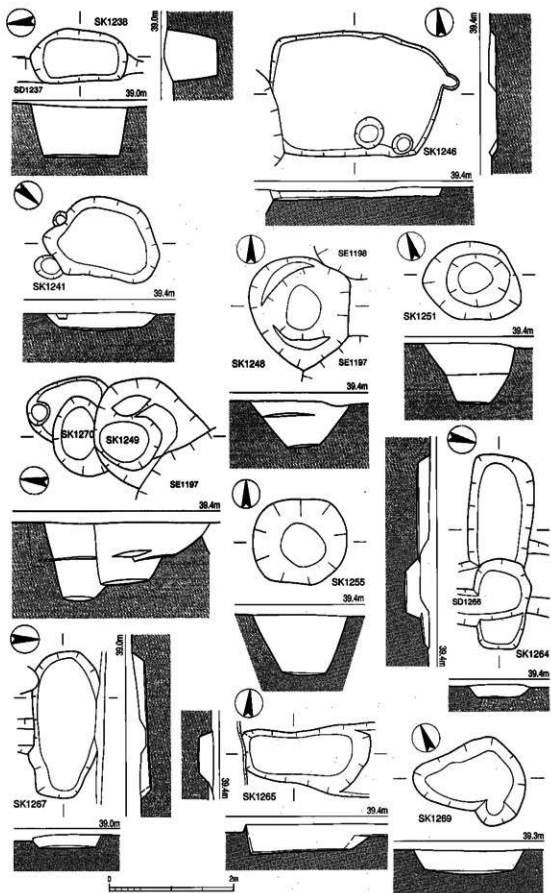


Fig. 125 東辺城土坑実測図② (1/60)

S K 1248 (Fig. 125, PL. 84-2, 86-2)

S K 1216の3.5m北東側に位置し、S E 1197・1198を切っている。平面形は円形を呈し、断面は摺鉢形をなす。径1.6m、深さ0.73mを測る。

S K 1249 (Fig. 125, PL. 84-2)

第45次調査区の中程に位置し、S E 1197に切られ、S K 1270を切っている。円形を呈し、東西長1.63m、深さ0.98mを測る。南壁には幅0.3mのテラスを設けている。

S K 1251 (Fig. 125)

S K 1240の1.5m北側に位置し、S E 1199を切っている。平面形は長円形を呈し、長軸1.6m、短軸1.24m、深さ0.98mを測る。

S K 1255 (Fig. 125, PL. 86-3)

S E 1201の2m東側で検出した。円形を呈し、長径1.5m、短径1.35m、深さ0.98mを測る。断面は摺鉢形を呈し、上面は大きく開口する。

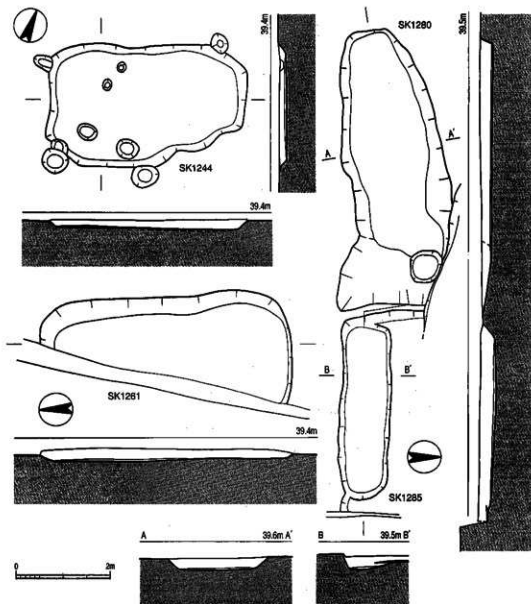


Fig. 126 東辺城土坑実測図③ (1/80)

Ⅲ 寺域の調査

S K1257 (Fig. 113)

S E1186に西壁の大半を切られて位置する。不整形を呈し、最大幅1.96mを測る。底面は平坦で、壁高は10cmの遺存状況。

S K1261 (Fig. 126)

第45次調査区の北西側で検出した。隅丸長方形を呈し、長軸5.3m、深さ0.28mを測る。底面は平坦であるが、北側に緩傾斜している。

S K1264 (Fig. 125)

第45次調査区の北東側に位置し、S D1266に切られる。長方形の土坑で、東西方向に長軸を有する。長さ3.1m、幅1m、深さ0.2mを測る。

S K1265 (Fig. 125)

S K1264の1.5m東側に位置し、S B1250柱掘方に切られる。長方形を呈し、長軸2.06m、短軸1.12m、深さ0.48mを測る。底面は西側に若干下がっている。

S K1267 (Fig. 125)

第45次調査区の南東側に位置する。不整形長方形を呈し、長軸2.34m、短軸0.98m、深さ0.16mを測る。

S K1269 (Fig. 125)

S K1267の2.2m西側で検出した。三角形を呈し、長軸1.8m、深さ0.68mを測る。

S K1270 (Fig. 125)

S K1249の北側で、南壁を切られて位置する。また、東壁側は別遺構と重複している。深さは1.25mあり、小形ながらしっかりした土坑である。

S K1280 (Fig. 126)

第45次調査区の北西側で検出した。茶灰色土層から切り込まれた長方形の土坑で、下層には植物遺体層が堆積している。堀土中からは墨書を有する土器が多く出土している。また、輪羽口・埴塼片もみられた。長軸5.86m、短軸2.04m、深さ0.24mの大きさ。

少量の墨書
土器出土

S K1285 (Fig. 126)

S K1280の東隣に位置する。当土坑も茶灰色土層から切り込まれた土坑で、土層的にもS K1280と類似する。隅丸長方形を呈し、長軸3.9m、短軸1.08m、深さ3.02mを測る。堀土中から「造寺」・「□調長」銘の墨書土器が出土している。

「造寺」銘
墨書土器

S K1354 (Fig. 127)

第47次調査区の南西隅で検出したが、大半が調査区外にあるため詳細は不明。深さは0.85mを測る。今回、新たに報告した。

S K1357 (Fig. 127)

S K1354のすぐ北側に位置し、S B1355・1362と重複する。前回未報告であるが、隅丸方形を呈し、中に角礫などが入っていたので、土坑として報告した。長軸1.35m、短軸1.26m、深さ0.35mを測る。

S K1359 (Fig. 127, PL. 71-1)

第47次調査区の中央やや南側にあり、S B1350を切っている。東西に長い溝状の土坑で、長さ3.55m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。底面は平坦ではなく、中程が深くなっている。堀土中

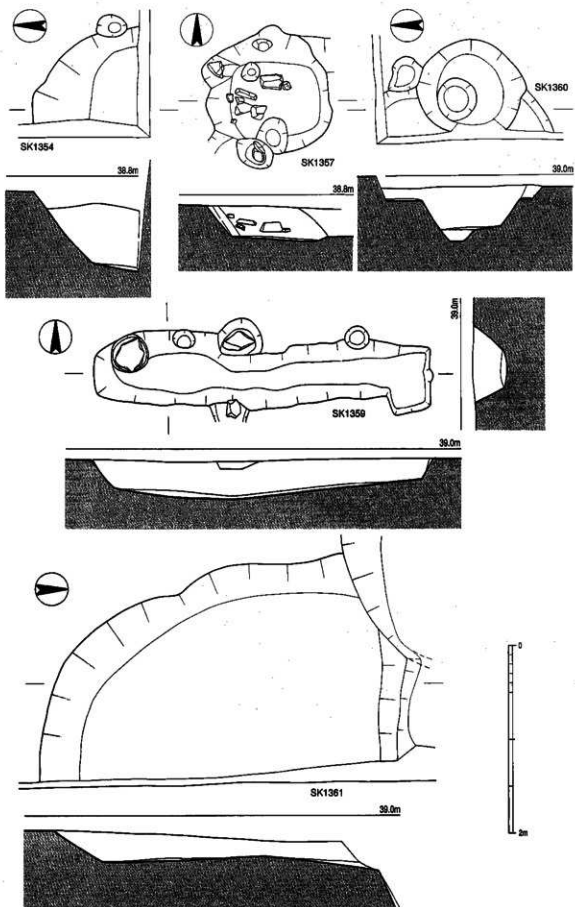


Fig. 127 東辺城土坑実測図④ (1/40)

Ⅲ 寺域の調査

から多くの土器が出土している。

S K 1360 (Fig. 127)

第47次調査区の西壁中央で検出した。直接的な切合い関係はないが、S A 1352と重複する。径1.05mの円形を呈し、深さは0.45mを測る。底面にはピットがあるが、当土坑に伴うものか不詳。

S K 1361 (Fig. 127)

第47次調査区の北側に位置し、S E 1365に切られる。大半が調査区外にあるため詳細は不明。径6m程の円形を呈するか。壁高は0.3mで、底面は平坦である。

S K 3464 (Fig. 120, Pl. 97-2)

第119次調査南区の中央で検出した。S E 3470に西壁側を切られるものの隅丸方形を呈するか。残存長2.22m、深さ0.84mを測る。底面は平坦をなす。埋土は黒褐色土であった。

S K 3467 (Fig. 120)

第119次調査南区の中央部に位置し、S E 3465・3470に切られる。南壁を失うが、平面形は隅丸方形を呈し、長軸2.34m、深さ0.42mを測る。

S K 3471 (Fig. 128)

第119次調査南区の北東側で検出した。隅丸方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.16m、深さ0.38mを測る。

S K 3485 (Fig. 128)

S K 3467の3.5m南西側で、S D 3478の先端の穴を土坑として報告する。不整円形を呈し、長軸1.46m、短軸1.15m、深さ0.48mを測る。底面には角礫が置かれていた。

S K 3501 (Fig. 128)

第119次調査北区の南東側に位置し、S K 3502を切っている。不整円形を呈し、長軸2.36m、短軸2.2m、深さ0.45mを測る。埋土は黒灰色土で、多数の土師器が出土した。

S K 3502 (Fig. 128)

S K 3501の東側で、西壁の一部を切られて位置する。楕円形を呈する小土坑で、長径1.5m、深さ0.22mを測る。

S K 3506 (Fig. 128)

S K 3501の6m北側で検出した。不整長方形を呈するが、西壁は丸みを帯びる。長軸3.8m、短軸2.8m、深さ0.36mを測る。底面はほぼフラットである。

S K 3507 (Fig. 128)

S K 3506の1m北側で検出した。隅丸長方形の小土坑で、長軸1.2m、短軸0.75m、深さ0.5mを測る。埋土は粘性の強い黒灰色土であった。底面は平坦であるが、西に緩傾斜している。

S K 3529 (Fig. 122)

第119次調査北区の中程に位置し、S E 3535を切っている。平面形は不整円形を呈し、径1.68m、深さ0.42mを測る。底面は平坦をなす。

S K 3553 (Fig. 96)

第119次調査北区の南西側で検出した上層遺構。平面形は長円形を呈し、長軸2.26m、短軸1.38m、深さは8cmと削平が著しい。S A 3561に囲まれる形で位置する。

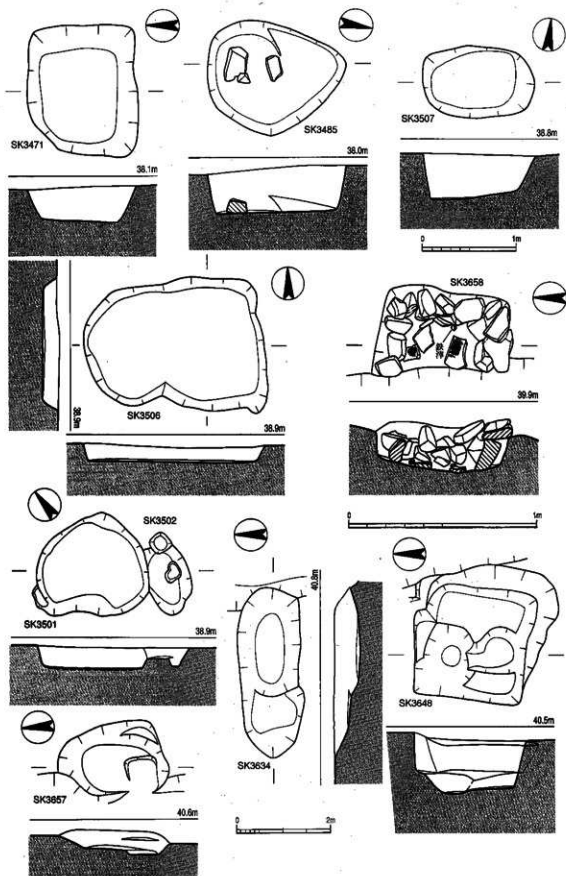


Fig. 128 東辺城土坑表測図⑤ (1/20・1/40・1/80)

III 寺域の調査

S K3614 (Fig. 129)

第121次調査区の東壁中央で検出した。S D3630に上部を削平される。北壁長4.1m, 南壁長2.5m, 東壁長5.5mを測る逆台形を呈する土坑で、底面はフラットである。垣土には暗灰褐色の粘質土が堆積していた。

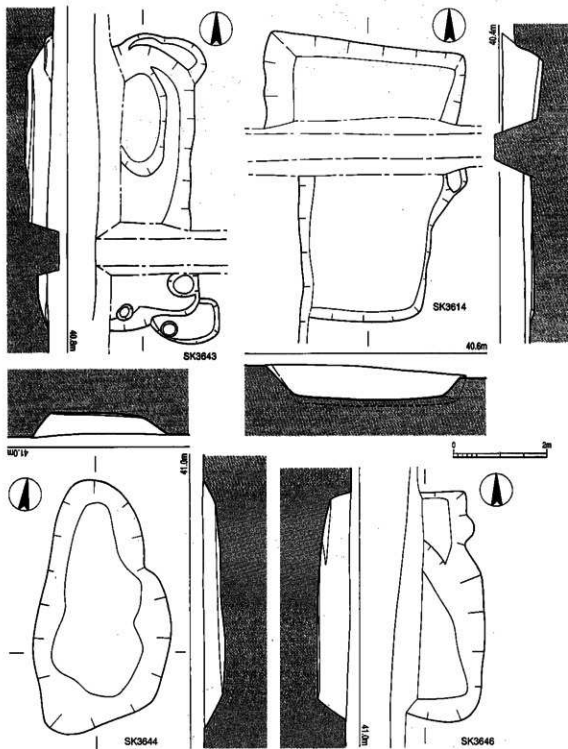


Fig. 129 東辺城土坑実測図⑥ (1/80)

S K 3634 (Fig. 128)

S K 3614の5.5m南西側に位置し、S D 3630に東端部を切られる。長円形を呈し、長軸3.6m、短軸1.35m、深さ0.54mを測る。西壁側には幅0.7mのテラスを有する。

S K 3643 (Fig. 129)

第121次調査区の西壁中央で検出した。西半部は調査区外に延びるものの平面形は隅丸長方形を呈しよう。南北長6.3m、壁高0.54mで、底面の北半部が楕円形状に一段深くなっている。

S K 3644 (Fig. 129)

S K 3643の3m北東側に位置し、S A 3624を切る。不整楕円形を呈し、長軸5.4m、短軸2.9m、深さ0.45mを測る。底面は平坦であるが、南側に緩傾斜している。

S K 3646 (Fig. 129)

S K 3644の2.5m西側で、S K 3643の北側に位置する。西壁は調査区外に延びる。南北長4.9m、深さ0.7mを測る。底面はほぼフラットで、北側に低いテラスを有する。

S K 3648 (Fig. 128, PL. 107-2)

S K 3634の5.5m南側にあり、S B 3610・3626、S A 3621に切られる。一辺2.4mの隅丸方形を呈し、底面には凹凸がみられる。埋土中から鉄滓が出土している。

S K 3657 (Fig. 128)

第121次調査区の東壁中央で検出した。S A 3625を切り、S D 3630に西壁を切られる。隅丸方形を呈し、長軸2.36m、短軸1.46m、深さ0.4mを測る。

S K 3658 (Fig. 128, PL. 107-3)

S K 3614の3.5m南側に位置し、S D 3630に切られる。前回は石組井戸S E 3658と報告していたが、縮尺・寸法に誤りがあった。実際は東壁長64cm、残高24cmの大きさである。また、比較的小型の石組井戸であるS E 3530ですら掘方径は1.3mで、石組の下場内径は0.6mを測る。それからしても井戸とは見なし難く、今回は土坑として報告した次第である。掘方内には15cm前後の石が詰まっており、瓦片・鉄滓などが出土した。(小田)

7) 池状遺構

S X 1200

第45次調査区の北端で検出した。池状の落込で、S B 1250及びS K 1280を切っている。東西21m、南北8mを確認したが、遺構としては北東側に広がる。最深部で遺構面からの深さ50cmを測る。埋土には腐植土が厚く堆積しており、多量の土器・陶磁器・瓦類及び木製品が出土した。また、「元□二年」銘の卒塔婆も出土している。

「元□二年」
銘 木 簡

S G 1305 (Fig. 130, PL. 89-1)

第45次調査区の北側に位置し、S A 1235・S B 1240・S D 1230に切られる下層遺構で、先の遺構と重複しているため北辺と南辺の一部を検出したにすぎないが、復原は十分可能である。平面形は東西方向に長い長方形を呈し、南北長は4.9m、東西復原長は6.5m、深さは最深部で0.8mを測る。取水部は幅1.9mで、池の最深部より20cm高い。また、池の南辺部には排水施設となる石組S X 1306を付設しており、池と南北溝S D 1300を繋いでいる。

長方形の池

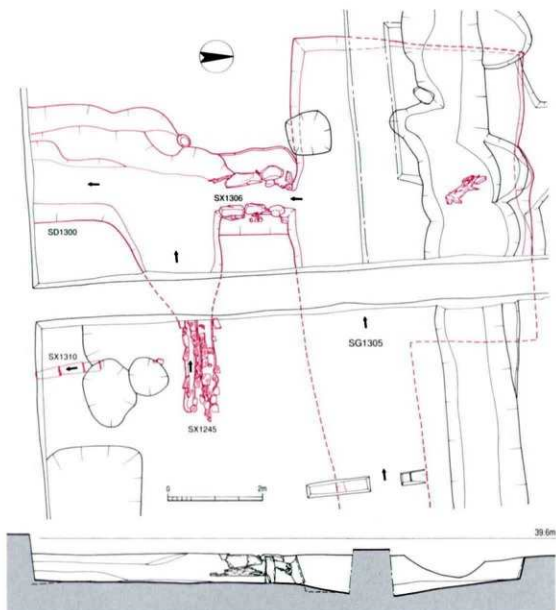


Fig. 130 池SG1305実測図 (1/80)

排水施設

S X 1306 (Fig. 130・131, PL. 89)

SG 1305に伴う石組水路で、掘方は幅1.8mを測る。右岸の石組は2個で、池側の石は立てて用いるが、溝側の石は横板材の上に乗せた状態である。左岸は40cm×50cm程の偏平な石を3個立てていた。石組長1.35m、内法0.36mを測る。

池と溝との接続部分を石組としたのは、接続部分の補強と水量調節及びこの箇所を通路として確保する必要があったためと考えられる。上部が削平されているため開渠となっているが、本来暗渠であった可能性を有する。 (小田)

8) 暗渠

S X 1245 (Fig. 130-131, PL. 87-1-2)

第45次調査区の北側で検出した瓦組暗渠で、西端はS D 1300に接続するものと考えられる。階段状に3段掘り込み、各段ごとに平瓦片を斜めに埋設したもので、最下部は幅25cmの溝状となっている。S G 1305発掘後、S D 1300の先端を右側に曲げS X 1245に繋げている。検出長2.1

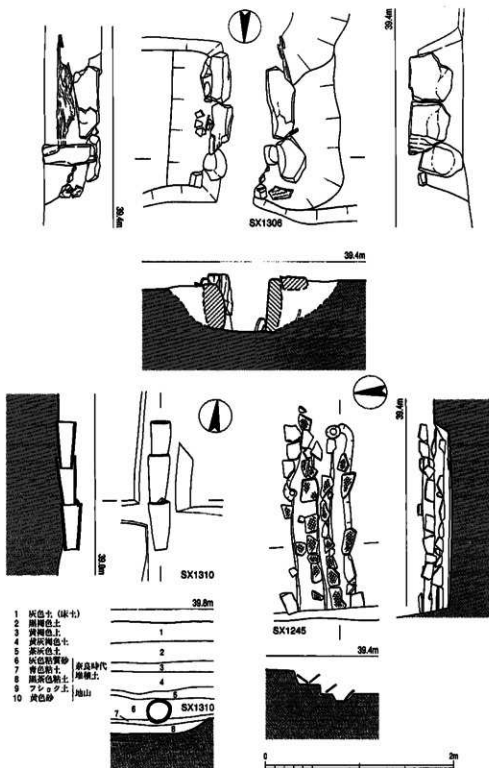


Fig. 131 排水施設 S X 1306, 暗渠1310, 瓦組 S X 1245実測図 (1/40)

III 寺域の調査

m, 幅0.65mを測る。

S X 1310 (Fig. 130-131, PL. 87-1, 88-1-2)

S X 1245の2 m南側で検出した。灰色粘砂に埋設されており、南北方向に土管を3本連結させたものである。土管一本の長さは50cm前後で、全長1.36mとなる。南側に排水しているが、いかなる施設に伴うものかは明らかでない。 (小田)

9) 鋳造関連遺構

S X 3566 (Fig. 132)

第119区次調査北区の西側で検出した。1間×1間建物の中央に方形土坑を掘り込んだ形態をなす。柱穴は径50cm前後の円形をなし、梁行1.5m, 桁行1.75mを測る。中央土坑は方形を呈し、0.7m×0.75m, 深さ0.26mを測る。堀土中から鋳型片が出土しており、鋳造関連の施設と考えられる。

S X 3640 (Fig. 132, PL. 108)

第121次調査区の中央やや西側で検出した。瓦溜 S X 3632に掘り込んでいる。掘方は兩方形を呈し、南北1.7m, 深さ0.28mで、底面は凹凸が著しい。最下部に炭化物混じりの暗黄褐色粘質土 (③層) を入れ、次に茶褐色粘質土 (②層) を1.1mの範囲で貼り付け、最後に灰白色粘土 (①層) を0.7mの範囲で貼付する。②層の上にも真土状の粘土を貼付しているが、

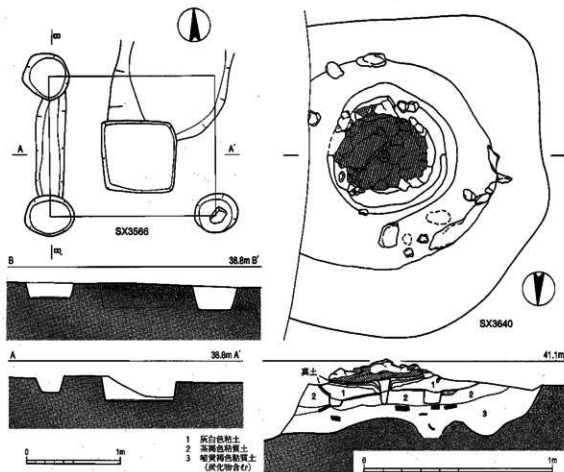


Fig. 132 鋳造遺構 S X 3566・3640実測図 (1/20・1/40)

上面のみならず厚さ1cmばかり黒変している。また、①層下部には枕木痕跡とみられる10cm弱の方形穴が左右に観察できる。①層目の表層は緻密な真土を貼付しており、強い火熱により赤化する。火熱が内部まで浸透したようで、表層から4cm程まで黒化している。上面中央には径6cm、深さ13cmの孔を穿つ。この孔が中子を支えるためのものであるなら①層自体は鋤型外型とみなされる。なお、当遺構は半裁し、保存している。(小田)

10) 落込

S X 3618

第121次調査区の南端で検出した隅丸方形の落込みで、S D 3619と重複するが、土坑の方が後出する。南北長7m以上、深さ0.35mの大きさで、埋土は灰褐色粘質土であった。

S X 3650

第121次調査区の北東隅で検出したが、大半が調査区外にある。S D 3630と重複する落込で、検出面からの深さは0.7mを測る。寛政5年(1793)に完成したとされる『筑前国鏡風土記付録』の観世音寺周辺を描いた絵図によると、講堂の東側に「猿沢池」が描かれ、池の中には木と石?が表現されている。その30年程後の文政4年(1821)に描かれた『筑前名所図説』では、講堂の東側に木が描かれ「さる沢」と表記されているが、既に池の表現はなく、畑となっている。この絵図に描かれた木が現在の楠とすると、S X 3650は「猿沢池」に該当しよう。【猿沢池】か

S X 3651

S X 3650の2m西側で検出した。長軸4.8m、短軸3.3m、深さ0.2mの不整形を呈する浅い落込である。

S X 3652

S X 3651の1.7m北側に位置する。長軸2.8m、短軸1.5m、深さ0.2mの楕円形を呈する浅い落込で、S B 3620の柱掘方は当土坑床面で検出した。また、掘方埋土上から須恵器甕が出土している。

S X 3653

S X 3651の3.8m西側で、西半部は調査区外に延びる。S X 3635の南西壁を若干切っている。東壁長1.8m、深さ0.2mの隅丸方形を呈する浅い落込。

S X 3654

S X 3652の3.3m西側に位置する。遺存状態が悪く、東壁10cmが残る程度であった。

(小田)

11) その他の遺構

瓦溜

S X 3632

第121次調査造鉢造橋 S X 3640の東隣で、同遺構に切られる。不整形を呈する瓦溜で、幅2.1m、深さ0.2mを測る。

S X 3635

S X 3651の西側から調査区隔にかけては、茶褐色土が堆積した浅い落込が広がり、埋土中か

Ⅲ 寺域の調査

らは老司Ⅰ式軒瓦や鬼瓦とともに巴文軒丸瓦などの瓦類が出土しており、特にS X 3653と接する箇所によくみられた。S X 3651・3654も同様な遺構である。

土器類

S X 3655

第121次調査区の南西で検出した。S D 3619埋没後の薄茶色土中から集積した状態で土師器坏が出土したが、掘込は明瞭ではない。坏は数個を重ねた状態で出土しており、その殆どに油煙がみられたことから灯火器としての使用が考えられる。講堂の補足調査として実施した第126次補足調査検出の廃棄土坑S K 3789・3795も同様な性格の遺構で、法要に使用した土器を一括埋納したものとみられる。

土師の一掃
殺 菌

石 垣

S X 437 (Fig. 133, PL. 69)

第20次調査区の南端で検出した。石垣の南側は暗灰色土が堆積した谷部となっており、谷部を整地・地上げた際の腰岸として構築されたもので、西側に延びる可能性がある。石垣は検出長2.1m、高さ1.06mを測り、一辺22~45cm、厚さ11~33cmの花崗岩・砂岩・凝灰岩の切石を最高5段積み上げたもので、中には五輪塔の地輪を転用したのもみられた。

積石塚

S X 1220 (Fig. 134, PL. 88-3)

第45次調査区の南西部には、長径6.7m×短径5.5mの小山が存在する。この小山については、奥村玉圃の編集による『筑前名所図会』（文政4年成立）に小山が描かれ、「ごま堂址」の文字が記入されていることから護摩堂=普窟院の基壇の一部とする意見と東辺築地の遺構とする意見があった。そこで、小山に幅1m、長さ4.3mのトレンチを入れ盛土土層の確認を行った。

その結果、盛土土層は大きく上層の表土層（①層：厚さ0.4~0.6m）と5cm大の礫が詰まった礫層（⑤層：厚さ0.9m）からなり、小石を積み上げた塚であることが判った。礫層には殆ど遺物は含まれないが、表土層には近世の遺物が含まれていた。また、積石塚本体は黒褐色土の上にあることから中世をさほど遡るものでもなく、普窟院及び東面築地に関する遺構である可能性は完全に否定された。

しかし、積石塚の東側には「コ」字形に遡る幅0.9~1.1m、深さ0.5mの礫敷があり、東西

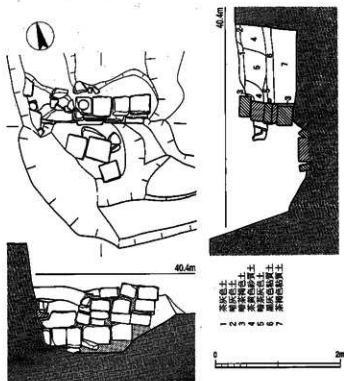


Fig. 133 石垣 S X 437実測図 (1/60)

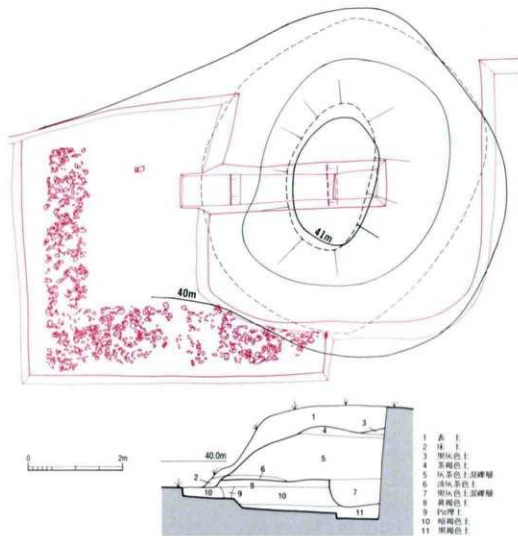


Fig.134 積石塚 S X1220実測図 (1/80)

幅は外側で7m、内側では5mを測る。しかし、この礎敷は第119次調査区までは延びていないので外側幅7mの方形を呈するものとみられる。この礎敷を建物に伴う雨落溝とみなすことが可能ならば伝承などから考えて、この場所に室町時代頃に護摩堂が建っていたとすることも強ち無理はない。ちなみに菩薩院に関しては、『観世音寺絵図』によると戒壇院と対になる場所—東面築地と南面築地との隅部に描かれており、現宝蔵の南側の未調査地に想定される。

護摩堂の跡か

(小田)

Ⅲ 寺域の調査

(3) 北辺城

北辺城の調査としては、大宰府史跡第70次・70次補足・120次・123次・144次調査がある。第70次・70次補足・120次調査は観世音寺の解明を目的とした計画調査であるが、他は現状変更（住宅改築等）に伴う確認調査として実施した。

1) 櫓

S A 1737 (Fig. 135)

第70次調査区の東側で検出した。東西方向に走る櫓で、4間分を確認した。柱穴は隅丸形状を呈し、径0.5m前後を測る。柱間は2.4m等間である。

S A 1840 (Fig. 135, PL. 112-1-2)

第70次調査区の中央に位置する。下層遺構で、S K 1771・1772・1778などの遺構に切られる。東西方向に走り、5間分を検出した。建物の可能性があったため精査したが、関連する柱穴は検出できなかった。

柱穴は隅丸形状を呈し、大きいもので1.1m程の掘方である。柱根が遺存しており、柱間は心々で西から2.55m, 2.7m, 2.55m, 2.4m, 2.4mと若干ばらつきがある。

S A 3590 (Fig. 136, PL. 129-2-3)

第120次調査区の南部で検出した東西方向の櫓である。柱穴は東西溝S D 3596中に掘り込まれている。8間分を検出した。柱間は一定しておらず、0.82~1.06mを測る。

S A 3595 (Fig. 136, PL. 129-2-3)

第120次調査区の南西部で3間分確認した。検出長は6.4m。柱筋に並ぶ小さなピットもこの櫓に伴う可能性がある。

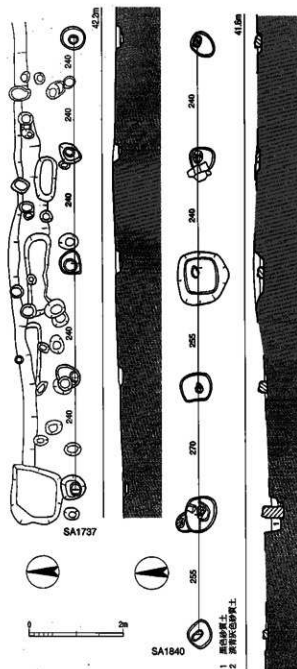


Fig. 135 北辺城構築測図① (1/80)

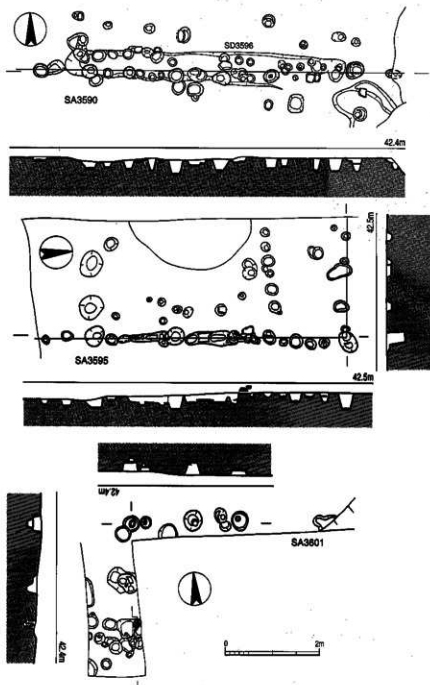


Fig. 136 北辺城横穴測定図② (1/80)

S A 3601 (Fig. 136)

第120次調査区の南中央に位置し、S B3606と重複するもの前後関係は不詳。北西隅部の検出に止まるが、東西2間分で南に折れるものと思われる。柱穴は円形を呈し、径0.34~0.4 m、深さ0.2~0.3mを測る。

(小田)

Ⅲ 寺域の調査

2) 建物

SB1691 (Fig. 137)

第70次調査区の東側で検出した上層遺構である。扁平な石2個が2.1m間隔で存在し、石の上面が平らで、かつ同レベルであることから建物礎石と判断した。

右側の礎石は長方形を呈し、長さ0.57m、幅0.43m、厚さ0.14mを測る。左側の礎石は三角形を呈し、長さ0.62m、厚さ0.26mの大きさである。礎石2個の遺存状態であるため建物規模等は不明。

SB1695 (Fig. 138)

第70次調査区の中央に位置し、床土除去後に検出した上層の礎石建物である。礎石自体は遺存しておらず、根石を

礎石建物

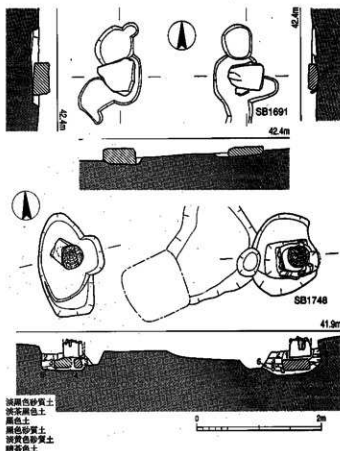


Fig. 137 北辺城建物実測図① (1/60)

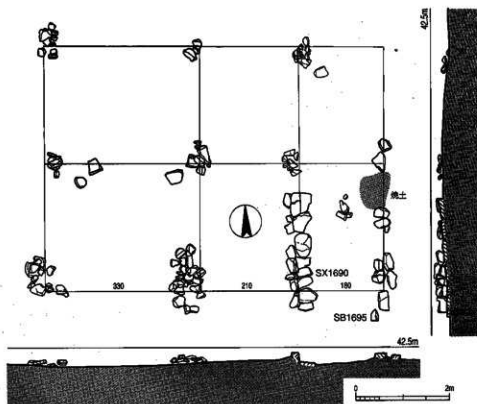


Fig. 138 北辺城建物実測図② (1/80)

留めるのみ。根石には20~30cm大の花崗岩を使用している。礎石が残っていないため建物の正確な数値は測り得ないが、梁行2間(5.1m)×桁行3間(7.2m)の規模で、桁行の柱間は1.8m, 2.1m, 3.3mに復原した。石組SX1690は石列の方向及びレベルが根石と同じであることから当建物に伴う遺構と考える。また、東梁側中央には60cm程の焼土面がみられる。(小田)

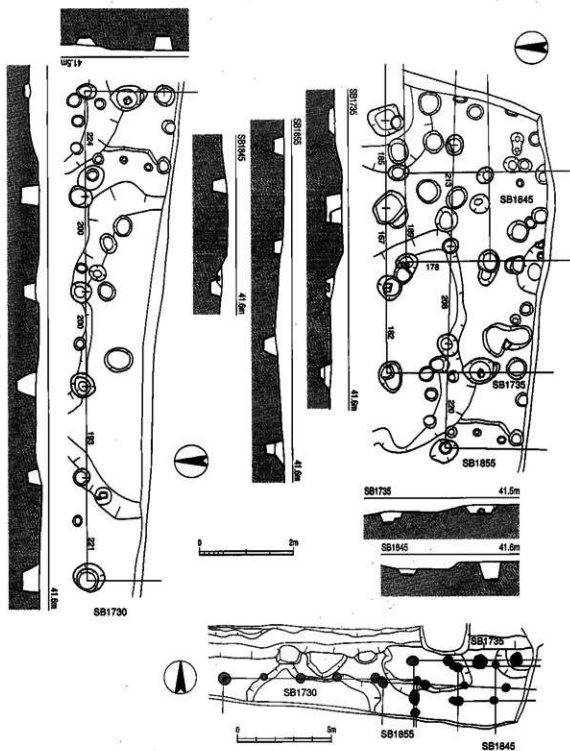


Fig. 139 北辺城建物実測図③ (1/80)

Ⅲ 寺域の調査

SB 1730 (Fig. 139, PL. 113-1)

第70次調査区の南東部で検出した梁行1間以上×桁行5間の東西棟建物である。南側は調査区外となる。建物規模は10.41m×1.63m以上である。桁方向の柱間は2.08m等間に復元される。SB 1735・1855と切り合う。

SB 1735 (Fig. 139, PL. 113-1)

第70次調査区の南東隅部で検出した梁行1間以上×桁行3間以上の東西棟建物である。南側と東側は調査区外となる。桁方向の柱間は1.79m等間に復元される。SB 1730・1845・1855と切り合う。

SB 1748 (Fig. 137, PL. 112-3)

第70次調査区の中央部で検出した1間の掘立柱遺構である。最上層で検出した。掘方は東側が1.3m×1.1mの楕円形、西側が1.7m×1.1mの不整形を呈する。ともに径0.35mの柱根が遺

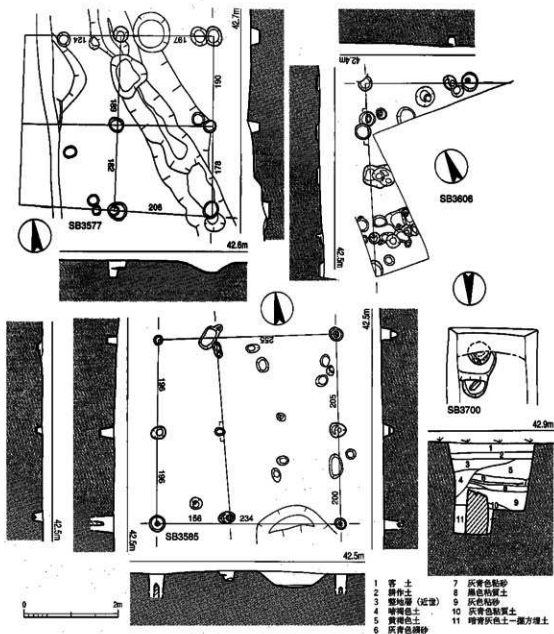


Fig. 140 北辺域建物実測図④ (1/80)

存している。下部が軟弱な地盤であるため自然石を礎盤として柱の下部に配している。柱の心々で3.65mを測る。遺構の性格については定かではない。(吉村)

S B 1845 (Fig. 139, PL. 113-1)

S B 1735・1855と重複して検出した掘立柱建物であるが、両者の前後関係は不明。検出した範囲では梁行・桁行とも1間以上の規模であるが、2間(3.78m)×2間(3.56m)の総柱建物として復原した。柱穴は0.32~0.46mの円形を呈し、深さは0.3mの遺存状況。

S B 1855 (Fig. 139, PL. 113-1)

S B 1735・1845と重複し、S K 1757を切っている。北側柱を3間分検出した程度であるが、西端の柱穴は他に比して大きい。また、西延長線上に柱穴とすべき穴がないことから隅柱柱穴と考え、桁行3間以上の東西棟建物とみなした。

S B 3577 (Fig. 140)

第120次調査区の北西部に位置し、S D 3605を切っている。梁行2間(3.7m)×桁行2間の総柱建物として復原した。柱穴は0.26~0.4mの円形を呈し、深さ0.2~0.3mを測る。

S B 3585 (Fig. 140, PL. 129-2)

第120次調査区の南東側に検出した。S D 3605を切り、S E 3570と重複する。梁行1間(3.9m)×桁行2間(4.05m)の掘立柱建物で、柱穴を結ぶ線はほぼ方形をなす。柱穴は0.18~0.34mの円形を呈し、深さ0.2~0.4mを測る。なお、南側の隅柱には柱根が遺存していた。

S B 3606 (Fig. 140)

第120次調査区の南端中央に位置し、S A 3601と重複する。大半が調査区外にあるため詳細は不明であるが、一応梁行1間以上×桁行3間以上の掘立柱建物と考えた。桁側の柱間は1.03m, 0.92m, 1.29mとばらつきがみられる。(小田)

S B 3700 (Fig. 140, PL. 131-3・4)

第123次調査区で検出した柱である。狭小な調査区の南壁にかかっているため柱掘方の金形は知り得ないが、一辺0.8m程の方形を呈するものと思われる。柱根は径0.5m, 残存長0.95mを測る。連続する柱穴が未検出であるが、ここでは建物遺構として報告しておく。(吉村)

3) 溝

S D 1786

第70次調査区の南側に検出した東西溝で、S E 1790・S K 1745・S K 1802に切られる。断面形は逆台形を呈し、溝中央部での上面幅0.85m, 下面幅0.36m, 深さ0.16mを測る。両端部での比高差は10cm程で、底面は西側に向かって緩やかに下がっている。

S D 1805 (Fig. 141-142, PL. 113-2)

S D 1786の南側に併走する溝で、S E 1760・1765・1790, S K 1740を切っている。断面形はV字形を呈し、溝中央部での上面幅3.2m, 深さ1.15mを測る。底面は

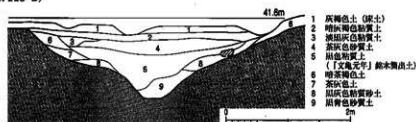


Fig. 141 溝 S D 1805土層図 (1/60)

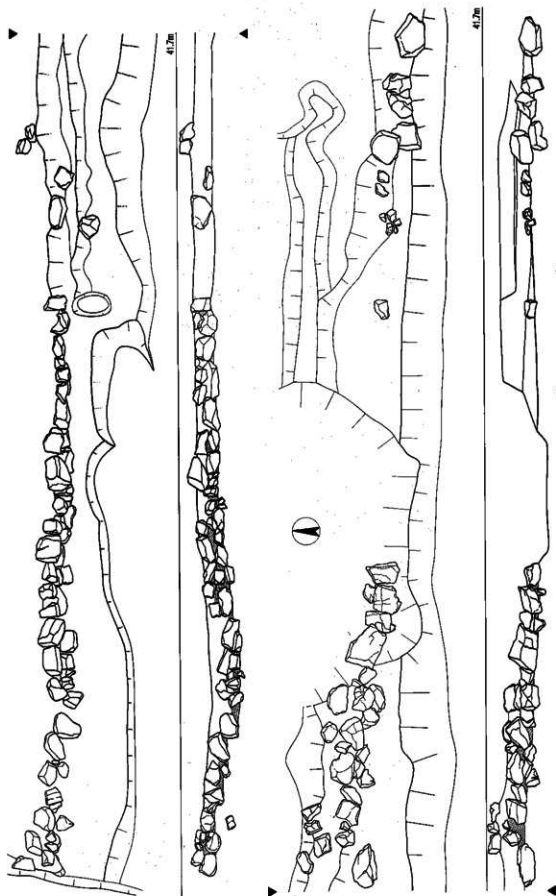


Fig. 142 溝SDB055跡実測図 (1/60)

東側に向かって緩やかに傾斜している。また、北側肩部には30~60cm大の花崗岩を並べ護岸と
している。5層の黒色粘質土中から「文亀元年(1501)」銘の木簡が出土した。

「文亀元年」
銘 木 簡

SD1814

第70次調査区の中程に位置する東西溝で、SK1788に切られる。礎石建物SB1695の根石を
残した状態で検出したため検出長は7.5mに留まる。上面幅0.6m、深さ0.1mを測る。

SD1824

SD1814の2m北側に位置し、SE1770・1800に切られる。概報段階では土坑とみなしてS
Kの記号を付していたが、東西に細長い形状を呈するので、今回は溝として報告する。検出長
22.8m、東端幅0.7m、両深さ0.12m、西端幅1.56m、両深さ0.21mを測り、東側に向かって
窄まっている。

SD1825

SD1824の1m西側で検出した溝で、SE1775・SK1788に切られる。北東-南西方向に流
れ、溝の北端はSD1830に接続し、南端には石組SX1842を設けている。北端幅2.1m、深さ
0.37mを測る。なお、SX1842の南端から北側にかけては多量の製塩土器片とともに「安曆」
銘の墨書土器が出土した。

「安曆」銘墨
書 土 器

SD1830 (Fig. 143)

第70次調査区の北端で検出した東西溝で、SD1850の上層にあたる。第70次補足調査で溝の
北側肩部をつかもうと努めたが、判然としなかった。掘土は暗灰色砂質土で、奈良時代の土器・
製塩土器及び須恵質の風招が出土している。また、暗渠SX1832・1833の先端は当溝で終焉し
ており、溝との関連が指摘できる。

SD1841

SD1824とSD1786の中程で検出した東西溝で、SE1755・SK1769に切られる。断面形は
逆台形を呈し、上面幅0.46m、深さ0.17mを測る。

SD1850 (Fig. 143, PL. 125-4)

SD1830の下層となる溝であるが、第70次補足調査において黄褐色整地土を除去して検出し
た。掘土上層は茶灰色粘質土で、下層は砂礫層である。

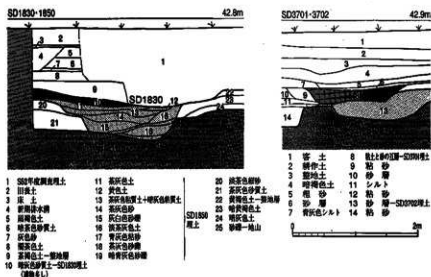


Fig. 143 溝SD1830・1850・3701・3702土層図(1/60)

Ⅲ 寺域の調査

SD3573

第120次調査区の北東側で検出した小溝で、北西から南東方向に緩やかに弧を描きながら延びる。上面幅0.3m、深さ0.2mを測る。南端は瓦組暗渠SX3572の0.6m手前で終焉するが、本来SX3572に接続していたものとみられる。

SD3594

第120次調査区の南端中央で検出した東西小溝で、SK3593を切り、SK3589に切られる。上面幅0.2~0.4mで、深さは10cm前後と著しい削平を受ける。当溝は黄褐色整地層SX3604の北縁に沿って付設されており、SX3604の区画溝的性格を有する。

SD3596

SD3594の0.4m南側に位置し、黄褐色整地層SX3604に切り込む。東西方向に走る小溝で、東端はSE3570に切られる。上面幅0.3m、深さ0.1mを測る。

SD3605 (PL.130-2-3)

第120次調査区を北西から南東方向に走る溝で、南端はSE3570で終わる。上面幅0.8m前後、深さ0.2~0.3mで、底面は凹凸が著しい。埋土には平安時代の遺物が含まれている。興味深いことに、この溝の北東側には奈良・平安時代前期の遺構は広がらない。

SD3701 (Fig.143)

第123次調査で検出した。調査範囲が狭小であるため土坑とも溝とも判断がつかねるが、埋土が砂層を主体とした粘土との互層をなすことから溝と判断した。埋土中から16世紀前後の遺物が出土している。

SD3702 (Fig.143, PL.131-2)

SD3701の下層で検出した東西溝で、上面幅1.05m、深さ0.2mを測る。位置的に第70次調査区
新出土器 検出の東西溝SD1786に連続するとみられる。須恵器の他に製塩土器が出土した。(小田)

4) 井戸

SE1701 (Fig.144, PL.118-2)

第70次調査区の南西部に位置し、西半部は調査区外にある。掘方は長径4.35mの楕円形を呈し、掘方のやや北寄りに本体の坑を掘削する。坑は素掘りで、径1.56m、深さ0.68mを測る。掘方の周縁には護岸のための石を2~3段積み上げている。(小田)

SE1755 (Fig.145, PL.115-1)

第70次調査区の東部で検出した石組構造の井戸である。上端径0.84mを測る。石積みは7段確認した。花崗岩の自然石を用いて構築されている。V類。SK1750を切る。北東の壁に立てかけた状態で竹が出土した。井戸祭祀に関わるものと考えられる。

SE1760 (Fig.146, PL.114-1)

第70次調査区の南東部で検出した。底部に曲物を据える井戸である。曲物は上部の腐食が進んでいる。径は56cmを測る。曲物の縁部に沿って平瓦を並べ、補強としている。Ⅲ類。

SE1765 (Fig.146, PL.114-2)

第70次調査区の南西部で検出した。方形縦板枠の下部に曲物を据える井戸である。数枚の縦板と3本の横板を残すのみで遺存状態が悪いが、一辺50cmを測る。下部の曲物は径44cm、高さ

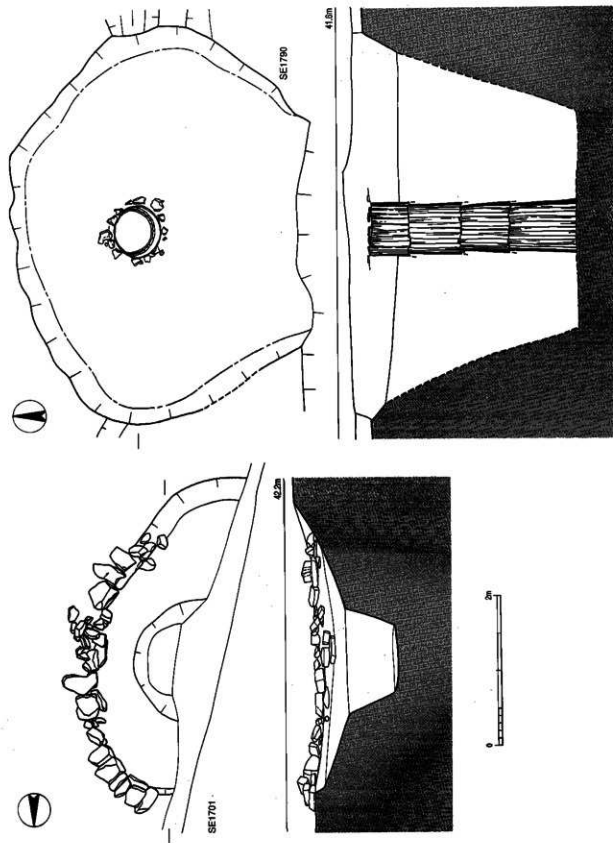


Fig. 144 北辺城井戸発掘部① (1/50)

III 寺域の調査

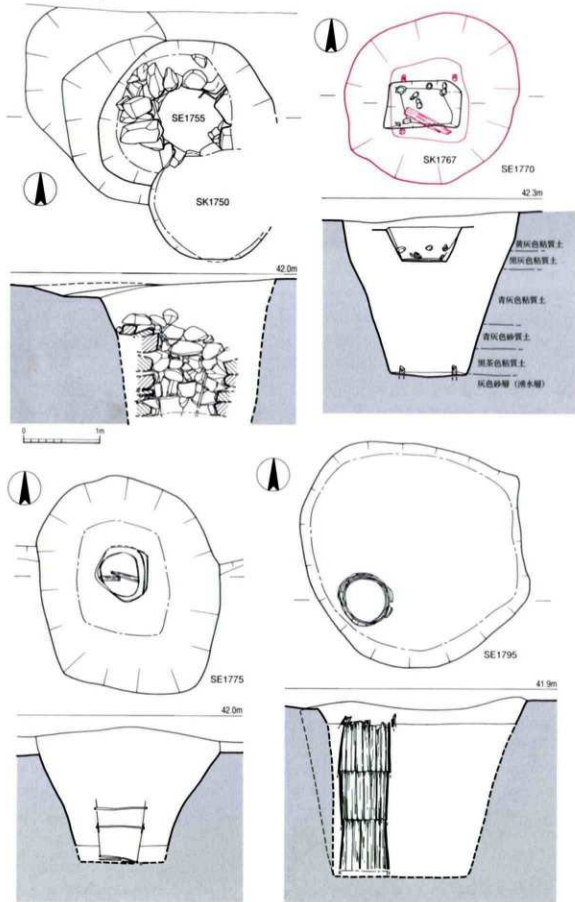


Fig. 145 北辺域井戸実測図② (1/50)

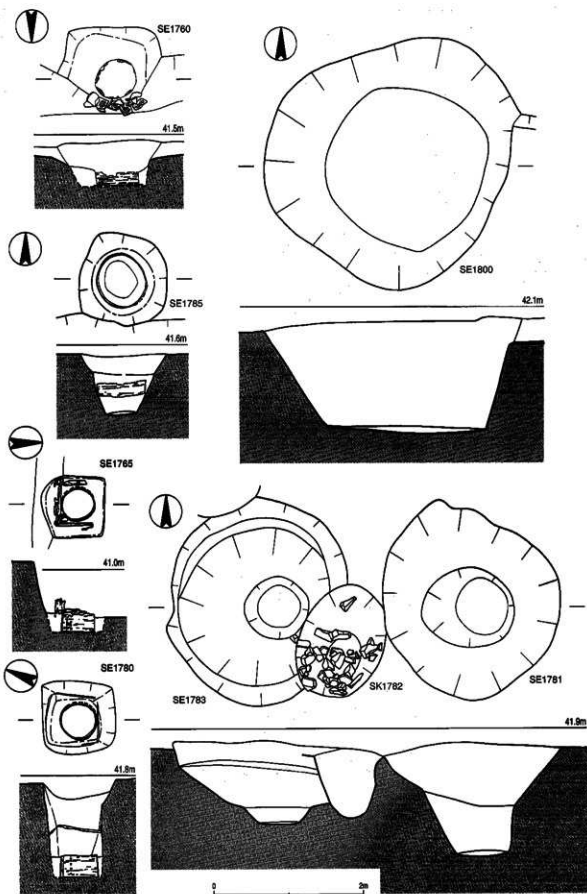


Fig. 146 北辺城井戸実測図③ (1/50)

Ⅲ 寺域の調査

26cmを測る。Ⅱ-B-b類。S D1805に切られる。

SE1770 (Fig.145, PL.114-3)

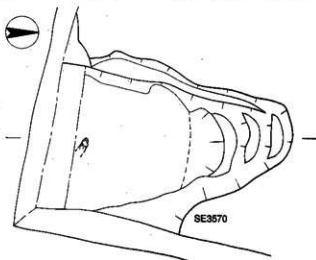
第70次調査区の北東隅部で検出した方形縦板構造の井戸である。遺存状態が極めて悪く、径6cmの隅柱3本と縦板の残骸が残るのみである。Ⅱ-A類。上層部において1m×0.6m程の長方形を呈した土坑状の窪みを確認し、埋土となる炭層には土師器が一括投棄されていた。

SE1775 (Fig.145, PL.115-2)

第70次調査区の北部で検出した。竹タガが3箇所残り、枠とした桶側の板材が2枚確認されたのみである。

SE1780 (Fig.146, PL.116-1)

第70次調査区の中央部で検出した。方形縦板枠の下部に曲物を据える構造の井戸である。上部の枠の遺存状態は悪く、掘方の中位に横桟が残るのみである。曲物は径49cm、高さ28cmを測る。Ⅱ-B-b類。上層部で白磁がまとめて出土した。



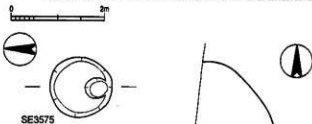
SE1781 (Fig.146)

第70次調査区の中央部で検出した。平面形は円形を呈する。SK1782に切られる。底部に曲物を据える井戸の可能性もある。



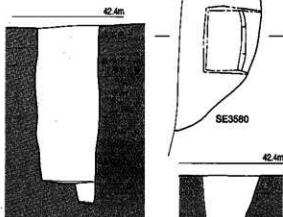
SE1783 (Fig.146)

SE1781の0.5m西側で検出した。平面形は円形を呈する。SK1782に切られる。SE1781と同様、底部に曲物を据える井戸の可能性もある。



SE1785 (Fig.146, PL.116-2)

SE1780の2.4m南西側で検出した。底部に曲物を据える構造の井戸である。曲物は径64cm、高さ17cmを測る。Ⅲ類。



SE1790 (Fig.144, PL.116-3)

第70次調査区の南で検出した桶側構造の井戸である。井戸枠は4段からなる。桶側の径は1段目が67cm、2段目が61cm、3段目が53



Fig.147 北辺城井戸実測図④ (1/50・1/80)

cm, 4段目が56cm・下端径66cm・高さ88cmを測る。板材の幅は6cm程で、1段目が21枚を、以下それぞれ22枚を使用している。最上段の桶側の縁に沿って瓦や小石を並べて補強としている。IV-A類。SD1805に切られる。

SE1795 (Fig.145, PL.117)

第70次調査区の北西部で検出した桶側構造の井戸である。枠は掘方の南西側に配されている。井戸枠は4段からなるが、1段目は腐食が進んでおり、下端部分を僅かに残すのみである。桶側の径は2段目が59cm, 3段目が62cm, 4段目は58cmで、下端径66cm・高さ77cmを測る。板材の幅は6~13cmで、3段目が18枚, 4段目が16枚を使用している。IV-A類。

SE1800 (Fig.146, PL.118-1)

第70次調査区の北部で検出した。平面形は円形を呈する。埋土上位にレンズ状に堆積する炭層が確認された。土師器が一括出土しており、この中には墨書を有する例が多く含まれる。

SE3570 (Fig.147)

第120次調査区の南東部で検出した。南側は調査区外となる。井戸枠は残存していなかったが、竹タガが遺存しており桶側構造の井戸と考えられる。掘方は北側が階段状になる。

SE3575 (Fig.147)

第120次調査区の南西部で検出した円筒状の素掘りの井戸である。

SE3580 (Fig.147)

120次調査区の南西部で検出した。西側は調査区外となる。構造は不明。 (吉村)

5) 土坑

SK1685 (Fig.148, PL.121-1)

第70次調査区の東端部で、SE1755の1m北側に位置する。径1.46m, 深さ0.3mの穴を掘り、周縁に20~30cm大の花崗岩を並べた上層の遺構である。

SK1740・1745 (Fig.149, PL.119-1)

SB1735のすぐ北側に位置し、SD1805に切られる。SK1745と重複しているが、前後関係は不明。深さは1.4mを測る。形状的に井戸かと考え底面まで掘り下げたが、井戸枠など出土しなかったため土坑とした。

SK1750 (Fig.145, PL.115-1)

SE1755に北壁を切られて位置する。石組が倒壊する恐れがあったため完掘していない。径1.64mの円形を呈し、井戸になる可能性がある。

SK1756 (Fig.148)

SD1805, SB1735・1845に切られるため遺存状態は悪く、深さは12cmを測る程度である。

SK1757 (Fig.149)

SD1805及びSK1740に北壁を切られる。楕円形を呈し、長軸2.43m, 短軸1.3m+a, 深さ1.18mを測る。埋土からは奈良時代の遺物が出土している。

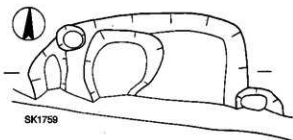
SK1759 (Fig.148)

第70次調査区の南中央で、SB1730の3m西側に位置する。大半が調査区外にあるため詳細は不明。北辺長1.92mで、深さは7cmと浅い。底面にある穴は別遺構であろう。

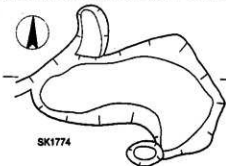
Ⅱ 寺域の調査



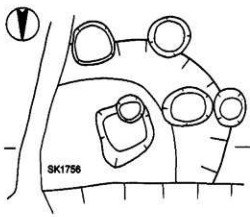
42.5m



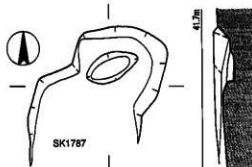
41.5m



42.3m



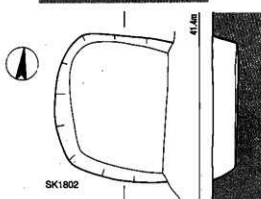
41.8m



41.7m



41.8m



41.4m



Fig. 148 北辺城土坑実測図① (1/40)

S K 1761 (Fig. 148)

S K 1759の1m西側に位置する。大半が調査区外にあり、詳細不明。楕円形を呈するか。壁高は15cmの遺存状況。

S K 1767 (Fig. 145)

S E 1770の埋土上層に掘り込まれた土坑である。平面形は長方形を呈し、長さ0.97m、幅0.62m、深さ0.45mを測る。埋土には炭を含み、底面には焼土層がみられた。また、土師器がまとまった状態で出土している。

S K 1768 (Fig. 149)

S K 1768・1769・1771・1772は東西方向に連なる大型の浅い土坑群で、茶灰色土を除去した後に出した。S K 1768は最大幅1.6m、深さ0.34mを測る。

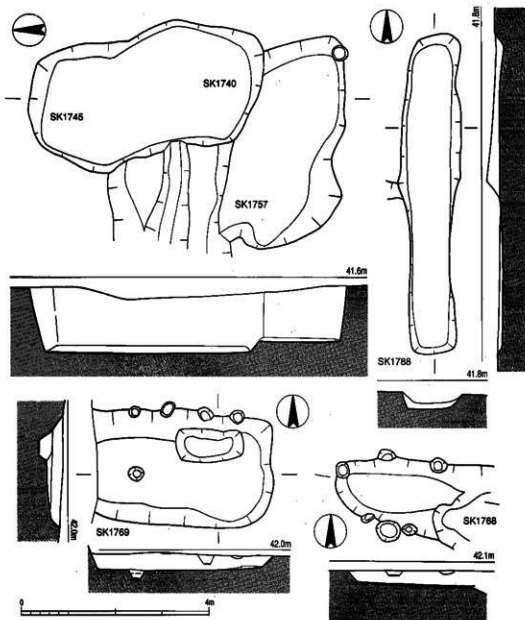


Fig. 149 北辺城土坑実測図② (1/80)

Ⅲ 寺域の調査

S K 1769 (Fig. 149)

S K 1768の西隣に位置し、S D 1841を切っている。隅丸長方形を呈する大型の土坑で、幅2.48m、深さ0.38mを測る。西壁はS X 1690の下に潜るため検出長3.8mに留まる。

S K 1771

S K 1769の7m程西側に位置する。S K 1788・S X 1748に切られ、S A 1840を切っているが、礎石建物S B 1695の根石を残した状態で検出したため全体の規模は不詳。深さは他の土坑と同じ0.3mを測る。

S K 1772

S K 1771の1m西側に位置し、S A 1840を切っている。隅丸長方形を呈し、長軸4.33m、短軸3.2m、深さ0.35mを測る。南壁側の深さは0.73mと一段下がっている。

S K 1774 (Fig. 148)

第70次調査区の北東部に位置する。不整形を呈し、長軸2.05m、短軸1.34m、深さ0.32mを測る。底面は西側に傾斜している。

S K 1782 (Fig. 146, PL. 119-3)

S E 1781・1783の中間に位置し、両者を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.53m、短軸1.13m、深さ0.93mを測る。堀土層からは角礫及び瓦片が出土した。

S K 1787 (Fig. 148)

S E 1785のすぐ北側に位置する。方形土坑が二つ重複したような形状を呈する。深さは17cmと削平が著しかったものの黒雲土器などが出土している。

黒雲土器の
出土

S K 1788 (Fig. 149, PL. 120-1)

第70次調査区の中程で検出した。石組S X 1842を切り、S D 1814と重複する。南北に長い溝状を呈し、長軸6.82m、短軸1.06m、深さ0.28mを測る。底面はほぼ水平で、堀土中から多量の土師器が出土している。

S K 1802 (Fig. 148)

第70次調査区の北西側で検出した。上層石列S X 1700を残した状態で掘り下げたため、東半部は未掘となったが、隅丸方形を呈するものと思われる。南北長1.53m、深さ2.6m。

S K 3574 (Fig. 151)

第120次調査区の東端部に位置する上層遺構で、S D 3573・S X 3572を切っている。円形を呈し、長径1.1m \pm 、短径1.06m、深さ1.03mを測る。

S K 3576 (Fig. 150, PL. 130-3)

S K 3574の4m北西で検出した上層遺構。平面形は不整形を呈し、長軸2.84m、短軸2.46mで、底面中央のピットまでは1.62mの深さを測る。底面は平坦ではなく、起伏が著しい。

S K 3582 (Fig. 151)

第120次調査区の中央やや南側で検出した上層遺構で、S K 3591・3592を切っている。楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸0.92m、深さ0.32mを測る。底面の北東側にテラスを有する。

S K 3583 (Fig. 151)

S K 3576の2.3m南側で検出した下層遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸1.93m、短軸1.52m、深さ0.53mを測る。底面は平坦をなす。

S K 3584 (Fig. 151)

第120次調査区の西側で検出した中層遺構で、S K 3586・3592を切る。倒卵形の小土坑で、長軸1.15m、短軸0.95m、深さは0.82mと径に比して深めに掘っている。

S K 3586 (Fig. 151)

S K 3584の北側に位置する中層の遺構である。平面形は隅丸三角形を呈し、長軸 $0.9m + \alpha$ 、短軸0.96mで、深さは17cmと削平が著しい。

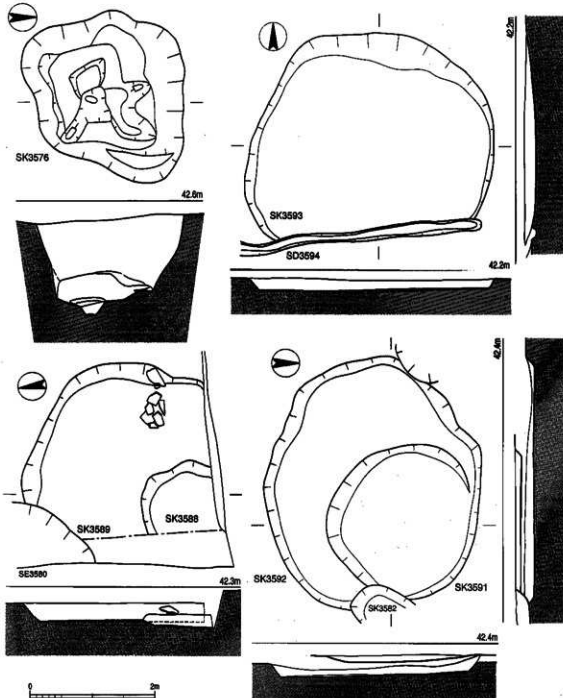
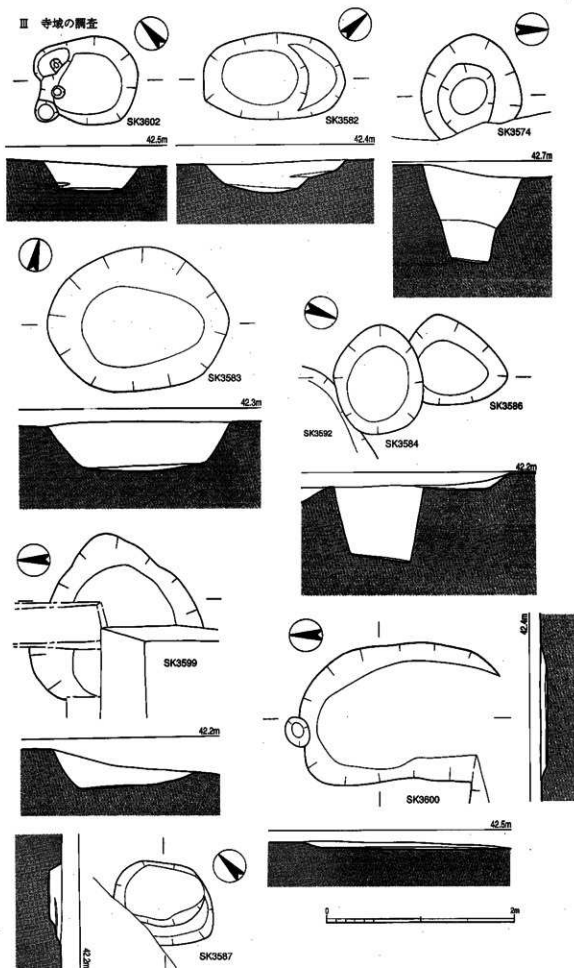


Fig. 150 北辺城土坑実測図③ (1/60)



S K 3587 (Fig. 151)

S K 3584の0.5m西側に位置する中層の遺構。隅丸方形を呈し、長軸1.02m、短軸0.87m、深さ0.14mの大きさ。南西側に幅10cmのテラスを有する。

S K 3588 (Fig. 150)

第120次調査区の南西隅で検出した下層遺構で、S K 3589の底面に掘り込まれているが、前後関係はつかめていない。大半が調査区外にあるため詳細は不明。

S K 3589 (Fig. 150)

第120次調査区の南西隅に位置し、S E 3580に切られる。底面は平坦で、壁高は0.28mの遺存状況である。当土坑も大半が調査区外にあるため詳細は不明。堀土中からは暗渠に用いる土管の出土している。

S K 3591 (Fig. 150)

S K 3582の西隣に位置する上層遺構で、それに切られる。北壁は削平により失われるが、南壁は高さ10cmの遺存状況。

S K 3592 (Fig. 150)

S K 3591の下層で検出した不整形の土坑で、長軸4.13m、短軸0.36m、深さ0.16mを測る。底面は平坦で、堀土中から奈良時代の遺物が出土している。

S K 3593 (Fig. 150)

S K 3592の南隣で、それに切られる。S D 3594と重複するが、溝の方が先行する。隅丸方形を呈し、長軸3.82m、短軸3.4m + e、深さ0.2mを測る。底面は平坦をなす。

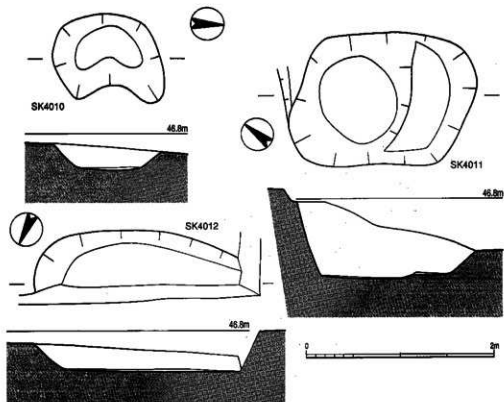


Fig. 152 北辺城土坑実測図⑤ (1/40)

Ⅲ 寺域の調査

S K 3599 (Fig. 151)

第120次調査区の南端で検出した下層遺構で、整地層 S X 3604 に切り込む。隅丸三角形を呈し、長軸1.84m、深さ0.43m。瓦片・小石が多量に出土した。

S K 3600 (Fig. 151)

S K 3592 の2 m北側に位置する。長さ2.1m、幅1.43m、深さ0.1mの浅い長円形土坑で、埋土中には製塩土器片が多量に含まれている。また、当土坑を中心として3×4 mの範囲にも製塩土器片が散在しており、製塩土器の廃棄土坑と考えられる。

製塩土器の
廃棄土坑

S K 3602 (Fig. 151)

S E 3570 の1 m西側で検出した上層遺構である。平面形は円形を呈し、長径1.02m、短径0.93 m、深さ0.28mの小土坑。

S K 4010 (Fig. 152)

第144次調査区の中央で検出した下層遺構。不整形を呈し、長軸1.1m、短軸0.76m、深さ0.3 mを測る。埋土中から室町期の陶磁器が出土している。

S K 4011 (Fig. 152)

S K 4010 の西隣に位置する。歪んだ隅丸方形をなし、長軸2.07m、短軸1.4m、深さ0.8mの大きさ。南東側にテラスを有するものの底面との差は僅かである。埋土中からは伊壁片や欄干口が数点出土していることから付近に鎌倉関連遺構が存在するものと思われる。

伊壁・欄干
口の出土

S K 4012 (Fig. 152)

S K 4011 の西隣で、調査区の西端隅部に位置する。大半が調査区外にあるため詳細は不明。検出長2.2m、深さ0.26mの大きさ。

6) 暗渠

S X 1831 (Fig. 153, PL. 124)

第70次調査区の北端で検出した暗渠施設で、S X 1831 から S X 1836 まで6本の暗渠を確認した。これらは S D 1830 と一連のものである。S X 1831 は最西端に設けられた南北方向の暗渠で、丸瓦を主体とする。瓦を葺く要領で北から順に並べられており、6.3m分を検出した。南端と北端の比高差は南側が5 cm高くなっており、南側から北側に向かって排水している。

S X 1832 (Fig. 153, PL. 124)

S X 1831 の上部に設けられており、北東-南西方向に連なる。截頭円錐形を呈する土管を主体とするもので、検出長5 m、土管数11本を数える。両端の比高差は0.2mあり、S X 1831 とは逆方向に排水している。

S X 1833 (Fig. 154, PL. 125-3~5)

S X 1836 の3.3m東側で検出した南北方向に連なる暗渠である。中央部を S E 1775 に切られて失うが、検出長は6.5mを測る。北側は丸瓦を重ねているが、下部は素掘りのままである。また、南側には直交する形で平瓦を並べていたが、その意図するところは判らない。

S X 1834 (Fig. 154, PL. 126・127-1)

S X 1833 の11.5m東側に埋設しており、6.8mを検出した。北西-南東方向に連なり、北端は S D 1830 に接続する。丸瓦2枚を重ね土管状としている。

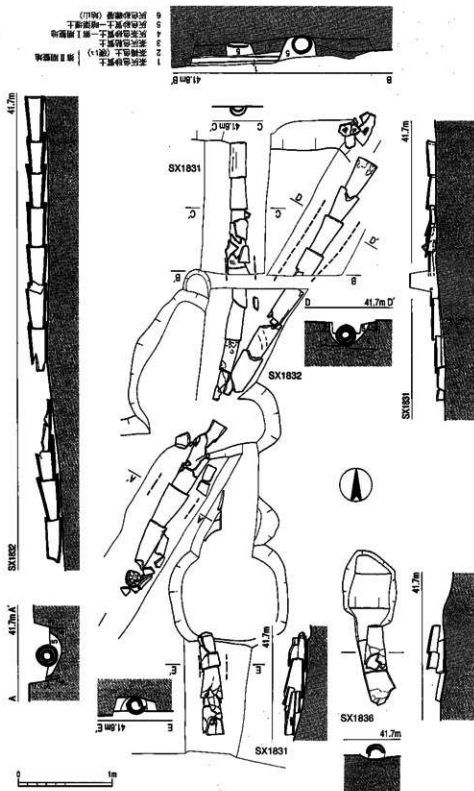
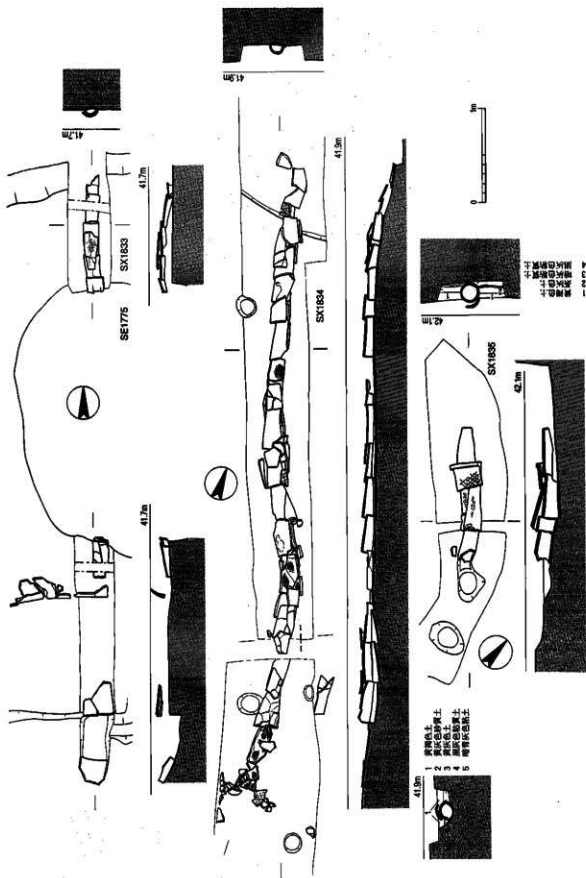


Fig. 153 北辺城暗渠実測図① (1/40)

S X 1835 (Fig. 154, PL. 127-2-3)

S X 1834の9.5m東側に埋設しており、1.45mの遺存状況である。北西-南東方向に連なり、北端はS D 1830に接続する。截頭円錐形の土管を並べており、土管数は3本数える。土管の連結状態と底面のレベルからすると南側から北側へ排水している。



S X 1836 (Fig. 153)

S X 1831の1.5m東側で検出した。底部に平瓦を並べ、上に丸瓦を重ねた構造で、平瓦2枚分の遺存状況である。瓦の重なり具合からすると北側に排水している。暗渠の先端はS E 1775に切られる土坑に接続している。

S X 3572 (Fig. 155, PL. 131-1)

第120次調査区の東端部に位置し、S K 3574に切られる。当遺構はS D 3573の南端部に相当し、この部分を暗渠としていた可能性がある。平瓦を3段階重ねており、瓦の下部には幅30cmの小溝を掘削している。

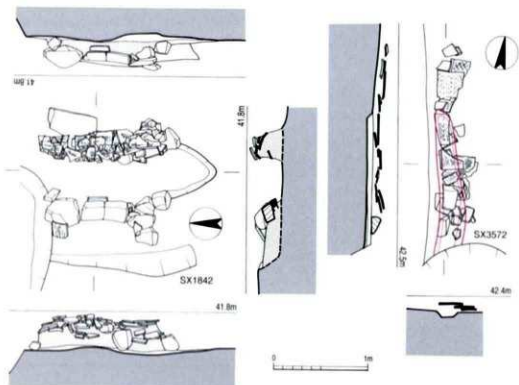


Fig. 155 暗渠S X 3572, 石組S X 1842実測図 (1/40)

7) 地 鎖

S X 1810 (Fig. 156, PL. 122-3)

第70次調査区においてS E 1760の西側で検出した。掘方は長径38cm×短径33cm大の円形を呈し、底面中央に底部穿孔を施した須恵器坏身を安置し、須恵器の蓋を被せていた。内容物は確認できなかったが、地鎖遺構とみられる。

S X 1815

第70次調査区においてS K 1759の1m西側で検出した。須恵器坏身・蓋のセットを埋置したもので、S X 1810と同一の器形を呈することから同時に2個埋めた可能性がある。

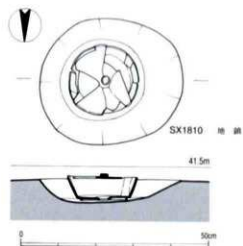


Fig. 156 地鎖S X 1810実測図 (1/10)

Ⅲ 寺域の調査

8) その他の遺構

石 組

S X 1690 (Fig. 138, PL. 122-1・2)

第70次調査の礎石建物 S B 1695に伴う施設で、建物の南東隅に付設している。方形の扁平な石を南北方向に8個並べ、その西端に接して横例しにした石を置き、階段状を呈する。石組の南北長は2.5mを測る。

S X 1842 (Fig. 155, PL. 121-2)

第70次調査 S D 1825に付随する施設で、同溝の北端部にあたる。特異なことは、右側が平瓦を主として積み上げ、左側は角礫を並べている点である。

流 路

S X 1796

第70次調査区西端部の流路を S X 1796として番号を付した。第70次調査に南接する第43次調査(僧房跡)でも北東-南西方向の流路を検出しており、それに接続するものである。

整地層

S X 3604

第120次調査区南端部一帯には、黄褐色土の整地層が基壇状に一段高くなっており、北縁の区画溝として S D 3594を掘削している。この基壇状の整地層は北辺築地としての可能性を否定できないが、この点に関しては『観世音寺-遺物・考察編-』において改めて検討したい。

(小田)

(4) 西辺城

西辺城の調査としては、大宰府史跡第48次・118次調査がある。現状変更（住宅改築）に伴い、確認調査を実施した。ともに推定寺域の西端部で、学校院との境界付近に位置する。

1) 溝

SD1366 (Fig. 157, PL. 133-2)

第48次調査区の西端に位置する。学校院東辺部にあたる第9・74・77次調査で検出した南北溝SD205東岸の可能性がある。深さは1.1mを測り、最下部には腐植土が堆積していた。当溝がSD205の東岸とすると溝幅は約14mになる。

SD1367 (PL. 133-2)

第48次調査区の中程で検出した。南北方向に走る小溝で、幅0.5m、深さ0.36mの規模。

SD3450 (Fig. 157)

第118次調査区の西端で検出したが、大半が調査区外にあるため詳細は不明。深さは0.63mを測る。堀土下位から老司I式瓦が出土した。

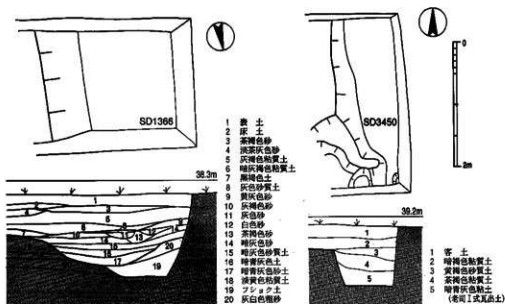


Fig. 157 溝SD1366・3450土層図 (1/60)

2) 土坑

SK3451 (Fig. 158, PL. 134-2)

第118次調査区の中程で検出した。円形を呈し、長径1.6m、短径1.4m、深さ1.04mを測る。当初は井戸と考えたが、南壁がオーバーハングしていることから土坑としておく。

SK3452 (Fig. 158)

SK3451の1.3m南東側に位置する。北壁を検出した程度で、詳細は不明。

Ⅲ 寺域の調査

S K 3453 (Fig. 158)

S K 3451の0.6m北東側に位置する。北壁は未検出となったが、楕円形を呈するか。検出長1.57m、幅0.9mで、深さは削平により10cmを測る程度。(小田)

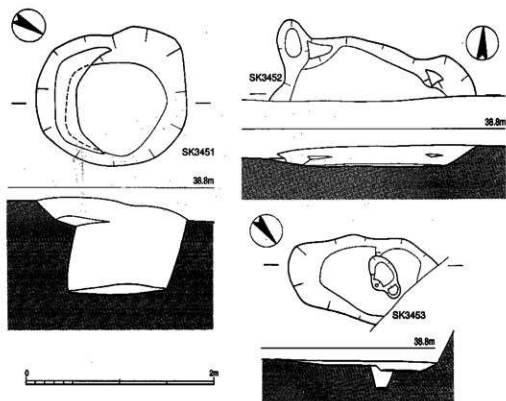


Fig. 158 土坑 S K 3451・3452・3453実測図 (1/40)

IV 総括

ここでは、観世音寺の伽藍周辺部で実施した発掘調査によって得られた成果を各地域ごとにまとめ、併せて残された課題点について触れる。なお、様々な検討事項に関しては、次回報告の【観世音寺—遺物・考察編—】で改めてふれたい。

南辺城

【成 果】

南辺城においては、17次の調査を実施し、築地4基、橋16条、建物75棟、溝81条、井戸51基、土坑168基、鋳造遺構5基、落込7基、埋甕・埋桶11基、石列、通路、採土穴などを検出した。

第109・111次調査では、Ⅰ期（9～10世紀代）・Ⅱ期（11～13世紀前半代）・Ⅲ期（13世紀後半～16世紀代）の建物・橋・溝・井戸・土坑を主体とする遺構を検出した。Ⅰ期には当該地に建物は存在せず、南門の南面域は空閑地であったことが確認された。Ⅱ期遺構は東西溝S D3300以北には存在せず、強い規制を受けている。建物・井戸・土坑などの遺構が溝以北に進出するのは、Ⅲ期の13世紀後半代からであり、古代観世音寺の寺域との関連が窺われる。

南門の南西
域は空閑地

Ⅲ期においては橋・溝で囲繞された区画内に数基の建物・井戸・土坑が存在し、大きく五つのブロックに分けられる。土坑・落込からは仏具に関する鋳型や輪・埴塀などの鋳造関連遺物が出土しており、鋳物師集団の居住地とみられる。

鋳物師集団
の居住地

第122次調査で検出した南北棟建物S B3660及び井戸S E3680は、8世紀前半の終焉であり、仮設事務所観世音寺造営に際して設けられた仮設事務所的な建物と考えられる。

【課題点】

南辺築地に関する明確な遺構は検出できなかったが、参道側溝とみられる南北溝S D3200・3840の先端は、第109次調査区北端の東西溝S D3149の手前で終わっており、この東西溝付近に築地が想定されるが、北面築地との関連からすると「資財帳」記載の数字そのものの検討も必要となろう。

東辺城

【成 果】

東辺城においては、6次の調査を実施し、橋15条、建物33棟、堅穴住居1軒、溝25条、井戸40基、土坑56基、鋳造遺構2基、排水施設、落込、瓦溜、池、石積、積石塚などを検出した。

第121次調査においては、8世紀後半代の南北溝S A3625を検出した。「資財帳」には「□□
唐拾伍文板葺」とあり、S A3625は「資財帳」記載の板葺と判断される。

東辺は板葺

第45・119次調査においては、Ⅰ期（8世紀中頃～12世紀前半）・Ⅱ期（12世紀前半～中頃）・Ⅲ期（12世紀中頃～14世紀）の建物・橋・溝・井戸・土坑などの遺構が検出され、橋S A1235及び溝S D1230で囲繞された区画内には、多数の独立柱建物・井戸・土坑があり、鋳造・鍛冶関連遺物が出土しており、金属製作工房とみられる。また、「□□東院」・「西院」・「厨」銘墨書土器の存在は、この地区が「東院」と呼ばれた工房ないしは厨関連施設であったことの傍証となろう。また、唐三彩壺の出土も特筆される。

金属製作工
房

IV 総括

【課題点】

『資財帳』大衆物草には、「厨」・「蔵屋」・「水屋」・「碓屋」などの厨房施設と「造瓦屋」が記載されているが、それらの施設と今回検出した建物群との関連は必ずしも明確ではなく、今後の課題といえる。

北辺城

【成果】

北辺城においては、5次の調査を実施し、橋5条、建物11棟、溝14条、井戸16基、土坑36基、暗渠7基、地鎮2基、石組、流路などの遺構を検出した。

北辺築地の
想定地

第70次調査においては、建物基壇や築地帯などの基礎地形に関連する6条の瓦組暗渠を検出した。この部分は版築状の整地層となっており、北辺築地をここに想定することが可能である。第120次調査においては、製塩土器を多量に廃棄した土坑が発見され、厨的施設の存在が推定される。

【課題点】

南辺城の項でも記したが、東西溝S D3149付近に南辺築地を想定し、瓦組暗渠の箇所には北辺築地を想定するとその間の長さは185m程となり、『資財帳』記載の東辺・西辺築地の長さ65丈(195m)より10m短くなる。単なる『資財帳』の記載誤りか、大きな疑問点である。

また、「小子房」・「客僧房」の僧房建物に関しては、その場所すら特定できておらず、今後の課題として残った。

西辺城

【成果】

西辺城においては、第48次・118次の2次の調査を実施し、狭小な調査区ではあったが、溝3条、土坑3基を検出した。

学校院との
境界線

第48次調査においては、学校院と観世音寺の境界線と考えられる南北溝S D205の東肩を確認した。

【課題点】

西辺城では2次の調査しか行っていないため、西辺築地については場所・規模など判っていない。また、寺城西辺部の状況も明らかではなく、学校院との境界も不明瞭であり、今後の大きな課題である。

P L A T E S



観世音寺本堂（背後の山は四王寺山，南上空から）



(1) 5次調査区1層柱穴群 (西から)



(2) 5次調査区2層柱穴群 (西から)



(1) 築地S A091A・B (北から)



SX092

(2) 築地S A091A・B (東から)



(1) 築地 S A 095 (東から)



(2) 築地 S A 095 (南から)



(1) 溝 S D093 (南から)



(2) 石槽 S X092 (北から)



(1) 16次調査区 (東から)



(2) 溝 S D 363 (南から)



(3) 土坑 S K 365 (北から)



(1) 23次調査区上層遺構 (西から)



(2) 23次調査区下層遺構 (西から)



(1) 築地状遺構 S A467, 溝 S D468 (北から)



(2) 築地状遺構 S A472 (北西から)



(1) 溝 S D 485 (北から)



(4) 礎敷 S X 487 (南から)



(2) 井戸 S E 480 (東から)



(3) 井戸 S E 480 枠 (東から)



(1) 28次調査区 (西から)



(2) 28次調査区 (南から)



(1) 土坑 S K 521 (南から)



(2) 下層遺構東半部 (南から)



(1) 39-1次調査区 (西から)



(2) 井戸SE870 (南から)



(1) 井戸SE867 (南から)



(2) 井戸SE867枠 (南から)



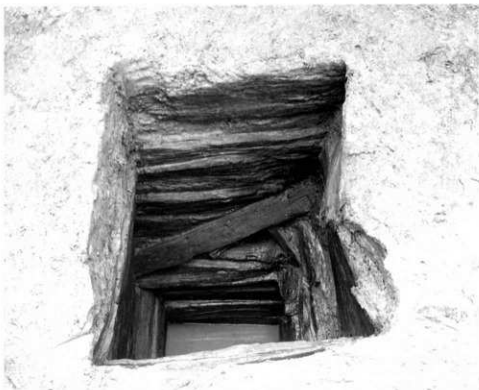
(3) 井戸SE868 (西から)



(1) 井戸SE868枠（西から）



(2) 井戸SE872（北から）



(3) 井戸SE872枠（北から）



(1) 39-2次調査区 3 Tr 上層遺構 (東から)



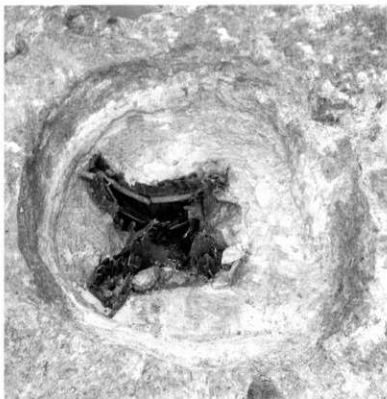
(2) 39-2次調査区 4 Tr 下層遺構 (東から)



(3) 39-2次調査区 4 Tr 下層遺構 (西から)



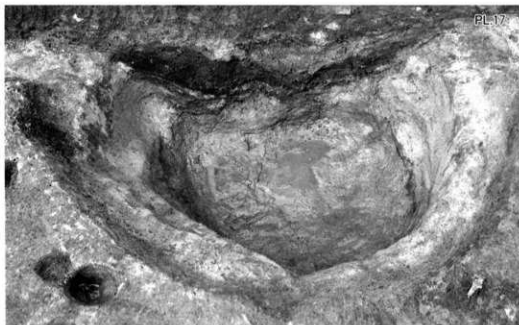
(1) 掘立柱建物 S B884・889, 溝 S D890 (西から)



(2) 井戸 S E 895 (南から)



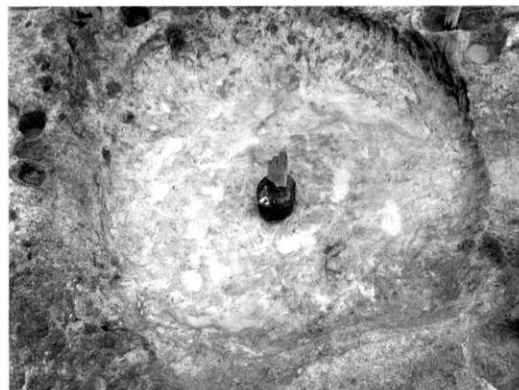
(3) 井戸 S E 895 枠 (南から)



(1) 井戸 S E 902 (南から)



(2) 土坑 S K 913 (南から)



(3) 土坑 S K 927 (南から)



(1) 土坑S K911・912 (北東から)



(2) 瓦散S X917 (北から)



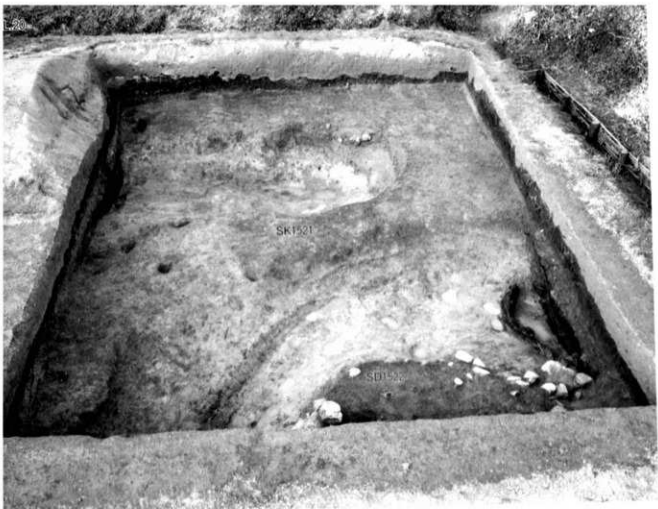
(1) 39-3次調査区 1 Tr (西から)



(2) 39-3次調査区 2 Tr (東から)



(3) 39-3次調査区 2 Tr (西から)



(1) 61次調査区 (南から)



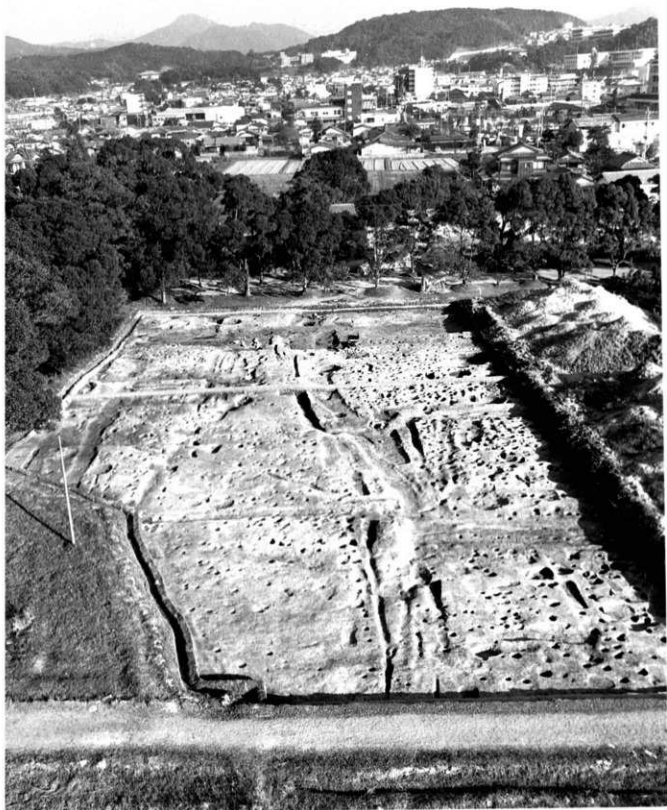
(2) 61次調査区 (西から)



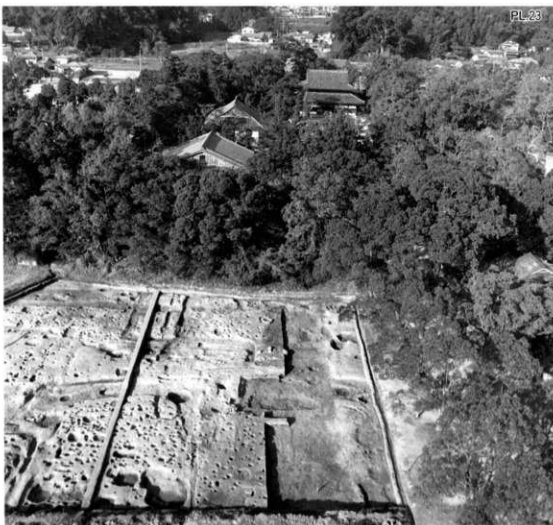
(1) 103次調査区 (南東から)



(2) 溝SD3050 (南西から)



109次調査区全景（空中写真，西上空から）



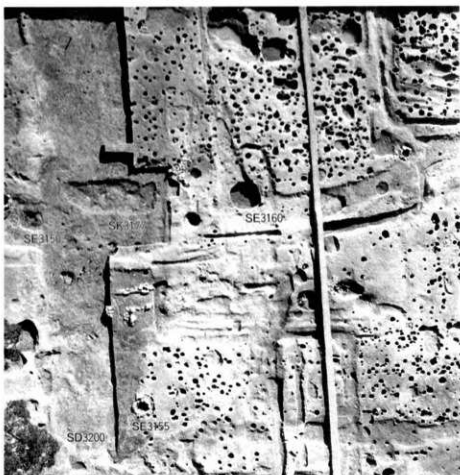
(1) 109次調査区 (空中写真, 南上空から)



(2) 111次調査区 (空中写真, 北上空から)



(1) 109次調査区西半部（北真上から）



(2) 109次調査区東半部（北真上から）



(1) 109次調査区 (西から)



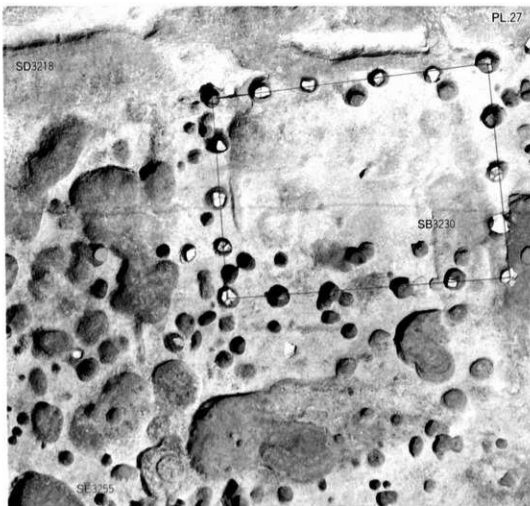
(2) 111次調査区西半部 (北から)



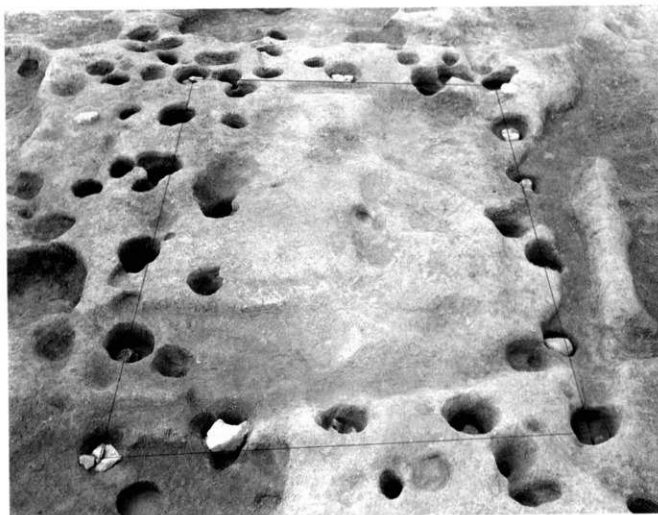
(1) 溝 S A 3195, 溝 S D 3190 (北から)



(2) 掘立柱建物 S B 3205 周辺 (北から)



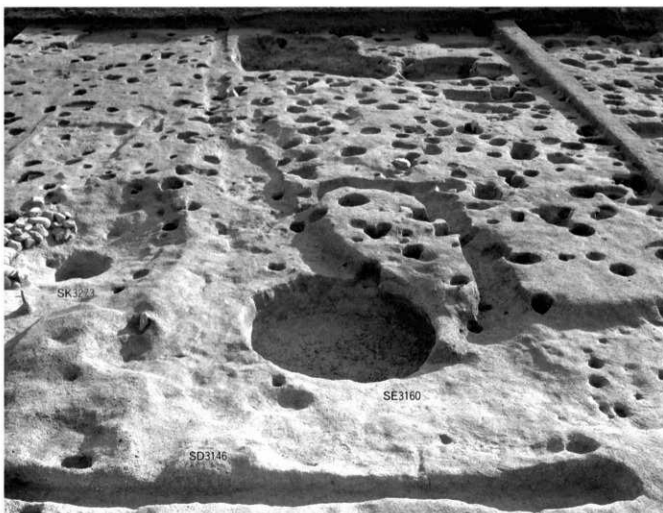
(1) 掘立柱建物 S B 3230 (東真上から)



(2) 掘立柱建物 S B 3230 (北から)



(1) 井戸 S E 3155 周辺 (東から)



(2) 井戸 S E 3160 周辺 (北から)



(1) 溝 S D 3200 (南から)



(2) 溝 S D 3200 (北から)



(1) 溝S D3290、掘立柱建物S B3304周辺（北から）



(2) 溝S D3300（西から）



(1) 井戸 S E 3145 (東から)



(2) 井戸 S E 3150 (西から)



(3) 井戸 S E 3155 (西から)



(1) 井戸 S E 3160 (東から)



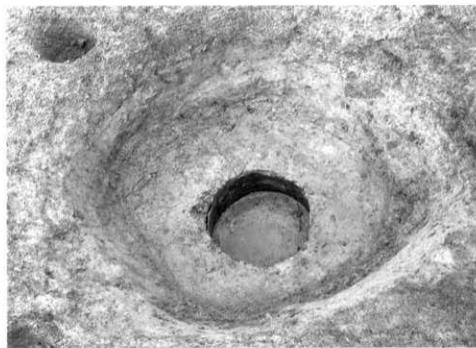
(2) 井戸 S E 3165 (西から)



(3) 井戸 S E 3170 (北西から)



(1) 井戸SE 3175 (西から)



(2) 井戸SE 3180 (東から)



(3) 井戸SE 3185 (東から)



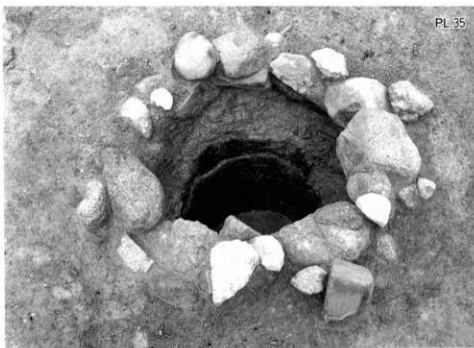
(1) 井戸SE3215 (南東から)



(2) 井戸SE3235 (北から)



(3) 井戸SE3240 (西から)



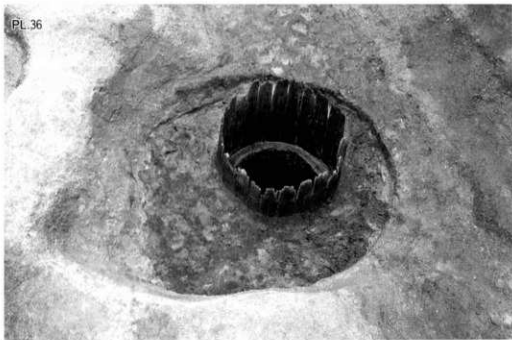
(1) 井戸 S E 3245 (東から)



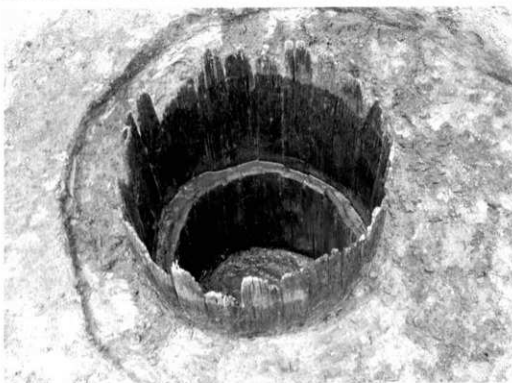
(2) 井戸 S E 3250 (南から)



(3) 井戸 S E 3255 (西から)



(1) 井戸S E 3260 (西から)



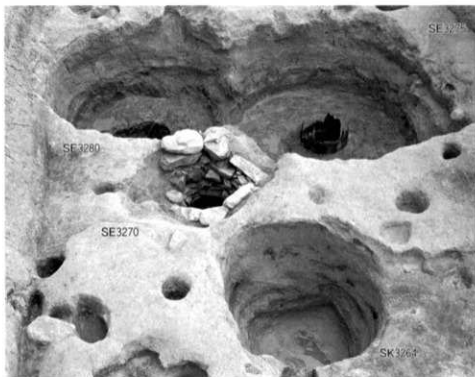
(2) 井戸S E 3260枠 (東から)



(3) 井戸S E 3265 (北から)



(1) 井戸 S E 3265 枠 (北西から)



(2) 井戸 S E 3270・3275・
3280, 土坑 S K 3264
(北から)



(3) 井戸 S E 3270 (北東から)



(1) 井戸S E 3275 (北から)



(2) 井戸S E 3275枠 (南から)



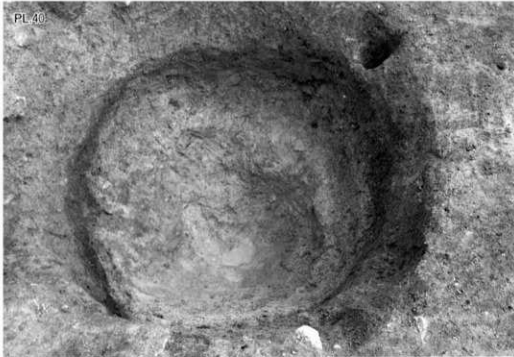
(3) 井戸S E 3280 (東から)



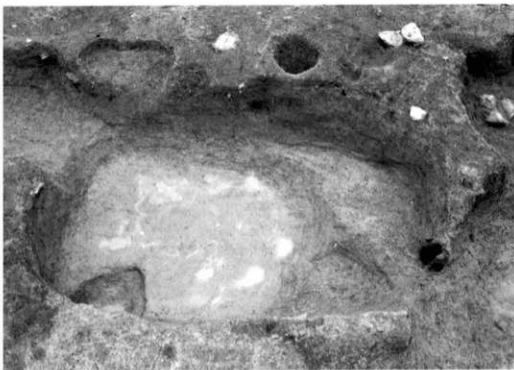
(1) 土坑 S K 3174 周辺 (西から)



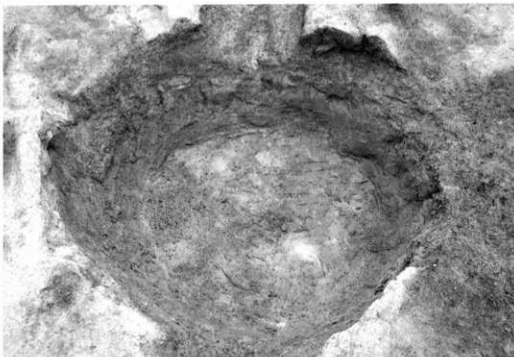
(2) 土坑 S K 3247 周辺 (北から)



(1) 土坑 S K 3246 (西から)



(2) 土坑 S K 3247 (東から)



(3) 土坑 S K 3259 (西から)



(1) 土坑 S K 3264 (北から)



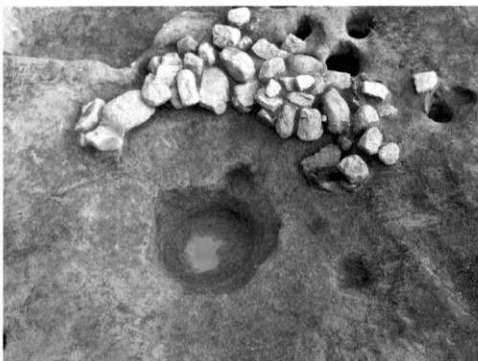
(2) 土坑 S K 3266 (東から)



(3) 土坑 S K 3268 (北東から)



(1) 土坑 S K 3271 (北から)



(2) 土坑 S K 3273 (西から)



(3) 土坑 S K 3295 (北から)



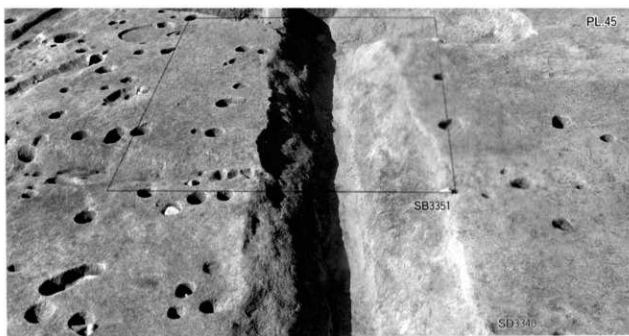
115次調査区全景（空中写真，南上空から 奥の建物は戒増院本堂）



(1) 115次調査区全景 (空中写真, 東真上から)



(2) 115次調査区南半部 (東真上から)



(1) 掘立柱建物 S B 3351、溝 S D 3340 (東から)



(2) 溝 S D 3338 (東から)



(3) 溝 S D 3333・3335 (東から)



(1) 井戸 S E 3345 (西から)



(2) 井戸 S E 3350 (南から)



(3) 井戸 S E 3350下部 (南から)



(1) 117次調査区全景（空中写真、西上空から）



(2) 調査区西半 Pit 群（東から）



(1) 溝 S D 3400 A ・ B (北東から)



(2) 溝 S D 3430 ・ 3440 (北東から)



(1) 井戸SE 3370 (南から)



(2) 井戸SE 3375 (東から)



(3) 井戸SE 3375枠 (南から)



(1) 井戸 S E 3380・3385 (北から)



(2) 井戸 S E 3380枠 (東から)



(3) 井戸 S E 3390 (南東から)



(1) 井戸 S E 3395 (東から)



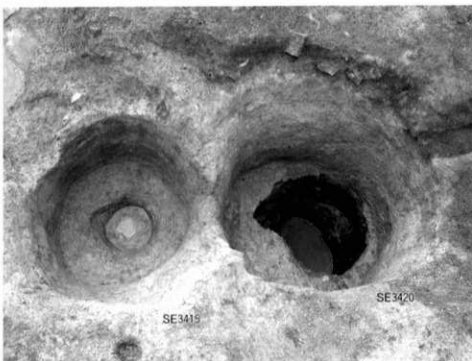
(2) 井戸 S E 3395下部 (東から)



(3) 井戸 S E 3405 (東から)



(1) 井戸 S E 3410 (北西から)



(2) 井戸 S E 3415・3420 (北から)



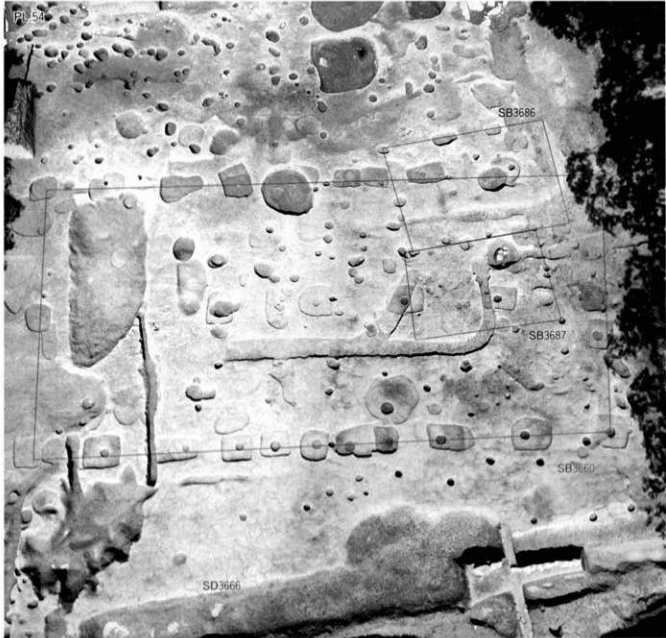
(3) 井戸 S E 3425 (南西から)



(1) 122次調査区全景（東から）



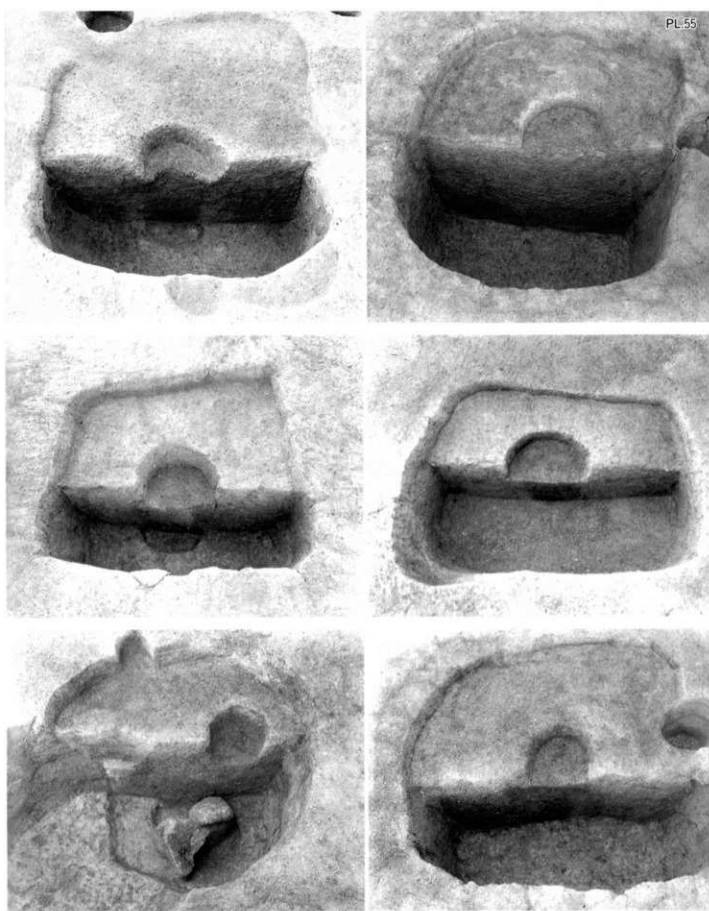
(2) 122次調査区全景（空中写真，東上空から）



(1) 掘立柱建物 S B 3660 (東真上から)



(2) 掘立柱建物 S B 3660 (北から)



獨立柱建物 S B 3660 柱頭方西剖



(1) 掘立柱建物 S B 3670 (東から)



(2) 溝 S D 3666、石組 S X 3662 (北から)



(1) 井戸 S E 3680 上部 (北東から)



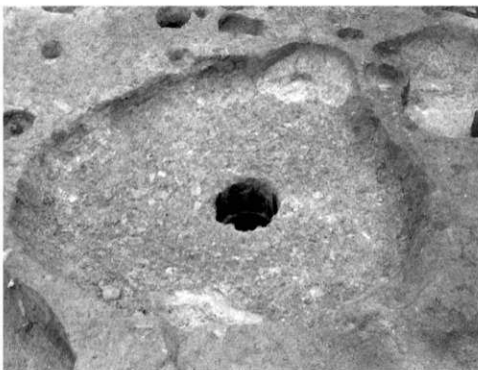
(2) 井戸 S E 3680 瓦出土状況 (北東から)



(3) 井戸 S E 3680 下部土器出土状況 (南から)



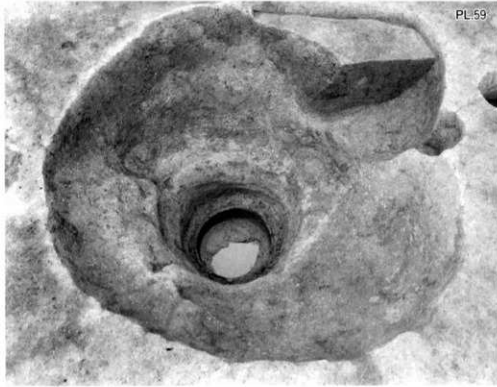
(1) 井戸 S E 3680 枠 (北西から)



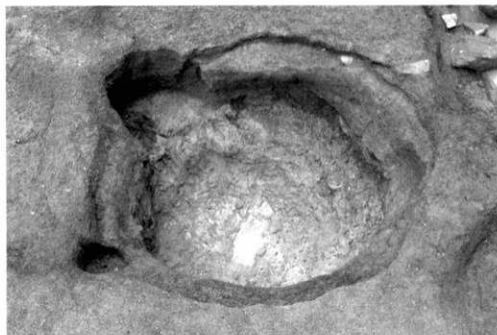
(2) 井戸 S E 3690 (北東から)



(3) 井戸 S E 3690 枠 (北東から)



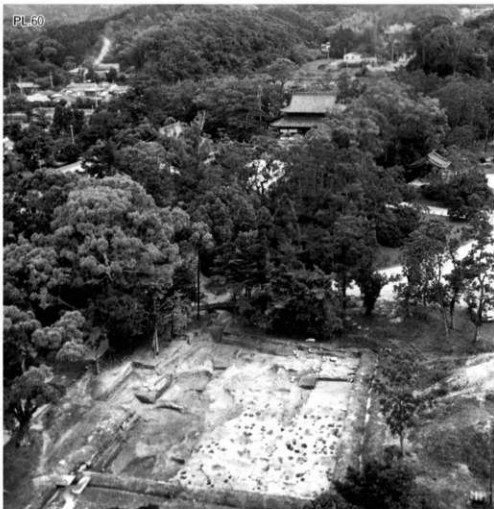
(1) 井戸 S E 3685 (東から)



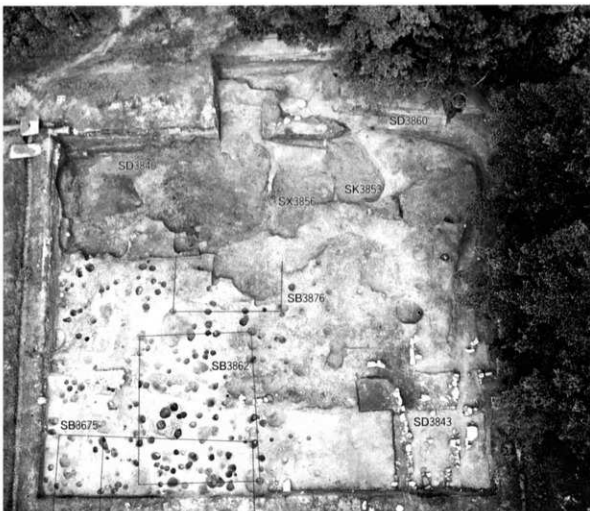
(2) 井戸 S E 3695 (東から)



(3) 土坑 S K 3677 (北から)



(1) 130次調査区全景（空中写真、南東上空から）



(2) 130次調査区全景（空中写真、東上空から）



(1) 130次調査区（東から）



(2) 130次調査区（西から）



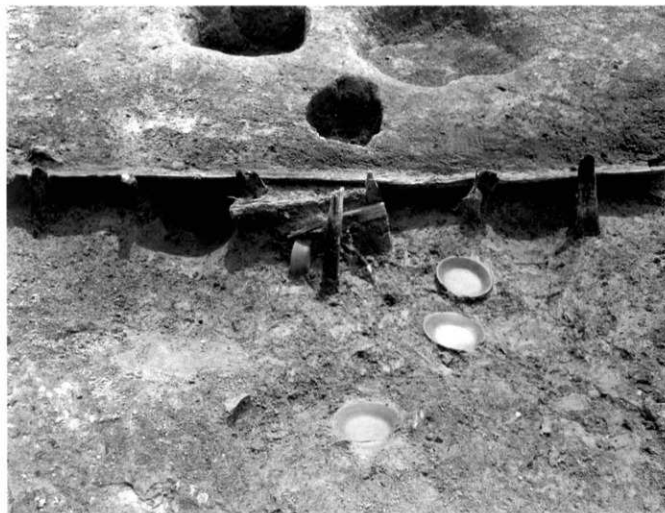
(1) 掘立柱建物 S B 3862, 溝 S D 3842 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B 3852・3862 (東から)



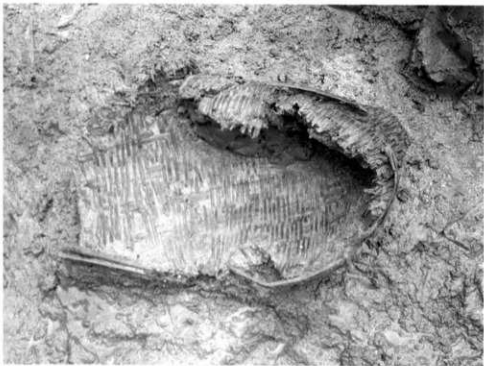
(1) 護岸 S X 3845 (西から)



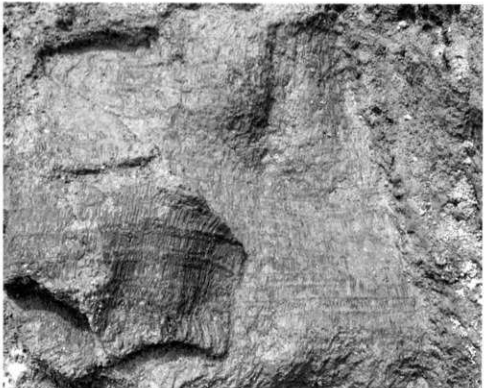
(2) 護岸 S X 3845細部 (西から)



(1) 溝 S D 3840 甬出土狀況



(2) 溝 S D 3840 甬出土狀況



(3) 溝 S D 3840 甬出土狀況



(1) 溝 S D 3841 (南から)



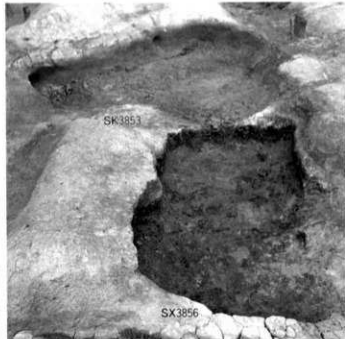
(2) 溝 S D 3843・3860・3865 (東から)



(1) 溝 S D 3855・3860 (南から)



(2) 溝 S D 3854, S D 3840下層遺構 (南から)



(3) 採土穴 S X 3856, 土坑 S K 3853 (南から)



(1) 埋壺 S X 3864 (南から)



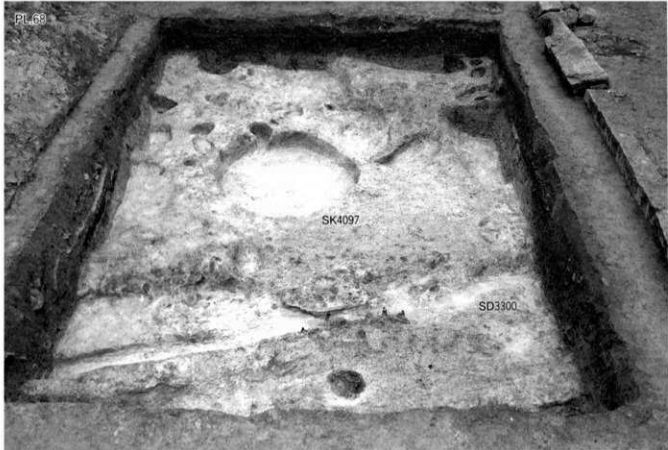
(2) 埋壺 S X 3867 (南から)



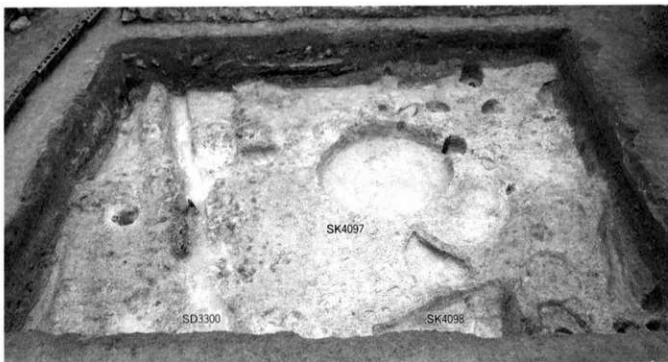
(3) 埋壺 S X 3868 (南から)



(4) 埋壺 S X 3872 (南から)



(1) 154次調査区 (南から)



(2) 154次調査区 (東から)



(1) 20次調査区 (南から)



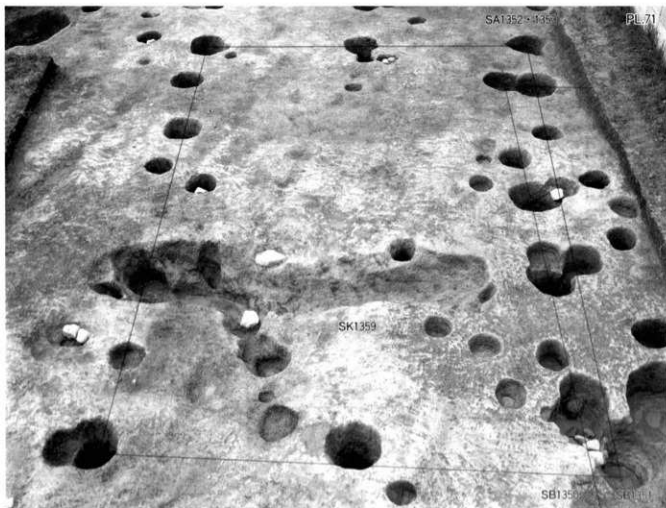
(2) 石垣 S X 437 (南から)



(1) 47次調査区 (南から)



(2) 47次調査区 (北から)



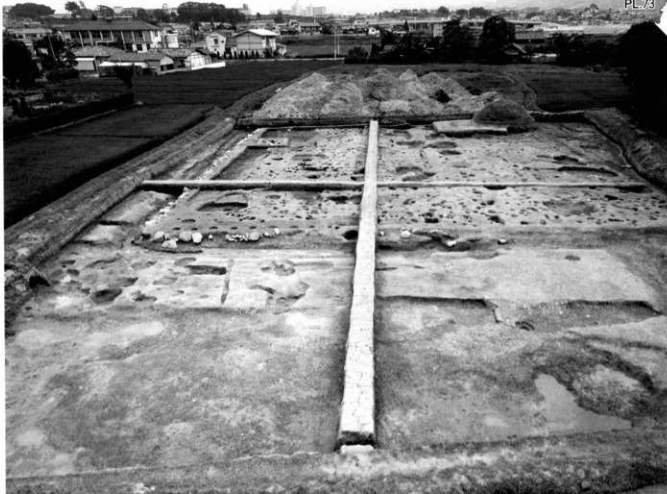
(1) 掘立柱建物 S B1350, 土坑 S K1359 (南から)



(2) 井戸 S E1365 (東から)



45次調査区全景（南から）



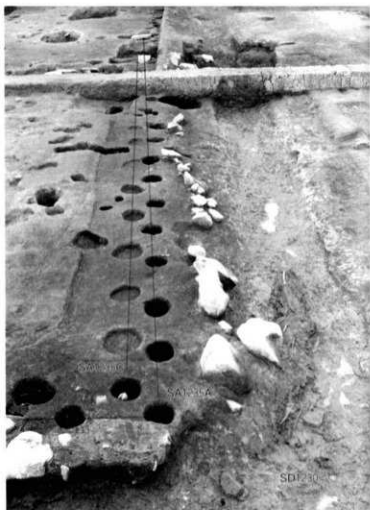
(1) 45次調査区（北から）



(2) 45次調査区（北東から）



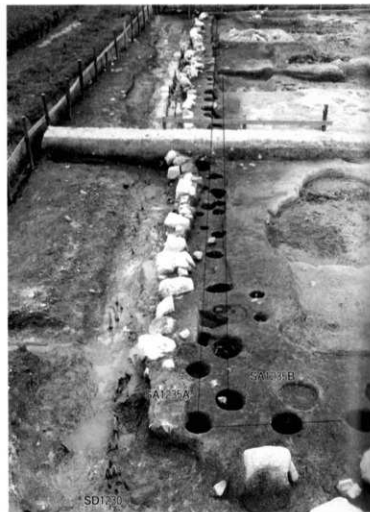
(1) 柵 S A1235, 溝 S D1230 (西から)



(2) 柵 S A1235, 溝 S D1230 (東から)



(3) 溝 S D1230 (北から)



(4) 柵 S A1235, 溝 S D1230 (北から)



(1) 溝 S D1230 (南から)



(2) 溝 S D1230護岸石列 (南東から)



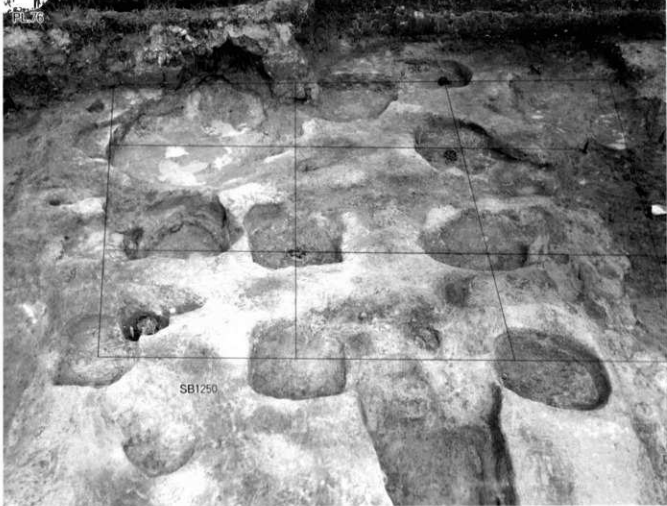
(3) 溝 S D1300 (南から)



(4) 溝 S D1230 (北から)



(5) 唐三彩出土状況



(1) 掘立柱建物 S B1250 (西から)



(2) 門遺構 S B1240A・B (北から)



(1) 井戸SE1180 (北から)



(2) 井戸SE1181 (西から)



(3) 井戸SE1181枠 (西から)



(1) 井戸SE1182 (北から)



(2) 井戸SE1183・1184 (西から)



(1) 井戸SE1183枠 (西から)



(2) 井戸SE1184枠 (西から)



(3) 井戸SE1184下部 (西から)

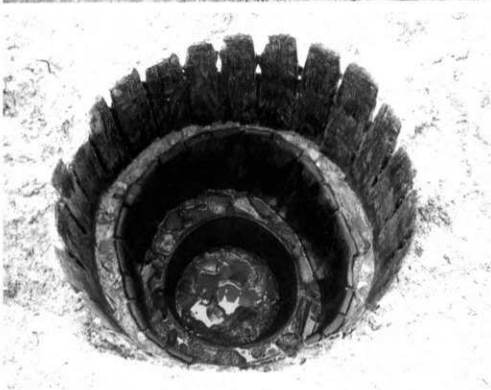
PI-80

SE1188

SE1189



(1) 井戸 S E 1188・1189 (北から)



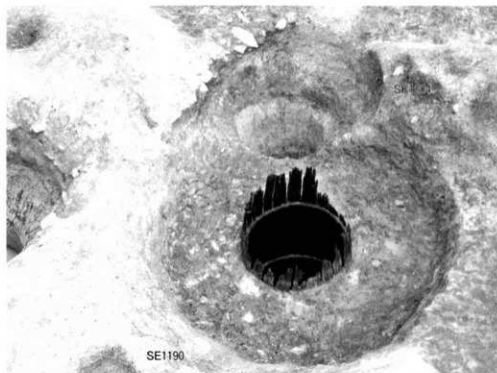
(2) 井戸 S E 1188 枠 (南から)



(3) 井戸 S E 1189 枠 (北から)



(1) 井戸SE1186 (南から)



(2) 井戸SE1190, 土坑SK
1204 (西から)



(3) 井戸SE1190 (西から)



(1) 井戸 S E 1191 (北から)



(2) 井戸 S E 1192・1193,
土坑 S K 1243 (西から)



(3) 井戸 S E 1193 (西から)



(1) 井戸SE1194・1195 (北東から)



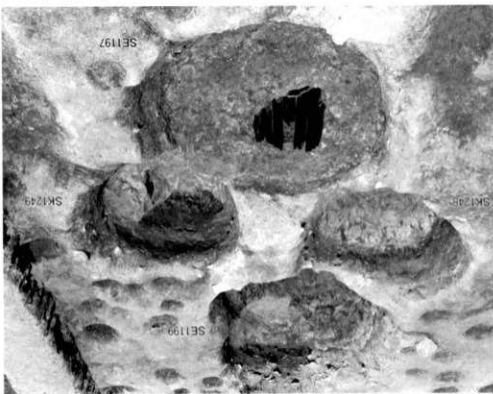
(2) 井戸SE1194枠 (南から)



(3) 井戸SE1195 (北から)



(1) 井戸 S E 1196 (西カ5)

(2) 井戸 S E 1197・1199,
土坑 S K 1248・1249 (南カ5)

(3) 井戸 S E 1198, 1199 枠 (南カ5)



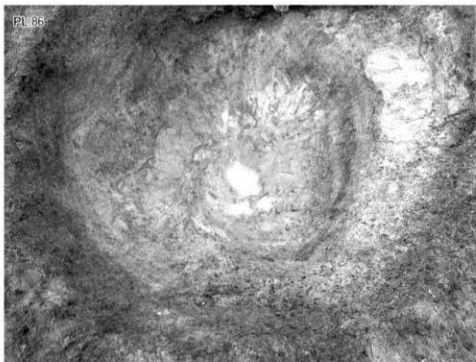
(1) 井戸S E1201 (西から)



(2) 井戸S E1202 (北から)



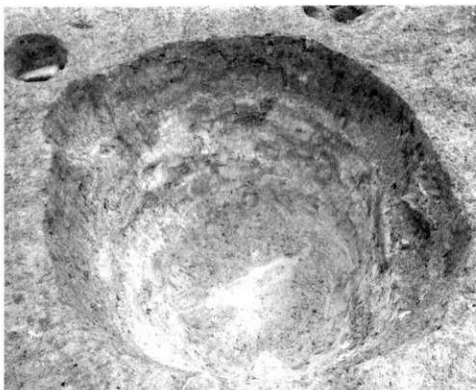
(3) 土坑S K1205 (北から)



(1) 土坑 S K1211 (南から)



(2) 土坑 S K1248 (南西から)



(3) 土坑 S K1255 (西から)



(1) 暗渠 S X 1245・
1310 (北から)



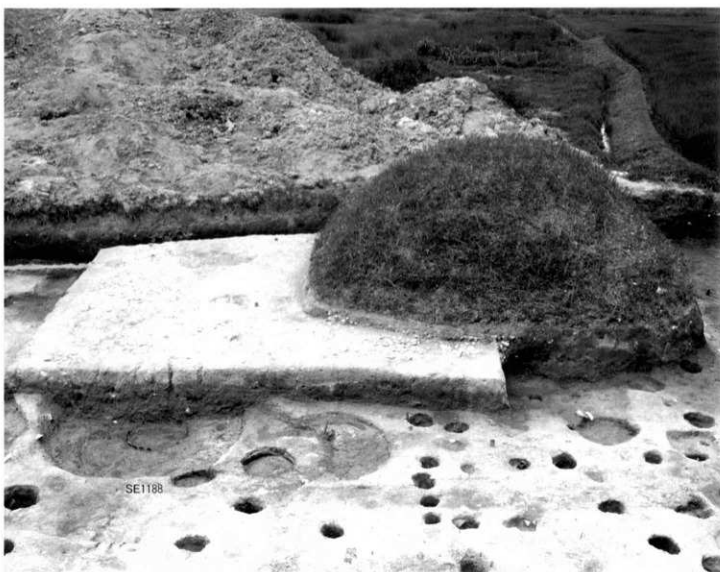
(2) 暗渠 S X 1245 (東から)



(1) 暗渠 S X1310 (南から)



(2) 暗渠 S X1310 (西から)



(3) 積石塚 S X1220 (北から)



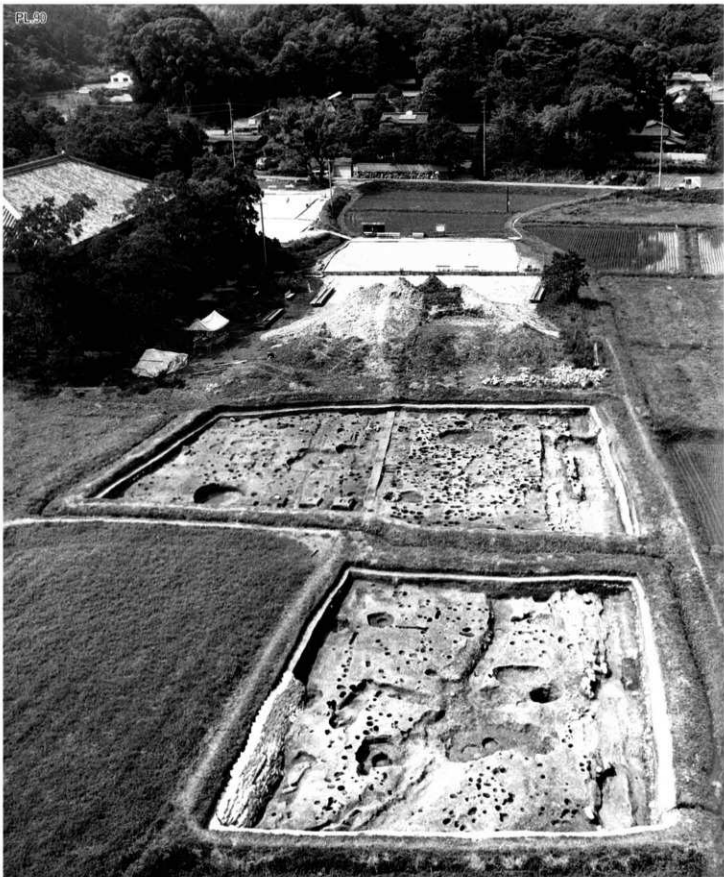
(1) 池SG1305, 排水施設SX1306, 溝SD1300 (北から)



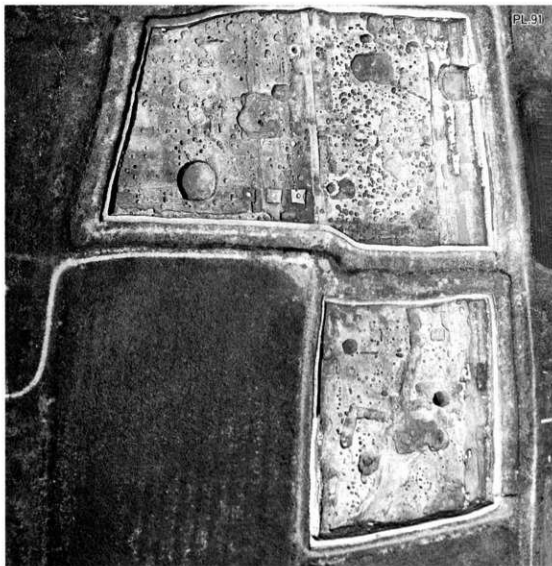
(2) 排水施設SX1306 (北から)



(3) 排水施設SX1306 (西から)



119次調査区全景（空中写真、南上空から）



(1) 119次調査区全景 (空中写真、南上空から)



(2) 119次調査区北半部 (東真上から)



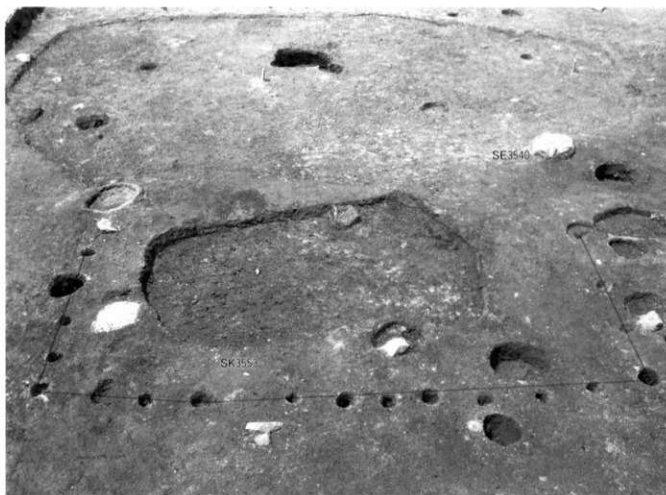
(1) 119次調査区全景（北から）



(2) 119次調査区全景（南から）



(1) 119次調査区北半部 (西から)



(2) 柵 S A 3561 (東から)



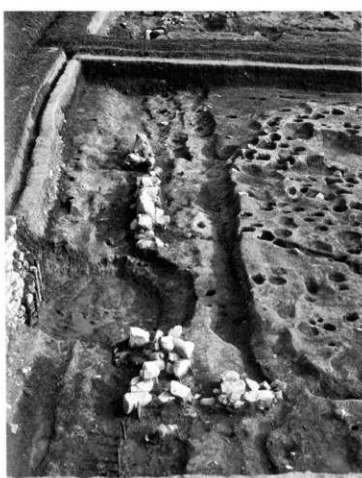
(1) 柵 SA3527、礎石建物
S B3460 (北から)



(2) 掘立柱建物 S B3461
(西から)



(3) 掘立柱建物 S B3565
(南から)



(1) 溝 S D 1230 (北から)



(2) 溝 S D 1230 (南から)



(3) 溝 S D 1300 (北から)



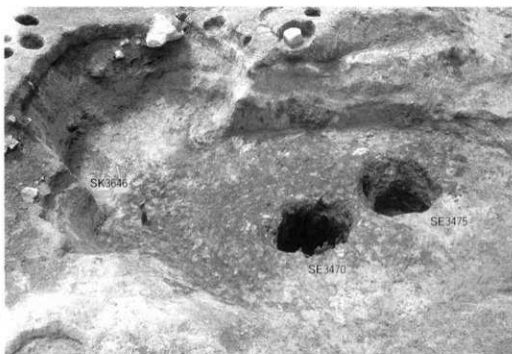
(1) 溝 S D 3550 (南から)



(2) 溝 S D 3550 (南から)



(1) 井戸 S E 3465 (南から)



(2) 井戸 S E 3470・3475,
土坑 S K 3464
(北から)



(3) 井戸 S E 3470枠 (南から)



(1) 井戸 S E 3480 (西から)



(2) 井戸 S E 3490 (西から)



(3) 井戸 S E 3495 (北から)



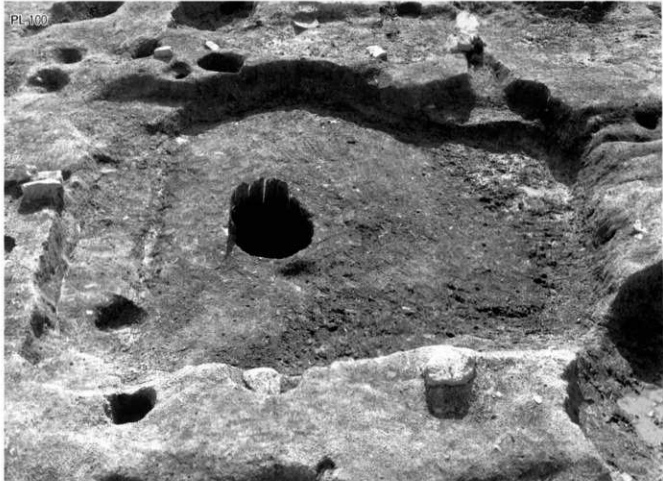
(1) 井戸 S E 3505 (西から)



(2) 井戸 S E 3515 (西から)



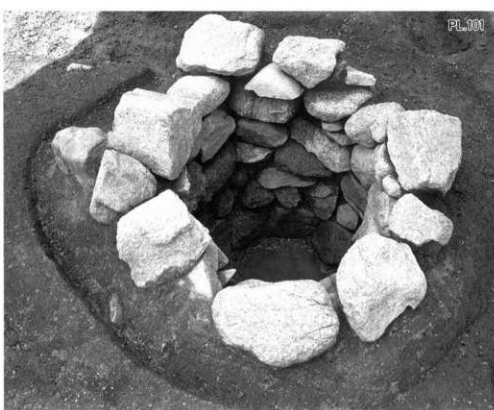
(3) 井戸 S E 3525 (北から)



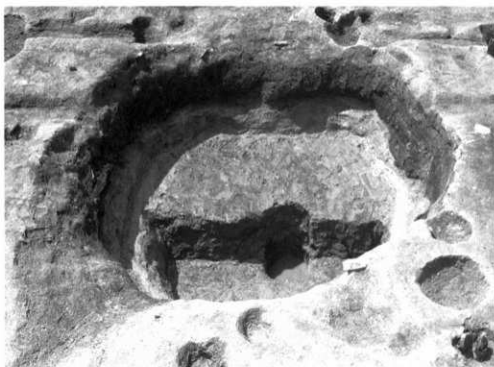
(1) 井戸 S E 3535 (東から)



(2) 井戸 S E 3535 枠 (東から)



(1) 井戸 S E 3530 (西から)



(2) 井戸 S E 3540 (北から)



(3) 井戸 S E 3545 (北から)



(1) 121次調査区全景（空中写真、西上空から）



(2) 121次調査区全景（北から）



(1) 柵・建物群 (西真上から)



(2) 柵 SA3622・3623, 溝 S D3637 (東から)



(3) 柵 SA3625, 溝 S D3630 (南から)



(1) 掘立柱建物 S B 3610・3626 (東から)



(2) 掘立柱建物 S B 3615 (西から)



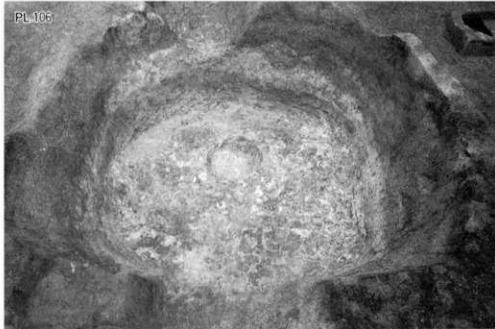
(1) 掘立柱建物 S B 3620 (南から)



(2) S B 3620柱痕 2



(3) S B 3620柱痕 3



(1) 井戸 S E 3636 (西から)



(2) 井戸 S E 3645 (北から)



(3) 井戸 S E 3645 枠 (北から)



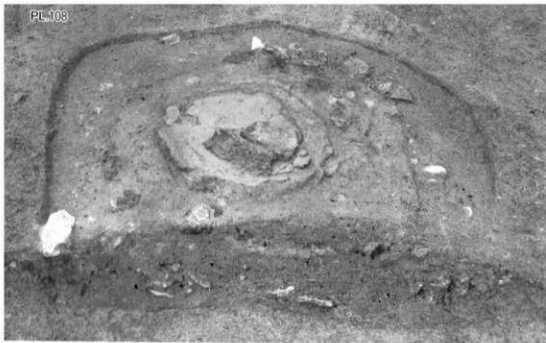
(1) 井戸 S E 3645 下部
(北から)



(2) 土坑 S K 3648
(南から)



(3) 土坑 S K 3658
(西から)



(1) 鑄造遺構 S X 3640
(東から)



(2) 鑄造遺構 S X 3640
(北から)



(3) 同 土層断面
(北から)



(1) 観世音寺北辺域（空中写真、北東上空から）



(2) 観世音寺北辺域（空中写真、北西上空から）



(1) 70次調査区上層遺構 (南から)



(2) 70次調査区上層遺構 (西から)



(1) 70次調査区下層遺構（南から）



(2) 70次調査区下層遺構（西から）



(1) 柵 S A1840 (東から)



(2) 柵 S A1840柱根 (東から)

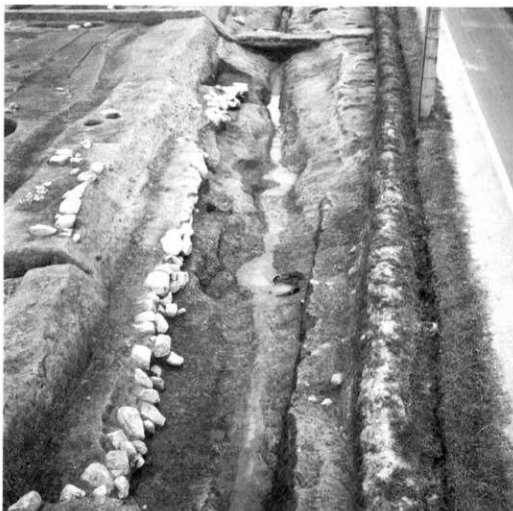


(3) 門建物 S B1748柱痕 (南から)





(1) 掘立柱建物 S B 1730・1735・1845・1855 (東から)



(2) 溝 S D 1805 (西から)



(1) 井戸SE1760 (北から)



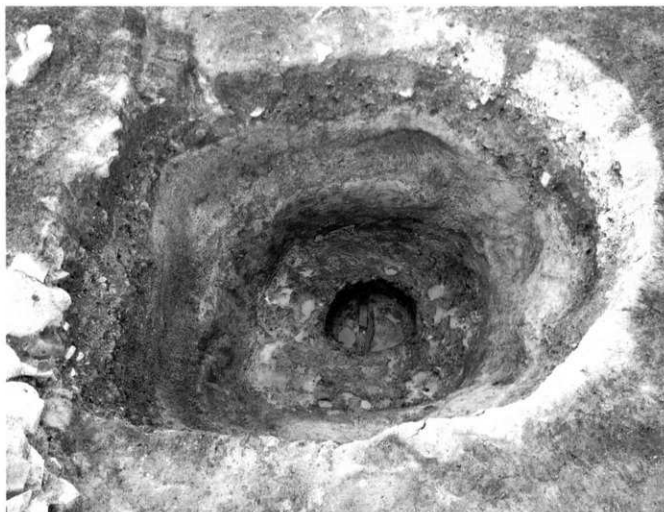
(2) 井戸SE1765 (北から)



(3) 井戸SE1770 (東から)



(1) 井戸SE1755、土坑SK1750 (東から)



(2) 井戸SE1775 (東から)



(1) 井戸 S E 1780 (西から)



(2) 井戸 S E 1785 (北から)



(3) 井戸 S E 1790 (北から)



(1) 井戸 S E 1795 (東から)



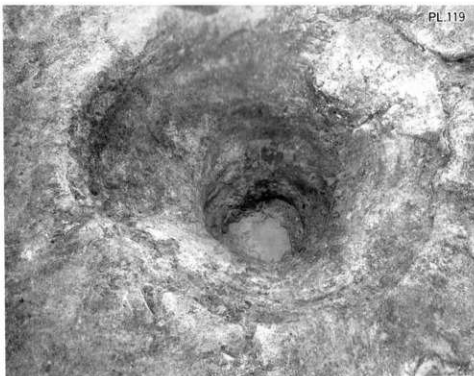
(2) 井戸 S E 1795 枠 (東から)



(1) 井戸SE1800 (南から)



(2) 井戸SE1701 (東から)



(1) 井戸SE1781 (南から)



(2) 井戸SE1783, 土坑SK1782
(北から)



(3) 土坑SK1740・1745 (北から)



(1) 土坑 S K 1788 (南から)



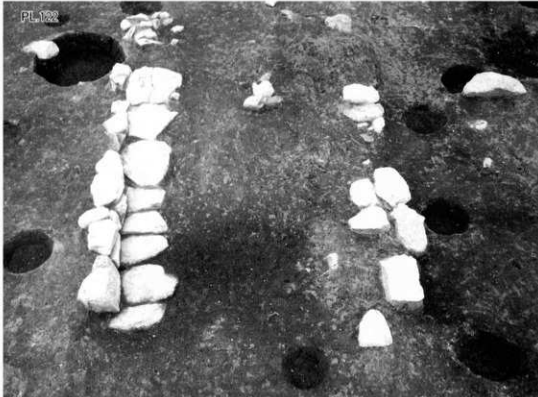
(2) 土器出土状況 (西から)



(1) 石組土坑 S K 1685 (南から)



(2) 石組 S X 1842 (東から)



(1) 石列 S X 1690
(南から)



(2) 石列 S X 1690
(東から)



(3) 地鏡 S X 1810 (南から)



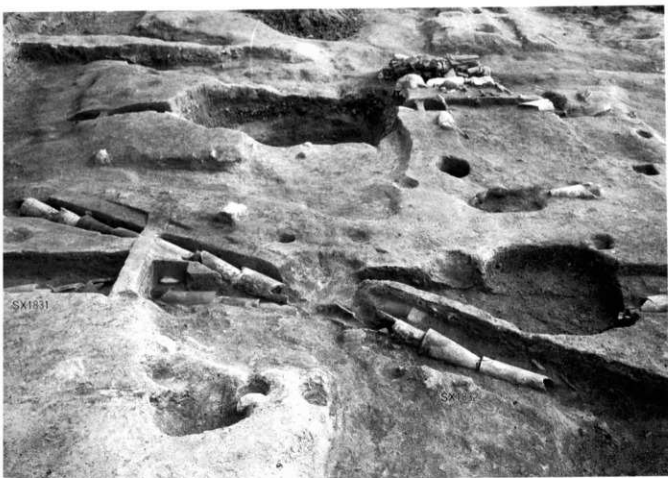
(1) 下層暗渠群 (西から)



(2) 下層暗渠群 (東から)



(1) 暗渠 S X 1831・1832・1833 (東から)



(2) 暗渠 S X 1831・1832 (西から)



(1) 暗渠 S X1831・1832 (北から)



(2) 暗渠 S X1831・1832 (南から)



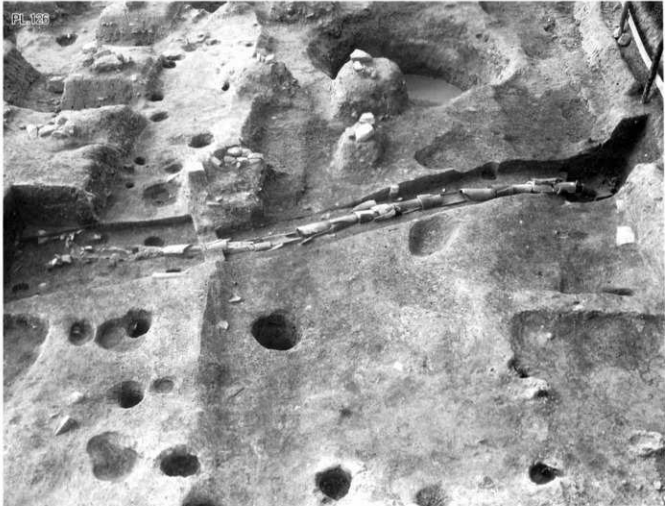
(3) 暗渠 S X1833 (北から)



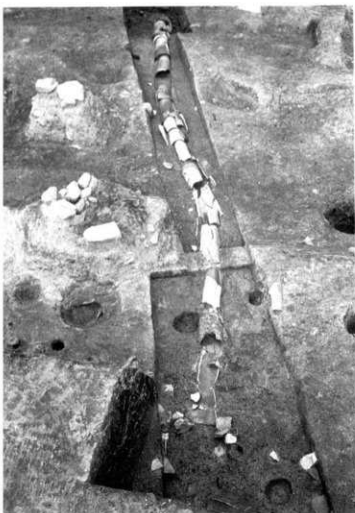
(4) 70次補足調査 暗渠 S X1833、溝 S D1850 (西から)



(5) 同 暗渠 S X1833 (東から)



(1) 暗渠 S X 1834 (東から)



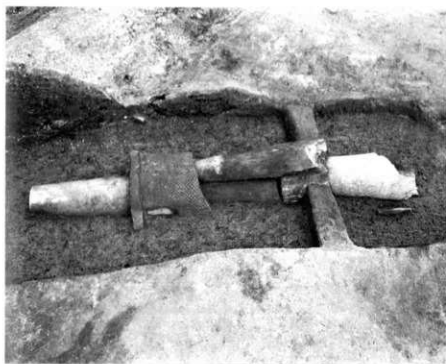
(2) 暗渠 S X 1834 (南から)



(3) 暗渠 S X 1834 (北から)



(1) 70次補足調査 暗渠 S X 1834, 溝 S D 1850 (北から)



(2) 暗渠 S X 1835 (南西から)



(3) 暗渠 S X 1835 (北西から)



(1) 120次調査区上層遺構（北から）



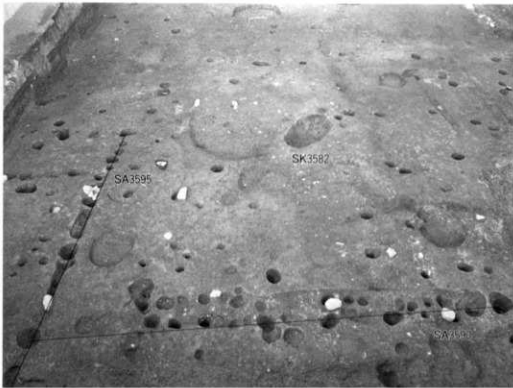
(2) 120次調査区上層遺構（北から）



(1) 中層遺構 (北から)



(2) 欄 S A 3590・3595,
掘立柱建物 S B 3585
(東から)



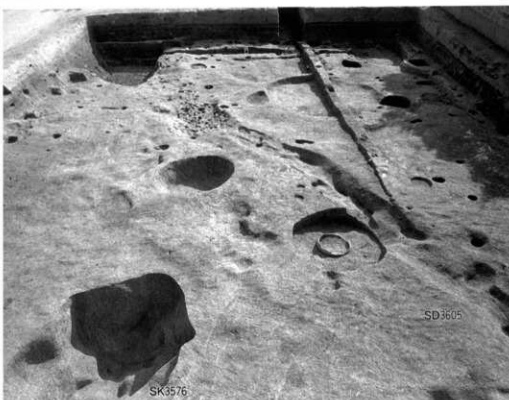
(3) 欄 S A 3590・3595
(南から)

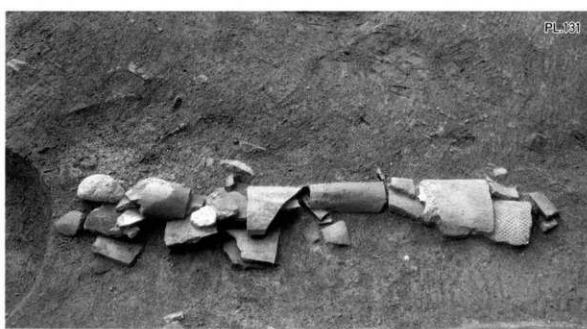


(1) 下層遺構 (南から)



(2) 溝 S D 3605 (東から)

(3) 溝 S D 3605、土坑 S K 3576
(北から)



(1) 暗渠 S X 3572 (東から)



(2) 123次調査区 (東から)



(3) 掘立柱建物 S B 3700 (北から)



(4) 同 柱根 (北から)



(1) 144次調査区上層遺構 (南西から)



(2) 144次調査区上層遺構 (北東から)



(1) 48次調査区 (東から)



(2) 48次調査区 (南から)



(1) 118次調査区 (東から)



(2) 土坑 S K 3451 (南から)

報告書抄録

ふりがな	かんぜおんじ								
書名	観世音寺								
副書名									
巻次									
シリーズ名	-寺域編-								
シリーズ番号									
編者名	小田和利(編集)・吉村靖徳								
編集機関	九州歴史資料館								
所在地	〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-1 TEL092-923-0404								
発行年月日	2006年3月31日								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
観世音寺	太宰府市観世音寺5-6-1		40221		33 30 41	130 31 24	700710~ 030210	16,000㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
観世音寺	寺院	奈良~室町 奈良~室町 奈良~室町 奈良~室町 鎌倉 奈良	構 建 物 溝 井 戸 土 坑 鑄造遺構 池						



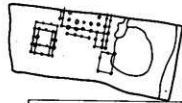
184次



8次



21次



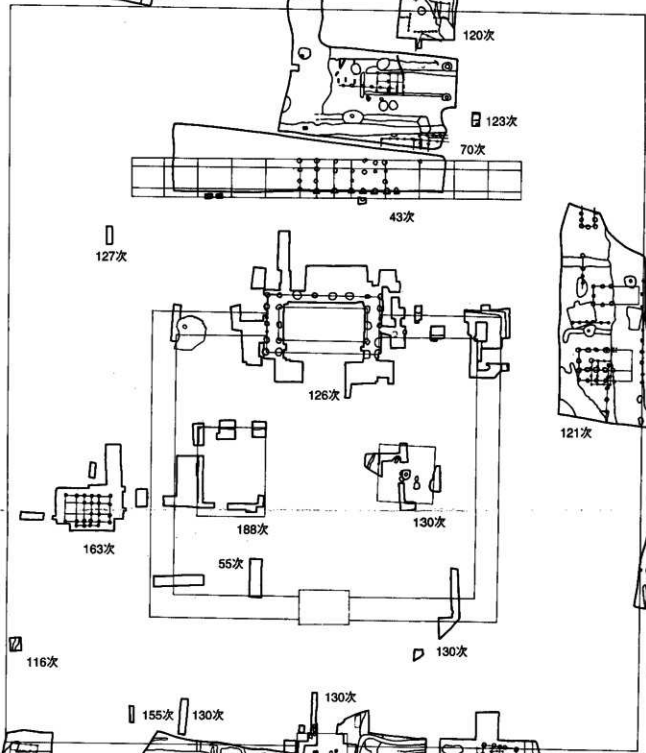
78次



144次



X+57.00



X+56.90



20次

127次

126次

121次

163次

188次

130次

55次

130次

45次

X+56.80



48次

116次

155次

130次

130次

119次

47次



115次



109次

111次

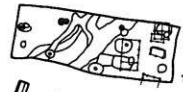
130次

61次

122次

条140

条83



117次

103次

X+56.70

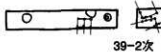


5次

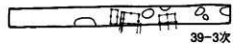


23次

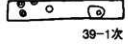
条246



39-2次



39-3次



39-1次



28次

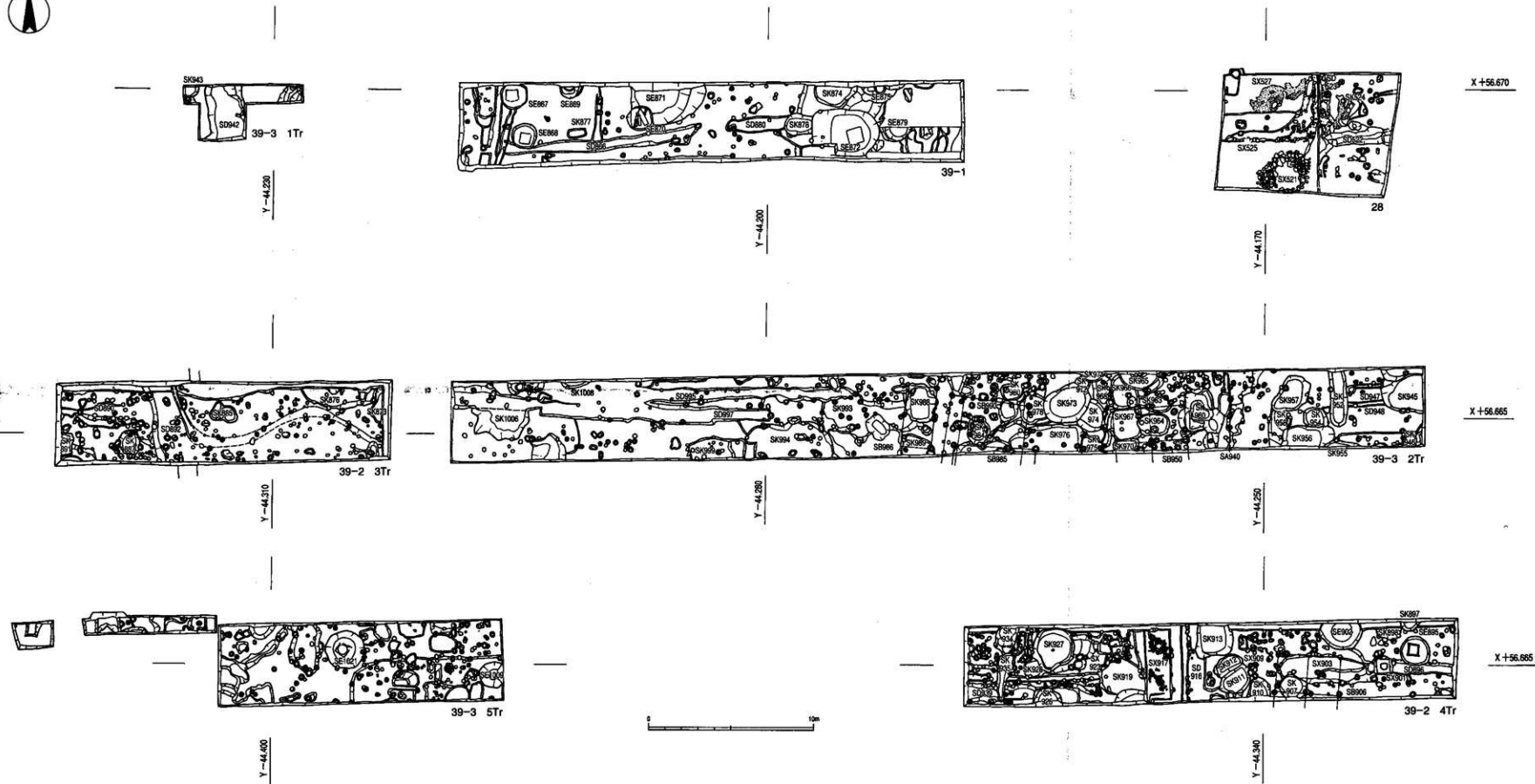
Y-44.300

Y-44.200

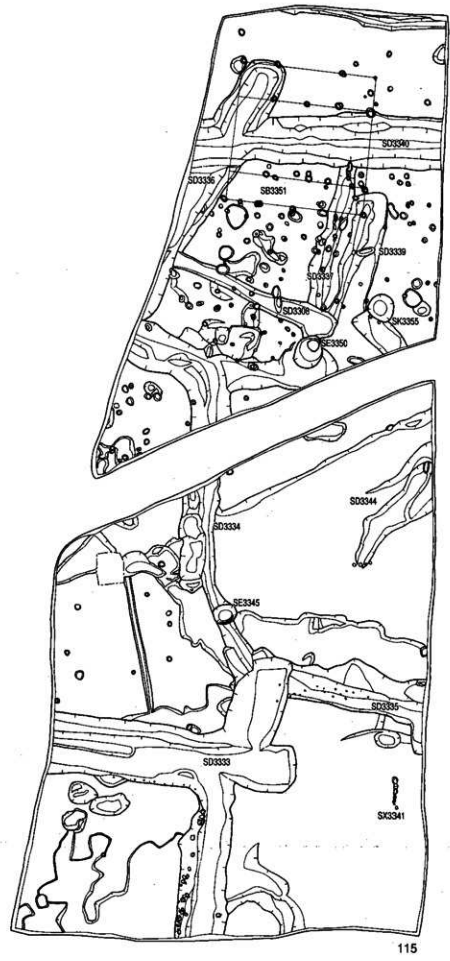
Y-44.100



付 図1 観世音寺遺構配置図 (1/1,000)



付 図 2 南辺城遺構配置図① (1/200)



Y-44.310



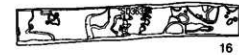
X+56.760

X+56.730

X+56.710



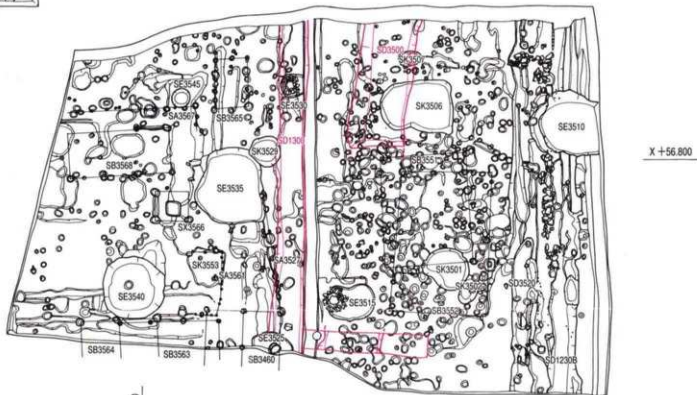
Y-44.260





X +56.850

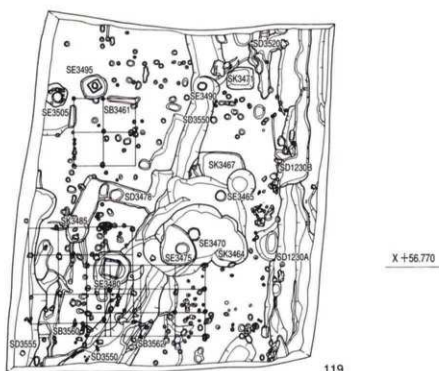
X +56.820



X +56.800



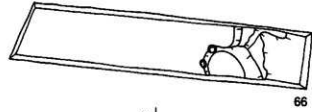
Y -44.130



X +56.770

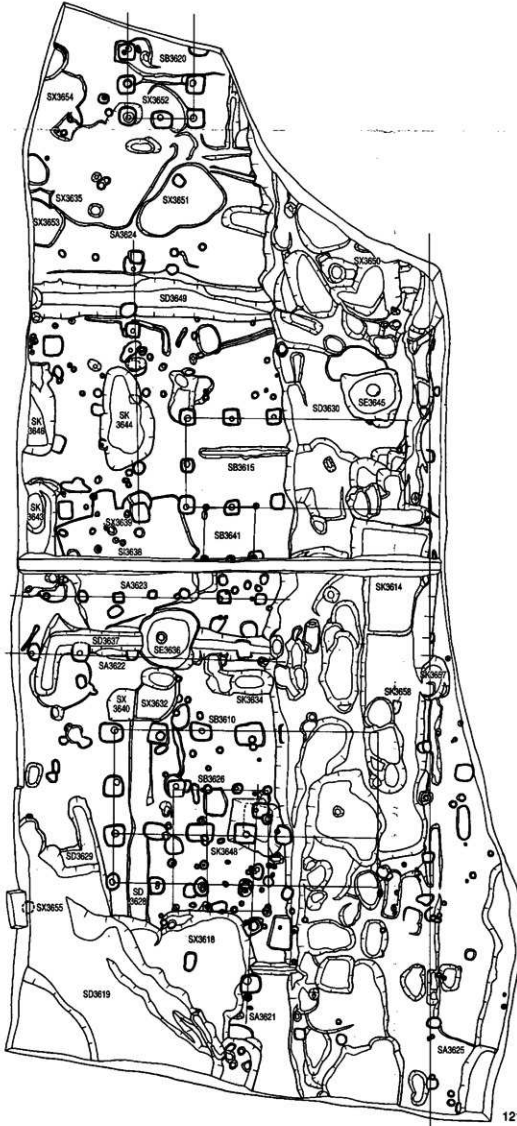
Y -44.110

付 図 5 東辺城遺構配置図① (1/200)



X +56.932

Y -4.130



X +56.900

X +56.870

Y -4.130

Y -4.140





付 図 7 北辺城遺構配置図 (1/200)

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 17	登録番号 3

観世音寺

—寺 城 編—

平成18年3月31日

発行 九州歴史資料館
太宰府市石坂4丁目7番1号
印刷 株式会社 昭和堂
福岡市博多区東比恵4-2-10